

令和 2 年度指定

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

管理機関 研究報告書

＜第 3 年次＞

令和 5 年 3 月

管理機関 京都府教育委員会

拠点校 京都府立鳥羽高等学校

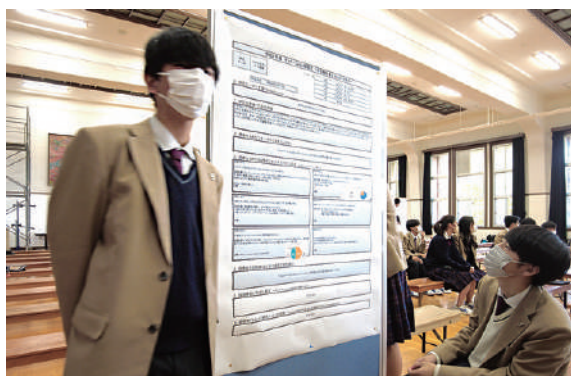
共同実施校 京都府立福知山高等学校



株式会社片岡製作所レーザ工場訪問



台湾片岡股份有限公司との
海外オンライン・インターンシップ



「イノベーション探究Ⅱ」ポスターセッション



福知山高校「みらい学Ⅱ」発表会



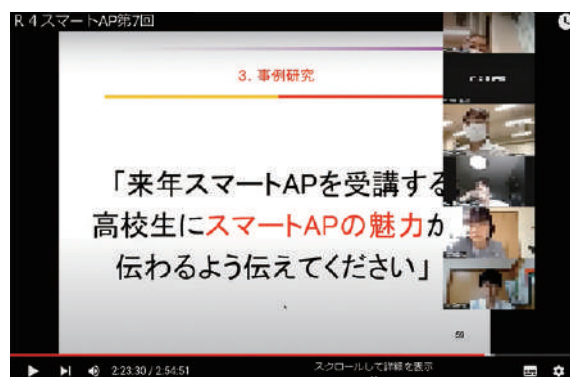
STEAM 数学Ⅱ



中国・西安交通大学附属中学との
オンライン交流



大阪大学アカデミック・ライティング講座



令和4年度「スマートAP」第7回

構想名： 未来を創る課題解決先進国の人材育成 ～京の智から地球の智へ～

新たな教育の仕組み「ALネットワーク京都」が3つの京都戦略により「豊かさ」の価値を再創造し、高い理想と夢を掲げた「京都モデル」で日本、世界をリード

育成する
人材像

長い歴史の中で紡ぎ受け継がれてきた智慧や価値を生かしつつ、多文化協働をとおして、人類共通の新たな価値と持続可能なよりよい未来社会を創造できる人材

育成する
6つの
資質・能力

伝 統 ・ 文 化

イノベーション

ソリューション

- ① 歴史をとおりて世界を俯瞰する力
- ② 多様な文化的背景を持つ人々と協働する力
- ③ 科学的に思考・吟味する力
- ④ 新たな価値を創造する力
- ⑤ 課題解決の枠組みをデザインする力
- ⑥ 困難な状況を突破する力

取組状況・成果

京都戦略 1 高度で先進的な学び

- ◆海外オンライン・インターンシップ
株式会社片岡製作所海外事業所と協働したグローバル人材に必要な資質等を学ぶ機会
- ◆きょうとAPP（令和4・5年度試行）
京都府立大学・福知山公立大学と協働し、単位認定を見据えた大学教育の先取り履修
- ◆拠点校における新たな科目の研究開発
「STEAM数学」-miro:bitを活用した課題解決型学習を実施
「京都古典・歴史学」-企業等と協働した京都の伝統・文化の神髄に触れる学び

京都戦略 3 研究開発内容共有と成果普及

- ◆京都府WWLプラットフォーム
令和2年度からポータルサイトで情報共有（指導計画の蓄積、成果の発信）を開始
- ◆京都府WWLフォーラム（年1回開催）
オンライン・フォーラムにより全国の高等学校・教育委員会等に成果等を発信
- ◆京都府WWL教員研修（年2回程度）
拠点校の成果を踏まえて、府内外の連携校等の教員に向けた研修を実施

ALネットワーク京都の形成

時間的・地理的制約を超えた学びのネットワークが完成



事業協働機関：京都市立大学、京都府立大学、福知山公立大学、クィーンズランド工科大学、復旦大学、国立民族学博物館、総合地球環境学研究所、JICA関西、京都文化博物館、片岡製作所、堀場製作所、NTT西日本、岡田光堂、松栄堂、冷泉家時雨亭文庫、金剛能楽堂

事業連携校：【府立】洛北高校、嵯峨野高校、桃山高校、南陽高校、グローバルネットフォー
ク京都校【府外】秋田県立秋田南高校、九里学園高校、千葉県立成田国際高校、
沖縄県立那覇国際高校【海外】ハンゴン高校（韓国）、上海市嘉定一中、西安交通大学
附属中学、台中市立台中工業高級中等学校、ヌヴェール高校（フランス）

京都戦略 2 グローバルで多様な協働学習

- ◆イノベーション探究ⅠⅡⅢ
拠点校における持続的な未来社会の創造に挑む課題研究・実践記録の共有
- ◆国内ハイブリッド型英語研修（年2回）
留学を志す府立高校生を支援
- ◆府立高校共通履修科目「スマートAP」
国内外大学の探究スキルに係る遠隔講義を単位認定（府立高校6校参加）
- ◆京都府WWL高校生サミット（年1回）
府内外及び豪州の高校生による持続的な未来社会の創出に向けた高校生国際会議
- ◆「高校生による気候変動学習プログラム」
事業協働機関と連携し、気候変動の専門家から、最先端の知見を学ぶ機会を提供
- ◆海外の高校生・大学生との遠隔交流
府内外のWWL関係校の生徒がカナダの学生と社会問題について意見交流

管理機関による支援の主な実績

- 海外留学、海外研修等への補助金支援
- ICT活用のための教員研修の開催
- 探究活動におけるT A活用の支援
- 外国語指導助手の増員配置

はじめに

京都府教育委員会
教育長 前川 明範

令和2年度文部科学省指定「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」につきましては、今年度でカリキュラム開発研究期間を終えることとなります。指定初年度から、拠点校である鳥羽高等学校及び共同実施校の福知山高等学校とともに、国内外の高等学校や教育委員会・学校法人並びに大学・企業・国際機関等と連携して、「AL（アドバンスト・ラーニング）ネットワーク京都」を形成し、高校生に高度で先進的な学びとグローバルで多様な協働学習の機会を提供することに尽力して参りました。

3年間の指定期間中は、新型コロナウイルス感染症の影響により、海外インターンシップや海外連携校との現地交流は一度も叶わず、各校においても、対面による協働学習が困難になるなど、計画していた取組に大きな変更を余儀なくされました。まさに窮地に立たされた感がありましたが、令和2年度第1回の運営委員会でいただいた「ピンチをチャンスに変える」の言葉は大きな励みとなりました。この言葉に勇気づけられ、ICTを活用した遠隔による取組に挑戦するなど、試行錯誤しながらではありましたが、構想計画の着実な実現に取り組んで参りました。

その結果、株式会社片岡製作所海外事業所と協働し、オンラインで現地社員の方からグローバル人材について直接学べる機会を創出できました。また、在籍校の異なる府立高校生が、大学初級レベルの探究に係るリサーチスキルを学び合える、府立高校共通履修科目「スマートAP」を実現するとともに、府内外の高校生や海外の高校生が、「持続的な未来社会の創出」に向けてオンラインで議論する「京都府WWL高校生サミット」も毎年開催することができました。さらに、京都府立大学と福知山公立大学とも協働し、大学教育の先取り履修である「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム（きょうとAPP）」の試行も開始できたところです。これらの成果は、ひとえに、ALネットワーク京都の連携校及び事業協働機関の皆様のお力添えによるものであり、地域や所属という垣根を超えて協働できたことに改めて感謝申し上げます。

次年度からは、これまでの3年間の成果を踏まえて、「スマートAP」、「きょうとAPP」及び「京都府WWL高校生サミット」の各取組を充実させていくとともに、時間的・地理的・経済的制約に左右されない高度な学びのネットワーク・モデルをさらに追究し、京都モデルとして全国に普及させるべく、一層の取組に邁進する所存です。

結びに当たり、本事業の推進に御指導、御協力いただきました運営指導委員の皆様、検証組織委員の皆様をはじめ、連携していただいた大学・企業・関係機関等の皆様、そして関わっていただいたすべての皆様に感謝申し上げますとともに、ALネットワーク京都のさらなる発展に向けて、引き続き御指導、御助言をいただきますようお願い申し上げます。

目次

令和4年度WWLコンソーシアム構築支援事業研究報告書

1 令和4年度WWLコンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書	1
2 WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業概要	
（1）構想計画書（概要）.....	21
（2）構想目的・目標.....	22
（3）令和3年度（指定2年目）の活動概要.....	24
3 具体的な活動内容	
（1）京都戦略Ⅰ「高度で先進的な学びの機会を提供」	
ア 海外オンライン・インターンシップ（事前学習）.....	27
イ 海外オンライン・インターンシップ（上海）.....	28
ウ 海外オンライン・インターンシップ（台湾）.....	31
エ オンライン・キャリアセミナー	
「グローバル・キャリアを考える-海外留学の現状とこれから-」.....	34
オ 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」（大学教育の先取り履修）.....	37
カ 拠点校に係る主な新科目の授業実践報告	
(ア) 京都古典・歴史学.....	39
(イ) ソーシャル・インテリジェンス.....	41
(ウ) STEAM 数学Ⅰ.....	42
(エ) STEAM 数学Ⅱ.....	43
(オ) STEAM 数学Ⅲ.....	44
(カ) STEAM 物理.....	45
(キ) STEAM 化学.....	46
(ク) STEAM 生物.....	48
(ケ) グローバル・コミュニケーションⅠ.....	50
(コ) グローバル・コミュニケーションⅡ.....	51
(サ) 日本歴史学Ⅰ.....	52
(シ) 世界歴史学Ⅰ.....	53
(ス) グローバル・シティズンシップⅠ.....	54

(セ) 文化遺産論 $\alpha \cdot \beta$	55
(2) 京都戦略Ⅱ「グローバルかつ多様な協働学習の機会を創出」	
ア 令和4年度京都府WWL高校生サミット	56
イ 令和4年度府立高校共通履修科目「スマートAP」	65
ウ 総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅰ」(1年・1単位)	81
エ 総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅱ」(2年・1単位)	99
オ 総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅲ」(3年・1単位)	116
カ カナダ・コキットラム市の高校生とのオンライン交流会	119
キ 中国・西安交通大学附属中学とのオンライン交流会	121
ク フランス・ヌヴェール高校とのオンライン交流会	124
ケ 韓国・ハンヨン高校とのオンライン交流会	126
(3) 京都戦略Ⅲ「研究開発内容の共有と継続的な成果普及」	
ア 京都府WWLフォーラム	128
イ 京都府WWL教員研修	136
(4) 共同実施校(京都府立福知山高等学校)の取組	147
(5) 令和4年度検証組織委員会からのWWL事業3年間の成果検証に係る報告	151
(6) 令和4年度(2022年度)第1回運営指導委員会議事録	180

※令和4年度(2022年度)第2回運営指導委員会議事録については、当該委員会が本報告書の編集作業後の開催のため、掲載していません。

(別紙様式3)

令和5年3月31日

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所	京都市下京区中堂寺命婦町1番地10 京都産業大学むすびわざ館内(3・4階)
管理機関名	京都府教育委員会
代表者名	教育長 前川 明範

令和4年度WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和4年4月1日 ～ 令和5年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 京都府立鳥羽高等学校

学校長名 宮島 勇二

3 構想名

未来を創る課題解決先進国の人材育成 ～京の智から地球の智へ～

4 構想の概要

歴史と伝統に育まれた「京の智・日本の智」と各国・各地域における「世界の智」を高度で先進的な学びや協働学習により「地球の智」へと高めることにより、設定したグローバルな社会課題「『豊かさ』の価値の再創造による持続的な未来社会の創出」に取り組み、Society 5.0において全国の自治体・高校等が活用できるイノベティブなグローバル人材を育成する京都モデル「ALネットワーク京都」を研究開発する。この京都モデルを実現するため、京都府独自の3つの京都戦略、大学教育の先取り履修や海外インターンシップ等の「高度で先進的な学びの機会の提供」、ICT活用による遠隔教育や京都府WWL高校生サミットの開催等の「グローバルかつ多様な協働学習の機会の創出」、オンライン情報共有システム「京都府WWLプラットフォーム」の活用等の「研究開発内容の共有と継続的な成果普及」を設定し、世界をリードする課題解決先進国となることを目指す。

5 教育課程の特例の活用の有無

普通科における卒業に必要な修得単位数に含めることができる学校設定科目の修得単位数の上限である20単位を超えて、学校設定教科「グローバル」に学校設定科目「英語理解」(2年次・3単位、3年次・4単位)を設置する。

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（ 令和4年4月1日 ～ 令和5年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①ALネットワーク京都運営指導委員会				■								■
②京都府WWLプラットフォームの運営	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
③運営指導委員会						■					■	
④検証組織委員会					■					■		
⑤京都府WWL教員研修				■								
⑥カリキュラム・アドバイザー配置	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
⑦オンライン・キャリアセミナー				■								
⑦京都府WWL高校生サミット							■					
⑧グローバルネットワーク京都交流会											■	
⑨京都府WWLフォーラム									■			

(2) 実績の説明

【実施体制の整備】

- a. 管理機関の下、拠点校を中心として組織的に研究開発・実践に取り組む体制の整備状況
 - ア ALネットワーク京都運営委員会の設置
管理機関の長を委員長とし、拠点校及び共同実施校の校長、事業協働機関である京都大学大学院の神吉紀世子教授と福知山公立大学の杉岡秀紀准教授からなる委員会を設置し、関係校及び関係機関が連携して組織的に事業を推進する体制を整備した。
 - イ 拠点校 WWL 会議の実施
拠点校において、拠点校 WWL 担当者を中心とした WWL 会議を週 1 回開催し、「総合的な探究の時間」をはじめカリキュラム研究開発について進捗状況を共有しながら組織的に事業を進めた。
 - ウ 共同実施校の体制
共同実施校において、管理機関及び拠点校と円滑に連携して事業を進めるために、「みらい探究部」に WWL 事業担当者を配置した。
 - エ カリキュラム・アドバイザーの拠点校配置
令和 2 年度から継続してカリキュラム・アドバイザーを配置した。※詳細については、【AL ネットワークの形成】の d に記載のとおり。
 - オ 国の他事業を実施している連携校の状況
府立嵯峨野高校、府立洛北高校、府立桃山高校がスーパーサイエンスハイスクール支援事業の指定を受けており、各校で WWL 事業担当者を配置し、管理機関と円滑に連携した。
- b. 管理機関の下、関係機関の間で十分な情報共有体制を整備した状況
 - ア 京都府 WWL プラットフォームの運用
管理機関はオンライン情報共有システムである京都府 WWL プラットフォームを活用し、管理機関、拠点校及び共同実施校の取組に係る情報の共有を行った。また拠点校の「総合的な探究の時間」に係る実践報告書を掲載し、取組の成果普及に努めた。
 - イ グローバルネットワーク京都校との連携
管理機関担当者は、拠点校を含む府立高校 10 校（鳥羽高校、山城高校、洛西高校、西乙訓高校、西城陽高校、城南菱創高校、菟道高校、東宇治高校、園部高校、峰山高校）からな

るグローバルネットワーク京都校の連絡協議会（６月）に出席し、WWL事業に係る情報共有と管理機関の取組への参加を依頼した。

ウ その他

- ・年度当初に国内連携校へWWL事業に係る年間計画を書面で通知した。また、府外連携校の担当者とメールで情報共有を行った。
- ・府外連携校を所管する教育委員会の担当者とメールで情報共有を行った。
- ・海外連携校と管理機関及び拠点校の担当者がメールで連携の調整等を行った。

c. 管理機関の長、拠点校等の校長が果たした役割について

ア 管理機関の長の主な役割

- ・ALネットワーク京都を形成し、事業運営と研究開発を実施
- ・運営指導委員会の設置及び運営
- ・検証組織委員会の設置と本府WWL事業の成果分析
- ・大学教育の先取り履修等の高度で先進的な学びに係る大学との調整と取組の実施
- ・教員研修や生徒対象セミナーの計画及び運営

イ 拠点校等の校長の主な役割

- ・事業の推進のための校内体制の整備
- ・生徒への高度で先進的な学びへの参加促進
- ・海外連携校とのプログラム実施
- ・事業協働機関への連携協力に係る依頼

d. 運営指導委員会及び検証組織委員会の開催実績及び検証資料の収集の状況

d-1. 運営指導委員会

＜運営指導委員＞

区分	氏名	所属・役職
委員長	三谷 宏治	K I T虎ノ門大学院・教授
委員	内藤 義弘	京都府国際センター・常務理事
委員	北尾 哲郎	日東薬品工業株式会社・取締役会長
委員	スティーブン・ハーダー	京都ノートルダム女子大学・教授

運営指導委員会には、高校教育課長、拠点校及び共同実施校の各校長も出席した。

＜開催実績＞

【第１回運営指導委員会】

日時：令和４年９月２６日（月）

場所：京都府立鳥羽高等学校

内容：（１）令和４年度事業実施計画及び上半期の実施状況及び生徒発表等

（２）令和４年度第１回アンケート調査結果について

（３）意見交換・研究協議

【第２回運営指導委員会】

日時：令和５年２月２７日（月）

方法：京都府立鳥羽高等学校

内容：（１）令和４年度実施内容及び成果と課題について及び生徒発表等

（２）検証組織委員会からの報告

（３）研究開発期間終了後の取組について

（４）意見交換・研究協議

d-2. 検証組織委員会

＜検証組織委員＞

区分	氏名	所属・役職
委員	小野 善生	滋賀大学・教授
委員	福田 敏信	KPMG／あずさ監査法人

<開催実績>

【第1回検証組織委員会】

日時：令和4年8月22日（月）

場所：京都府教育庁

内容：（1）今年度の事業実施計画概要について
（2）今年度の検証組織委員会に係るスケジュールについて
（3）令和4年度第1回アンケート調査結果の分析について
（4）卒業生追跡調査について

【第2回検証組織委員会】

日時：令和5年1月16日（月）

場所：京都府教育庁

内容：（1）拠点校担当者へのヒアリング調査
（2）ヒアリング調査を踏まえたアンケート調査の結果分析
（3）WWL事業3年間の成果分析・まとめ

<検証資料>

令和2年度から以下の内容でアンケート調査を実施し、データ収集・分析を行った。

検証項目	対象	資料
1. 6つの資質・能力の育成 2. マインドセット	拠点校全学年の生徒	生徒向けアンケート
3. 探究的な資質・能力について	拠点校・共同実施校 全学年の生徒	生徒向けアンケート
4. 拠点校におけるカリキュラム 研究開発・実施の進捗状況	拠点校の教員	教職員向けアンケート 担当者へのヒアリング調査

また成果分析の参考資料として、以下の取組についてもアンケート調査等を実施した。

- （1）海外オンライン・インターンシップ（上海及び台湾）
- （2）オンライン・キャリアセミナー
- （3）拠点校と海外連携校とのオンライン交流会（フランス・中国・韓国）
- （4）京都府WWL高校生サミット
- （5）京都府WWL教員研修
- （6）府立高校共通履修科目「スマートAP」
- （7）「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム（先取り履修）」

- e. 管理機関が、拠点校等の卒業生を追跡調査する仕組みの構築に向けた計画
卒業生追跡調査の方法等について、拠点校が以下のとおり実施予定である。

対 象 者：拠点校令和2年度入学生のうち協力者

調査方法：オンラインによる自由記述形式のアンケート調査

質問内容：（1）WWL事業と卒業後の進路選択について
（2）WWL事業を通じた学びが卒業後にどのように活かしているかについて
（3）卒業後の海外指向性の変化について

調査時期：卒業前・卒業後3年目・卒業後5年目の合計3回

- f. アジア高校生架け橋プロジェクト等による留学生等の日本での学習や生活を支援する体制
アジア高校生架け橋プロジェクトについては、共同実施校の福知山高校がタイの留学生1名を受け入れた。本WWL事業に携わっている英語科教員が受入担当者となり、言語面で留学生を支援できる体制を整えるとともに、担当者とクラス担任が日本語学習の支援を行った。留学生は日本語初級者であることから、科目によっては内容理解が難しい授業もあったが、「みらい考Ⅰ（総合的な探究の時間）」に参加しグループで探究活動に取り組む体制を整えた。

- g. 事業拠点校での取組について、本事業による取組が学校全体の授業改善や関係機関の教職員や生徒の意識改革を促した状況

拠点校の教職員対象のアンケート調査を令和2年度から3年間実施し、本事業による取組が学校全体の授業改善や拠点校の教職員の意識改革を促したかについて調査した。また教職員アンケート結果を踏まえて、検証組織委員会において拠点校担当者へのヒアリング調査を行い、アンケート結果の要因と拠点校の教員の意識変容についてさらに深い分析を試みた。なお、生徒の意識改革の状況については、「8 目標の進捗状況、成果、評価」に記載する。

ア 拠点校教職員アンケート調査に係る主な肯定的回答率の変化

- ・「多様な学校設定科目は、高度で先進的な学びの機会を、生徒に提供できている。」
令和2年度12月 83.3% → 令和4年度12月 89.7% (+6.4%)
- ・「伝統文化の神髄に触れる機会は、グローバル社会を俯瞰する力の育成に有効である。」
令和2年度12月 84.8% → 令和4年度12月 92.6% (+7.8%)
- ・「WWL事業による取組が、学校全体の授業改善につながっている。」
令和2年度12月 74.2% → 令和4年度12月 85.3% (+11.1%)

イ 拠点校担当者のヒアリング調査から分析できる教員の変容

- ・「総合的な探究の時間」において指導方法等の改善に継続して取り組んだ結果、教員の教科指導にも変化が生じている。具体的には、発問をする際には、探究活動に活きる発問を考え、教科等横断的な指導を意識し始めている。
- ・新たな教科・科目の研究開発について、担当教員が科目を通して育成する資質・能力を明確にして指導するよう、校内で実践報告書の作成に取り組んだ。これにより、本府WWL事業で育成する6つの資質・能力について、担当教員が各科目でどのように指導し育成するのかを常に意識し教科指導を行った。その結果、授業が主体的かつ協働的な学びとなり、授業改善が進んでいる。

ウ 関係機関の教職員の意識改革を促した取組

- ・府立高校共通履修科目「スマートAP」について、以下のとおり府内関係校の教員が参観できるようにし、大学教員による指導方法を学ぶ機会を提供できた。

日 時：令和4年4月から9月までの計6回

内 容：社会課題の解決に必要なリサーチスキル等の講義を参観し、各校の探究活動の指導に活かす。

参観者：鳥羽高校・福知山高校・嵯峨野高校・峰山高校の教員

- ・京都府WWL教員研修として、拠点校の探究活動における実践報告並びに大阪大学教員による講義及びワークショップを開催し、拠点校の成果を普及するとともに、探究活動におけるレポート作成能力等の育成について、関係校の教職員の意識改革を促すことができた。なお、ALネットワーク京都以外の府立高校教員の参加もあった。

日 時：令和4年7月28日（金）午後1時30分から3時30分まで

講 師：堀一成 教授（大阪大学全学教育推進機構）

テーマ：「探究活動におけるアカデミック・ライティングの指導－鳥羽高等学校の実践を例に」

参加校：鳥羽高校、福知山高校、洛北高校、桃山高校、清明高校、北稜高校、朱雀高校、須知高校、秋田県立秋田南高校、沖縄県立那覇国際高校（合計10校、20名）

- h. アジア高校生架け橋プロジェクトの留学生受け入れ

共同実施校である福知山高校がタイからの留学生を1名受け入れた。（再掲）

【財政等支援】

- a. 自己負担額として、計画段階よりさらに計上したもの

該当なし。

b. 人的又は財政的な支援、研修やセミナー等の実施状況

ア グローバル人材の育成に係る支援

- ・拠点校における英語指導助手の1名増員
- ・感染症拡大等の影響により英語指導助手の配置が遅れた学校への非常勤AETの配置
- ・拠点校の「総合的な探究の時間」におけるティーチング・アシスタントの財政的支援
- ・京都府WWL高校生サミットにおける、京都府名誉友好大使等の派遣に係る財政的支援

イ 留学支援事業の充実

- ・将来的に海外留学を志す生徒を支援するために、国内で対面とオンラインによるハイブリッド型英語研修を実施

ウ ICT利活用の推進に係る支援

- ・各府立高校におけるICTの利活用を推進する教員に係る研修を実施

c. 管理機関が、国の委託が終了した後も事業を継続的に実施するために計画したこと

ALネットワーク京都事業として、「スマートAP」等の取組について予算を計上した。

【ALネットワークの形成】

a. ALネットワーク運営組織の実績

年度計画の策定、事業の運営、達成状況の評価・見直し、指定後の取組を協議するために、ALネットワーク京都運営委員会を年2回（7月・3月）開催した。

b. 関係機関の間で十分な情報共有体制を整備し、有効な事業実施を実現したこと

ア 情報共有体制の整備

- ・京都府WWLプラットフォームの活用
- ・府立高校グローバルネットワーク京都校連絡協議会の開催
- ・京都府WWLフォーラムの開催

イ 有効な事業実施の実現について

事業協働機関である総合地球環境学研究所が京都府及び京都市と実施している「高校生による気候変動学習プログラム」に、本府WWL関係校が昨年度に引き続き参加した。参加校は、福知山高校、嵯峨野高校、桃山高校及び南陽高校で、参加生徒は気候変動に関する専門家による勉強会を通じて気候変動について学んだ。また令和4年11月14日に開催された京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウムにおいて、「第13回KYOTO地球環境の殿堂」の殿堂入り者とのトークセッションに、京都府の代表生徒として関係校から4名の生徒が登壇した。

c. 卒業生の国内外のトップ大学への進学や海外留学等の促進に向けた取組

ア オンライン・キャリアセミナー

将来、グローバルに活躍することを目指す府内のWWL関係校の希望生徒を対象に、以下のとおり、グローバル人材に求められる資質・能力について学び、高校卒業後のグローバル・キャリアについて考える機会を設定した。

題 目：「グローバル・キャリアを考える－海外留学の現状とこれから－」

実施日：令和4年7月23日（土）午後1時30分から3時30分まで

方 法：オンライン開催

内 容：第一部「現地学生による海外大学紹介」

第二部「海外大学在学中の日本人学生による留学体験談」

第三部「海外大学進学の魅力と進学対策について」

第四部「海外企業勤務の日本人によるキャリアデザインに関する講話」

参加者：18名（鳥羽高校、山城高校、洛北高校、嵯峨野高校、桃山高校、洛西高校、東宇治高校、南陽高校）

イ ハイブリッド型英語研修（国内）

新型コロナウイルス感染症の影響により、オーストラリア中期留学については中止したが、その代替として国内で3泊4日のハイブリッド型英語研修を年2回実施した。国内の留学生と対面でプロジェクトに取り組みながら、シンガポール等の大学生とオンラインで交流するとともに、イギリスの大学とも接続して日本人学生から留学の現状についての説明を受けるなど、参加生徒の海外留学への意識を高める内容であった。

ウ 京都府WWL高校生サミットに向けたカナダ・コキットラム市の高校生との交流会

府外連携校を含む生徒が、カナダの高校生と本サミットで議論するテーマについて意見交流し、参加生徒の海外志向の向上に効果があった。

エ その他、海外志向性を高めたと考えられる取組

- ・拠点校が海外連携校（フランス・中国・韓国）と実施したオンライン交流
- ・海外オンライン・インターンシップ（中国・台湾）における現地社員との交流
- ・京都府WWL高校生サミットにおけるオーストラリアの高校生や留学生ファシリテーター（香港・中国・ブータン・カナダ・オーストラリア・ミャンマー）との交流

d. ALネットワーク運営組織に専任者からなる事務局を設置した状況及び本事業のカリキュラムを開発する人材の配置状況

カリキュラムを研究開発するにあたり、斉藤和彦カリキュラム・アドバイザーを拠点校に配置した。カリキュラム・アドバイザーの主な役割は以下のとおりである。

ア 拠点校の「総合的な探究の時間」に係る指導・助言

イ 共同実施校の「総合的な探究の時間」の成果発表会への参加及び指導・助言

ウ 府立高校共通履修科目「スマートAP」に係る講義内容の調整及び運営面での助言

エ 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」に係る京都府立大学及び福知山公立大学との協議への参加及び課題等の分析

オ カリキュラム開発の課題の整理のため、管理機関の担当指導主事と定期的な打ち合わせ

e. テーマと関連した高校生国際会議等の開催準備状況

e-1. 京都府WWL高校生サミット

「『豊かさ』の価値の再創造による持続的な未来社会の創出」をテーマに、NTT西日本京都支店と協働し、以下のとおり、令和4年度京都府WWL高校生サミットをオンラインで開催した。参加者は、SDGsの視点を踏まえたトピックの中から1つ選択し、事前にテーマに関して調査を行い、持続的な未来社会の創出における課題とその解決策を議論し発表した。

日 時：令和4年10月29日（土）午前10時から午後4時30分まで

内 容：(1)トピック及び使用言語（日本語・英語）ごとに4人程度のグループを編成
(2)トピックに関して事前に各地域の課題とその解決方法を調査しグループで共有
(3)共有した解決策の中から、どの解決策が最も普遍的かつ先進的であるかを議論
(4)言語ごとに発表会を実施し、他のグループに議論した結果を発表
(5)英語部門については、留学生がファシリテーターとして参加

方 法：オンライン開催（参加生徒は主に在籍校からオンラインで参加）

参加校：鳥羽高校、福知山高校、洛北高校、嵯峨野高校、洛西高校、南陽高校、峰山高校、秋田県立秋田南高校、学校法人九里学園高校、沖縄県立那覇国際高校、Mansfield State high school（豪州）

参加者：日本語29名（7グループ）、英語24名（6グループ）

講評者：【英語】スティーブン・ハーダー 教授（京都ノートルダム女子大学）

【日本語】杉岡秀紀 准教授（福知山公立大学）

留学生：6名（京都大学大学院、関西大学、京都外国語大学、京都教育大学）

トピック：下記の領域に関して、SDGsを踏まえた課題を設定

I 「文化遺産の戦略的活用による活力ある未来社会の創出」

II 「科学技術と自然が調和する豊かな未来社会の創出」

Ⅲ「多文化共生による平和で安心な未来社会の創出」

Ⅳ“Creating a vibrant society in the future, making strategic use of cultural heritage”

Ⅴ“Creating a secure and peaceful society where people from various backgrounds and origins can live together in the future”

<成果>

- ア 9割以上の参加者が「本サミットは自分にとって意義のあるものであった。」と回答しており、今後も学校の枠を超えた交流への参加を希望している。
- イ 議論の観点（「普遍性」と「革新性」）を示すことで、議論の到達点が明確になり、オーストラリアの高校生との英語ディスカッションが円滑に行われた。
- ウ 英語部門においてオーストラリアの高校生が参加したことにより、よりグローバルな視点で社会課題を議論することができた。
- エ 府外連携校からの継続参加により、日本語部門のディスカッションにおいても、参加生徒が身近な地域課題を全国的な課題と関連させて議論することができた。

e-2. グローバルネットワーク京都交流会

拠点校を含むグローバルネットワーク京都校 10 校が集まり、探究活動の成果について以下のとおり交流会を実施した。

日 時：令和5年2月4日（土）

場 所：京都工芸繊維大学

テーマ：「持続可能な国際社会への展望」

参加校：鳥羽高校、山城高校、洛西高校、西乙訓高校、城南菱創高校、菟道高校、東宇治高校、西城陽高校、園部高校、峰山高校

内 容：(1)論文コンテスト（審査は事前に行い、当日は表彰式を実施）

(2)英語プレゼンテーションコンテスト（全10校が発表）

(3)日本語ポスターセッション（計18グループが発表）

f. 社会に開かれたフォーラムや成果報告会などの実施

以下のとおり、京都府WWLフォーラムを開催し、カリキュラム研究開発の成果を報告し、本府WWL事業の学術顧問による未来社会に向けた人材育成について学ぶ機会を設定した。

日 時：令和4年12月23日（金）午後1時30分から3時30分まで

方 法：オンライン開催

内 容：(1)管理機関によるALネットワーク京都の取組実績及び成果報告

(2)拠点校によるカリキュラム研究開発の成果報告及び生徒発表

(3)基調講演 阿部健一 教授（総合地球環境学研究所）

「未来を創る言葉と力：関係価値」

参加者：22名（本府WWL事業運営委員、本府WWL事業運営指導委員、府内外連携校関係者、他府県WWL拠点校等、他府県教育委員会、大学関係者）

なお、「6 管理機関の取組・支援実績 （2）実績の説明」のg-ウに記載のとおり、京都府WWL教員研修も実施し、拠点校の探究活動の成果普及に努めた。

g. 構想目的の達成に資する取組の計画と、効果的かつ円滑な運営のための情報収集・提供の実績

ア 「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」令和4年度連絡協議会への出席

イ 東京都教育委員会実施「Diverse Link Tokyo Edu」成果報告会への参加

ウ 大学コンソーシアム京都主催「第20回高大連携教育フォーラム」（令和4年12月3日）において、本府WWL事業に係る高大連携の取組を報告

エ 京都府WWLフォーラムに参加した他県WWL拠点校への情報提供

h. ALネットワーク運営組織の基盤となる関係機関との協定文書等

「京都大学と京都府教育委員会との包括連携に関する協定」（平成 26 年）

「京都府立大学と京都府教育委員会との連携協力に関する協定書」（平成 29 年）

「京都府と福知山公立大学との連携・協力に関する包括協定書」（平成 30 年）

「京都府立高等学校生徒への大学教育の先取り履修プログラムの実施に係る覚書」（令和 4 年）

「日本国京都府教育委員会とオーストラリア国クイーンズランド州教育省との間の協力協定」（令和 4 年）

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和4年4月1日 ～ 令和5年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①設定したテーマ												
②「イノベーション探究Ⅰ」に係る大学・企業等との協働												
③「イノベーション探究Ⅱ」に係る大学・企業等との協働												
④グローバル・キャリアパス・プログラム												
⑤京都府立大学との連携												
⑥新たな教科・科目の設定												
⑦海外インターンシップ			工場見学				海外渡航制限のためオンライン実施に変更					
⑧カナダの高校生との交流会（サミット事前学習）												
⑨大学教育の先取り履修「スマートAP」の実施	計7回の講義と京都府WWL高校生サミットを実施									受講証明書発行		
⑩大学教育の先取り履修「きょうとAPP」	前期科目受講					後期科目受講						

(2) 実績の説明

a. 設定したテーマについて

グローバルな社会課題のテーマとして、指定初年度から継続して「『豊かさ』の価値の再創造による持続的な未来社会の創出」を設定し、SDGs の目標を踏まえた、3つの領域について、拠点校の「総合的な探究の時間」の課題研究や本府WWL高校生サミット等に取り組んだ。

領域Ⅰ	文化遺産の戦略的活用による活力ある未来社会の創出
領域Ⅱ	科学技術と自然が調和する豊かな未来社会の創出
領域Ⅲ	多文化共生による平和で安心な未来社会の創出

b. 関係機関による先進的なカリキュラムの研究開発

b-1. 拠点校における大学・企業等との協働

ア 第 1 学年グローバル科「イノベーション探究Ⅰ」について

○令和 4 年 5 月 12 日（木）神吉紀世子 教授（京都大学大学院）によるワークショップ
テーマ：「まちづくり研究について～京の智の再発見～」

○令和 4 年 6 月 24 日（金）乾明紀 准教授（京都橘大学）によるワークショップ
テーマ：「リサーチクエストについて」

○令和 4 年 10 月 20 日（木）杉岡秀紀 准教授（福知山公立大学）によるワークショップ
テーマ：「大学の研究と社会貢献-私の探究（研究）紹介-」（オンライン実施）

- 令和4年12月23日（金）企業訪問
訪問先：岩本印刷株式会社
内 容：若者向けの和菓子商品のパッケージを開発するために、パッケージ印刷工場の見学とインタビュー調査を実施（参加生徒3名）
- 令和4年12月26日（月）企業訪問
訪問先：株式会社鶴屋長生
内 容：若者に和菓子の魅力を伝えるため、和菓子作りの工夫やマーケティングについてインタビュー調査を実施（参加生徒2名）
- 令和5年1月15日（日）企業訪問
訪問先：株式会社渡月橋
内 容：嵐山の新しいお土産を開発するため、コロナ禍の外国人観光客の動向や商品流通についてインタビュー調査を実施（参加生徒3名）
- 令和5年2月4日（土）課題研究発表会
助言者：高田光雄 副学長（京都美術工芸大学）、吉田大作 准教授（京都芸術大学）、小田浩子 代表取締役（有限会社遠山）、西山一諸 様（一般社団法人京都中小企業家同友会）、卒業生6名
- 上記の他、卒業生がT Aとして複数回にわたり探究活動に参加し、助言を行った。

イ 第2学年グローバル科「イノベーション探究Ⅱ」について

- 令和4年5月21日（土）乾明紀 准教授（京都橘大学）によるワークショップ
テーマ：「チーム探究を充実させるために」
- 令和4年6月25日（土）中間報告会
助言者：堀一成 教授（大阪大学）、坂尻彰宏 准教授（大阪大学）、大阪大学T A 4名
- 令和4年7月9日（土）堀一成氏 教授（大阪大学）及び柿沢寿信 准教授（大阪大学）による講義・ワークショップ
テーマ：「よい課題研究とはどのようなものか？」
- 令和4年7月11日（月）経営者インタビュー
内 容：経営者と高校生が共に、ウェルビーイングな生き方・働き方について考える取組として、アトム株式会社代表取締役社長とオンラインで接続し、SDGsの18番目のゴールを設定することを目標に、企業理念や職業観についてインタビュー調査を実施（参加生徒8名）
- 令和4年9月10日（土）「大阪大学アカデミック・ライティング講座」
会場：大阪大学豊中キャンパス
講師：堀一成 教授（大阪大学）、坂尻彰宏 准教授（大阪大学）、柿沢寿信 准教授（大阪大学）、大阪大学T A 4名
- 令和4年11月5日（土）課題研究中間発表会
助言者：高田光雄 副学長（京都工芸美術大学）、堀一成 教授（大阪大学）、坂尻彰宏 准教授（大阪大学）、柿沢寿信 准教授（大阪大学）、大阪大学T A 8名
- 上記の他、卒業生がT Aとして複数回にわたり探究活動に参加し、助言を行った。

ウ 第3学年グローバル科「イノベーション探究Ⅲ」について

- 令和4年7月15日（金）英語プレゼンテーション
助言者：京都府名誉友好大使15名、京都府立高校の英語指導助手5名
内 容：2年次に取り組んだ課題研究について、留学生等に英語で成果を発表し、研究したテーマについて意見交流会を実施した。

エ 「グローバル・キャリアパス・プログラム」について

拠点校グローバル科の専門科目において、以下のとおり、企業等のグローバルな視座と知見に触れることにより、グローバル人材として求められる幅広い教養と深い専門性を身に付けることを目標に実施した。

- 令和4年11月7日（月）京都青果合同株式会社によるワークショップ
対象科目：第1学年対象「ソーシャル・インテリジェンス」
内 容：「市場の役割」や「流通業界のマーケティング」について
 - 令和4年12月8日（木）株式会社松榮堂によるワークショップ
対象科目：第2学年対象「京都古典・歴史学」
内 容：「個人の日常生活と感性の在り方と『香り』や『香』との密接な関係」、「現在の『香』に求められるもの」等
 - 令和5年1月28日（土）株式会社岡墨光堂によるワークショップ
対象学年：第2学年選択科目「地域研究」・「京都の風土・世界の風土」
内 容：「文化財修理の伝統技術」及び「昨今の文化財に係る諸問題等」
 - 令和5年2月3日（金）株式会社片岡製作所によるワークショップ
対象科目：第2学年グローバル科 物理選択者「STEAM 物理」
テーマ：「高校の学びとものづくり技術」
- オ 普通科リベラルアーツコース「総合的な探究の時間」について
- 令和4年7月12日（火）京都府立大学教員による特別講義
内容：京都府立大学教員による、専門分野を例に研究の作法や研究の流れについての御講演（120分）を、普通科リベラルアーツコース128名を対象に実施した。
講師：菱田哲郎 教授（文学部）、山川肇 教授（生命環境科学研究科）
 - 令和4年9月27日（火）中間報告会
助言者：菱田哲郎 教授（文学部）、山川肇 教授（生命環境科学研究科）、京都府立大学TA3名
 - 令和5年2月4日（土）成果報告会
助言者：菱田哲郎 教授（文学部）、窪田好男 教授（公共政策学部）、山川肇 教授（生命環境科学研究科）、池田葉月 講師（京の防災防疫安全安心研究センター）、京都府立大学TA5名
- カ 運営指導委員である三谷宏治 教授（KIT（金沢工業大学）虎ノ門大学院）による特別講義について
- 令和4年9月26日（月）に第1学年の生徒には「発想力の鍛え方」、第2学年の生徒には「決める力の鍛え方」についての講義・ワークショップを実施した。
- b-2. 共同実施校における大学等との協働
- ア 令和4年5月6日（金）杉岡秀紀 准教授（福知山公立大学）による講義
対象：文理科学科第1学年
内容：「探究活動と問いの立て方」
 - イ 令和4年7月26日（火）金剛能楽堂訪問
対象：7名（海外オンライン・インターンシップ参加者）
内容：金剛龍謹 本府WWL事業学術顧問による能楽についての講話と実演を拝聴・拝見し、伝統文化の神髄について学びを深めた。
 - ウ 令和4年9月21日（水）国際理解プログラム「JICA 国際協力出前講座」
内容：セネガルの小学校で青年海外協力隊として勤めておられた方による、セネガルの小学校の様子、国際協力の必要性、求められる支援の内容についての講演を実施した。
 - エ 令和4年12月7日（水）文理科学科第15回「みらい学Ⅱ」研究発表会
対象：文理科学科第2学年
助言者：杉岡秀紀 准教授（福知山公立大学）
 - オ 令和5年2月24日（金）みらい学Ⅰ「SDGs×地域課題研究」研究交流会
助言者：杉岡秀紀 准教授（福知山公立大学）、斉藤和彦 カリキュラム・アドバイザー、WWL担当指導主事

b-3. 拠点校及び共同実施校における海外大学との連携

令和4年7月16日(土)に府立高校共通履修科目「スマートAP」の一環として、豪州クイーンズランド工科大学による“Team Work and Collaboration”の講義を実施した。参加生徒はオンラインで受講し、講義後に英語レポートを作成し、フィードバックを受けた。なお、府内連携校「スマートAP」受講者も本講義を受講した。

c. 新たな教科・科目の設定

c-1. グローバル・シティズンシップⅠ

新学習指導要領より新設された科目「公共」をベースにした学校設定科目として授業を行った。内容は日本国憲法、国内政治・経済分野を重点的に扱い、自分の身のまわりをグローバルな視点で考察する能力の育成に取り組んだ。教科書の知識をもとに現代社会の諸問題について、グループ討議をしながら資料を作成してプレゼンテーションをさせる時間を多く設けた。こうしたアプローチは、教材に対する思考力を高め、理解を深めることに寄与した。

c-2. 京都古典・歴史学

「京都古典・歴史学」は、平安文学等、京都に係る古典文学やこれらに影響を与えた漢文学の読解及び歴史的視点からの考察を行い、京都の伝統・文化や歴史を深く理解することを目標に取り組みを行った。その一環として、3学期に「平安人のいろあそび」と題した特別講義を実施し、平安時代の「国風文化」、特に「襲」について地歴公民科の教員と国語科の教員で文献や資料をもとに講義を行った後、グループごとに「襲」の色合わせを考え発表させ、平安時代の人々の色彩感や自然観の理解につなげることを試みた。

c-3. ソーシャル・インテリジェンス

「イノベーション探究Ⅰ」に関連づけ、ICT機器を用いたデータの収集・分析、結果を解釈する能力を向上させる取組を行った。まず、「情報Ⅰ」の教材を用いて、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度を育成した。また、プログラミング(Python)を、WEB上の学習コンテンツを用いて、学習者それぞれのペースで学習した。他に、表計算ソフト、プレゼンテーションソフト等の操作と活用を学習した。これらを活用し、「イノベーション探究Ⅰ」と連動させた分析・発信をすることで情報活用の実践力を習得した。

c-4. 地域研究／京都の風土・世界の風土

学校設定科目「地域研究」は地理Aの代替科目として昨年度に設置され、また「京都の風土・世界の風土」は世界史Aの代替として、これまでもグローバル科で実践されてきた科目である。2年生のグローバル科が両科目のいずれかを選択履修している。2学期には防災・減災をテーマとした授業を計画し、具体的な状況を想定して自分ならどのような対応をとるかを、小グループに分かれてゲーム的要素をもたせて討論させ、災害現場における問題点や課題について理解を深めた。

c-5. STEAM 数学ⅠⅡⅢ

今までに学習した内容が、社会でどのように役立っているかについて、実験をとおして体験的に学ぶことで、問題を解決する力や、新規性の高いものを創造できる力の育成に取り組んだ。例えば、数学Ⅰおよび数学Aでは小型の教育用マイコンmicro:bitやiPadを利用して校舎の高さを求めるという課題や、倍数判定法を学んだ後に素数をテーマにしたゲームを通して判定法の有用性に気付く活動を行った。STEAM 数学Ⅲではグラフ描写ソフトを用いて、2次曲線の特徴を発見しその特徴を理解した上で、自ら問題を作成する活動を行った。

c-6. STEAM 芸術ⅠⅡ (STEAM 芸術Ⅱは選択科目)

今年度はⅠのみの開講であったが、STEMを含む他の学問・芸術・文化とArtの関わりについて考察した。音楽では、他の学問・芸術・文化との関連や、生活や社会との関わりに触れつつ、グループ活動や比較聴取などを通して議論を活発化した。また美術では、遠近法を使

った絵画を鑑賞・制作し、光学の観点から光と色彩との関連や顔料と水との分量による表現の違いについて考えた。さらに書道では、タイポグラフィが日本や中国における過去の優れた筆跡を元に創出されたことを例に、書の現代的意義や多方面への応用について考えた。

c-7. STEAM 物理

現象を科学的に吟味、考察する能力を身につけさせることを目標に、学習した内容を踏まえた上で、新たな題材を与え、科学的に吟味、考察するような授業を展開した。円運動には向心力が必要であることを学習する中で、惑星運動に注目させ、向心力としてどのような力がはたらく必要があるかを考察させた。また、回転する表面があら円板上にある物体の運動という向心力が見つけにくいものを題材に、科学的に吟味し考える機会を設けた。

c-8. STEAM 化学

身の回りの自然現象と関連付けながら、身近に化学を考えるきっかけとなるように授業を展開した。単に新しい語句や公式を暗記して問題を解くだけでなく、実験実習を通して得られた知見を教科等横断的に他教科との関連性も図りながら物事の本質を理解できるように指導した。また、実験実習はコロナ禍でもあり実施回数は少なかったが、マイクロスケールによる4種類の個別実験を行い、生徒に考察させた。

c-9. STEAM 生物

体内の現象や、生物と非生物的環境との関係性を、保健体育や家庭基礎との学習内容と連携することにより、さまざまな視点から学び、その現象のメカニズムや目的に注目させるとともに、系統的に理解できるよう、ペアやグループ内での情報共有、スライドや動画を作成して他者に説明するなど、アウトプットの機会を増やした。また、興味関心のあるものについて、自ら疑問点を主体的に見だし、教科書や資料から知識を習得し資料を用いてまとめる能力の育成に力を入れた。

c-10. グローバル・コミュニケーションⅠⅡⅢ

「グローバル・コミュニケーションⅠ」では、京都あるいは、日本の若者が直面している問題に関する探究活動を行い、その内容について英語でプレゼンテーションやディスカッションをした。聴衆に分かりやすく内容を伝えるために、発表スライドを工夫して、表現方法に磨きをかけた。「グローバル・コミュニケーションⅡ」では、「イノベーション探究Ⅱ」に関連したテーマについて英語によるディベート活動やライティング活動を行った。ディベートでは主張に対する反論を立案する活動をとおして、批判的思考力を養った。「グローバル・コミュニケーションⅢ」では、「イノベーション探究Ⅲ」と関連づけ、英語論文作成に必要な表現や構成等、アカデミック・ライティングの学習に取り組みさせた。論文の構成を整理して書くことを通して、これまでに養った俯瞰する力、科学的に思考する力、探究の枠組みをデザインする力を発揮する機会を設けた。

c-11. ESA (English for Studying Abroad) Ⅰ

読むこと、聞くこと、話すこと、書くことの総合型タスクを行った。4技能の英語コミュニケーション能力の向上に加え、説得力をもって論理的に自分の意見を発信する力を養った。スピーチ、寸劇 (Skit)、助言、ディスカッションを通し、自分の伝えたい内容を自分の言葉でわかりやすく効果的に伝える技術を学んだ。また、論理的思考力、問題解決能力、伝達能力、柔軟性など意見を発信するためには欠かせない力を様々なシチュエーションを提示しながら体験的に学んだ。

c-12. EE (E-English) Ⅰ

ICT機器を活用しながら、主体的に学習に取り組む態度を育むことを目標とした活動に取り組んだ。iPadを利用して、各自のペースで、それぞれの能力や課題に合わせた内容のスタディサプリ Englishに取り組んだ。その内容は毎回レポートにまとめ、各自の学習を振り

返ることが出来た。苦手分野を選んだり、同じ内容を様々な方法で深めたりするなど主体的に取り組む活動が多く、生徒の満足度も高かった。また Skit 作成・発表、英検を基にしたスピーキング活動にも取り組み、学んだ内容を活用したアウトプット活動が出来た。

c-13. 第2外国語ⅠⅡ

中国語、韓国語、フランス語を母語とする教員による授業をととして、各言語およびその文化について学ばせた。また、フランス・ヌヴェール高校や中国・西安交通大学附属中学の高校生とオンラインで交流会を行うなど、多様な文化的背景を持つ人々と協働する力を育成した。韓国語選択者2年生3名が、第23回京都韓国語スピーチ大会に出場し、3名ともに銅賞を獲得した。

c-14. 英語理解

英文構造の理解等を行いながら、筆者の意見・主張を的確に読み取る活動に重点を置いた。その上で、それらについて英語で意見交換を行い、自分の考えを英文にまとめ、グループ内で輪読する等の活動を通して内容理解を深めるようにした。また、「英語表現」・「グローバル・コミュニケーション」で学んだ手法を基に、内容に関連したトピックについてのショートスピーチを行い、英語で意見を伝える力の養成に努めた。これらの活動を通して、生徒が英語を通じてものごとを主体的に考え、自分の意見を形成することに寄与した。

c-15. 文化遺産論α・文化遺産論β

史資料を提示し、歴史的事象について思考・判断し表現するワークを実施するとともに、文献調査を行い、ある文化についてマイテーマを設定して考察する取組を行った。例として、文化遺産論αでは、古代ギリシアの歴史家トゥキディデスの著書『歴史』の一節を取り上げデロス同盟の実態を読解することで、ペルシア戦争後の都市国家アテネの性格を教科書の内容からさらに踏み込んで考察した。史資料の読解や文献調査をととして歴史を多角的な視点で捉える学びや、教科書で取り扱われている文化がなぜ、今日まで継承され「遺産」となっているのかについて価値を見出す学びに繋がった。

d. カリキュラムに位置付けられた短期・長期留学や海外研修

新型コロナウイルス感染症拡大により海外渡航が制限されたため、ICTも活用しながら国内での取組に変更した。各取組の内容は以下のとおりである。

d-1. 拠点校の海外研修

普通科リベラルアーツコース及びグローバル科の生徒については、海外研修旅行を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により行き先を国内に変更して実施した。

d-2. 海外インターンシップ

拠点校と共同実施校を対象に、以下のとおり、株式会社片岡製作所の海外事業所とオンラインで接続し、グローバル企業の事業内容及び海外で活躍するために必要な資質・能力について学ぶため、海外オンライン・インターンシップを以下のとおり2回実施した。

事前学習：令和4年7月26日（火）株式会社片岡製作所京都本社レーザ工場訪問

参加生徒20名（第1回と第2回の参加者合同で実施）

第1回：令和4年9月28日（水）上海事業所と接続

参加生徒10名

第2回：令和4年12月21日（水）台湾事業所と接続

参加生徒10名

内 容：いずれの回も、各事業所の現地社員の方々から、海外における事業展開及びコロナ禍における現地の状況について説明を受けるとともに、参加生徒と現地社員との質疑応答を実施

<成果>

- ア 現地社員との対話を通して、参加生徒はグローバルに活躍するための資質・能力について、大きな学びを得た。例えば、多くの参加者が「日本人に足りないのはチャレンジ精神であり、失敗を恐れずに沢山挑戦して学ぶ姿勢を持ちたい。」とアンケートで回答している。
- イ 参加生徒の海外志向や外国語学習への意欲に大きな影響を与えた。例えば、「海外より日本は少し遅れている部分が沢山あると知り、私たちはもっと海外に目を向けていくことを進学であっても就職であっても頭に置いて考えるべきだ」、「言語を取得していくことの大切さや、言語を学ぶ上での大切なことが分かり、この経験を今後の第2外国語の学習や、大学受験などに活かしたい。」とアンケートで回答している。

d-3. カナダ・コキットラム市の高校生との交流会

当初計画していた海外インターンシップでは、海外事業所の訪問に加えて、現地の高校や大学生とフィールドワークや協働学習を実施することとしていた。しかし現地訪問が実現しなかったことから、カナダ・コキットラム市の高校生とオンラインによる交流会を実施した。なお、本取組は京都府WWL高校生サミットにおける英語ディスカッション参加者に対する事前準備として実施した。

- 日 時：令和4年10月15日（土）午前8時30分から午後1時まで
- 方 法：オンライン開催
- 参加者：13名（鳥羽高校、福知山高校、洛西高校、南陽高校、峰山高校、秋田南高校）
- 内 容：①本サミットで議論するトピックを踏まえた、英語ディスカッションの練習
②上記トピックについて、カナダの高校生と少人数のグループで意見交流

<成果>

- ア 参加者が本サミットと同じトピックで、カナダの高校生と話し合い、日本とは異なる価値観等を学ぶことができた。
- イ 本取組について、参加者全員が京都府WWL高校生サミットの英語ディスカッションで効果があったと回答している。
- ウ オンライン実施により、府外連携校にもグローバルな学びの機会を提供できた。

d-4. 府立高校海外サテライト校事業

新型コロナウイルス感染症の影響により、府立高校海外サテライト校事業は中止した。その代替として、「6 管理機関の取組・支援実施（2）実績の説明【ALネットワークの形成】」のc-イに記載のとおり、国内で3泊4日のハイブリッド型英語研修を年2回実施した。

- e. 体系的なカリキュラムの編成にあたり、各教科をバランス良く学ぶ教育課程の編成について
拠点校では単位制による教育課程を導入し、上記「c. 新たな教科・科目の設定」に記載のとおり、課題解決型学習やSTEAM教育を取り入れた、既存教科の枠組みにとらわれない教科・科目を設置している。
- f. 工夫された学習活動の実施に向けた計画
管理機関は、遠隔地の高校生同士が時間的・地理的・経済的制約を超えて、高度で先進的な学びにアクセスできる仕組みとして、下記gに記載のとおり、昨年度から府立高校共通履修科目「スマートAP」を開始した。また海外インターンシップ等でICTを活用した取組を行い、共同実施校だけでなく、連携校にもグローバルな学びの機会を提供できた。

g. 大学教育の先取り履修の実施に向けた計画

g-1. 府立高校共通履修科目「スマートAP」

令和3年度から継続して、大学との協働による高度で先進的な学びのプログラムを実施した。合計6名の大学教員によるリレー講義やワークショップを受講し、その成果を踏まえて本

府高校生サミットに参加するプログラムである。

<参加校>

拠点校、共同実施校、洛北高校、嵯峨野高校、南陽高校、峰山高校（計 27 名）

<令和 4 年度プログラム> ※全て遠隔で実施

- 第 1 回 4 月 16 日（土） 「課題研究の意義、問いの立て方」
杉岡秀紀 准教授（福知山公立大学）、江上直樹 講師（大阪大谷大学）
- 第 2 回 5 月 7 日（土） 「研究テーマの決定 -RQ の設定と仮設の構築-」
乾明紀 准教授（京都橘大学）
- 第 3 回 6 月 4 日（土） 「研究方法について -量的研究と質的研究-」
神吉紀世子 教授（京都大学大学院工学研究科）
- 第 4 回 7 月 16 日（土） “Team Work and Collaboration”
Rebecca Axelson 講師（豪州・クイーンズランド工科大学）
- 第 5 回 7 月 30 日（土） 「論理的・批判的に考える」
柿澤寿信 准教授（大阪大学国際共創大学院学位プログラム推進機構）
- 第 6 回 8 月 20 日（土） 「チームでプチ課題研究！ -研究計画書を作ろう-」
乾明紀 准教授（京都橘大学）
- 第 7 回 9 月 17 日（土） 「プレゼンテーションの技法」・まとめ
杉岡秀紀 准教授（福知山公立大学）
- 第 8 回 10 月 29 日（土） 京都府WWL 高校生サミット

<成果>

- ア 大学の初年次教育との接続を図ることを意識しながら、探究の「作法」を一通り学ぶことができるプログラムを府内の連携校 4 校にも拡大して実施できた。
- イ 在籍校の異なる生徒から成るグループを編成し、全プログラムを通してグループでの議論を実施した。また、グループで 1 つのプロジェクトに取り組み、成果物にまとめ発表できるよう各回の講義内容の連携を図り、習得した知識をスキルとして活用する機会も設定できた。これは、協働学習の促進と学習成果の可視化にも役立ち、生徒は習得した知識等を本府高校生サミットや各校の探究活動に活かすことができた。なお、共同実施校の参加生徒が、関西学院大学高等部主催「中・高生による探究の集い 2022」コンテスト部門に出場し、第 2 位となった。
- ウ 全プログラムを通して生徒はきわめて意欲的に参加し、日本語や英語でのレポート等について、取組状況が良好であった。また、参加者アンケートから生徒の将来構想にも大きな影響があったことを見取ることができた。

g-2. 「きょうとアドバンスト・プレイズメントプログラム（きょうとAPP）」

管理機関は、京都府立高等学校に在籍する生徒が大学の正規授業を履修するプログラムの実施に関して、京都府立大学及び福知山公立大学と覚書を交わし、令和 5 年度までの試行を開始した。試行期間中の身分は聴講生となるため、大学による単位認定は行わず、修了証の発行のみ行う。修了証を発行された者については、在籍校において学校外における学習に係る単位として認定する。令和 4 年度の開講科目等に係る詳細は以下のとおりである。なお、参加対象校は拠点校（鳥羽高校）と共同実施校（福知山高校）の 2 校であり、受講方法は原則、オンデマンド方式のオンライン受講としている。

<令和 4 年度「きょうとAPP」>

学期	大学	科目名	聴講者数	修了者数
前期	福知山公立大学	経営学入門	2 名	2 名
		多文化共生論	2 名	2 名
		エンタテインメント情報学	2 名	2 名
後期	京都府立大学	現代社会と法	6 名	令和 4 年度 末に確定
		コミュニティワーク	2 名	

	福知山公立大学	森林の科学	2名	
		地域協働論	2名	
		ゲーム情報学	4名	

<成果>

- ア 受講者アンケートによれば、生徒の主体的な姿勢に大きな変化があった。例えば、講義の視聴以外でも関連書籍などを読み、最終レポート作成に取り組んだ。
- イ 大学教員によれば、能力や意欲について大学生との差は感じられないということであり、大学教員にとって大きな刺激となったようである。
- ウ 大学の正規授業を修了した生徒は、大きな達成感を得て、自己肯定感が高まった。

<課題>

- ア 大学生に対面で実施している授業を録画して配信する場合、大学教員の負担が大きい。
- イ 大学にとって、先取り履修のメリットが明確でない。

h. より高度な内容を学びたい高校生のための拠点校・共同実施校の条件整備

拠点校では「STEAM 数学」や「文化遺産論 α・文化遺産論 β」等の多様な学校設定科目を設置し、生徒の興味・関心に合わせて、より高度な内容を学べるカリキュラムを編成している。

拠点校、共同実施校及び一部の府内連携校について、希望生徒が府立高校共通履修科目「スマート AP」を受講できるように条件を整備した。また、拠点校及び共同実施校では、府内 2 公立大学による大学教育の先取り履修について、希望生徒が聴講できる条件が整っている。

i. 日本人高校生と留学生が一緒に英語等で授業・探究活動を履修するための学校体制の整備

共同実施校が、アジア高校生架け橋プロジェクトにより、1 名の留学生を受け入れ、日本語能力を考慮しながら、探究活動を含めた様々な取組を在校生と一緒に取り組めるように配慮した。

8 目標の進捗状況、成果、評価

a. イノベティブなグローバル人材の育成状況

育成を目指すイノベティブなグローバル人材に求められる 6 つの資質・能力及び探究的な資質・能力等について指標を定め、アンケート調査を 3 年間実施した。その結果と拠点校担当者へのヒアリング調査から分析できる成果は、以下のとおりである。

a-1. 令和 2 年度入学生（現 3 年生）の拠点校生徒対象アンケートに係る 3 年間の経年比較

ア 成長志向について、令和 4 年 12 月の結果において、全ての指標で肯定的回答率が 1 年次よりも上昇している。2 年次に肯定的回答率が下降したが、3 年次に上昇したものは、以下の 2 つである。

- ・指標 4 「自分のやりたいことを見つけ、それに情熱を傾けたい。」

（1 年次 90.3% → 2 年次 76.6% → 3 年次 95.5%）

- ・指標 5 「集団での問題解決場面において、率先してリーダー的な役割を担うことができる。」（1 年次 47.8% → 2 年次 49.4% → 3 年次 58.6%）

イ 海外志向について、英語・異文化への関心及び海外志向性ともに、2 年次に肯定的回答率は下降した。しかし、3 年次 12 月の結果は 1 年次と同様の肯定的回答率となった。

ウ 6 つの資質・能力について、いずれの指標も 3 年次では 1 年次を上回る肯定的回答率となっている。特に変化の大きい指標は以下の 2 つである。

- ・指標 12 「身近な地域や京都の事柄を、日本全国や世界と関連付けて考えることができる。」【歴史をとらえて世界を俯瞰する力】（1 年次 41.8%→3 年次 63.0%）

- ・指標 18 「京都や世界の伝統・文化や技術について、それらの持つ新しい価値に気づくことができる。」【新たな価値を創造する力】（1 年次 56.0%→3 年次 76.5%）

また、2 年次に肯定的回答率が下降した「多様な文化的背景を持つ人々と協働する力」に係る指標 13 と指標 14 や「困難な状況を突破する力」に係る指標 21 において、今年度 12 月には 1 年次の結果を上回る肯定的回答率となっている。

- ・指標 13「異なる文化や価値観を尊重している。」
(1 年次 86.6% → 2 年次 77.0% → 3 年次 93.7%)
 - ・指標 14「異なる価値観を持つ人と協力しながら課題に取り組むことができる。」
(1 年次 73.1% → 2 年次 70.9% → 3 年次 88.8%)
 - ・指標 21「困難な状況であってもあきらめたくないと思う。」
(1 年次 78.7% → 2 年次 71.7% → 3 年次 88.8%)
- a-2. 令和 3 年度入学生（現 2 年生）の拠点校生徒アンケートに係る 2 年間の経年比較
- ア 成長志向と海外志向ともに、1 年次の結果と比較して大きな変化はない。全体として、令和 2 年度入学生（現 3 年生）の 2 年次の結果よりも、肯定的回答率が高い。
 - イ 6 つの資質・能力について、1 年次より肯定的回答率が上昇しているものに、「科学的に思考・吟味する力」に係る指標 15（+7.4）と「困難な状況を突破する力」に係る指標 21 と指標 22（+9.6%、+7.0%）がある。なお、肯定的回答率が下降している指標はない。
 - ウ 令和 2 年度入学生と比較して、6 つの資質・能力について、「歴史をとらえて世界を俯瞰する力」に係る指標 12 と「新たな価値を創造する力」に係る指標 18 は、他の指標と比べて肯定的回答率はそれほど高くなく、指標 12 が 43.6%、指標 18 が 67.8%となっている。これは令和 2 年度入学生と同様の傾向である。
- a-3. 令和 4 年度入学生（現 1 年生）の拠点校生徒アンケートに係る年度内比較の結果
- ア 成長志向及び海外志向に係る指標について、年度内の調査（7 月・12 月）の比較では大きな変化はない。
 - イ 6 つの資質・能力について、指標 13「異なる文化や価値観を尊重している。」は肯定的回答率が 92.4%と極めて高い。また、「困難な状況を突破する力」に係る指標 21 について、肯定的回答率が大きく上昇している（75.1%→87.3%）。
 - ウ 6 つの資質・能力について、指標 12（47.5%）と指標 18（66.3%）の肯定的回答率は、令和 2・3 年度入学生と同様に他の指標よりも肯定的回答率はそれほど高くない。
- a-4. 令和 2 年度入学生（現 3 年生）の探究的な資質・能力に係る生徒アンケート結果
- ア 鳥羽高校
昨年度（2 年次）に指標 1 と指標 7 の肯定的回答率が下降した。しかし今年度 12 月では、全ての指標で 1 年次の肯定的回答率を上回っている。特に変化の大きい指標は、指標 5（+35%）である。
・指標 1「関心のあるテーマに、課題を発見・設定できた。」
(1 年次 75.7% → 2 年次 72.1% → 3 年次 84.3%)
・指標 5「研究内容を研究ノートやポスター等に効果的にまとめ、発表することができた。」（1 年次 48.5% → 2 年次 63.2% → 3 年次 83.5%）
・指標 7「自己の役割を自覚し、協働的かつ建設的にグループ活動に参加しようとしている。」（1 年次 83.6% → 2 年次 73.2% → 3 年次 87.4%）
 - イ 福知山高校
2 年次までに探究活動を終える教育課程となっており、令和 4 年 12 月の結果は参考程度の扱いとなる。ただし、鳥羽高校と同様に指標 5 の肯定的回答率は初年度（74.0%）から着実に上昇し、令和 4 年 7 月（3 年次 1 学期）には 90.2%の生徒が肯定的に回答している。
- a-5. 令和 3 年度入学生（現 2 年生）の探究的な資質・能力に係る生徒アンケート結果
- ア 鳥羽高校
昨年度（1 年次）と比較して、全ての指標で肯定的回答率が上昇している。特に、「情報の収集・選択」（+15.4%）、「思考・分析」（+17.0%）、「仮説構築」（+15.2%）、「表現」（+11.9%）、「社会参画の意識」（+12.0%）に係る指標で顕著な変化がある。
 - イ 福知山高校

全ての指標で肯定的回答率が大きく上昇している。特に「仮説構築」については、1年次 35.2%に対して、今年度は 76.8%まで上昇した。

- a-6. 令和4年度入学生（現1年生）の探究的な資質・能力に係る生徒アンケート結果
- ア 鳥羽高校の年度内比較において、「表現」（+18%）と「主体性・積極性」（+9.8%）で、肯定的回答率の顕著な上昇が見られる。一方、SDGsへの意識に係る指標8で肯定的回答率が下降（△6.0%）している。
 - イ 福知山高校の年度内比較において、「課題設定」（+15.9%）、「仮説構築」（+16.5%）、「主体性・積極性」（+15%）、「多様性・協働性」（+11.3%）で肯定的回答率が上昇している。

a-7. WWL事業に係る3年間の成果

- ア 拠点校における3年間を通した探究活動のサイクル確立
- 拠点校の探究活動は、学年が上がるにつれてローカルからグローバルな視点での探究へと発展させ、3年次でその成果を英語又は日本語でアウトプットする流れを確立している。これにより、3年間かけて6つの資質・能力を着実に伸ばすことに成功している。特に「歴史を通して世界を俯瞰する力」や「新たな価値を創造する力」について、1年次よりも肯定的回答率が20%も伸びており、段階を追った指導の結果である。
- また、探究活動について、3年次に再び時間をかけて成果をまとめ発表すること、また他者と意見交流することで、自分自身の成長に改めて気づくことができているようである。それが「議論の際は自分の考えを相手にわかりやすく伝えたとともに、相手の意見にも耳を傾けることができる力」の育成に繋がっている。
- イ 探究活動を軸にした教員の授業改善と教員の意識変容
- 令和2年度入学生において、2年次（令和3年度）に肯定的回答率が下降した指標が6つの資質・能力及び探究的な資質・能力に係る指標で見られたが、令和3年度入学生ではその傾向は見られない。これは探究のテーマ設定方法について工夫と改善をした結果であり、教科指導においても探究的視点から発問できる教員が増えたことが要因であると考えられる。探究活動を軸にした取組が、教員の教科指導にも良い影響を及ぼしている。
- また新たな教科・科目の研究開発についても、6つの資質・能力をどのようなアプローチで育成するのかについて、校内で実践報告書を作成し共有することで、教員間で指導に関する意識が統一され、授業改善が進んだ。
- ウ 拠点校・共同実施校の探究的な資質・能力の育成
- 拠点校と共同実施校ともに、「総合的な探究の時間」を通して、探究的な資質・能力を着実に育成できている。特に、両校ともに、「研究内容を研究ノートやポスター等にまとめ、発表することができた。」の肯定的回答率の伸び率は非常に高い。その他の指標と比較して、1年次における発表に係る指標の肯定的回答率は低い傾向にあるが、学年が上がるごとに着実に上昇していることから、両校の指導の成果が表れている。

b. ALネットワークが果たした役割

- ア 拠点校における高大社連携による取組の充実
- 高校生が京都の事柄を世界と関連させて考えることや、京都の事柄について新たな価値に気づくために、拠点校では事業協働機関である株式会社松栄堂や株式会社岡墨光堂等と連携しながら、京都の伝統文化に係る学習を推進している。また探究活動において、グローバル科では事業協働機関の複数の大学教員と、普通科では京都府立大学の教員と連携し、講義や中間発表会における指導・助言をお願いしている。3年次の留学生との交流会も含めて、大学教員や企業の方など、多様な文化的背景を持つ人々と協働しながら意見交流する機会を3年間にわたって生徒に提供したことで、「自分の考えをわかりやすく伝え、相手の意見にも耳を傾けること」や「異なる価値観を持つ人と協力しながら課題に取り組むことができる」の育成にも効果が表れている。
- イ 高度な学びの機会による生徒の変化

事業協働機関等と協働して実施している、府立高校共通履修科目「スマートAP」や「きょうとAPP」のような高度で先進的な学びは、参加生徒のキャリア発達に大きな影響を与えている。イノベーティブでグローバルな人材に求められる資質・能力の育成にとって非常に効果的な取組ではあり、高校生が将来について深く考える契機となっている。また、自己研鑽に必要な向上心や挑戦心の育成にとっても大変意義がある。

ウ 学校・地域を超えたグローバルな協働学習の機会の提供

京都府WWL高校生サミットにより、拠点校をはじめ、府内連携校の生徒が他県の高
校生、そして海外の高校生と社会課題について議論する場を提供できた。地理的・時間
的制約を超えて、学校・地域・国の枠を超えて、高校生が議論することで新たな課題を
発見し、またこれからの社会で活躍するグローバル人材のネットワーク形成に貢献でき
たと考える。これは、ALネットワーク形成により達成できた大きな成果である。

c. 短期的、中期的及び長期的に設定した目標の進捗状況

c-1. 短期的・中期的目標（令和2年度～令和5年度末）について全ての目標を達成した。

- ア 府立高校共通履修科目「スマートAP」により、拠点校及び共同実施校が大学教育の先
取り履修に向けた実証研究を行い、高等学校の単位として認定を開始した。
- イ 情報共有の場として京都府WWLプラットフォームの本格運用を開始した。
- ウ 京都府WWL高校生サミットを開催した。
- エ 高校生が大学の正規授業を履修する取組については、令和4年度から2年間の試行を開
始した。大学による単位認定については継続して協議を行う。

c-2. 長期的目標

- ア ICTを用いた時間的、地理的、経済的に制約されずに活用できるALネットワークの
モデルとして、事業終了後も京都府WWL高校生サミット及び「スマートAP」の継続
開催を決定した。
- イ 事業終了後の継続的な運営に向けて、次年度の財源等の確保ができています。

9 自走に向けた方向性と、次年度以降の課題及び改善点

- a. 事業協働機関と連携し、自走に向けた方向性について、次年度も以下の取組を計画している。
 - ア 府立高校共通履修科目「スマートAP」の実施
 - イ 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」の試行継続
 - ウ 京都府WWL高校生サミットの開催
 - エ 総合地球環境学研究所と連携した「高校生のための気候変動学習会」への参加
- b. 本事業に関する管理機関の課題や改善点について

事業終了後の、ALネットワーク京都の運営体制について、人的・予算的措置がないなか
で、円滑に取組を実施するため、運営面のさらなる工夫と業務の整理が必要となる。
- c. ALネットワークの課題や改善点について
 - ア コロナ禍のために、連携が進まなかった関係校等との今後の連携を計画する必要がある。
 - イ 「スマートAP」対象校を拡大し、より多くの連携校に高度な学びを提供できるかにつ
いて検討する必要がある。
 - ウ 「きょうとAPP（大学教育の先取り履修）について、大学の単位認定と対象校拡大に
ついて、事業協働大学と本格的に協議を始める必要がある。
- d. 研究開発にかかる課題や改善点について
 - ア 高大社連携の取組を事業終了後も円滑に実施するために校内体制の維持が課題となる。
特に働き方改革に伴い土曜日授業がなくなり、大学教員等との日程調整が課題である。
 - イ 「総合的な探究の時間」等に係る成果を連携校等にさらに普及させていく必要がある。

【担当者】

担当課	指導部高校教育課	TEL	075-414-5815
氏名	伊藤 恵哉	FAX	075-414-5847
職名	指導主事	E-mail	k-ito07@pref.kyoto.lg.jp

2 WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業概要

（１） 構想計画書（概要）

構想名

未来を創る課題解決先進国の人材育成 ～京の智から地球の智へ～

構想概要

歴史と伝統に育まれた「京の智・日本の智」と各国・各地域における「世界の智」を高度で先進的な学びや協働学習により「地球の智」へと高めることにより、設定したグローバルな社会課題『豊かさ』の価値の再創造による持続的な未来社会の創出』に取り組み、Society 5.0において全国の自治体・高校等が活用できるイノベティブなグローバル人材を育成する京都モデル「ALネットワーク京都」を研究開発する。この京都モデルを実現するため、京都府独自の3つの京都戦略、大学教育の先取り履修や海外インターンシップ等の「高度で先進的な学びの機会の提供」、ICT活用による遠隔教育や京都府WWL高校生サミットの開催等の「グローバルかつ多様な協働学習の機会の創出」、オンライン情報共有システム「京都府WWLプラットフォーム」の活用等の「研究開発内容の共有と継続的な成果普及」を設定し、世界をリードする課題解決先進国となることを目指す。

研究開発・実施体制

	機関名・学校名・情報
管理機関	京都府教育委員会
事業拠点校	京都府立鳥羽高等学校（公立）
事業共同実施校	① 京都府立福知山高等学校（公立）
事業協働機関 (国内外の大学、企業、 国際機関等)	① 京都大学
	② 京都府立大学
	③ 福知山公立大学
	④ キーンズランド工科大学
	⑤ 復旦大学国際問題研究院日本研究中心
	⑥ 国立民族学博物館
	⑦ 総合地球環境学研究所
	⑧ JICA関西
	⑨ 京都府国際センター
	⑩ 京都文化博物館
	⑪ 京都府立図書館
	⑫ 株式会社片岡製作所
	⑬ 株式会社堀場製作所
	⑭ 西日本電信電話株式会社 京都支店
	⑮ 京都青果合同株式会社
	⑯ 京都中小企業家同友会
	⑰ 株式会社岡墨光堂
	⑱ 株式会社松栄堂
	⑲ 公益財団法人冷泉家時雨亭文庫
	⑳ 公益財団法人金剛能楽堂財団
事業連携校 (国内外の高等学校等)	① 京都府立山城高等学校（公立）
	② 京都府立洛北高等学校（公立）
	③ 京都府立嵯峨野高等学校（公立）
	④ 京都府立洛西高等学校（公立）
	⑤ 京都府立桃山高等学校（公立）
	⑥ 京都府立西乙訓高等学校（公立）
	⑦ 京都府立東宇治高等学校（公立）

⑧	京都府立菟道高等学校	(公立)
⑨	京都府立城南菱創高等学校	(公立)
⑩	京都府立西城陽高等学校	(公立)
⑪	京都府立南陽高等学校	(公立)
⑫	京都府立園部高等学校	(公立)
⑬	京都府立峰山高等学校	(公立)
⑭	秋田県立秋田南高等学校	(公立)
⑮	九里学園高等学校	(私立)
⑯	千葉県立成田国際高等学校	(公立)
⑰	沖縄県立那覇国際高等学校	(公立)
⑱	ハンヨン高校(韓国)	(私立)
⑲	上海市嘉定一中	(公立)
⑳	西安交通大学附属中学	(公立)
㉑	台中市立台中工業高級中等學校	(公立)
㉒	ヌヴェール高校(フランス)	(私立)

(2) 構想目的・目標（構想計画書より一部抜粋）

1 イノベティブなグローバル人材像

京都府は、令和元年度、これからの行政運営の指針となる「京都府総合計画（京都夢実現プラン）」を策定し、概ね20年後の2040年を見据えた京都府の望むべき姿を提示したところである。本計画では、国連が進める「持続可能な開発目標（SDGs）」の理念を共有しつつ、経済の量的拡大だけを追い求めるのではなく、「豊かさ」の価値を再創造し、高い理想と夢を掲げた「京都モデル」で日本、世界をリードすることを目指している。その実現に向けて、①文化の力による新たな価値の創造、②国際交流が暮らしの中に根付いている多文化共生社会の形成、③伝統技術と先端産業の融合、④地球環境と調和したしなやかで強靱な社会の実現の4つのビジョンに基づく施策を推進することとしている。

京都府教育委員会（以下「管理機関」という。）は、この総合計画で示されたビジョンや「京都府教育振興プランーつながり、創る、京の知恵ー」に示した、目指す人間像「歴史と伝統にはぐくまれた京都の知恵をつなぎ、自然、人、社会とつながる人」「積み重ねられた知恵を活用し、新しい価値を創り出して世界に発信する人」を踏まえて、この事業の構想名を、「未来を創る課題解決先進国の人材育成 ～京の智から地球の智へ～」と定め、この事業で育むイノベティブなグローバル人材像を、「長い歴史の中で紡ぎ受け継がれてきた知恵や価値を生かしつつ、多文化協働をとおして、人類共通の新たな価値と持続可能なよりよい未来社会を創造できる人材」と定義する。

現在、我々人類は大気や水の汚染、生態系や文化的遺産の破壊、さらに価値観の対立による国家間や地域間の紛争など、人間活動の影響により生じた地球規模の課題に直面している。こうした課題を解決するには、これまでの人類の長い歴史の中で各国・各地域において受け継がれてきた知恵を生かすとともに、課題解決の方策をデザインし、国際社会全体で協働して困難に立ち向かい、解決に取り組む姿勢が必要であること、さらには、科学的に考え、新たな価値を発見したり、創り出したりすることが求められることを踏まえ、事業で育成する人材に求められるものを、次の3領域からなる6つの資質や能力と定義する。

I 伝統・文化領域

①歴史をとおして世界を俯瞰する力

②多様な文化的背景を持つ人々と協働する力

II イノベーション領域

③科学的に思考・吟味する力

④新たな価値を創造する力

III ソリューション領域

⑤課題解決の枠組みをデザインする力

⑥困難な状況を突破する力

2 ALネットワークの目的と役割

管理機関は、上記1で示した資質や能力を育み、イノベーティブなグローバル人材を育成する仕組みとして「ALネットワーク京都」を構築する。

ALネットワーク京都の目的を以下のとおり定める。

大学・グローバル企業・国際機関等との連携による高度で先進的な学びや、グローバルで多様な協働学習により、「豊かさ」の価値の再創造による持続可能な未来社会の創出に貢献する人材を育成し、将来のWWLコンソーシアムの構築に寄与する。

京都府内及び日本国内各地の高校や教育委員会・学校法人並びに世界の高校・大学・企業・国際機関等と連携し、ICTを活用した遠隔教育等による時間・場所・経済状況に制限されない Society 5.0 に向けたグローバル人材育成モデルの研究開発及び成果普及に取り組む。

この目的の実現に向けたALネットワーク京都の役割として3つの京都戦略を実践する。

京都戦略1：高度で先進的な学びの機会を提供

多くの大学やグローバル企業、研究機関が集積する京都の地の利を生かし、高校生に対して、大学教育の先取り履修の機会や、伝統文化の神髄に触れる機会、海外の企業でのインターンシップの機会など、高度で先進的な学びの機会を提供することにより、グローバル人材として必要な資質や能力を育成する。

京都戦略2：グローバルかつ多様な協働学習の機会を創出

京都府が取り組んできた「学校ICT環境整備促進実証研究事業」による研究成果の活用や、本事業で連携する府内・府外の高校や大学、国外の高校などが交流する京都府WWL高校生サミットの開催により、時間的・地理的・経済的制約を超えた多様な協働学習の機会を提供する。

京都戦略3：研究開発内容の共有と継続的な成果普及

研究開発内容のオンライン情報共有システム「京都府WWLプラットフォーム」や、拠点校・共同実施校・連携校・協働機関による研究協議会「京都府WWLフォーラム」の一般公開をとおり、成果普及を継続的に行う。また、ICTを活用した「京都府WWL教員研修」を実施し、生徒のみならず世界中の高校教員が協働的に学び合える環境を整備する。

3 短期的、中期的及び長期的な目標

- (1) 短期的な目標（令和2年度～令和3年度末、第1年次・第2年次）
 - ・拠点校、共同実施校が協働機関の大学と、大学教育の先取り履修・大学による単位認定に向けた実証研究開始
 - ・研究開発に係る情報共有の場として京都府WWLプラットフォームを開設
 - ・京都府WWL高校生サミットの開催
- (2) 中期的な目標（令和4年度～令和5年度末、第3年次・第4年次）
 - ・大学教育の先取り履修による単位認定の本格実施
 - ・京都府WWLプラットフォームの本格運用開始
- (3) 長期的な目標（令和6年度～、第5年次～）
 - ・令和6年度以降は、管理機関がALネットワーク京都の運営を継続し、WWLコンソーシアムにおける役割を担い続ける。財源については、京都府予算及び、ふるさと納税制度を用いた「京都府母校応援ふるさと事業」等を活用する。
 - ・ICTを用いた時間的・地理的・経済的に制限されずに各都道府県において活用できるALネットワークモデルの完成

(3) 令和3年度(指定2年目)の活動概要

1 京都戦略Ⅰ「高度で先進的な学びの機会を提供」

(1) 海外インターンシップ

令和2年度と同様に当初は事業協働機関である株式会社片岡製作所の海外事業所でのインターンシップと、現地高校・大学等におけるワークショップを年3回(台湾・上海・韓国)企画していたが、新型コロナウイルス感染症による渡航制限のため中止した。その代替として、同社の協力により、上海事業所と9月29日に、台湾事業所と11月24日にオンラインによるインターンシップを2回実施し、現地社員より各国の歴史・文化及び海外事業所の事業内容について説明を受けるとともに、現地社員へのインタビューを行った。(時間数不足のため単位認定はなし。)

なお、令和3年度から共同実施校(福知山高校)も対象として実施し、拠点校が開発した高度で先進的な学びの機会を他の府立高校にも広げることを開始した。福知山高校の参加者については、事前学習である株式会社片岡製作所京都本社レーザ工場訪問日に、併せて金剛能楽堂を訪問し、能楽に関する講話の拝聴や観能を通して、伝統文化の神髄に触れる機会を設定した。

(2) 拠点校における新たな教科・科目の設定

拠点校ではWWL事業の指定を機に単位制による教育課程を導入しており、課題解決型学習やSTEAM教育を取り入れた、既存教科の枠組みにとらわれない教科・科目を年次進行で設置することとしている。指定2年目は2年次生用に「京都古典・歴史学」、「京都の風土・世界の風土」、「STEAM数学Ⅱ」、「STEAM物理/化学/生物」、「グローバル・コミュニケーションⅡ」、「E S A (English for studying Abroad)」、「E E (E-Engilsh I)」、「第2外国語Ⅱ」、「英語理解」11科目を開設した。STEAM数学Ⅱでは、数学B「確率分布と統計的な推測」の単元で、生徒がオリジナルのゲームを立案し、掛け金と配当金からプレイヤーの利益の期待値を算出する課題解決型学習を実施した。

(3) 大学教育の先取り履修の枠組み構築に向けた取組

昨年度の埼玉大学との懇談に引き続き先行事例を学ぶべく、令和元年度指定WWL事業の管理機関である広島県教育委員会に依頼して県教育委員会及び協働先大学の担当者とのオンライン懇談を実施した。広島大学と県立広島大学との懇談については、本府管理機関担当者及びカリキュラムアドバイザーに加えて、京都府立大学や福知山公立大学の担当者も同席し、府内二公立大学と協働した枠組み構築に向けて数多くの知見を得ることができた。

なお、構想計画の策定時点では福知山公立大学との間で大学教育の先取り履修に係る実証研究を行う予定であったため、本取組を「きょうとF(F:福知山を表す)ラーニング」と称していたが、協働先を京都府立大学にも広げられることになったため、「きょうとアドバンスト・プレースメントプログラム(きょうとAPP)」として発展的に改編することとした。

2 京都戦略Ⅱ「グローバルかつ多様な協働学習の機会を創出」

(1) 京都府WWL高校生サミット

令和2年度から継続して『「豊かさ」の価値の再創造による持続的な未来社会の創出』をテーマに、以下により行った。参加生徒はSDGsの目標を踏まえた3つの領域(下記参照)の中から議論したい領域を1つ選び、持続的な未来社会の創出のために何ができるかを議論し、グループ提言としてまとめ発表した。令和3年度は英語グループ・ディスカッションを本格的に実施し、事前準備レッスンとしてカナダ・ブリティッシュコロンビア大学(UBC)の学部生とオンラインで議論する内容について意見交換する機会も設定した。なお、英語グループ・ディスカッションには京都府名誉友好大使、関西大学や京都外国語大学等の留学生にTAとして協力いただいた。当日は事業協働機関であるNTT西日本京都支店からも支援を受けて、本サミットを円滑に実施した。

(概要: 令和3年度京都府WWL高校生サミット)

・日程 令和3年11月13日(土) 午前10時～午後4時30分

- ・参加者 67名（鳥羽高校20名、福知山高校6名、洛北高校1名、嵯峨野高校4名、洛西高校4名、西乙訓高校2名、東宇治高校3名、峰山高校3名、秋田県立秋田南高校9名、学校法人九里学園高校6名、沖縄県立那覇国際高校9名）
- ・方法 Web会議システムZoomを活用したオンライン開催
- ・内容 18グループ（日本語9、英語9）によるディスカッションとプレゼンテーション
領域Ⅰ：文化遺産の戦略的活用による活力ある未来社会の創出
領域Ⅱ：科学技術と自然が調和する豊かな未来社会の創出
領域Ⅲ：多文化共生による平和で安心な未来社会の創出
- ・講評 【日本語部門】杉岡秀紀 准教授（福知山公立大学地域経営学部）
【英語部門】スティーブン・ハーダー 准教授（京都ノートルダム女子大学）

（概要：UBCの学生とのオンライン交流会）

- ・日程 令和3年10月30日（土）午前8時30分～午後1時
 - ・参加者 21名（鳥羽高校8名、福知山高校1名、洛北高校1名、洛西高校2名、西乙訓高校1名、東宇治高校1名、峰山高校1名、秋田県立秋田南高校2名、沖縄県立那覇国際高校4名）
 - ・内容 オンライン上のコミュニケーション方略に係る講義等を踏まえて、参加者がUBCの学生と少人数グループになり、文化遺産の活用等に関するトピックについて意見交換
- ※UBC：The University of British Columbia

（2）「イノベーション探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」

拠点校における課題研究の軸である「イノベーション探究」では、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に探究するプロセスを重視し、大学・企業等との協働により開発したカリキュラムの下、「チーム探究」に取り組んでいる。1年次「イノベーション探究Ⅰ～地域発見プログラム～」では「京の智」の再発見・発信をテーマに、「現状探究」を中心とした探究活動を行い、2月に校内課題研究発表会を開催した。2年次「イノベーション探究Ⅱ～グローバル・ジャスティスプログラム～」では探究レベルを「原因探究」まで深め、①伝統文化領域、②サイエンス領域、③エリア・スタディ領域の3つの切り口（視点）からグローバルな研究課題を設定して探究活動を行った。3年次「イノベーション探究Ⅲ」では、2年次に取り組んだ研究ノートの内容を英語に要約し、探究の内容を留学生等に英語で発表し、探究の成果をアウトプットする活動を実施した。

（3）府立高校共通履修科目「スマートAP」

「グローバルな社会課題の解決に必要なリサーチスキルを習得させるとともに、イノベティブなグローバル人材の基盤となる論理的・批判的思考力と多文化協働力を育む」ことを目的に、国内外の大学教員による全7回のリレー講義及び京都府WWL高校生サミットへの参加から成るプログラムを実施した。なお、令和3年度の対象校は鳥羽高校（拠点校）と福知山高校（共同実施校）とし、受講者全員について取組状況が良好であったため、在籍校の単位として認定されている。

（概要）

- ・受講者数 20名（鳥羽高校14名、福知山高校6名）
- ・令和3年度プログラム（当初計画）
 - 第1回4月25日（日）導入・リサーチスキル①「課題研究の意義、問いの立て方」
杉岡秀紀 准教授（福知山公立大学地域経営学部）
江上直樹 講師（大阪大谷大学教育学部）
 - 第2回5月8日（土）リサーチスキル②「研究テーマの決定－RQの設定と仮説の構築－」
乾明紀 准教授（京都橘大学経済学部）
 - 第3回6月5日（土）リサーチスキル③「研究方法について－量的研究と質的研究－」
神吉紀世子 教授（京都大学大学院工学研究科）
 - 第4回7月10日（土）多文化協働の手法“Team Work and Collaboration”

Rebecca Axelson 講師（クイーンズランド工科大学）

第5回 7月31日（土）論理的・批判的に考える

柿澤寿信 准教授（大阪大学国際共創大学院学位プログラム推進機構）

第6回 8月21日（土）リサーチスキル④「チームでプチ課題研究！ー研究計画書を作ろうー」

乾明紀 准教授（京都橘大学経済学部）

第7回 9月18日（土）リサーチスキル⑤「プレゼンテーションの技法」・まとめ

杉岡秀紀 准教授（福知山公立大学地域経営学部）

第8回 11月13日（土）令和3年度京都府WWL高校生サミット

(4) 海外との交流

「府立高校海外サテライト校事業」として、管理機関とクイーンズランド教育訓練省との包括協定に基づくオーストラリア中期留学を3学期に計画していたが、渡航制限のために中止し、代替として府立高校生ハイブリッド型英語研修を8月と3月に実施した。異文化理解または英語力向上を目的としたオールイングリッシュのキャンプであり、ICTを活用してシンガポールやオーストラリアの学生と交流するとともに、イギリスとリアルタイムでオンライン接続し現地の町並みを疑似体験することも取り入れた。拠点校では、フランス・ヌヴェール高校と6月3日と10日に、中国・西安交通大学附属中学と10月18日及び12月8日に、それぞれオンラインで交流会を行った。また韓国・ハンヨン高校とはオンライン掲示板を使い、作成した動画を交流した。

3 京都戦略Ⅲ「研究開発内容の共有と継続的な成果普及」

(1) 京都府WWLフォーラム

「Society 5.0の未来社会に向けた人材育成ー高等学校教育に求めるものー」をテーマに、以下により京都府WWLフォーラムを開催した。

(概要)

- ・日程 令和3年7月30日（金）午後3時～午後4時30分
- ・参加者 40名程度
- ・方法 Web会議システムZoomを活用したオンライン開催
- ・内容 ALネットワーク京都の事業協働機関等から有識者を招いてパネルディスカッションを実施
- ・パネリスト 永益英敏 教授（京都大学総合博物館長）、岡岩太郎 代表取締役（株式会社岡墨光堂）、赤土豪一 キャリアガイダンス編集長（株式会社リクルート）
- ・パネリスト兼コーディネーター 渋谷節子 教授（福知山公立大学地域経営学部）

(2) 京都府WWL教員研修

京都府WWLプラットフォームを活用して拠点校の研究開発内容等を継続して発信するとともに、以下により京都府WWL教員研修を2回開催した。

(概要)

- 第1回
 - ・日程 令和3年7月30日（金） 午後1時15分～午後2時45分
 - ・参加者 16名（府立高校教員13名、他府県事業連携校教員3名）
 - ・方法 Web会議システムZoomを活用したオンライン開催
 - ・講師 江上直樹 講師（大阪大谷大学）
 - ・内容 「探究学習を通して身につけることを目指す能力とは」
- 第2回
 - ・日程 令和3年9月29日（火） 午後2時30分～午後4時
 - ・参加者 24名（府立高校教員22名、他府県事業連携校教員2名）
 - ・方法 Web会議システムZoomを活用したオンライン開催
 - ・講師 塩瀬隆之 准教授（京都大学総合博物館）
 - ・内容 「Society 5.0における文理融合の学びを考えるーオンライン授業なしにSociety 5.0人材は育てられるかー」

3 具体的な活動内容

(1) 京都戦略Ⅰ「高度で先進的な学びの機会を提供」

ア 海外オンライン・インターンシップ（事前学習）

1 ねらい

海外オンライン・インターンシップの事前学習として、事業協働機関である株式会社片岡製作所レーザ工場を訪問し、片岡公二会長より事業内容やグローバルな事業展開について学ぶとともに、実際にレーザ加工技術を見学する。

福知山高校生には伝統・文化を学ぶ機会として、金剛能楽堂を訪問する機会を設定し、本府WWL事業の学術顧問である金剛龍謹氏より能楽に関する講話と実演を披露していただき、長い歴史の中で受け継がれてきた知恵や価値を学び、日本の伝統・文化の持つ新たな価値に気づく力も育成する。

2 概要

- | | |
|---------|--|
| (1) 日 程 | 令和4年7月26日（火） 午前11時00分から午後5時 |
| (2) 場 所 | 金剛能楽堂
株式会社片岡製作所レーザ工場 |
| (3) 参加者 | 鳥羽高校生徒13名、福知山高校生徒7名（計20名）
第1回と第2回の参加者合同で実施 |
| (4) 内 容 | 午前11時00分 金剛能楽堂訪問（福知山高校生のみ）
金剛龍謹氏による能楽に関する講話・実演
午後3時00分 株式会社片岡製作所訪問
午後3時10分 開会、片岡宏二 会長による事業内容説明等、質疑応答
午後3時50分 レーザ工場見学 ※2グループに分かれて実施
午後5時00分 閉会 |

3 参加者の感想

- ・知らないところで技術が活用されていて、陰で支えているすごい会社であると思いました。精密な機械を扱っているいろんな企業から必要とされていることが知れた。
- ・今まで全く知らなかったレーザ加工技術について間近で見せてもらえて、企業を顧客とする企業のことについて興味が湧いた。視野が広がった。
- ・機械によってとても小さな穴を正確にあける技術がとても凄かった。マイクロチップなどにも使われているのが驚きでした。
- ・穴を μ 単位で開ける技術がとても印象的でした。実際に技術を見ると思っていたのとは違う部分などがあった楽しめました。
- ・実際に工場内の専門的な機械を目にして、私たちの目に見えないところにも沢山の仕事があるということを改めて感じる事ができた。



金剛能楽堂訪問



株式会社片岡製作所訪問

イ 海外オンライン・インターンシップ（上海）

1 当初のねらい

事業協働機関である株式会社片岡製作所の中国・上海片岡貿易有限公司を訪問し、海外事業所でのインターンシップを通して、将来的に国際的なフィールドで活躍できるグローバル人材に必要な資質・能力を向上させる。

総合的な探究の時間における課題研究等との関係では、現地の高校生との交流やインタビュー調査を通して、研究内容をグローバルな視点から深化させるとともに、世界の伝統・文化や技術について学び、日本（京都）の伝統・文化や技術と関連させて、それらの持つ新たな価値に気づく力を育成する。

2 計画変更

令和2年度から続く新型コロナウイルス感染症拡大による海外渡航制限のため、令和4年度実施予定の海外インターンシップも全てICTを活用した、オンラインによる海外インターンシップとして実施することとした。

本取組についてはオンライン実施となったため、単位認定に必要な時間数を確保できないことから、単位認定を行わないこととした。

3 概要

- | | |
|---------|--|
| (1) 日 程 | 令和4年9月28日（水） 午後3時40分から午後5時 |
| (2) 場 所 | 鳥羽高校及び福知山高校 |
| (3) 参加者 | 鳥羽高校生徒7名、福知山高校生徒3名（計10名） |
| (4) 方 法 | Web会議システムZoomを活用したオンライン開催 |
| (5) 内 容 | 午後3時40分 開会・挨拶、参加者紹介
午後3時55分 上海事業所より上海の紹介
・上海の文化や町並みについて
・コロナ禍の生活や行動制限について
午後4時20分 上海事業所の事業内容について説明
午後4時35分 参加生徒から現地社員へのインタビュー
午後4時59分 閉会 |

4 参加者の主な感想

(1) 質問1

海外オンライン・インターンシップに参加して、あなたの目的は達成できましたか。
--

<鳥羽高校>

- ・上海に関する今までのイメージや知っていたことと違っており、知らなかったことを知れて上海のイメージが分かった。また、中国の人から見た日本のイメージなどの話が面白かった。
- ・海外に行きたい思いが強くなり、進路について少しやりたいことがわかった気がした。
- ・上海の良いところや外国語の学び方について教えていただき、そこから探究活動への良いイメージができた。
- ・自分や日本に足りないものについて考えることができ、それを踏まえて将来に向けて今自分達は何をすべきなのかをよく考えることができた。

<福知山高校>

- ・海外の方との交流で、海外で働くために頑張ることなどを知ることができた。
- ・海外支店は本社と綿密に連携してお客さまにサービスを提供しているとわかった。
- ・達成できた。上海の人とズームで話し合った時に色々と上海のことも知れたしグローバル化についても理解を深められた。

(2) 質問 2

オンラインで海外事業所の方と交流等をして、一番印象に残っていることは何ですか。

<鳥羽高校>

- ・上海って、「すごい」などシンプルに思った。
- ・日本人に足りないのはチャレンジ精神だと聞き、日本人である自分も分かる部分があり、失敗を恐れずに沢山挑戦して学ぶ姿勢を持つように意識していきたい。
- ・上海の動画を見て自分が思っていたより、遥かに賑やかで日本と全然違うなということを知った。また、海外をもっと見るべきという言葉もすごく心に残った。
- ・第一に上海は経済や街並みも含めてすべてすごいなと印象に残った。出来るだけはやく中国に行ってみたいなと思った。

<福知山高校>

- ・上海で何か製品の不具合が起こった時はエンジニアが直接上海に行くということを知って驚いた。お客様一人一人に寄り添うという形がすごいと思った。
- ・上海について非常に詳しく知れることができ、京都の本部との連携についても知ることができたので、将来働く時に見通しを立てることができた。

(3) 質問 3

海外オンライン・インターンシップに参加する前と比べて、考え方や気持ちの変化はありましたか。変化があった場合、具体的にどのような変化がありましたか。

<鳥羽高校>

- ・海外に沢山の日本企業が進出しており、30万人もの日本人が上海にいと知って驚いた。
- ・中国の印象について、ニュースや歴史の勉強を通してマイナスなものが多かったが、このインターンシップを通して、コロナがなければすごく活気があり、最新の技術も集まっている国だと分かり、上海に行ってみたいと思えた。
- ・自分は海外があまり好きではなく海外には行きたくないという気持ちが大きかった。しかし今回の上海インターンシップを通して、日本にはない魅力が見つかり、上海に行きたい気持ちが大きくなった。
- ・京都について質問させていただき、日本人は「海外に出ようとしなない」や「チャレンジ精神がもっとあってほしい」など日本人を客観的に見ることができた。今よりもっと日本をどうすればいいか考えることができた。

<福知山高校>

- ・「海外で働きたい」とぼんやりとした思いを持っていたが、今回の海外オンライン・インターンシップに参加して、グローバルに働くということを知り、より一層この気持ちが強まった。
- ・オンライン・インターンシップで話を聞いて、海外は離れていて日本と関係が離れている印象があったが、インターネットなどを通して簡単に関わることができるとわかった。

(4) 質問 4

海外オンライン・インターンシップの経験を、大学進学後や社会人で、どのように活かしていきますか。

<鳥羽高校>

- ・言語を取得していくことの大切さや、言語を学ぶ上で大切なことが分かり、今後の第二外国語の学習や大学受験などで活かしていきたい。また、いろんなことへのチャレンジ精神を持って、生活していきたい。
- ・就職した職業にこの経験を活用してもっと視野を広めたいと思った。どの職業に就いても外国と繋がる経験をしておいてよかったなと思えるような大人になりたい。
- ・海外より日本は少し遅れている部分がたくさんあると知り、進学であっても就職であっても、もっと海外に目を向けていくことを頭に置いて考えていきたい。

- ・片岡製作所に入った理由として「自分の個性をより活かせるため」と聞き、自分が得意なことを探して仕事に就きたいと思った。

<福知山高校>

- ・今回の海外オンライン・インターシップでグローバルに働くためには何事も積極的に取り組むといいと伺ったので、それを胸にこれからも過ごしていつ海外で働ける人材になりたい。
- ・海外について深く学ぶとともにグローバル経営について深く学びたい。

5 分析できる成果

いずれの参加者も、都会と田舎が両隣にある上海の町並みや、日本よりも多くの点で発展している上海の生活に驚いていた。今回のオンライン・インターシップの大きな成果は、中国に関するイメージについて、参加生徒に古く誤った固定観念を持っていたことを気づかせたことである。日本人の多くが内向き思考になっている現在において、一人でも多くの高校生が世界の現状を知り、また日本の置かれている状況を知る機会を提供できた。

さらに、日本語が堪能な現地社員との交流を通して、いかに外国語習得がグローバル人材に必要なかを参加生徒は経験できた。外国語習得の重要性、さらには中国から見た日本人の視点など、参加者の高校生活だけでなく、社会人になった後も活きる多くの助言をいただくことができた。

本インターシップは、参加生徒の外国語習得への意識向上と、日本人や自分自身をグローバル人材という観点から俯瞰して分析する大変貴重な場となった。



オンライン上の様子



鳥羽高校の様子

ウ 海外オンライン・インターンシップ（台湾）

1 当初のねらい

事業協働機関である株式会社片岡製作所の台湾片岡股份有限公司を訪問し、海外事業所でのインターンシップを通して、将来的に国際的なフィールドで活躍できるグローバル人材に必要な資質・能力を向上させる。

総合的な探究の時間における課題研究等との関係では、現地の高校生・大学生との交流やインタビュー調査を通して、研究内容をグローバルな視点から深化させるとともに、世界の伝統・文化や技術について学び、日本（京都）の伝統・文化や技術と関連させて、それらの持つ新たな価値に気づく力を育成する。

2 計画変更

令和2年度から続く新型コロナウイルス感染症拡大による海外渡航制限のため、令和4年度実施予定の海外インターンシップも全てICTを活用した、オンラインによる海外インターンシップとして実施することとした。

本取組についてはオンライン実施となったため、単位認定に必要な時間数を確保できないことから、単位認定を行わないこととした。

3 概要

- | | |
|---------|--|
| (1) 日 程 | 令和4年12月21日（水） 午後3時40分から午後5時 |
| (2) 場 所 | 鳥羽高校及び福知山高校 |
| (3) 参加者 | 鳥羽高校生徒6名、福知山高校生徒4名（計10名） |
| (4) 方 法 | Web会議システムZoomを活用したオンライン開催 |
| (5) 内 容 | 午後3時40分 開会・挨拶、参加者紹介
午後3時55分 台湾事業所より台湾の紹介
・台湾の選挙時の町並みの変化について
・国慶節（10月10日）の様子について
午後4時20分 台湾事業所の事業内容について説明
午後4時35分 参加生徒から現地社員の方へのインタビュー
午後4時59分 閉会 |

4 参加者の主な感想

(1) 質問1

海外オンライン・インターンシップに参加して、あなたの目的は達成できましたか。
--

<鳥羽高校>

- ・日本と台湾の違いについてのお話から、コミュニケーションの重要性や多文化理解の必要性を学ぶことができた。
- ・台湾の方は優しくて親近感が湧き、今まであまり台湾に行きたいと思わなかったが、台湾の街を自分で見て台湾の人たちと話したいと思った。また、海外の人と繋がる楽しさを感じることができた。
- ・台湾の生の情報をリモートではあったが知ることができ、日本への思いや語学についてなど実際に日本の海外事業所で働いている人にしか聞くことができないことを聞けた。
- ・台湾の選挙の風景や建国記念日について知り、日本との違いが面白かった。

<福知山高校>

- ・台湾の方々とお話でき、学びや新しいことを知れたのでよかった。
- ・台湾の現地の方と交流させていただくことでいろいろな意見、考えが聞けてとても参考になった。

(2) 質問 2

オンラインで海外事業所の方と交流等をして、一番印象に残っていることは何ですか。

<鳥羽高校>

- ・海外事業所で働いていると、国によって考え方は違うけど目標とすることは同じであると話されていたことが1番印象的で深く共感できたし、これからもその考えを大切にしようと思った。
- ・日本と台湾の関係が兄と妹のようだとおっしゃっていたのが印象に残った。どの国もそのような近い関係になれば良いと思った。
- ・いろいろな方が関わって、目には見えないけれど、すごく大きなものを創られていることに驚いた。
- ・台湾事業所の方が流暢に日本語を話しておられて、自分たちとも普通に会話していたことが一番印象的であった。

<福知山高校>

- ・台湾の方が一生懸命日本語を勉強しておられる姿を見てすごいなと感じた。
- ・台湾の方は日本のことを友好的に捉えている事実がとても嬉しかったし印象に残った。
- ・海外で働くには、その国の文化や生活を理解しておくことが大事という話が印象的であった。

(3) 質問 3

海外オンライン・インターンシップに参加する前と比べて、考え方や気持ちの変化はありましたか。変化があった場合、具体的にどのような変化がありましたか。

<鳥羽高校>

- ・今まで英語ができれば海外でも活躍できると思っていた部分があったが、実際は言語も含めて多文化や他国の理解も含めて海外の人とコミュニケーションをとることが大切なのだった。
- ・台湾のことは詳しく知らなかったけれど、今回のインターンシップで日本を思う気持ちを知ってすごく身近に感じたし、すごく行ってみたいと思った。
- ・台湾の方々が日本語で日本の好きな場所や好きな食べ物について話しているのを見て、日本人と同じように見えて、言語の違う海を超えた遠い国から身近に思える国だと少し考えられた。
- ・日本の文化と海外の文化の違いを身近に感じることができ、もっと海外について知りたいと思った。

<福知山高校>

- ・台湾という国について、日本と似ていることや親日であることが参加前と比べて強く印象に残った。
- ・海外で働いてみたいという気持ちが高まった。

(4) 質問 4

海外オンライン・インターンシップの経験を、大学進学後や社会人で、どのように活かしていきますか。

<鳥羽高校>

- ・国境を超えてコミュニケーションをとりながら仕事をされている姿はかっこいいと思った。大学に行ったら留学をして、実際に日本と外国の違いを感じてみたいと思うようになった。
- ・海外の方との交流や海外に関する行事があるときには、今回学んだように文化の違いやお互いの考えを理解しあい、同じ目標を目指す時には意見を言い合うことが大事だと思ったのでコミュニケーションをしっかりとれるようにしたい。また自分がしたい事や得意とすることをしっかりと定めてそれに向かって目指していきたい。
- ・国ごとの考え方や文化の違いを理解した上で、協調して物事に取り組んでいきたい。

- ・これからも英語などの外国語の勉強を続けていきたいと思った。また他の国を知るなかで日本のことももっと知っていききたいと思った。

<福知山高校>

- ・海外の人の気持ち、文化を理解しながら協力して仕事をしていきたいなと思った。
- ・自分も海外の方と繋がれるような仕事をしたいというふうに感じているので今回学んだことや、おっしゃっていたことを活かしてもっといろんな経験を積んでいこうと思った。

5 分析できる成果

本インターンシップでは、参加者の多くが台湾事業所の方々の日本語運用能力に感動し、どのように日本語を学習し、また外国語を学ぶ上で効果的な学習方法を質問するなど、参加者の外国語学習の意欲向上と外国への関心の高まりを促したと言える。

質疑応答の時間では「台湾の人々は日本をどのように見ているのか」という質問では、現地社員より「兄と妹のような関係」と回答があり、会全体が非常に暖かい雰囲気にも包まれた。現地社員の方々は高校生の多岐にわたる質問に足して、まるで兄弟のように非常に心のこもった回答や助言をし、過去のオンライン・インターンシップからさらに距離が縮まったやり取りができた。

グローバル人材に必要な資質・能力については、外国語取得だけでなく異文化の理解や、考え方は異なっても同じ目標を共有すること等、高校卒業後も活きる学びを現地社員から多くいただけた。

なお、台湾事業所の方より、秋に日本の高校生が台湾を訪問し、交流を深めた様子を映像で紹介していただき、近い将来に参加生徒も必ず海外、台湾を訪問できる日が近づいていることをお話しいただけたことは、参加生徒の内向き思考に大きな影響があったと確信している。



鳥羽高校の様子



質疑応答の様子

エ オンライン・キャリアセミナー 「グローバル・キャリアを考える -海外留学の現状とこれから-」

1 ねらい

コロナ禍で海外渡航が制限される中、将来、グローバルに活躍することを目指す府立高校生を対象に、海外の大学生や日本人留学生から、海外の大学で学ぶ意義や留学の現状について学ぶとともに、海外で活躍する社会人からグローバル人材に求められる資質・能力についても学ぶことで、高校卒業後のグローバル・キャリアについて考える機会とする。

2 構想計画書からの変更

構想計画では、拠点校及び共同実施校の希望者が、株式会社片岡製作所の海外事業所を訪問し、現地社員からグローバルに活躍するために必要な資質・能力について学ぶ取組を年間3回、計画していた。しかし、指定初年度から新型コロナウイルス感染症の拡大による海外渡航制限と安全確保のためから、海外渡航は中止し、オンラインによる海外インターンシップを実施することとした。本取組は、過去2年間にわたるオンラインによる実績を踏まえて、連携校にも先進的な学びの機会を提供することを目的に、高校卒業後のグローバル・キャリアについて学び考える機会として設定した。

3 運営協力

株式会社国際交流センター

4 概要

- | | |
|----------|--|
| (1) 日 程 | 令和4年7月23日（土） 午後1時30分から3時30分 |
| (2) 方 法 | Web会議システムZoomを活用したオンライン開催
※海外在住者とリアルタイムで接続し実施 |
| (3) 対 象 | ALネットワーク京都の拠点校・共同実施校及び連携校に指定された京都府立高等学校に在籍する生徒 |
| (4) 参加者 | 18名（鳥羽高校3名、山城高校1名、嵯峨野高校1名、桃山高校3名、洛北高校5名、洛西高校3名、南陽高校1名、東宇治高校1名） |
| (5) 内 容 | 午後1時30分 開会・挨拶
午後1時35分 第一部「海外の大学紹介」カナダ及び豪州の現地大学生
午後2時00分 第二部「私が海外大学に進学した理由・留学体験談」
クイーンズランド大学在学中の日本人留学生
午後2時40分 第三部「海外大学進学の魅力と進学対策について」
留学カウンセラー（株式会社ISS）
午後3時55分 第四部「グローバルな環境で働くキャリアデザイン」
シンガポールの企業で活躍中の日本人社会人 |
| (6) 使用言語 | 第一部は英語、その他は日本語 |

5 成果

- (1) アンケート結果
次ページ参照。

ア 質問 1 から 6 について

No.	質問項目	そうである	どちらかといえば そうである	どちらかといえば そうではない	そうではない
1	今回のセミナーは自分にとって意義のあるものであった。	18	0	0	0
2	今回のセミナーは、「自分のやりたいこと」や「情熱を傾けたいこと」を見つけるきっかけとなった。	13	5	0	0
3	今回のセミナーを通して、外国語を学ぶ意欲が高まった。	18	0	0	0
4	今回のセミナーを通して、海外の大学への長期留学や進学への関心が高まった。	15	2	1	0
5	今回のセミナーを通して、将来海外で働きたいと思うようになった。	9	7	1	1
6	セミナー前に疑問に思っていたことが解消した。	14	4	0	0

イ 質問 7 について

「第一部から第四部で自分のためになったものはどれですか。」(複数選択可)

第一部	第二部	第三部	第四部
10	11	13	12

(2) 質問 1 の主な回答理由

- セミナーを開催していただくまで知らなかった事がたくさん知れた。
- 実際に外国に行った経験をそのまま話してもらうことで実感が湧いた。
- 留学などについて何をすればいいか不安に思っていたけど、経験者の方から具体的なアドバイスを聞くことで今、またこれから何をすべきかを知れた。
- 留学経験や留学先の現地の人々からの意見が聞ける経験は中々ないので、自分の将来に役立つセミナーだったと感じた。
- 高校生のうちにしておくべきことや、実際に海外で働いている方のお話を聞くことができた。
- なかなか聞けない話ばかりで海外大学進学の話も就職の話もどの話もととてもわかりやすく、自分にとって良い影響を与えた。

(3) 今回のセミナーについて感想があれば記入してください。(自由記述)

- 英語での説明が全然聞き取れなかったのもっと勉強が必要だと思った。
- 自分が今まで知らなかったことやすべきことが知れてとても良かった。より海外のことに興味が湧いた。
- 現在進行形で海外大学に進学している人の話が聞けて、自分にとって意義のあるものとなった。
- やはり海外で学ぶことは自分の視野を広げる良い機会に違いないという思いが持てた。「もっと積極的に質問していれば」と後悔しているので、こういった機会にチャレンジ精神をもって行動できるように留学に向けてなっていきたい。
- まずは正確な情報を得る努力をすることと、成績、英語力を伸ばすことが重要だと分かりました。今の私にも出来ることはまだまだ沢山あると知れたので、迷いながらも進路に向けて頑張っていきたいと思いました。
- 海外留学でのメリットやデメリットを隠さず説明してくれて、自分が留学の良い点しか見ていなかったということに気付かされたセミナーだった。これから留学を検討していく中でしっかり留学についての詳細な情報に目を通そうと思えた。
- オンラインということで不具合があるか心配していたのですが、ほとんどなく貴重なお話を聞かせていただけて本当に良かったです。

(4) 分析できる成果

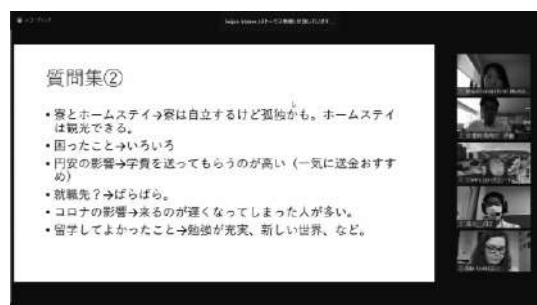
- ア 実際に海外大学在学中の日本人留学生と海外で活躍中の日本人社会人の方のお話しは、非常に説得力があるとともに、いずれも公立高校出身ということから参加者が身近な存在として話に耳を傾けることができた。
- イ 参加者には事前に質問事項を提出させてことにより、全ての部において参加者の疑問や不安に答える形で全ての発表と説明をしていただけた。それにより、留学の現実やデメリットも包み隠さず話していただいたことで、参加者はこれから乗り越えなければならない壁に気づくことができた。
- ウ アンケート結果から、参加者の外国語学習への意欲を高める取組となり、また情熱を傾けたいことを見つけるきっかけと作りとなったことから、グローバルなキャリア観を育成する上で、大変効果的な取組であったと

6 課題

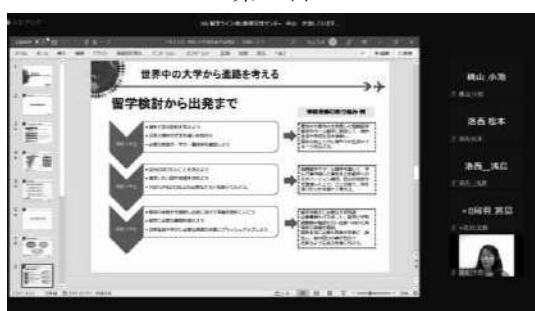
- ア 参加生徒が質疑応答の時間に積極的に質問することは少なかった。オンライン上で積極的にやり取りできる工夫は必要であると感じた。
- イ ALネットワーク京都の府立高校 15 校を対象に参加者募集を行ったが、参加者は少数であった。海外大学への進学は非常に困難なものではあるが、コロナ禍で海外志向が低下していることも要因と考えられる。将来の社会を担う人材育成のためには、現状の中でどのようにグローバルな人材を育成するのか大きな課題である。



第一部



第二部



第三部



第四部

オ 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」(大学教育の先取り履修)

1 目的

府内の大学と協働し、十分な能力と意欲を有する高校生が在学中に高度な学びにアクセスできる機会を保障することにより高校教育と大学教育の円滑な接続を図り、京都の知を生かし、持続可能な未来社会の創出に貢献できるイノベティブなグローバル人材の育成に資する。

2 内容

高校生に大学の正規授業の履修機会を提供するため、大学との協働により大学教育の先取り履修プログラムを開発する。令和4・5年度の2年間でプログラムの試行期間とする。

3 協働先

京都府立大学
福知山公立大学

4 対象

ALネットワーク京都拠点校・共同実施校又は連携校に指定された京都府立高等学校のうち、令和4年度は次の2校を対象とし、令和5年度は別途定める。

- 鳥羽高校 (ALネットワーク京都拠点校)
- 福知山高校 (共同実施校)

5 受講方法

オンライン配信を基本とし、具体的には大学において定める。

6 成績評価・単位認定

(1) 大学における取扱い

試験・レポート等により大学生と同じ基準で成績評価を行う。所定の成績を修めた者には大学の定めるところにより修了証が交付される。

(2) 高等学校における取扱い

本プログラムを修了した者には、生徒が所属する各学校において別途必要な指導を行った上で、学校外における学修に係る単位として認定することができる。

7 令和4年度の科目及び受講者数

【前期】6名(鳥羽高校3名、福知山高校3名)

大学名	学部名	科目名	教授等	定員	受講者
福知山公立大	地域経営学部	経営学入門	加藤好雄 准教授	各5名程度	2名
		多文化共生論	大谷 杏 准教授		2名
	情報学部	エンタテインメント情報学	倉本 到 教授		2名

【後期】16名(鳥羽高校11名、福知山高校5名)

大学名	学部名	科目名	教授等	定員	受講生
京都府立大	教養教育センター	現代社会と法	河野尚子 講師	5～6名	6名
	公共政策学部	コミュニティワーク	中根成寿 准教授		2名
	生命環境学部	森林の科学	勝山正則 教授		2名
福知山公立大	地域経営学部	地域協働論	杉岡秀紀 准教授	各5名程度	2名
	情報学部	ゲーム情報学	藤井叙人 講師		4名

8 令和4年度福知山公立大学前期試行状況のまとめ

(1) 開講科目・受講者数・学修状況

開講科目	受講者数	修了者数
経営学入門	2名	2名
多文化共生論	2名	2名
エンタテインメント情報学	2名	2名

(2) 受講状況

- ・概ね良好。在学生より熱心に受講する姿勢が教員への良い刺激となるとの意見あり。
- ・1名の生徒は最後にまとめて受講し遅れて授業レポートを提出した。

(3) 授業運営

- ・概ね円滑に行われたが、WiFi環境が不安定な教室では録画用のパソコンを有線接続する必要があり、運営に手間が生じた。
- ・録画について著作権の問題から使えない教材があり、大学生の授業に制限がかかった。

(4) 教員と生徒とのコミュニケーション

主にメールにより円滑に行われたが、メールを見る習慣が確立していない生徒に連絡・指示が徹底しないことがあった。

(5) 教学システムの運用

大学生と同様の手続きでメールアドレスを発行。円滑に運営された。

(6) 生徒アンケートの結果概要

ア 授業への満足度

6名全員が満足度「5」（5段階中）と回答

イ 授業内容についての理解度

- ・「概ねすべての講義を理解」 5名
- ・「一部の講義は理解できなかった」 1名
- ・「半分以上の講義を理解できなかった」 0名

ウ 受講してよかったこと（複数回答可）

- ・講義の内容が興味深い 5名
- ・知識の習得に役立つ 4名
- ・思考力・表現力の育成に役立つ 3名
- ・進路を考える上で役立つ 4名
- ・自ら学ぶ姿勢が身に付く 4名
- ・大学の高度な学問・研究に興味 2名

(7) 主な課題

ア 授業運営に関して

異なる授業形式（大学生＝対面、高校生＝講義録画を提供）への対応に係る教員の負担増

イ 学修評価に関して

成績をつけるかどうかが教員の判断によるため、修了証の発行基準が不明確

ウ 学内合意の形成に関して

- ・試行の趣旨・目的の学内への浸透が不十分
- ・大学側のメリットの打ち出しが困難

カ 拠点校に係る主な新科目の授業実践報告

(7) 京都古典・歴史学

国語科 教諭 越野 尚子、沖 拓人
地歴・公民科 教諭 奥村 典夫

1 はじめに

京都古典・歴史学は、平安文学等、京都に係る古典文学やこれらに影響を与えた漢文学の読解及び歴史的視点からの考察を行い、京都の伝統・文化や歴史を深く理解した上で、これを守り受け継ぐ担い手としての自覚を深めるとともに、他国の文学作品との比較をとおして文化を超えて受け継がれる人間の普遍的な価値観を探ることを目的として設置した科目である。

2 内容

本実践は2年生グローバル科 71 名を対象にした。奈良時代から鎌倉時代までの衣装の変遷を踏まえて、平安時代の衣装の特徴を知り、国風文化について考える授業である。地歴・公民科との連携によって、奈良時代から鎌倉時代までの衣装の変遷を、日本史の学習事項に関連付けて教科横断的に学べるのが、本科目の特徴である。

本実践の流れは以下の通りである。

【講義】

平安時代の衣装の特徴を踏まえて「襲^{かさね}」とはどのようなものかを学び、古典作品の中にどのように描かれているかを学ぶ。このとき、色の組み合わせにおいて「時節」というものが重要視され、襲の名前にも季節の植物の名が多く用いられていることに着目させ、ワークショップにつなげる。

【ワークショップ】

- ① 講義を踏まえて学習者が各自でテーマを設定して「襲」の色合わせを考える。
- ② 学習者は各自の iPad に配信されたワークシートを編集し、テーマに沿った5色をワークシート上に配置する。さらに、設定したテーマや5つの各色に関する説明を記入してワークシートを完成させた後、ロイロノート上に提出する。
- ③ ロイロノート上で全員の作品を相互に共有する。
- ④ ロイロノートのアンケート機能を用いて人気作品の投票を行い、各自の振り返りコメントを記入する。

3 学び

授業で学習する『源氏物語』をはじめとする平安時代の作品に登場する衣装や襲について学ぶことで、当時の人々の自然観やものの見方を知ることができ、今後の作品理解にもつなげることができた。

また、奈良時代の衣装のデザインや色合いは中国の影響が強く、時を経るにつれてデザインが変化し落ち着いた色合いになっていったことについて、古典と歴史の両面から複合的な考察ができた。

4 次回への課題

本実践以前に襲の色目に触れている教材を複数扱っておくべきであった。また、学習者たちの作品をもとにフィードバックする時間を十分にとれたら、さらに学びが深まったと思うので、次回はその

時間をしっかりととりたい。

5 授業の振り返り

昨年度の反省点を踏まえ、講義の時間を短くし、学習者自身が考える時間を長く確保した。また、昨年度はクループ形態で行ったワークショップを今年度は個人で行ったほか、色紙を台紙に貼るのではなく、iPad の写真編集機能を用いることによって、多彩な色を選択肢として持つことができた。さらに、ロイロノートの活用によって、各生徒が手元で全員の作品を共有することができた。本年度は、個人でのワークショップであったので、設定されるテーマが昨年度よりも多岐にわたり、個人の内面を深めたような作品も多くみられたのが成果であった。



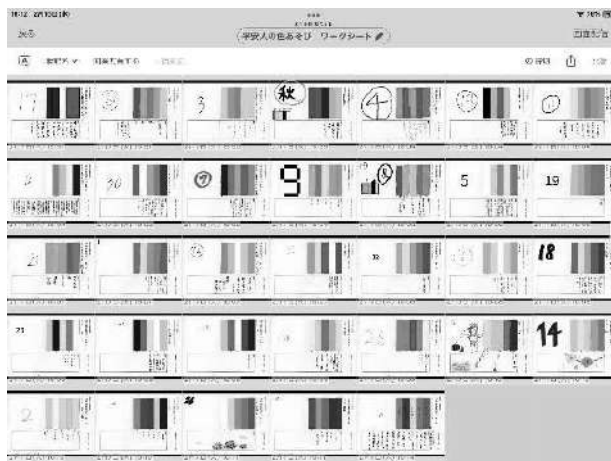
取り組みの様子①



取り組みの様子②



取り組みの様子③



完成作品

(イ) ソーシャル・インテリジェンス

数学科 教諭 岩本 泰久

1 はじめに

ソーシャル・インテリジェンスは、必修科目「情報Ⅰ」の代替科目であり、社会の中で情報及び情報技術が果している役割や影響を理解させた上で、他科目と連携し、身の回りのデータに親しみ、データの収集・分析、結果の解釈に取り組むことで、情報リテラシーと統計リテラシーの育成を目指す科目である。情報社会、情報安全対策、プログラミングを学んだ後、統計の基礎を学ぶ。統計については、統計リテラシーや推論を重んじ、理論や公式、計算方法を控えめにし、データそのものの統計的な考え方を重視し、問題解決の実践的学習を行う。また、発表の機会を設け活動の理解も深める。

2 内容

令和4年8月から10月に、1年生グローバル科80名に対して、プログラム言語Pythonの学習を、オンライン学習コンテンツを利用して行った。Paiza ラーニング (<https://paiza.jp/works>) のPython入門編1からPython入門編6までを、各生徒が動画コンテンツを視聴し、練習問題を解きながら学習を進めた。教師は、動画の内容理解を支援したり、練習問題に対する考え方を指導したりした。

3 学び

Paiza の学習コンテンツは、動画の視聴、練習問題の繰り返しで構成されており、プログラムスキルが身につくように設計されている。動画は理解しやすく、ハンズオン形式でコーディングについて説明している。それゆえ、生徒は自分のペースで学習を進め、基本的なPythonのコードとリスト、辞書の概念を学んだ。意欲的な生徒はスキルチェックに挑戦し、学習した内容のアウトプットに努めた。

4 次回への課題

授業が進むにつれて、生徒の学習ペースに大きな差が生まれた。各授業で学習到達目標を提示し、クラス全体で進度を共有しながら個別の学習について助言したが、全体で課題の提出を課すことはできなかった。個人のペースで学習しながら、クラス全体の進度を揃える仕組みの構築が必要である。

Web上の学習プログラムを利用した本実践は、個別に最適化した学習を提供できるものであった。

一方、プログラムのコーディングは唯一の正解コードがなく、問題と正解がセットになった学習から、生徒は意識を転換する必要がある。バグ取りこそがプログラムの華であり、トライ＆エラーの繰り返し求められる。根気強くコードと向かい合えるように指導し、「困難な状況を突破する力」の育成に努めたい。

5 授業の振り返り

本科目は情報リテラシーに加え、統計リテラシーの育成を目指す科目である。「情報Ⅰ」の代替科目であり、「情報の科学的な理解」、「情報社会に参画する態度の育成」、「情報活用の実践力の習得」も目標としたが、その理解度とアプリの習熟度合に差が生じた。プログラミング言語について、仕事の場面ではJavaScriptが一般的だが、高校生にとってはコードの単純さからPythonが適していた。

また、毎年、探究活動においてAIをテーマする生徒がおり、Pythonの学習経験を活かし、機械学習のライブラリを用いてAIの理解を深め、実験を行うチームが現れることも期待できる。

(ウ) STEAM 数学 I

数学科 教諭 戸田 雄一郎

1 はじめに

STEAM 数学 I は数学 I・A で学ぶべき諸項目の基本的な概念や原理・原則を体系的に理解し、課題解決学習・ものづくりを通した教科横断的な学びの中で、思考力、表現力並びに分析力の育成を目指している。本稿は、三角比を用いて校舎の高さを測量した授業および、素数を題材にしたゲームをとおして倍数判定法について学んだ授業の実践報告である。測量の授業について、生徒が主体的に取り組む課題解決型の学習プログラムになるように、図形と計量分野での学習経験を利用して、測量方法をデザインする課題設定を行った。

2 内容

令和4年11月16日(水)に1年グローバル科40名を対象に、数学I「図形と計量」の単元の学習内容を用いて、校舎の高さを測定する活動を行った。仰角や水平距離をどのように取得するのかをデザインすることが課題である。仰角と水平距離の測定方法については自由とし、各生徒にmicro:bitを配布して自由に使わせた。なお、micro:bitのプログラムや機能については、授業前半で確認した。

令和4年12月26日(月)に1年グローバル科80名を対象に、「素数大富豪」というトランプゲームを題材に倍数判定法の有用性について学ぶ活動を行った。数学A「数学と人間の活動」の単元の学習内容を用いた。「素数大富豪」とは手札から相手が出した素数よりも大きな素数を出し、手札を最初に無くした人が勝ちというゲームである。まず、倍数判定法について調べ学習を行いロイロノートで提出させた。その後、調べた内容を元に先述のゲームを行い、最後に追加ルールを考えさせた。

3 学び

校舎の高さについての授業では、仰角や水平距離といったデータの測定方法について考えることで、現実の文脈に即した問題理解ができるようになったと考える。また、各データの取得方法についても、学習者それぞれが工夫することができた。理数分野、芸術分野の既習事項を複合させてアウトプットする活動になったと考えられる。一方、倍数判定法の授業では、ゲームを通して判定法の有用性に気付くとともに、ゲームバランスを考え追加ルールを考えることで、推測する力やデザインする力を養う事ができたと考えられる。

4 次回への課題

こちらで例示したプログラムを用いるに留まった学習者、倍数判定せずに適当にカードを出している学習者もいた。周囲の学習者と考えを活動中に共有するような仕組みを作ることで、課題解決に係わる見方・考え方、本活動の意図やポイントが広がる・伝わるような工夫を行うことが考えられる。

5 授業の振り返り

問題演習だけでは、生徒は受け身になりがちである。校舎の高さを測ること、ゲームで勝利することのように、現実場面の問題として向き合ったとき、姿勢が前向きになり、問題が自分事になったと感じた。授業をとおしてその単元の知識・技能を身に付けるだけでなく、教科書の内容を現実の場面と繋げることで、視野が広がり、主体的な学習態度の涵養につながるのではないかと考えられる。

(I) STEAM 数学Ⅱ

数学科 教諭 河合 勝寿

1 はじめに

STEAM 数学Ⅱは、数学Ⅱ・Bで学ぶべき諸項目の基本的な概念や原理・原則を体系的に理解し、課題解決学習・ものづくりを通した教科横断的な学びのなかで、思考力、表現力並びに分析力の育成を目指した科目である。

2 内容

2年生グローバル科16名を対象とし、数学Ⅱ「図形と方程式」の単元において、「2つの曲線の交点を通る曲線群」と「直線の通過領域」の内容について、数学アプリ Geogebra を用いてそれぞれ考察させた。手順は次の①～⑥のとおりである。

- ① 教員が問題を提示し、定数を動かすと、どのような図形になるのかについて生徒の意見を聞く。
- ② 次に Geogebra の使い方も含めて、教員がアプリに入力し、スクリーンで見せる。
- ③ 生徒も各自入力して実験する。
- ④ 一般的な解法を紹介する。
- ⑤ 生徒自ら問題を作り、アプリ上でその挙動を確認する。
- ⑥ 発見したことや感想を共有する。

3 学び

アプリを用いて、実際に定数 k や t を動かすことで、現象を視覚的に捉え、新しい視点から問題を捉え直す経験となり、「困難な状況を突破する」ための方策の1つを学んだ。また、自ら考えた式を入力して様々な挙動をみることで数学の表現の豊かさを知り既習事項の組み合わせから「新たな価値を創造する」ことについて喜びを知ることができたのではないかと考える。

4 次回への課題

扱った内容については、何が問われているのか非常に理解しにくいものである。今回、アプリを用いて変数を動かすことで、理解に向けてのハードルは下がったものの、意味を理解せずとも、形式的に式が作れることから、理解した気分になる生徒が散見された。感覚的な理解を入り口として、その式が何を表しているのか、なぜそう考えるのかを、明確に言語化させる必要性を感じた。

5 授業の振り返り

Geogebra などの数学アプリを使うと誰でも簡単にグラフ等を描くことができる。さらに変数を動かすことでアニメーションのような動きも可能である。生徒の興味・関心を高め、数学への理解を深めるのに、このようなアプリは有用であるため、本校が育成を目指す資質・能力を養うためにさらなる活用方法について考えていきたい。

(才) STEAM 数学Ⅲ

数学科 教諭 安本 聖子

1 はじめに

STEAM 数学Ⅲは、数学Ⅲで学ぶべき諸項目の基本的な概念や原理・原則を体系的に理解し、課題解決学習・ものづくりを通した教科横断的な学びのなかで、思考力、表現力並びに分析力の育成を目指している。本実践では、iPad を用いて、2 次曲線の特徴を発見しその特徴を理解した上で、単元にこだわらず、自ら問題を作成することで、新しい価値を創造する力を養おうとした。

2 内容

令和 4 年 12 月 14 日（水）に 3 年グローバル科 20 名を対象に、数学Ⅰ「2 次関数」及び数学Ⅱ「図形と方程式」の単元の学習内容を用いた課題解決型の授業を行った。2 年時に数学Ⅲ「式と曲線」の導入として扱った内容を振り返った後、文字定数の値を変えると曲線がどのように変化するのか、iPad を操作して気づいたことをまとめ、なぜそうなるのか考察した。さらに、自ら問題を作成し解いてみるということを試みた。

3 学び

計算上でわかることでも、実際に図形を動かしていくと、変化を細かいところまで見ることができ、また、なぜ場合分けが必要なのか、なぜ条件が与えられているのか、などもはっきりと理解できるようになった。式のどこに注目すればよいのかを再確認できた。

4 次回への課題

指示していたものの、これまで学習した数学の範囲を超えた問題を作成し、結果的に問題を解くことができなくなった学習者も数名いた。また、iPad を使えば曲線を描くことも動かすこともできるため、iPad の操作に集中しすぎた生徒もいた。

5 授業の振り返り

理論上理解した内容も、経験することでより知識として深まることを感じた。

(生徒の感想から)

【感想】
関数のグラフには文字より無限の応用がある。log とか e とか sin とか $\sqrt{\quad}$ とか使った時に、どんな組み合わせになるのか見つけていない。創造性もあるのかもじゃない。中々、日常生活には馴染みつきにくいかもしれないが、やってみると新しい発見につながるかも。

【感想】
共通テストでは思考力というものがとられてきているが、経験したことがあるか、見たことがあるかが、合否が分かれるかもしれないと思った。知っていること → なぜがあることができた。

(カ) STEAM 物理

理科 教諭 橋谷 隆史

1 はじめに

STEAM 物理 は、地球環境における物理現象と生活との関係の理解を深め、さらにすべての人類に最大の福祉をもたらすように科学を用いなければならないという責任感を持てるようになることを目指して設置した科目である。物理的な事物・現象に対する探究心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、物理学的に探究する能力と態度を育てるとともに、物理学の基本的な概念や原理・法則の理解を深め、科学的な自然観を育成する。

2 内容

本実践は令和4年11月25日（金）に2年生グローバル科14名の生徒を対象に行った。物体の円運動について、物体に向心力がはたらくことを学習する中で、身の回りで円運動をする物体に目を向けさせ、学習内容を踏まえた上で現実現象を科学的に吟味、考察する能力を身につけさせることを目的とした。

糸をつけたテニスボール、遊園地のティーカップの乗り物などの例を示した上で、円運動をする物体には、向心力が必ず働いていること確認した後、これまでに学習した内容や、身の回りの生活の中から、向心力となりうるものがこれらの他にないかを考えさせ、惑星運動に注目させ、向心力としてどのような力がはたらくているのかを考えさせた。

3 学び

惑星運動では惑星間にはたらく万有引力が向心力となる。このように円運動をする物体には力がはたらくていないように見える場合でも、必ず向心力が存在することを学び、習得した知識を活用（応用）しようとする際の、ものの見方・考え方を生徒は学んだと考える。

4 次回への課題

実践後に、回転する表面があらい円板上にある物体に関する問題に取り組んだ。摩擦力が向心力になることに気づく生徒が多く見られた。例年、これまでに学習した「力」について、十分な理解ができておらず、向心力となりうるものをなかなか見つけることができない生徒が多く見られる。これは学習者が既習の単元を前提として考えることができない状態であることが原因であると考えられる。学習内容を踏まえた上で現実現象を科学的に吟味、考察する時間をより設けていく必要がある。

5 授業の振り返り

学習内容を踏まえた上で現実現象を科学的に吟味、考察する能力を生徒に身につけさせることは非常に大切なことである。授業者が答えを教えるのではなく、生徒が思考をして、科学的に吟味、考察する機会を得られるよう、発問を工夫していきたい。

1 はじめに

STEAM 化学は、物質やその変化に関する基本的な原理・原則の理解を深め、化学の基本となる概念や原理・法則を活用する能力を身につけさせるとともに、事物・現象を分析し総合的に考察する能力を育成することを目標にした科目である。

2 内容

マイクロスケールによる個別実験では、一人ひとりが積極的に実験に参加することができ、原理・原則の理解を深めて主体的な学習が期待できる。また、試薬の節減や実験廃棄物の少量化ができることから、SDGsに関連させた観点からの指導も可能となる。本稿では令和4年の6月から12月の授業の中で、2年生グローバル科 STEAM 化学選択者 21 名に対し、4 回に分けて行ったマイクロスケールによる個別実験の報告を行う。

(1) 実験テーマ「マイクロスケール実験（USB電源を用いた電気分解）」

従来のように、班で役割分担をして行う班別実験ではなく、実験の最初から最後まで自分自身の手で行うマイクロスケールによる個別実験形式で行った。また、PCやタブレット、スマホなど様々な用途に使用されているUSBハブやUSB端子から供給される直流電圧5.1Vで用いて、従来にはなかった新しい方法で3種類の水溶液の電気分解を安全に行うことができた。

(2) 実習テーマ「マイクロスケール実習（金属結晶の主な単位格子模型の製作）」

実験室以外のどこでも行える実習として、発泡スチロール球を用いた金属結晶の主な単位格子模型の製作を行った。面心立方格子 fcc や体心立方格子 bcc における原子配置の幾何学的な位置関係について数学を用いて事前学習した。その事前学習の計算に基づき、外箱となるプラスチック板の展開図を作成させて外箱を作らせた。最後にカッターナイフを用いて、適切な大きさになるように球をカットして外箱の中に配置させ、もの作りの楽しさも実感させた。

(3) 実験テーマ「マイクロスケール実験（硝酸カリウムの再結晶と吸引ろ過）」

硝酸カリウムの溶解度の差を利用した再結晶と、吸引ろ過と通常ろ過を比較してろ過速度の違いを観察させる個別実験を行った。その後、花火にも用いられる酸化剤の硝酸カリウムを紙面上で思い通りに燃焼させ、その酸化作用を観察した。

(4) 実験テーマ「マイクロスケール実験（コロイド溶液の作成と性質）」

コロイド溶液を作成して、1時間では現象が確認できにくい電気泳動以外のコロイドの様々な

性質についてマイクロスケールによる個別実験で行い、比較させた。また、絵の具の水溶液を顕微鏡で投影して、粒の大きなコロイド粒子の不規則な運動のブラウン運動をしっかりと観察させた。

3 学び

上記4つのマイクロスケールによる個別実験を行うことにより、自分自身の頭で考え、系統的に実験することで実験内容をより深く理解できるようになる。また、理解が深まることにより興味関心もより高まり、「科学的に思考・吟味する力」を養うより良い学びにつながる。コロナ禍で器具を出来る限り共用しなくてもよいマイクロスケールによる個別実験を自ら積極的に行うことで「困難な状況を突破する力」をも養うことが出来る。

4 次回への課題

理科教育では身近な自然現象を捉えるための理論的な考え方である因果律を重視するので仮説と検証を行える実験実習は必要不可欠なものであると考える。その中で STEAM 化学として他教科との関連も踏まえながら実践し、従来の化学とは異なる授業を展開するためには時間が不足しがちである。

今後は限られた時間の中でより効果的なマイクロスケールによる探究的な個別実験教材開発が必要である。

5 授業の振り返り

小中学校では、理科実験では主に自然現象への興味関心を高めることにウエイトを置いている。高校ではその現象がどのような原理で起こるのかを理論的に証明していく過程にウエイトを置いている。その意味では、中学校の教科書にも記載されているマイクロスケール実験を個別で行うことはコロナ禍においても大変有効であった。

(ろ) STEAM 生物

理科 教諭 金本 瑞穂

1 はじめに

STEAM 生物 は、現在の地球の環境変化および世界の生態分布や地域による生息形態の違いについて学ぶとともに、生物の発生や体内環境維持について、他の科目と連携することにより総合的に理解を深める。そして、これらを基礎として、生物種が地球環境の変化に対し、絶滅、適応してきた歴史を知ることにより、時間的に長いスケールで生物の変化を考え、生物を通した視点で「現在の地球」について考える力を養うことを目的に設定した科目である。

2 内容

本実践は、令和4年10月24日（月）～26日（水）の期間にある計4時間を使って、2年生グローバル科 STEAM 生物選択者7名の講座で行った。「生態系のバランスと保全」の単元で、生態系のバランスと人為的攪乱を関連付けて理解し、生態系の保全の重要性を認識させるために、今までの授業スタイルのなかに、3つの活動①～③を取り入れ、以下のような流れで授業を行った。活動①～③はすべてロイロノートで提出させ、全員で共有した。

- ・ 1時間目：導入「生物多様性はなぜ大事なのか」、単元課題・評価の確認、①テーマ学習
- ・ 2・3時間目：講義
- ・ 4時間目：講義、②単元課題、③振り返り

講義は、今まで通り行うが、1時間目に単元課題（問い）を2つ設定し、講義前の知識や考えでは説明できず、学ぶ必要性を感じさせる導入を意識した。また、①テーマ学習では、導入の中にちりばめられた語句や教科書から気になる部分を見つけ、問いを立てて調べ、資料を活用してまとめる活動を iPad で行った。2～4時間目の講義では、生徒がまとめた①テーマ学習の提出物を利用しながら講義を行った。4時間目の最後に、再び②単元課題を提示し、ロイロノートのシンキングツールを用いながら、現象の関係性を整理し、単元課題に対する自分の意見をまとめる活動を行い、最後に③振り返りシートの記入を行った。

3 学び

今までと同じ授業スタイルの中に、新たな活動を入れることでメリハリができ、生徒同士の交流も活発になった。はじめに単元課題（問い）を提示しておくことで、今後の学習内容が何につながっているのかを意識して授業を聞いている生徒が多くみられた。テーマ学習では、興味を持って積極的に教科書や図録から情報を取得し、学んだことを自分で図を描いてまとめている生徒が多くみられた。

生徒たちの生物への興味関心の高さ、自分で学ぶ力が少しずつ身についていることを実感した。また、ロイロノートを用いて共有することで、まとめ方や資料の使い方、問いの立て方、視点などを他者から学ぶ姿を見ることもできた。

4 次回への課題

活動①での課題設定では、幅広い問いの設定になる生徒が多く、広く浅い知識の習得となり、まと

めるのに苦労している生徒が多かった。「どのように」「だれが」「いつ」「どこで」などといった具体的な問いをたてるための指導が必要である。また、今回は単元課題の問いを2つ設定したが、授業時数をふまえ、数や質を変える必要がある。

5 授業の振り返り

本実践のような授業の形式は、生徒の興味関心に応じて活動の内容（量や質）を変化させることで、さまざまな単元で取り入れることができると考えた。

第5章 第3節 生態系のバランスとその保全
疑問に思ったことを調べよう（教科書、資料集を使用）

疑問 生物多様性とは

調べた結果

第5章 第3節 生態系のバランスとその保全
疑問に思ったことを調べよう（教科書、資料集を使用）

疑問 キーストーン種とは？

調べた結果

キーストーン種：ある生態系において、その生態系のバランスを保つのに重要な役割をする生物種（食物網における上位の捕食者）

例）アラスカのワコ

①生物多様性はなぜ重要なのか？

主張 生物多様性は重要

理由

- 生態系の安定性の向上
- 生態系の生産性の向上
- 生態系の回復力の向上
- 生態系の持続性の向上
- 生態系の多様性の向上

②生態系をどのように保全するか

生態系を保全するための3つの原則

- 原則1 生態系のバランスを維持する。生態系のバランスが崩れると、生態系の機能が低下し、生態系の持続性が脅かされる。生態系のバランスを維持するためには、生態系のバランスを崩さないことが重要である。
- 原則2 生態系の多様性を維持する。生態系の多様性は、生態系の安定性を向上させる。生態系の多様性を維持するためには、生態系の多様性を損なわないことが重要である。
- 原則3 生態系の持続性を維持する。生態系の持続性は、生態系の生産性を向上させる。生態系の持続性を維持するためには、生態系の持続性を損なわないことが重要である。

振り返りカード 記入日 月 日 () 時間目

第5章 第3節 生態系のバランスとその保全

①この時間の学習で理解がどのように深まったか。

生態系のバランスを自然浄化と人間活動に関連させて考えられた。

②この単元の学習で、どのようなことがわかったか。

生態系のバランスを保つためには、消費者はもとより生産者の影響も受ける。

③最終的に自分はどんな姿になったのか。（変容）

聞いたことのある言葉もいつかあったけど、生態系のことと関連させて現象を理解できるようになった。

振り返りカード 記入日 11月 1日 (火) 時間目

第5章 第3節 生態系のバランスとその保全

①この時間の学習で理解がどのように深まったか。

生態系のバランスについて知識を身につけ、身につけた知識を使い、自分自身にできることやその先のことについて考えられるようになった。

②この単元の学習で、どのようなことがわかったか。

生態系を保つために必要な生き物などない。つまりどの生物もお互いに影響を与え合っていて、一つでも欠けてしまうと生態系の形が変わってしまうということがわかりました。

③最終的に自分はどんな姿になったのか。（変容）

生態系の仕組みを知り、絶滅危惧種が増える理由などを知って、自分にできることをもっとしたいと思いました。

(ケ) グローバル・コミュニケーションⅠ

英語科 教諭 佐々木 啓成

1 はじめに

グローバル・コミュニケーションⅠは、実践的英語コミュニケーション能力の育成を目指すとともに、事実や意見を考察し、論理の展開や表現方法を工夫し、英語を手段として自分の意見を世界に発信する方法を習得するために設置した科目である。

2 内容

本実践は、11月22日(火)にグローバル科1年生を対象として行った。実践の内容は、「京都あるいは、日本の若者が直面している問題」をテーマにして、探究活動を行い、その内容を英語で発表するものである。グローバル科2年生が聴衆として参加した。発表内容には、「どのような問題に直面しているのか?」、「その問題の深刻性とは?」、「その問題の解決法とは?」、「その問題を解決した後の状況とは?」の4つの項目を含むように指導した。発表は1グループ4人を基本として、グループ内で上記4つの項目の中でどの項目を発表するかを決定し、個人練習やグループ練習を積み重ねた。伝わる発表にするために、視覚的に分かりやすいスライドの作成と、表現方法に磨きをかけた。また、発表の後には、聞き手である2年生が発表内容について即興的に英語で質問をし、1年生はその質問に対して即興的に英語で答えた。さらに、Microsoft Forms のアンケート機能を使って、2年生に1年生の発表を評価させた。

3 学び

テーマに対する探究活動では、科学的に思考・吟味する力が求められ、オリジナリティのある内容にするために、新たな価値を創造する力が求められた。また、イノベーション探究Ⅰで学んでいる課題解決の枠組みを利用する必要性もあり、生徒たちはこの取り組みを通じて、多くの力を高めることができた。

4 次回への課題

発表時の英語について、音声面で課題が見られた。個々の語彙の発音、リズム、抑揚などの音声面について改善が必要であるので、授業の中で継続して指導していく必要がある。

5 授業の振り返り

英語面の育成だけでなく、汎用的能力の獲得においても、発表活動には教育効果が高い。年間指導計画の中で、意図的に発表活動を計画し、生徒の能力を総合的に高めたい。

(2) グローバル・コミュニケーションⅡ

英語科 教諭 桂 カイ

1 はじめに

グローバル・コミュニケーションⅡは、グローバル・コミュニケーションⅠに引き続いて、実践的英語コミュニケーション能力の育成を目指すとともに、事実や意見を考察し、論理の展開や表現方法を工夫し、英語を手段として自分の意見を世界に発信する方法を習得するために設置した科目である。次の(1)～(3)を本科目の目標とする。

- (1) 相手の意見を踏まえて、論理的に自分の意見を主張できる能力を育成する。
- (2) 根拠に基づいて論理的かつ説得力のある英文を書く能力を育成する。
- (3) 課題の設定・リサーチの方法、課題解決方法をエッセイ・ライティングによって表現する能力を育成する。

2 内容

本実践は令和4年4月から1月にかけて、アカデミック・ライティングの基本を学習することを目的に行った。パラグラフの構成、パラグラフ・ライティングにおけるクリティカル・シンキングの手法を用いた分類整理の仕方、英語の文章の結束性と論理の一貫性、そして要約についての演習を実施した。また最後に、学習の成果として、400語程度の英語エッセイを提出させ、生徒同士のペア評価と、ルーブリックを用いた教員評価を行った。

3 学び

本実践により、自分なりの価値基準や判断で問題を分析させ、どのようにして結論にいたったかについて説得力をもって論理的に提示する力を養った。また、難しいトピックに対し、柔軟な発想で考え、グループで議論し、結論を導き出す過程をとおして、他者と協働する力の育成に寄与した。

4 次回への課題

ライティングを主な活動として取り入れたため、「話す」観点からの評価ができなかった。ライティングの練習問題をさせる際も、ペアワークをし、トピックの内容について理解を深めたが、ピア評価を効果的に行ったり、お互いのエッセイの添削を行ったりする機会がさらにあればよりよいライティング学習になったと感じる。

5 授業の振り返り

ライティングをとおして、他者と協働する力や新たな価値を想像する力、課題解決能力など様々な資質・能力を育成することができた。「書くこと」は「考えること」と直結しており、言語に関する気づきが促進されたと感じる。自分が言い表したいことがあるのに、英語の語彙が見つからず、英文にすることができない生徒が多かったが、文法指導やフィードバックをとおして、新たな発見や気づきにつながった。また、自分の考えを批判的に判断できるようになり、どのようにしたら自分の考えをより効果的に読み手に伝えられるかを自問することで問題解決能力を養うことにもつながった。今後も応用的なライティング指導と生徒が自分自身の考えを発信できる機会を与えていけたらと思う。

(サ) 日本歴史学Ⅰ

地歴公民科 教諭 奥村 典夫

1 はじめに

「日本歴史学Ⅰ」は、「日本史探究」の代替科目として設置された。前近代の歴史をグローバルな視点で俯瞰し、多面的多角的な考察を踏まえ、表現力を培うことを目標とする。この一連の学習を通して協働力、創造力、課題解決力を習得する。

2 内容

5単位の科目であり、毎日の授業をとおして継続的に内容の濃い指導ができる。原始・古代、中世、近世を取り扱い、政治・外交、経済・社会、思想・文芸の側面から各時代の歴史像を結ぶことを目標とする。予め教師が考察課題を示す追究学習から始め、やがて、生徒自らが課題を立てての探究学習へと発展させる。年度の初めには、各自の興味関心に基づき、「マイテーマ」を設定して、文献に当たり、3学期には、成果としてレポート（小論考）を作成することを目指した。

3 学び

(1) 「マイテーマ」をたて考察力を涵養するまなびへ

生徒自身が「我が事」として歴史像を結んでいくために、「マイテーマ」を持ち「文献記録」を進め、レポートを作成させた。この学習過程で、「歴史をとおして世界を俯瞰する力」「科学的に思考・吟味する力」「課題解決の枠組みをデザインする力」の涵養を進めた。

(2) 「等身大」の歴史像を結ぶまなび

「我が事」として、歴史像を結ぶため、日々の授業では、社会史・生活史の視座にたつて、過去の人々の痕跡・資史料に当たり、その解釈をとおして「情念」をくみ取る感性を持たせた。これは日々の授業の考察課題の発問をとおして進めた。

4 次回への課題

上記の指導過程において「学校経営計画で設定した資質・能力を育む授業」で期待される教育成果は上げられると考える。ただし、初年である今年度は、感染症の行動制限もあり、特に「マイテーマ」の設定過程では、濃い個別指導が必要であったと振り返る。

5 授業の振り返り

学習の3観点のバランスが、均しく習得されることが望まれるが簡単なことではない。今後、「歴史総合」から「日本史探究」・「日本歴史学Ⅰ」へと続く流れに沿って考えると、2年間のスパンでの発達段階を考慮して指導計画を設定していく必要があるだろう。今年度「日本歴史学Ⅰ」においては、教科書の文脈を精緻に読み取る力の習得と並行して、「マイテーマ」に基づく文献講読を行ったことは意味があったと判断できる。

(シ) 世界歴史学 I

地歴公民科 教諭 福井 英嗣

1 はじめに

世界歴史学 I は、選択必修科目「世界史 B」の代替として、諸地域の歴史的特質の形成、諸地域の交流・再編、結合過程を総合的に考察し、また資料を多面的・多角的に読み解き活用する技能を習得して、世界の歴史の大きな枠組みと展開について理解を深め、地球世界の課題とその展望を探究する力を養うことをねらいとして設置した。

2 内容

令和4年11月22日（火）および11月24日（木）に2年生グローバル科生徒28名を対象に世界史 B の「宋代の社会と文化」の単元での実践である。張昞端の「清明上河図」から北宋の都開封の様子についての考察を深めるとともに、日本の『一遍上人絵伝』に描かれた京の都と比較することで、それぞれの都の相違点についても考察した。資料の活用を重視するという科目の目標にもとづいて資料読解の力を養い、日本を含む世界の歴史の枠組みに関して多角的なものの見方や理解を深めた。考察の過程においては、ロイロノートを活用して自身の考えをまとめながら、他者との共有をはかった。

3 学び

絵画資料から当時の社会や生活の様子に関するたくさんの情報を得るという体験をして、さらにその情報をこれまでに学習してきた知識と結びつけて考察することで、宋代には商工業が発展し、都市化が進んだことが理解できた。また、『一遍上人絵伝』を活用して、日本の京の都と比較をすることによって、建物のつくりや都市の構造について視野を広げながら考察することができた。両国の関係性についても宋銭（銅銭）を用いて考えることができた。

4 次回への課題

ほとんどの学習者が絵画から都市に関する情報を読み取ることはできるが、そこから「それはなぜか」といった理由についてさらに考察を深め、仮説を立てるところまで到達する学習者は多くはなかった。今後も、様々な歴史的事象を扱う中で、その背景や歴史的意義について考察する機会をしっかりととらえて、思考を深化させていく必要があると感じた。

5 授業の振り返り

ロイロノートのシンキングツールやノートアプリなど、ICTの活用方法をさらに検討することで、自身の考えをまとめ、より効果的なグループによる探究活動が行えるのではないかと考えられる。

(Ⅻ) グローバル・シティズンシップⅠ

地歴公民科 教諭 山中 脩平

1 はじめに

グローバル・シティズンシップⅠは、必修修科目「公共」の代替として設定し、グローバルな社会の諸課題を追求し解決しようとする姿勢及び平和で民主的な社会の形成者に必要な資質・能力を高めるために、グローバルな社会体験を重視した探究学習を行うことを目的として設置した科目である。

2 内容

本実践は、令和4年11月8日（火）に取り組んだ授業である。教科書の「企業の働きと役割」という箇所を用いて「社会的責任を負う企業の姿はどのような姿か」というテーマでグループ討議を行い、資料を作成し、発表を行った。

授業展開としては、①教科書・資料集を読み込む、②テーマに沿ってグループ討議を行う、③討議内容を踏まえ、テーマについて資料作成を行う、④資料をスクリーンに映しながらプレゼンテーションを行う、⑤各グループの発表・教材内容について補足するという流れで取り組んだ。その際、それぞれの項目について明確に時間設定を行い、与えられた時間の中でいかに良いものをつくるかという意識付けをさせた。また、発表側のみではなく、聴く側にも聴く姿勢の在り方について考えさせる指導を行った。

3 学び

教材内容に対する教師側の指導を事前ではなく事後に行った。それにより、教師の情報を受け取るのではなく、生徒自らが教材の情報を獲得しにいく姿勢をみることができた。それにより、プレゼンテーションでは、多様な視点の考え方を感ずることができた。

4 次回への課題

一つのテーマに対して2～3時間程度の時間を使って取り組むことにより、生徒はより深い考察ができるのではないかと考えた。

5 授業の振り返り

本実践において、討論や資料作成、プレゼンテーションを用いた授業の一つの形を見つけることができた。本実践を一般化することで、異なる単元や教材でも同じアプローチができると考えた。

(e) 文化遺産論 $\alpha \cdot \beta$

地歴公民科 教諭 宮崎 雄史郎 (α : 世界史)

奥村 典夫 (β : 日本史)

1 はじめに

文化遺産論は、古代から現代に至る日本を含む世界の文化の特色などを、グローバルな視野で、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりなどに着目して、多面的・多角的に考察したり、説明したり、それらを基に議論したりする力を養うための科目として設置した。

2 内容

2年次で世界史・日本史の通史をおおよそ近代以前まで学習し終えている生徒に対して、1学期より古代から時系列に沿って、文化史の単元を抽出し2年次より深く考察できるよう授業を設計した。

同時代の史資料を提示し、2年次で培った知識・技能をもとに歴史的事象について思考・判断し表現するワークを実施したり、学校図書館を利用して文献調査をおこない、ある文化について自分なりの観点を設定して考察したりする取組をおこなった。1つ例を挙げると、文化遺産論 α において、古代ギリシアの歴史家トゥキディデスの著書『歴史』の一節を取り上げデロス同盟の実態を読解することで、ペルシア戦争後の都市国家アテネの性格を教科書の内容からさらに踏み込んで考察できるようにした。

3 学び

史資料の読解や文献調査をとおして文化史をより深く考察することで、歴史を多角的な視点で捉えることができるとともに、教科書で取り扱われている文化がなぜ、今日まで継承され「遺産」となっているのかについて価値を見いだすことができる。こうした学びは、歴史をとおして世界を俯瞰する力や科学的に思考・吟味する力など、本校が重視する資質・能力の育成に繋がり得た。

4 次回への課題

開講時間が文化遺産論 $\alpha \cdot \beta$ と同じであったため、世界史・日本史それぞれの講座が合わさって何か1つの問いを設定した学習ができると、より充実した学習活動が展開できると思われる。

5 授業の振り返り

一過性のワークショップ等で特色を出すのではなく、日々の学習の中で絶えず、今求められる資質・能力の育成に取り組んだ点が良かったと感じる。

(2) 京都戦略Ⅱ「グローバルかつ多様な協働学習の機会を創出」

ア 令和4年度京都府WWL高校生サミット

1 ねらい

地球規模の様々な課題の解決に向けて、AL(アドバンスド・ラーニング)ネットワーク京都の活用により、「京の智」すなわち、京都に存在する伝統・文化、大学・企業・研究機関などの知恵、日本各地で継承されてきた「日本の智」、さらには海外における「世界の智」をICT活用によって、時間的・地理的・経済的制約を超えて協働的に学ぶことで、高校生が「地球の智」へと高める機会とする。また、ALネットワーク京都で育成するイノベティブなグローバル人材に求められる6つの資質・能力の向上を図る。

2 内容

『「豊かさ」の価値の再創造による持続的な未来社会の創出』に向けて、在籍校の異なる高校生で構成された少人数のグループ(4名程度)を編成し、以下のいずれか1つの領域に関するテーマについて、各地域・国で課題となっていることとその解決策を交流し、解決策として最も先進的なものや、他の地域・国でも活用できるものはどれかを議論し発表した(詳細については資料2を参照)。なお、使用言語は日本語または英語とし、選択したテーマ及び言語ごとにグループ分けを行った。また、本取組は時間的・地理的・経済的制約を超えて遠隔地の高校生も参加できる仕組みを構築するために、協働事業機関であるNTT西日本京都支店と連携し、参加生徒をオンラインで接続して実施した。

【議論した領域】(具体的な議論の内容については資料1参照)

領域Ⅰ「文化遺産の戦略的活用による活力ある未来社会の創出」

領域Ⅱ「科学技術と自然が調和する豊かな未来社会の創出」

領域Ⅲ「多文化共生による平和で安心な未来社会の創出」

3 概要

- | | |
|----------|---|
| (1) 日 程 | 令和4年10月29日(土) 午前10時から午後4時まで |
| (2) 場 所 | 参加生徒の在籍校等 |
| (3) 方 法 | Web会議システムZoomによるオンライン開催 |
| (4) 参加者 | 53名
(鳥羽高校11名・福知山高校6名・洛北高校1名・嵯峨野高校2名・洛西高校1名・南陽6名・峰山高校6名・秋田県立秋田南高校8名・学校法人九里学園高校5名・沖縄県立那覇国際高校1名・豪州・Mansfield State High School 6名) |
| (5) 留学生 | 京都府名誉友好大使(京都大学大学院)3名、京都外国語大学1名、関西大学1名、京都教育大学1名 |
| (6) グループ | 合計13グループ(日本語7グループ、英語6グループ) |
| (7) 内 容 | 午前10時00分 開会・挨拶
午前10時05分 講評者紹介、Session1説明
午前10時15分 Session1
・グループ内で自己紹介
・Group WorkⅠ: グループで、各自が調査した問題と解決策を共有
午前11時00分 Session2
(正午まで) ・Group WorkⅡ: 革新性と普遍性の観点から最も優れた課題解決策について議論
午後1時10分 Session3
・Group WorkⅢ: 議論した内容について、発表資料を作成 |

午後 2 時 プレゼンテーション

※プレゼンテーションは使用言語ごとに参加者を2つのグループに分けて実施

午後 3 時 10 分 杉岡准教授及びハーダー教授による講評

午後 3 時 30 分 閉会、アンケートへの回答

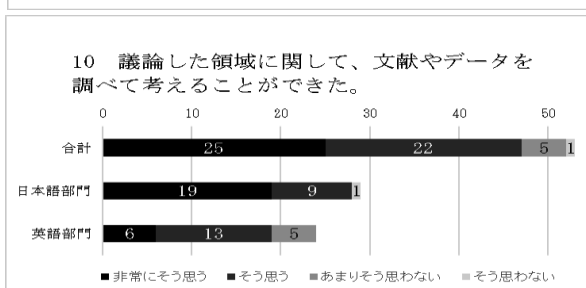
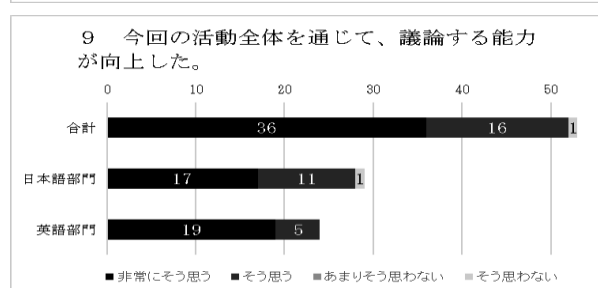
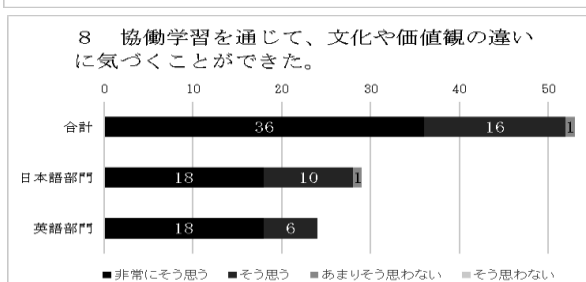
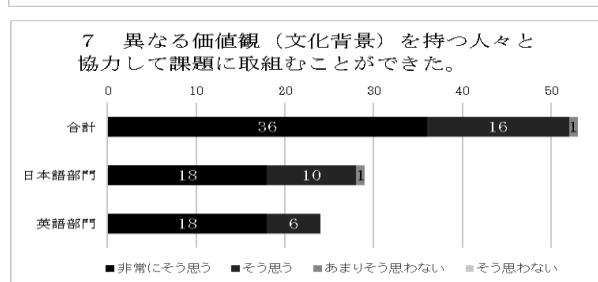
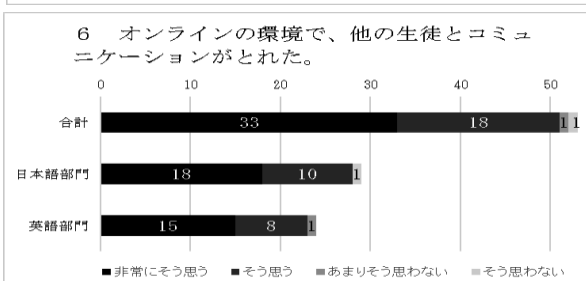
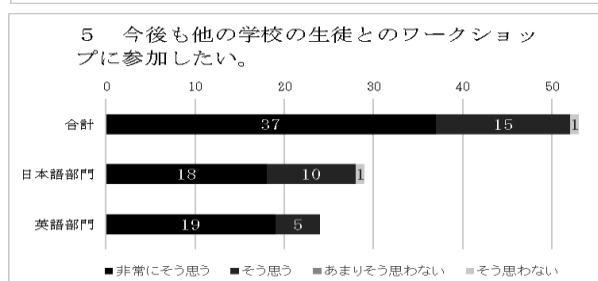
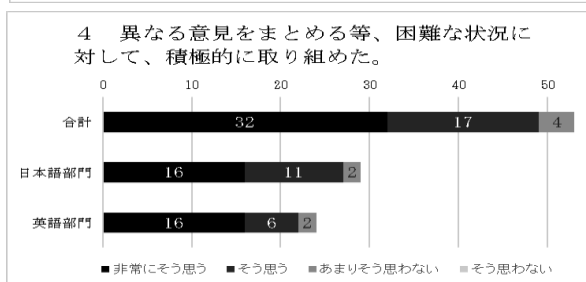
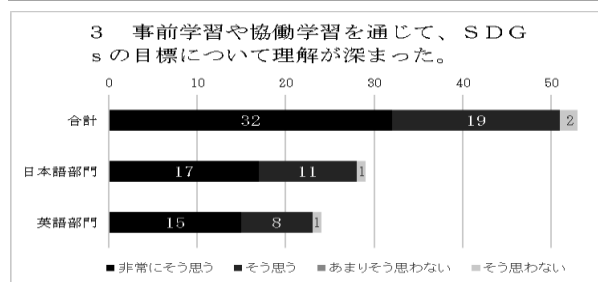
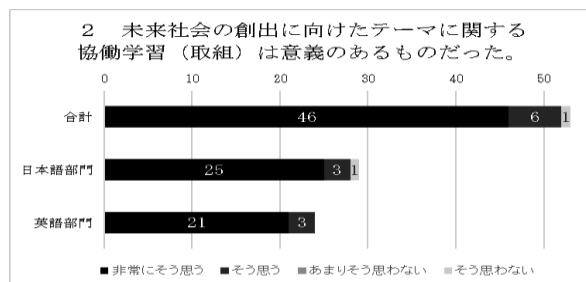
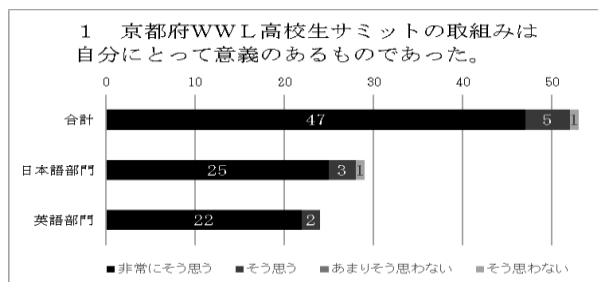
午後 3 時 40 分 グループごとに交流会（振り返り）

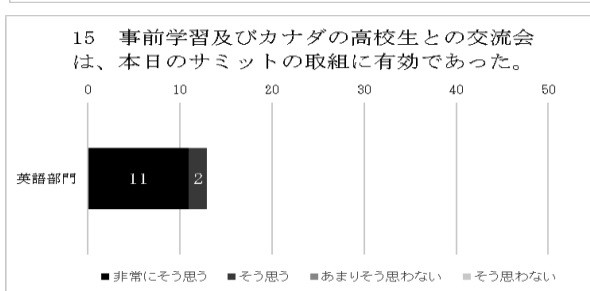
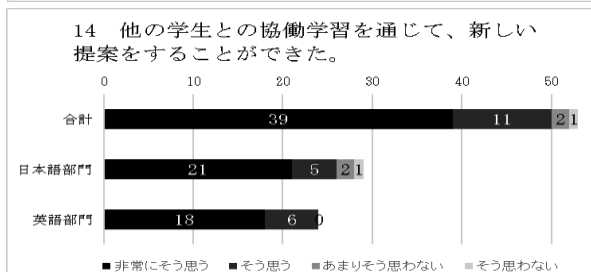
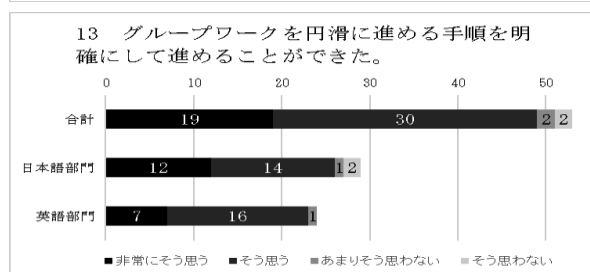
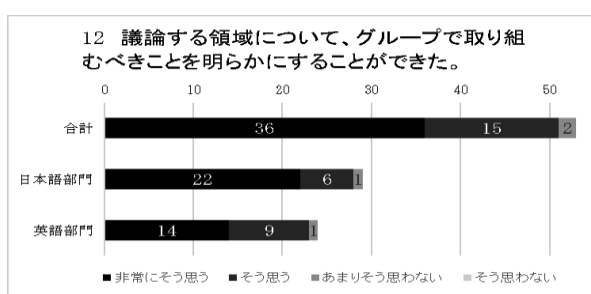
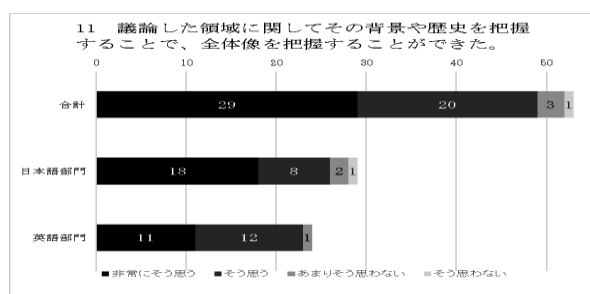
- (8) 参観者 京都美術工芸大学 高田光雄 副学長（鳥羽高校学術顧問）
筑波大学 真田久 特任教授（鳥羽高校学術顧問）

4 成果

(1) アンケート結果

※質問 15 は、事前学習対象者 13 名のみの回答となっている。





(2) 参加生徒の感想（一部抜粋）

【日本語部門】

- ・同級生とは思えないくらいのプレゼン力、企画力、進行力に圧倒されつつも、自分もそれに煽られて、良いように乗せてもらい積極的にグループ活動に参加出来てすごく楽しく、有意義な時間でした。ほかの班の発表を聞く時間は「あ、こうすれば分かりやすい発表、パワーポイントになるんだな」とすごく勉強になりました。
- ・コロナ禍で他県の生徒と交流する機会が非常に少ない中、こうして同年代の人と簡単には答えが出ない問題について議論でき、自分にとってとても成長のできる時間だったと思います。普遍性と革新性というのは相反するものにも思えて最初はすごく悩みながら事前課題に取り組んでおりましたが、最終的にはその2つの意味をこのWWLで掴めたので、参加して本当に良かった。
- ・学校で行っている探究活動は知り合いと対面で話し合いを重ねるので意思疎通がはかりやすいですが、今回は初対面の人とリモートで話し合うので一筋縄ではいかず、協働することの難しさがわかりました。WWLに参加して、自分以外にも文化財と観光について考えている人がこんなにもいるのかと感動した。
- ・初めは自分の意見を述べるのがあまり得意ではなかったのですが、このイベントを通して、皆違う意見、価値観を持っていることに改めて気づくことができ、今では色んな人の意見を聞きたい、自分の意見も共有したいという思いが生まれました。
- ・最後まとめて発表するには時間が足りなく、最後まで話し合っており上手くまとめることが出来なかった。すごく難しかった。でも本当に、今回話し合ったようなことはすごく具体性があるので、自分達さえ動けば実現できるような気がした。
- ・違う意見を持った人たちと交流をすることで新たな視点で物事を見つける力が着いたのではないと思う。今後、学校で意見の交流や物事を考える際に、活かせるいい活動にすることが出来た。もっと質問をし、自分の考えを発表できたらよかったのかなと少し後悔もあるので来年も参加したいと思った。

- ・初対面の人と意見を交換し、新しいアイデアを作っていくことは難しかったけれど、それによって絆が深まったように感じるし、少しだけ自分に自信が持てるようになりました。

【英語部門】

- ・初めてオールイングリッシュでの話し合いで自分の英語力がまだまだだなと感じながらも、オーストラリアでの問題について少しは理解出来たので良かったと思う。聞き取れないところが多くて話し合いにならないこともあったので、もっと英語を出来るようになってから、もう一度挑戦したいと思った。
- ・事前学習であらかじめ予備知識をつけておいたことで最初から議論に主体的に参加することができた。サミットが始まる前は英語で他のグループメンバーのプレゼンを聞いたり、議論したりすることに少し不安があったがファシリテーターの方やオーストラリアの高校生が手助けしてくれたおかげで問題なく取り組むことができた。
- ・自分の意見を発言するタイミングや、メンバーのアイデアをまとめて話し合いを有意義に進める術など様々な事を学んだ。非常に意味のある会だったと思う。
- ・英語を使うことのゴールはテストなどではなくて、こういった世界の人とSDGsなどについて議論したり、一緒に活動したりすることなのだと感じました。英語の重要性を感じたので、これからもっと勉強してこういった英語を使える機会にも参加していきたいと思います。
- ・This summit was very useful and insightful. I learned many things about Japan, including how Japan and Australia are not very different in terms of the social issues that we have. This was a good opportunity for me to develop my critical thinking and public speaking skills.
- ・I think this summit was a great opportunity for us as Australian students to communicate with students from Japan. This appealed to me as it is something that I have always wanted to have the opportunity to do. However, I wish that maybe on occasion we could talk to the Japanese students in Japanese so that we can have a go at communicating with them in the language that we are learning, and that is their native language.

(3) 分析できる成果

令和2年度から京都府 WWL 高校生サミットを継続開催しているが、今年度は初めて海外（オーストラリア）の高校から参加者を募り開催することができた。小規模ではあったが指定初年度から継続して実施してきたことが、オンラインによる高校生国際会議のノウハウの着実な蓄積となり、本サミットに参加する高校生にとって大変意義のある取組に成長させることができた点は大きな成果である。

アンケート結果から、英語部門の参加者についてはオーストラリアの高校生を含めて全員が、質問1「本サミットが自分にとって意義がある」について肯定的に回答した。留学生ファシリテーターの協力はあったが、オンライン上で在籍校及び国籍の異なる高校生が英語で議論することが不可能でないことを示すとともに、これからの未来社会を担う高校生に「グローバルな協働学習の機会」の提供を実現できたことは大きな成果である。一方、日本語部門については、参加者の9割が質問1について肯定的に回答しており、英語部門同様に価値観や文化の異なる高校生が協働しながら議論する場を創出できたことは大きな成果となった。

令和 4 年度京都府WWL高校生サミット 各領域で議論する内容及び対応するSDG sについて

議論したい内容について、第 1 希望と第 2 希望を選択してください。第 1 希望は英語の領域、第 2 希望が日本語の領域となってもかまいません。

グループワークでは、主に他校生と 4 人程度のグループを組み、指定のSDG sの目標（今年度の重点テーマ）を踏まえた内容について、参加者各自の身近な地域や国の課題とその解決策を事前に調査してもらい、グループで調査した内容を交流します。その後、交流した内容の中から、最も先進的な解決策、または他の地域・国でも活用できる解決策はどれなのかを議論し、1 つ選んで発表します。

1. 領域Ⅰ「文化遺産の戦略的活用による活力ある未来社会の創出」（使用言語：日本語）

(1) 議論する内容

文化遺産は観光業にとって良い資源の一つであり、経済発展のカギとなります。しかし文化遺産を活用した観光業は問題も抱えています。持続可能な観光を促進するために、文化遺産を活用しながら、どのように文化遺産を保存することができるのでしょうか。なお、持続可能な観光業とは、「地元の人と旅行者の両方を、文化遺産と観光の両方を重んじるもの」*として定義します。また、文化遺産とは有形（寺社仏閣など）と無形（京料理、おもてなし）の両方を含みます。

上記の内容について、あなたの身近な地域や国で課題となっている（いた）こと、そしてその課題を解決するために取られている方法について調査してください。

*参考：UNESCO “Cultural heritage based tourism”

<https://en.unesco.org/fieldoffice/almaty/silkroads/cultural-heritage>

(2) SDG s の目標（今年度の重点テーマ）

目標 8 働きがいも経済成長も

目標 11 住み続けられるまちづくりを

（参考）その他、対応するSDG sの目標

目標 4 質の高い教育をみんなに

目標 9 産業と技術革新の基盤をつくろう

目標 12 つくる責任 つかう責任

2. 領域Ⅱ「科学技術と自然が調和する豊かな未来社会の創出」（使用言語：日本語）

(1) 議論する内容

先進国や開発途上国を問わず、世界中で気候変動が起こっており、国際社会の重要な課題となっています。気候変動は、様々な形で人間や動植物の生活や命を危険にさらしています。気候変動のスピードを緩めるための行動として、私たちに何ができるでしょうか。

上記の内容について、あなたの身近な地域や国で課題となっている（いた）こと、そしてその課題を解決するために取られている方法について調査してください。

参考：UNICEF 「持続可能な世界への第一歩 SDGs CLUB」

https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/17goals/13-climate_action/

(2) SDG s の目標（今年度の重点テーマ）

目標 7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに
目標 13 気候変動に具体的な対策を

(参考) その他、対応する SDG s の目標

目標 3 すべての人の健康と福祉を
目標 9 産業と技術革新の基盤をつくろう
目標 12 つくる責任 つかう責任
目標 14 海の豊かさを守ろう
目標 15 陸の豊かさを守ろう

3. 領域Ⅲ「多文化共生による平和で安心な未来社会の創出」(使用言語：日本語)

(1) 議論する内容

現在、世界中で、異なる文化背景や価値観を持つ人たちが平等かつ平和に住める包摂的な社会をどのように作るのかが重要になっています。これは日本人と外国人という違いのみを指しているわけではありません。例えば、日本国籍の人でも、両親や祖父母が海外出身であることから、異なる文化背景や日本語とは異なる母語を持つ人も増えています。そこで、包摂的な社会を作るために私たちは何ができるのでしょうか。

上記の内容について、あなたの身近な地域や国で課題となっている(いた)こと、そしてその課題を解決するために取られている方法について調査してください。

(2) SDG s の目標 (今年度の重点テーマ)

目標 10 人や国の不平等をなくそう
目標 16 平和と公正をすべての人に

(参考) その他、対応する SDG s の目標

目標 1 貧困をなくそう
目標 2 飢餓をゼロに
目標 5 ジェンダー平等を実現しよう
目標 17 パートナリーシップで目標を達成しよう

参考：UNICEF 「持続可能な世界への第一歩 SDGs CLUB」

<https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/17goals/10-inequalities/>

杉岡秀紀 氏「SDG s の 16 番目の目標は達成できるのか？」

<https://www.fukuchiyama.ac.jp/news/20516/>

4. Area IV “Creating a vibrant society in the future, making strategic use of cultural heritage” (discussed in English)

※テーマ I の内容について、英語で議論します。

(1) Content discussed in this area

Cultural Heritage is one of the good resources for tourism and one of the key tools for economic development. But cultural heritage-based tourism causes some problems as well. How can we preserve the cultural heritage while utilizing it to promote sustainable tourism? It is defined as “tourism that respects both local people and the traveler, cultural heritage and the environment*1.” Cultural heritage includes both tangible (temples, shrines, etc.) and intangible element (Kyoto cuisine, Omotenashi*2, etc.).

What problems do you or did you have in your home area or country? Please

investigate one of the problems and find solutions that people have taken.

*¹ Reference : UNESCO “Cultural heritage based tourism”

<https://en.unesco.org/fieldoffice/almaty/silkroads/cultural-heritage>

*² Japanese hospitality

(2) Specific Goal to be considered

Goal 8 Decent Work and Economic Growth

Goal 11 Sustainable Cities and Communities

(Reference) other SDGs related to the topic

Goal 4 Quality Education

Goal 9 Industry, Innovation and Infrastructure

Goal 12 Responsible Consumption and Production

5. Area V “Creating a secure and peaceful society where people from various backgrounds and origins can live together in the future” (discussed in English)

※テーマⅢの内容について、英語で議論します。

(1) Content discussed in this area

Today, it is important to think about how we create an inclusive society where people of different cultural backgrounds and values can live together equally and peacefully. This does not only mean differences between Japanese people and foreigners. For example, more and more people of Japanese nationality have different cultural backgrounds or native languages different from Japanese, because their parents or grandparents come from other countries. What can we do to create an inclusive society?

What problems do you or did you have in your home area or country? Please investigate one of the problems and find solutions that people have taken.

Reference: United Nations Department of Economic and Social Affairs

<https://sdgs.un.org/goals/goal10>

(2) Specific Goal to be considered

Goal 10 Reduced Inequality

Goal 16 Peace and Justice Strong Institutions

(Reference) other SDGs related to the topic

Goal 1 No Poverty

Goal 2 Zero Hunger

Goal 5 Gender Equality

Goal 17 Partnerships to achieve the Goal

資料 2

グループの編成及び当日の進め方について

1 当日までの準備等

(1) グループの編成

- ・参加生徒は、申込の際、議論するテーマについて第1希望と第2希望を選択
- ・希望を基に、主催者がテーマ及び言語ごとにグループを編成（各グループ4名程度）
- ・**各グループのメンバーは在籍校の異なる生徒で構成**
- ・英語部門には、日本在住の留学生がファシリテーターとして1名ずつ参加予定
- ・英語部門には、海外の高校生等も参加の可能性あり

(2) 参加者の事前準備

- ・参加生徒は、議論するテーマに関して、事前学習用ワークシート（参考資料）を用いて各自が調査した課題とその解決策を整理
- ・上記の内容を、当日の【セッション1】で同じグループの参加者に5分以内で説明できるように準備

2 当日の進め方（予定）

(1) セッション1：アイスブレイク及びグループワーク1

- ・グループ数分のブレイクアウトルームを設定（主催者）
- ・指定のブレイクアウトルームに移動し、グループ内で自己紹介と以下の役割を決定

役割	内容
司会	各セッションの司会進行を行う。メンバーの発言を促し、出た意見に対して感想等を述べて、話をふくらませる。また話題が脱線しそうなとき、話の流れを戻すのも役割となる。
書記	司会が議論を進めやすいように、メンバーから出た意見の中からキーワードを整理して記録する。メンバーの意見を全て記録する必要はない。
タイムキーパー	セッションごとに時間の制限がある。時間内で効果的に議論等が進められるように、時間の管理をする。
発表者	グループの代表として、プレゼンテーションの時間に議論した内容を発表する。

- ・自己紹介と役割分担の後、事前学習用ワークシート（参考資料）を用いて各自が調査した課題と解決策を交流
- ・交流時間は一人につき5分程度（発表4分、質疑応答1分）
- ・調査した内容を交流する際は、資料を画面共有してもかまわない。**ただし、画面共有する場合には、事前に方法等を必ず確認し操作に慣れておくこと。**
- ・主催者が画面共有のサポート等は行わない。

(2) セッション2：グループワーク2

- ・グループとして交流した課題と解決策の中から、「先進性」と「普遍性」の観点から最も優れた解決策を決定し、その理由をまとめる。

(3) セッション3：グループワーク3

- ・選んだ解決策をさらに良いものにできるかを議論しながら、グループでプレゼンテーションを作成
- ・プレゼンテーションは以下の項目を含むこととする。

- ア 議論した内容について、どのような課題や解決策が紹介されたのかを簡単に説明（1分以内）
- イ 最も先進的、あるいは他の地域・国でも活用できる（普遍的）解決策はどれかを紹介
- ウ その解決策が先進的あるいは普遍的な理由を説明
- （エ 紹介した解決策をより良くできる場合は、その方法等を説明）

(4) プレゼンテーション

- ・使用言語ごとに設定した発表用のブレイクアウトルーム（2部屋）に移動
- ・各グループの発表者が、セッション3でまとめた内容を発表
- ・1グループ最大5分（発表時間5分＋入替時間1分、質疑応答なし）
- ・プレゼンテーションはグループ番号の小さい順番に実施
- ・パワーポイント等を画面共有しながら発表してもかまわない。ただし、画面共有する場合には、事前に方法等を必ず確認し操作に慣れておくこと。
- ・主催者が画面共有のサポート等を行わない。

(5) 講評

- ・使用言語ごとに大学教員から講評
- ・後日、グループごとの簡単なフィードバックを学校経由で送付予定

3 閉会式後

- ・参加生徒対象のオンライン・アンケートへの回答
- ・アンケート終了後、各グループに再度分かれて、自由に交流できる時間を設定

イ 令和4年度府立高校共通履修科目「スマートAP」 全体まとめ

1 趣旨

イノベティブなグローバル人材に求められる資質・能力として、本府WWLコンソーシアム構築支援事業が定義する6つの力のうち、主に、②多様な文化的背景を持つ人々と協働する力、③科学的に思考・分析する力、⑤課題解決の枠組みをデザインする力の育成に関連し、大学との協働による高度で先進的な学びのプログラムを提供し、大学教育との効果的な接続に資する。

2 目的

グローバルな社会課題の解決に必要なリサーチスキルを習得させるとともに、イノベティブなグローバル人材の基盤となる論理的・批判的思考力と多文化協働力を育む。

3 対象

ALネットワーク京都の拠点校・共同実施校又は連携校に指定された京都府立高校に在籍する第2学年生徒のうち、受講を希望する者。令和4年度の対象校は次の6校とする。

鳥羽高校（ALネットワーク京都拠点校）

福知山高校（共同実施校）

洛北高校・嵯峨野高校・南陽高校・峰山高校（連携校）

なお、遠隔での講義については自宅からの参加を可能とする（受講に必要な端末（パソコン等）及びインターネット環境を確保すること）。

4 内容

大学教員によるリレー講義・ワークショップから成るプログラムをオンライン又はオフラインで受講し、その成果を踏まえて令和4年度京都府WWL高校生サミットに参加した。

◆令和4年度プログラム（当初計画）※時間欄のA、Bについては後述

回	日程	時間	テーマ・内容	形式（場所）
第1回	4月16日（土）	A	導入・リサーチスキル①「課題研究の意義、問いの立て方」 杉岡秀紀先生（福知山公立大学地域経営学部 准教授） 江上直樹先生（大阪大谷大学教育学部 講師）	遠隔
第2回	5月7日（土）	B	リサーチスキル②「研究テーマの決定－RQの設定と仮説の構築－」 乾明紀先生（京都橋大学経済学部 准教授）	遠隔
第3回	6月4日（土）	B	リサーチスキル③「研究方法について－量的研究と質的研究－」 神吉紀世子先生（京都大学大学院工学研究科 教授）	遠隔
第4回	7月16日（土）	B	多文化協働の手法“Team Work and Collaboration” 講師は調整中（豪州・クイーンズランド工科大学）	遠隔
第5回	7月30日（土）	A	論理的・批判的に考える 柿澤寿信先生（大阪大学全学教育推進機構 准教授）	遠隔
第6回	8月20日（土）	A	リサーチスキル④「チームでプチ課題研究！－研究計画書を作ろう－」 乾明紀先生（京都橋大学経済学部 准教授）	対面 （鳥羽高校）
第7回	9月17日（土）	B	リサーチスキル⑤「プレゼンテーションの技法」・まとめ 杉岡秀紀先生（福知山公立大学地域経営学部 准教授）	遠隔
第8回	10月29日（土）	10:00 ～16:30	京都府WWL高校生サミット	遠隔 （在籍校）

※新型コロナウイルス感染症感染防止のため、第6回を対面形式から遠隔形式に変更して実施

5 各授業の構成・時間割

各回の授業（第8回を除く）の構成と時間割は、次のA、Bいずれかのパターンで実施した。

	A	B
講義・ワークショップⅠ	午前10時30分～正午	午後1時10分～同2時40分
講義・ワークショップⅡ	午後1時～午後2時30分	午後2時50分～同4時20分
レポート作成・ふりかえり	午後2時40分～午後3時10分	午後4時30分～同5時

6 受講者数

計27名（鳥羽9、福知山4、洛北2、嵯峨野2、南陽6、峰山4）

7 令和3年度からの変更点

- (1) 対象を令和3年度はALネットワーク拠点校（鳥羽）と共同実施校（福知山）の2校に限定したが、令和4年度は対象を連携校に拡大し、6校とした。対象校の選定にあたっては、BYODの導入状況を参考にした。
- (2) 受講生が遠隔講義を受講する際、令和3年度は教員の指導の下で在籍校から接続させたが、令和4年度は自宅からの接続を可とした。
- (3) 令和4年度はレポート課題を新たに課すなど、内容の見直し・充実を図った。

8 成果と課題

(1) 成果

ア プログラムの趣旨・内容について

- ・「大学の初年次教育との接続を図ること」と「各校における探究学習の指導に生かすこと」を意識し、探究の「作法」を一通り学ぶことができるプログラムを2年間かけて研究開発した。シラバスの軸に探究スキルを位置付け、探究を支える論理的・批判的思考力と多文化協働力を両翼に配置する構成により、有機的な学習プログラムのモデルを構築することができた。
- ・目的の一つである「多文化協働力」の育成を図るため、個人ではなくチームで探究を行うプログラムとなるよう内容を工夫した。具体的には、生徒がグループワークを通して1つのプロジェクトに取り組み、成果物にまとめ発表できるよう各回の講義内容の連携を図った。この方式は学んだ知識をスキルとして活用するのにきわめて有効であった。また、協働学習の促進と学習成果の可視化にも役立ち、生徒に学習の充足感をもたらす効果があった。
- ・今年度はチーム探究に先立ち、受講生が各自レポートを作成するという課題を新たに課した。これは個人探究のレベルを深め、ひいてはチーム探究の到達度を高めるのに効果的であった。

イ 実施方法・形式について

- ・オンライン授業が滞りなく実施できることは昨年度実証されたので、今年度はさらに拡充し、完全オンラインで実施した。昨年度は生徒に登校させ、学校から教員の指導の下で接続させたが、今年度は生徒の自宅からの接続を可とした。教員の特段の関与なく、生徒がオンライン授業に円滑かつ主体的に参加できることを確認したことは、APの趣旨に鑑みて成果であると言える。
- ・プログラムの対象校の拡大に伴い、受講生の学習グループを在籍校が異なる生徒同士で構成する必要が生じた。互いに面識のない生徒がオンラインで協働することには困難が予想されたため、初回講義時に各グループによるオンラインランチの時間を設けた。また、講師の先生方の協力の下、各回のグループワークの冒頭にはアイスブレイクを取り入れ、グループ内の人間関係の構築が促されるよう配慮した。これらの工夫によりオンラインによる協働学習を円滑に進めることができた。その結果、「チーム探究」の趣旨をよりよく実現し、本プログラムの目的

の1つである「多文化協働力の育成」に資することができたと考える。

- ・講義の受講に係る指示・連絡等を昨年度は在籍校の教員が行ったが、今年度は教員の関与を減らす観点から、必要な指示・連絡等はメールにより各受講生に直接伝えた。指示・連絡の不徹底による混乱や課題の提出遅れ等の問題は一件もなかった。高校生に対しても対大学生と同様の方法で授業に係る指示・連絡の周知が可能であることを確認できたことは、APの趣旨に鑑みて成果であると言える。

ウ 「京都府WWL高校生サミット」（以下「サミット」）との連動について

- ・昨年度に引き続き、サミットを本プログラムにおける学習成果の発表の場として位置付けた。サミットのテーマが本プログラムの学習内容と親和性の高いものであったため、効果的な連動を図ることができた。
- ・サミットでは本プログラムの受講生の多くがグループ内の議論を主導したり、進んで司会者や発表者を務めたりするなど、グループディスカッションにおいて中心的な役割を果たした。これは、本プログラムを通して探究的な学習態度やリーダーシップが養われたことの証左であると言える。

エ 受講生の取組状況について

- ・全プログラムを通して受講生はきわめて意欲的に参加し、取組状況も良好であった。講義後のレポートの記述から受講生の確かな変容を見取ることができることや、生徒の将来構想に良い影響があったと見取ることができたことは、大いに評価できる。

(2) 課題

ア プログラムの趣旨・内容について

- ・各回の講義内容を連動させることは、本プログラムの趣旨・目的のよりよい実現を図る上で効果的であるが、そのためには講師の先生方との事前の綿密な擦り合わせが必要となる。講義準備や受講生から提出されたレポートの評価等も含めて、講師の先生方への負担を一定程度生じさせるプログラムであることは否めない。本プログラムを持続可能な取組にする上で、講師の先生方にかかる負担を軽減するための工夫を検討する必要がある。

イ 実施方法・形式について

- ・プログラムの設計当初はオンラインと対面の組み合わせによるハイブリッド方式を想定していたが、新型コロナウイルス感染症による感染防止の観点から全面オンラインでの実施に切り替えざるを得なかった。8(1)イに記したように、結果的に全面オンラインでも所定の目的を達成できることを確認したことは成果であったが、対面のよさを組み込むことで得られる効果を確認できなかったことは残念である。
- ・受講生が在籍する学校の教員の関与は昨年度に比べて減ったものの、事前事後の指導等に係る負担は一定程度発生する。本プログラムを持続可能な取組にする上で、在籍校の教員にかかる負担を軽減するための工夫を引き続き検討する必要がある。

ウ サミットとの連動について

- ・8(1)ウに記したように、本プログラムをサミットと連動することで得られる教育効果は大きい。サミットは本プログラム受講生以外からも参加者を募るため、今後対象校をさらに拡大し受講生が増えると、サミットとの連動が困難になる可能性がある。また、サミットを本プログラムから切り離した場合、それに替わるコンテンツを用意する必要がある。

令和4年度第1回「スマートAP」

1 実施日時

令和4年4月16日（土）10:30～15:10

2 テーマ

第1講「課題研究の意義 ー問いを立てるー」

第2講「問いを立てる ー情報収集の仕方ー」

3 講師

第1講 福知山公立大学地域経営学部 准教授 杉岡 秀紀 氏

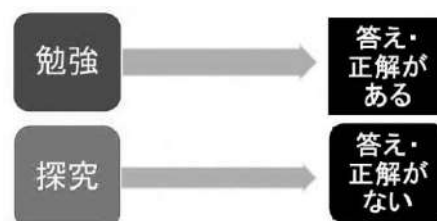
第2講 大阪大谷大学教育学部 専任講師 江上 直樹 氏

4 講義概要

4-1 第1講「課題研究の意義 ー問いを立てるー」

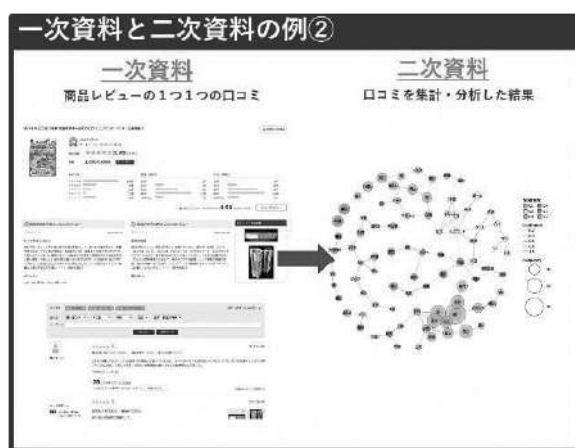
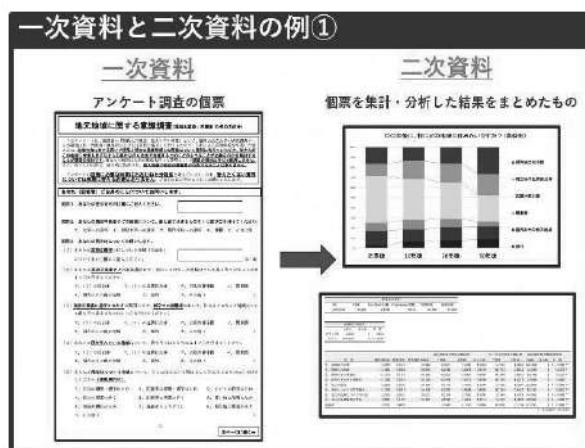
本講義ではまず「勉強」と「探究」の違いを押さえた上で、今後大学や社会で求められるのは探究的な学びであり、高校で取り組む課題研究はそうした学びの基礎づくりに有効であるという話があった。

そして、アメリカの哲学者ジョン・デューイが「探究と疑問は同義語」と述べているように、探究は何らかの疑問（問い）から始まるものであり、既存の常識を疑う姿勢をもつことや、日常の生活に立脚した小さな問いでよいので、自身の関心から生まれる問いを大事にすることの重要性を学んだ。



4-2 第2講「問いを立てる ー情報収集の仕方ー」

本講義では第1講の内容を受け、問いを立てるためにはその前提となる知識や体験が必要であり、そのための情報収集が不可欠であることや、本格的な研究ではこの情報収集の段階で先行事例や先行研究を調べる必要があることなどが紹介された。そして、情報収集する資料の種類には一次資料と二次資料があること、探究を深めるためには二次資料を参照するだけでは不十分であり、自分なりに一次資料を探して参照する必要があることなどを学んだ。また、インターネットを利用して情報収集する際に留意すべき事項についても学習した。



5 受講生のリフレクションから（一部を抜粋）

- これから探究が始まる予定ですが、少しだった「わくわく」が倍増しました。程度に大きな差はありますが、大学教授の方々がやっていることと同じ領域に足を踏み入れることになるので、とても嬉しく思います。
- 自分の今まで考えていた「探究」ということへの新しい考え方が今回の授業でたくさん入ってきて、自分の視野が広がったように感じました。
- （自分と）同じ年の人が世界に問題を発信している姿を見て、高校生だからとか関係なく誰もがチャンスがあると思ったし、すごく刺激を受けた。
- 「問い」を作るためには“常識を疑う”ことが必要なので、そのために今は勉強を学んでいることがわかり、とても納得した。話を聞いていて「思わず出てきてしまった問い」などは今よりも、幼かった頃の方が多かったなと感じた。それは、今の自分はいろいろな考え方にとらわれてしまっていて、「それはそういうものなんだ」と質問を閉ざしてしまっていたからだなと気づいた。だから、これからは（中略）日常にあふれている「なぜ？」に探究心をそそいでみたい。
- 私は高校1年生の時にも探究活動を行っていた。しかし、問いの立て方や情報収集のやり方が下手だったと思う。というのも、問いでは先行研究を調べずにただ調べたことを羅列するものになってしまっており、情報収集では調べ方がわからずに、とりあえずグーグル検索して、いろいろな情報の中から都合のいいものだけを使っていた。なので中身のない探究活動、いや調べ学習になっていたと思う。今回は講師の方々の言葉にギクッとしてしまったことが多かった。
- 去年の探究活動では（中略）あまり目的のないままアンケートをとったり、インターネットでの調べ学習をしていたけど、それでいいかなあ・・・、どこに問題があったかなあ・・・とよくわからず考えていたけど、“問いの立て方”に問題があったのだと気付いた。今年は“問いを立てること”に力を入れたい。また、去年は先生から教えていただいた論文を参考にしただけだったが、自分で資料を見つける方法がわかったので、自分で探してたくさんの知識を身に付けて、多角的に1つの問題について見るできるようになりたい。
- これまでにした学校の探究活動はテーマを与えられて行っていた（中略）が、日常の些細な疑問から探究が始まることを学べた。（中略）これまでは複数の人が同じテーマで探究したら皆似たような結論にたどり着くと思っていたが、今回の講義で探究は人の数だけ結果があるということを初めて知った。
- 思い込みをしていることに一人で気付くことができないので、思い込みに気付くためにも他の人との交流が必要だと思った。探究をしていく上で、同世代の友だちだけで進めていくよりも違う世代との交流、範囲を広げて外国人の方たちの意見も聞いてみて（中略）多くの人の視点から物事を考えていこうと思った。

令和4年度第2回「スマートAP」

1 実施日時

令和4年5月7日（土）13:10～17:00

2 テーマ

「研究テーマの決定ーリサーチクエスト（RQ）の設定と仮説の構築ー」

3 講師

京都橘大学経済学部 准教授 乾 明紀 氏

4 講義概要

研究における問いのことをリサーチクエスト（RQ）というが、本講義では研究の大まかな方向性（研究テーマ）をまず決めて、そこから具体的なRQへと絞り込んでいく手順について説明があった。また、RQを立てる際には、①「今までの研究と比較して何が新しいのか」、②「自身の力量で扱うことができるか」、の2点に留意する必要があることを学んだ。

その後、「心に残った引っかかりや違和感を問いにする」ということを実際に体験するため映画を視聴し、映画の内容について各自が心に抱いた「！」や「？」を文字にするという作業をした。視聴後のグループワークではそれらの「！」と「？」を交流し、そこからどのようなRQを立てることができるかを議論した。また、RQを立てた後にはそのRQに対する暫定的な答え（＝仮説）を用意する必要がある、その答えを調査や実験等で検証していく過程が研究であることも学んだ。

研究テーマとリサーチクエストの違い

研究テーマの例	リサーチクエストの例
・SNSについて ・SNSの普及について ・SNSの普及プロセスについて ・若者とSNSの関係について ・SNSの年代別の利用法について ・SNS利用の国際比較について	・どのようにしてTikTokは高校生に浸透したのか？ ・なぜ、高校生と40代では、SNSの利用方法が違うのか？ ・日米の高校生が投稿するTikTokには、どのような違いがあるのか？

良い研究（探究）はRQがシャープ！

38

大きすぎず、面白い問いを立ててみよう！



39

◆視聴した映画『ザ・トゥルー・コスト ～ファストファッション 真の代償～』について

2015年／アメリカ／93分／カラー。

この数十年、服の価格が低下する一方で、人や環境が支払う代償は劇的に上昇してきた。本作は、服を巡る知られざるストーリーに光を当て、「服に対して本当のコストを支払っているのは誰か？」という問題を提起する、ファッション業界の闇に焦点を当てたこれまでになかったドキュメンタリー映画だ(<https://unitedpeople.jp/truecost/about>より引用)。

5 受講生のリフレクションから（一部を抜粋）

- 前回の講義では「良い問いとはどういうものか」を学び、今回はそれを作るためのプロセスを学ぶことができた（中略）。これまでは一気に問いを立ててしまい、なかなか良い問いが立てられなかったが、今回の講義で段階的に問いを立てていく方法やその深め方を知ることができ、課題をデザインする能力が身に付いたように思う。
- 私は今回の講義を受講するまでリサーチクエスチョンや研究テーマは自分の身近にあることであり、自分自身の中から見つけ出そうとしていたけれど、疑問や違和感を見つけるためにはその分野に対するある程度の知識が必要だということがわかりました。また、リサーチクエスチョンや研究テーマを探す際、ヒントになるのは疑問や違和感だけでなく、“！”で表すことができるような驚きやひらめき、怒りや感動などの自分の感情も課題やテーマそのものの本質をもう一度見直すきっかけになるものだと思います。
- 日常生活で疑問がなかなか出てこないのですが、今日の映画を視聴して、疑問をもつことがなくなるのは今後ありえないことだと思います。今回だったら、そもそも映画を見るまで消費者が衣服を購入するまでに何人もの犠牲があり劣悪な環境があったことすら知らなかったもので、新しいことを知ることは大切で、この「スマートAP」に参加している意義を新たに認識することができました。
- 大きな問いから小さい具体的な問いを作ったらいいんだとわかり、これまでうまくいかなかった研究は問いが大きすぎて焦点を合わせられなかったただけだと気づき、ほっとした。いつもリサーチクエスチョンが決まらず、決まっても先生に「抽象的すぎる！」と却下されてしまうことが多かったので、今回教えていただいたことを生かしていきたい。
- 今回の講義では自分の捉え方が少し変化したように感じる。今日見た映画こそ、偶然出会っていたならば感情のままに受け取っていただろうが、疑問点や自分の反応に注目した上で見ると、映画のことを問題提起のタネの宝庫であると認識するようになった。要するに、五感で触れたものに対して自身の反応とリンクして落とし込むようになった。
- 問いを立て、自分の中で「仮説」を立て、もう一度問いを見直す。考えていく中で自分の考えをシャープにしていく。こういった行程を踏んで考えていくことの重要性を今回の講義で学ぶことができた。今回のレポートづくりに関わらず、さまざまな場面でアブダクションを活用していきたいと思う。
- 「研究」というものは誰かに「知」を伝えることが大切であると知って、これまでの社会がこんなにも成長したのも多くの人が研究して発表してきたからと思うととてもすばらしいと思った。
- チャットでみんなが考えたRQはあんまりかぶってなくて、同じ映画を見ただけなのにこんなにも違う視点があることを知っておもしろいと思った。
- 自分だけでは考えつかなかった問いをグループで交流することで知ることができて、本当に良い時間だったなと思います。

令和4年度第3回「スマートAP」

1 実施日時

令和4年6月5日（土）13:10～17:00

2 テーマ

「研究方法について ー量的研究と質的研究ー」

3 講師

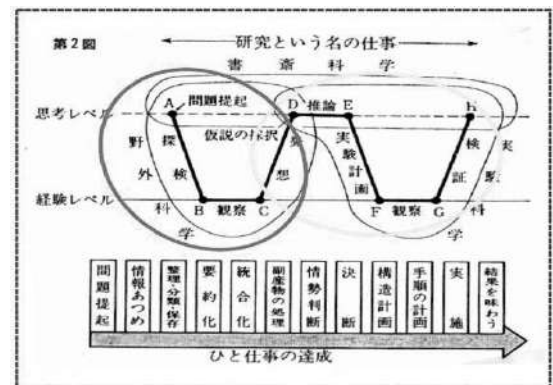
京都大学大学院工学研究科 教授 神吉 紀世子 氏

京都大学大学院工学研究科建築学専攻 修了生 高山 夏奈 氏

4 講義概要

本講義では研究の進め方を国内で初めて体系的に理論化された地理学者、文化人類学者の川喜田二郎氏の著書を紹介いただきながら、その基となる考え方と、収集した情報やデータのまとめ方などについて学んだ。

その後、神吉研究室修了生の高山氏から修士論文の研究概要について講義があり、量的研究と質的研究の特徴や違いについて理解を深めた。神吉教授と修了生の対談を通して、研究のもつ魅力やおもしろさに触れることもできた。



出典：川喜田二郎『発想法 創造性開発のために』（1966）

◆高山氏の修士論文「京都山科のスプロール市街地における位置指定道路の形成過程」の概要

- 地元山科のスプロール街路はどのような経緯で形成されたのか？
＝ 研究のスタート
- 複雑な街路網の欠点がわかっていてもスプロールせざるを得なかったプロセスがあるのではないか？
→ それを解明することで今後のまちづくりに生かせるヒントが得られるかもしれない。
＝ 研究の意義
- 住宅供給期以前の道路を基盤地図と旧土地台帳をもとに復元し、それらが住宅供給期においてどう変化したかを調査
＝ 研究の方法
→ 戦後農地改革による土地区画再編と住宅供給期における効率優先の宅地開発が複雑な街路構造の原因であることが判明
＝ 結論

5 受講生のリフレクションから（一部を抜粋）

- どんな研究においても、まずは以前にどのようなことが行われているのか（先行研究）を調べることが大切であるとわかりました。
- 探究活動でテーマや方向性がはっきりしていないと、その次の実験・調査が上手く進まないのだと感じ、その過程が最も大切で最も時間がかかるとわかったので、たくさん悩んで考えて、決めていこうと思いました。
- 論文の一つの例から研究を進めていく具体的な方法を知りました。自分が疑問に思ったこと（RQ）と今回の講義を比較しながら聞いていると、範囲を絞ることでイメージがしやすくなり結論が出やすくなるので、良い考え方を学べました。
- 論文の制作過程で最も時間がかかるのは仮説検証だと思っていたが、そうではなく、モヤモヤを疑問にすることだと初めて知った。
- 研究方法についてたくさん学びました。そして、仮説の大切さを知りました。私たちがこれから調べていくこと、悩んでいることを相談させていただいた時にとっても丁寧に返答してくださったり、論理立ててお話ししてくださったりして、とてもわかりやすかったです。
- 実際の研究を聞かせていただいて、都市開発や建築の学問ってすごくおもしろそうだなと思いました。もともと地図を眺めることは好きなので、新しい学問を知れて新鮮な気分です。
- とても大変なことがとてもたくさんあったはずなのにすごく楽しそうにお話しされているのが印象的で、私も楽しくできるようにしたいと思いました。
- 前半の講義の最後に「気付くためには少しだけでも手を動かすことが大事」とおっしゃっていて、それが今日学んだことの中で一番大きかった。後半の講義で、前回の講義で出ていたリサーチクエスションについて、どうすれば情報をよりよく収集できるかと質問をした時に、神吉先生が、自分の手の届くところに問いをもってくると考えやすいとおっしゃった。その考えが印象深く、自分も実行しようと思った。
- 実際の研究を聞いて何でもリサーチクエスションにできること、もやもやをリサーチクエスションに昇華させることの難しさを知りました。難しいことがそれをやらない理由にはならないと思うので、楽しみながらがんばっていこうと思います。

令和4年度第4回「スマートAP」

1 実施日時

令和4年7月16日（土）13:10～17:00

2 テーマ

“Team Work & Collaboration”

3 講師

Queensland University of Technology, Lecturer, Ms. Rebecca Axelson

4 講義概要

豪州・クイーンズランド工科大学とオンラインで接続し、全て英語による講義及びワークショップを行った。クイーンズランド工科大学には本講義専用のウェブサイトを作成してもらい、事前学習用のワークシートや講義のスライド資料等をダウンロードできるように配慮していただいた。これは受講者の不安を和らげ、学習に対するレディネスを高めるのに効果的であった。

前半の講義では、タックマンモデルに基づいたチームビルディングの手法と、機能的なチームに必要な条件について学んだ。後半の講義では、チーム内で起こりうる対立の種類とその解決方法について学んだ。2つの講義後に、各チームは **Desert Island Survival**（指定されたアイテムの中から無人島に持って行くアイテムを3つ決めるゲーム）に挑戦し、チームビルディングを実際に体験した。講義後には「**Desert Island Survival**を通して経験したことを、本日の講義で学んだことを踏まえて振り返る」というレポート課題が課され、全員がレポートを作成し提出した。

5 受講生のレポートから（一部抜粋） ※文法等の誤りについては、原文のままである。

- I was so surprised that there were so many roles in a team. There were positive roles such as Summarizer and Energizer, and there were also negative roles such as Blockers and Withdrawer. I had never been conscious of Team Roles, so next time when I work with people, I will try to do some positive roles.
- In team works, we can't avoid happening conflicts. I learned how to move, not to avoid conflicts but lead the conflicts to better direction.
- In team works, we can't avoid happening conflicts. I learned how to move, not to avoid conflicts but lead the conflicts to better direction.
- I think our team was able to demonstrate the good points of our team because each of the three items that our team members chose first were different. I think the difference is the team's greatest strength.
- I feel it's difficult to make the group successful. We have to work to achieve one thing. Some people don't think we must cooperate with each other. I would like to encourage those people with talking and doing what we have to do.
- I could know there are many style to communicate with, and saying my opinion is also important. In today, I was a summarizer but I want to be able to do all task roles, so I want to communicate with and discuss with others more.
- I want to work as a team without forgetting that “the difference is the greatest power of the team” that I realized in the lecture.
- I will never forget the words “proactive people plus planned process equal a successful team.” Listening this words, I think this formula is extremely significant.
- I was interested in role of Tension Reliever. When we thinking, we are into it. So, tension Reliever is important role. I want to play this role, when I conversation in a team.

令和4年度第5回「スマートAP」

1 実施日時

令和4年7月30日（土）10:30～15:10

2 テーマ

「論理的・批判的に考える ―議論の説得力を高めるために―」

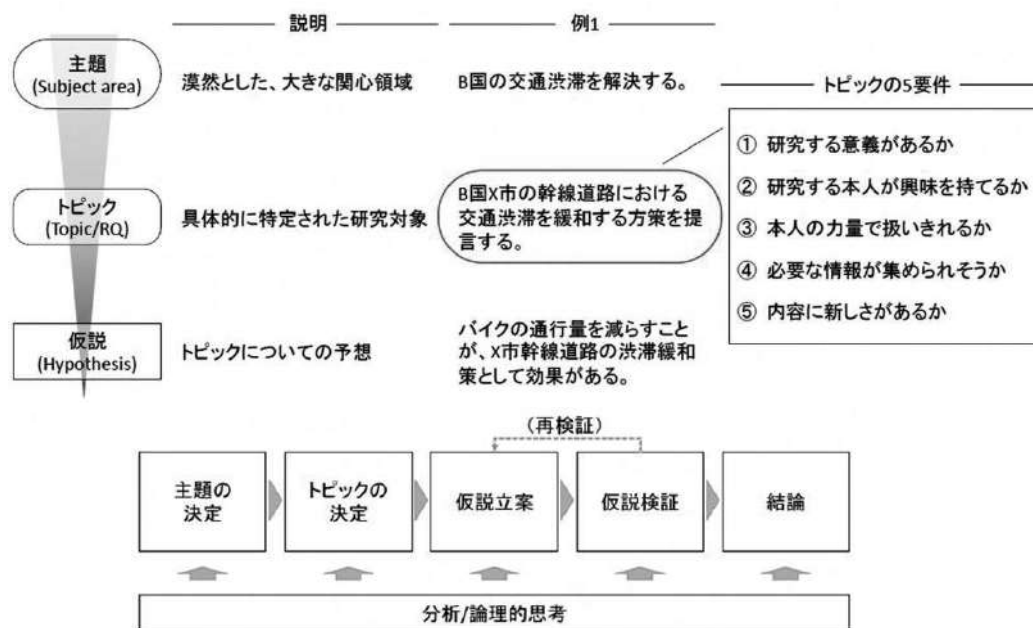
3 講師

大阪大学全学教育推進機構 准教授 柿澤 寿信 氏

4 講義概要

本講義では、研究発表が備えるべき基本的要件を確認した後、研究発表で説得力のある議論を行うためにはどのようなことに気を付ける必要があるかを学んだ。

議論とは〈前提〉と〈結論〉から構成されるものであり、両者が論理的につながってはじめて説得力のある議論を行うことが可能になること。〈前提〉と〈結論〉のつながりには、①「類推」、②「帰納的な議論」、③「原因と結果」、④「理由と主張」、などいくつかの異なるパターンがあること。それらのパターンを意識することによって自身の研究発表をよりよく組み立てることができ、他人の議論の説得力を判断する目も養うことができること。これらのことを、さまざまな実例とグループワークを通して実践的に学んだ。



5 受講生のリフレクションから（一部を抜粋）

- 前提と結論はつなげるものだ学びました。もとは別物の2つを理論と思考で結びつけるためその間には綻びが生じやすいことに気付き、自分が発表する時には気を付けて、誰かの発表を聞く時には質疑に用いたりして、より深みのある充実したものになるよう活用したいと思います。
- いくつかの課題文から前提や結論を抜き出す作業を通して、いかに順序だった説明が大切かということを知り、これからたくさんの場面で活用していきたいと思った。また、今まで私は物事を深く考えずにそのまま飲み込んでしまう癖があったのですが、それが少し改善したように感じます。

- さまざまな課題文を客観的に見て、本当にその考え方は合っているのか批判的に捉える練習ができました。この客観的・批判的な考え方を自分のRQにも活かして、自分はこう思っているけど他の人はどう思っているのかと、自分の考えを貫き通すのではなく、一度疑ってみることが大事だと思いました。
- 僕は論理的に文章を構築することが苦手で、文章が完成したあとに自分の文章を客観的に見るとつながりがないことが多い。今回の講義の中で取り上げられた実際の論文と自分の文章を比較すると似ている点が多くて、自分の文章を見ているようだった。だが、自分の文章を客観的に見て、わかりやすい文章に改善していくための良い機会になったと思う。
- 高校生によって書かれた文章を読んでその議論の問題点について話し合う活動を通して、これまでの自分のレポートなども資料やデータのような理由づけが不足していて説得力に欠けていたのではないかと思った。
- 今回の講義では、論理性を高めて説得力をつけるための視点を学ぶことができた。研究結果を確実なものにするために、研究対象の規模を考慮したり対照実験によって性質が正確であることを示したりと、さまざまな観点で考えることが必要だと理解した。
- 自分の研究発表において説得力を高めるだけでなく、他人の研究発表を聞く時にも聞き方が変わるだろうと思った（中略）。1つの発表を聞くにも聞く角度が増え、切り込み方も視野も広がったように思います。
- 単に物事に対して批判的に考えるのでは伝わらないことが多くあるが、論理的に考えた上で批判すると伝わりやすいのだと気付いた。（中略）物事を批判的に考えることが苦手な私は、「ちょっとおかしいな」と思ってもうまく伝えられずに言いくるめられて終わる、ということが多くあったのですが、今回の講義を受けてみて、どう伝えることができれば納得してもらえるか知ることができた。
- 「批判的に考える」ことのイメージに関して、これまでテレビや発表会などで粗探しと批判が混在していた印象があり、「批判」に対する批判的な態度をもっていたが、批判的な考えが発表の論理性を向上させるために重要な役割を果たすという本質のもとでは、今一度、批判について真剣に取り組み、練度を上げることが必要だと感じた。

令和4年度第6回「スマートAP」

1 実施日時

令和4年8月20日（土）10:30～15:10

2 テーマ

「チームでプチ課題研究！ ―研究計画書を作ろう―」

3 講師

京都橘大学経済学部 准教授 乾 明紀 氏

4 講義概要

本講義では、第2回講義時に視聴した映画での気づきから各自がこれまでに考えたRQを持ち寄り、チームとしてのRQを作るという活動を行った。この講義に先立って受講生には、研究の前半にあたる部分（RQの設定から仮説構築の見通しまで）を個人レポートにまとめるという課題が与えられていた。グループワークではそれぞれのレポートをチーム内で読み合い、問題意識を共有した上でチームとしてのRQを検討した。その後、研究の動機・意義と仮説構築の見通しを含む（チームとしての）研究計画書を作成し、各グループが発表した。

講義では第2回で学んだ研究のプロセスを再確認するとともに、チーム研究（探究）は個の力の結集が引き起こす化学反応により個人研究（探究）よりも質の高い結果を得られる可能性があることや、チームでRQを立てる際に留意すべきことなどについて学んだ。



◆チームとしての研究計画書（様式）

各チームが考えたリサーチエスチョン発表 （紙に書く場合は太くて濃い文字で！）

①リサーチエスチョン	②自分たちが取り組みたい 動機・理由
チーム名 全員の名前	
③このRQを探究する社会的意義 （社会的背景・社会的な動機・目的など）	④仮説構築のための方法

※情報量が多くなった場合は、2枚に分けてもOKです
発表時間は3分程度

45

◆生徒が作成した研究計画書の一例

①RQ 寄付する衣服の 価値を最大限にするには 4班	②動機 善意→悪影響
③RQに対する社会的意義 衣服のムダを省く 現地の産業に支障を 与えない 洋服屋に与える影響を	④仮説構築のための方法 募集法を変える 寄付したい服の欠点を調べる

5 受講生のリフレクションから（一部を抜粋）

- 今回の講義でレポートの作り方を学んだ。今まで何気なく書いていたけど、本題を取り上げ、RQを書いて…という順序通りに書くとなんかまとまった。これからのレポート作成に活かしていきたい。また、他のメンバーのレポートを読むことはとてもおもしろかった。自分と違う視点で見ている意見は自分の新しい意見を広げていくきっかけになると思う。
- 今までの「スマートAP」で学んできたことを実践することができました。グループで良いリサーチクエスチョンを考えるために個人で考えてきたリサーチクエスチョンに対して意見を言い合ったり、お互いに評価し合ったりしてグループ内でたくさんコミュニケーションをとることができて、とても楽しかったです。
- 今まではインプットが多かったが、今回は今までに学んだことをアウトプットさせる感じだったが、インプットの時だけでは知らなかったことを知ることができたし、「こうやったらうまく進められる」とか「こうしたらわかりやすい」など、実践を通して考え方が進化した気がする。また、「個人で」ではなく「チームで」RQを考えるのは初めてだったけど、「チームで」やる時にやっぱり「個人」がとても大切なんだと改めて感じた。
- これまでRQは自分一人で考えるのが自分の意見のとおりになるから楽だと思ったこともあったが、班の人たちと共有することで客観的に考えられるようになることがわかった。RQ1つ立てるのにも、考えていくうちに根本からRQが変わったり、丁寧にすればするほど精度の高いRQができていくのがおもしろかった。
- ありきたりな意見は誰にでもできますが、社会的な利益もあり、ある一定のターゲットもあり、そしてまだ世に出されていない案という意見はなかなかなくて、そういった面を考慮しながら意見を出すのは難しく、やはり一人では意見が出しづらかったです。ですが、グループのみんなと意見を出し合うことによって自分と違う視点での意見がたくさん出てくるので、それを掛け合わせると良い案というものが出てきました。一人で考えることも大切ですが、意見を考える時に詰まった時は他の人と意見と交流することの重要性を改めて認識しました。
- 画面共有しながら話す時にマッピングがとても役に立った。マッピングはなぜその意見に至ったのかや共通点を簡単に見ることができるので、自分の探究活動に活かしたい。また、マッピングを見ながら話し合いを進めることで、別の人意見からさらに派生して自分の新たな気づきになった。自分だけで考えても気づけなかった部分がグループワークによって気づけたことはグループ探究のメリットだと感じた。
- グループで短時間で話をまとめるために、意見を出すだけでなく、お互いの意見の共通点を見つけて擦り合わせることが大事だと気づきました。また、意見をまとめてくれたり、一つ一つ丁寧に確認してくれたりする人がいたおかげでスムーズに進められたので、自分もそういう面で気付いて、他の人のサポートにまわることができるようにしたいです。

令和4年度第7回「スマートAP」

1 実施日時

令和4年9月17日（土）13:10～17:00

2 テーマ

「プレゼンテーションの技法 ―聞き手に火をつけるプレゼン術―」

3 講師

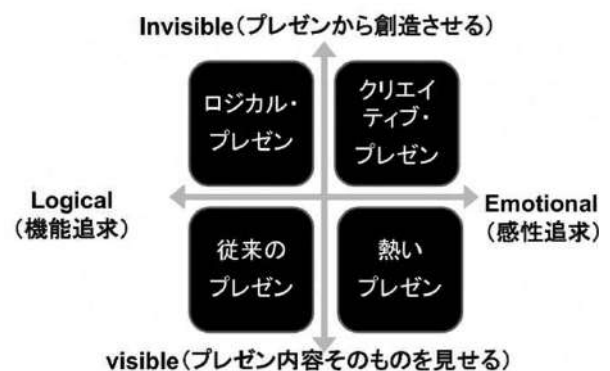
福知山公立大学地域経営学部 准教授 杉岡 秀紀 氏

4 講義概要

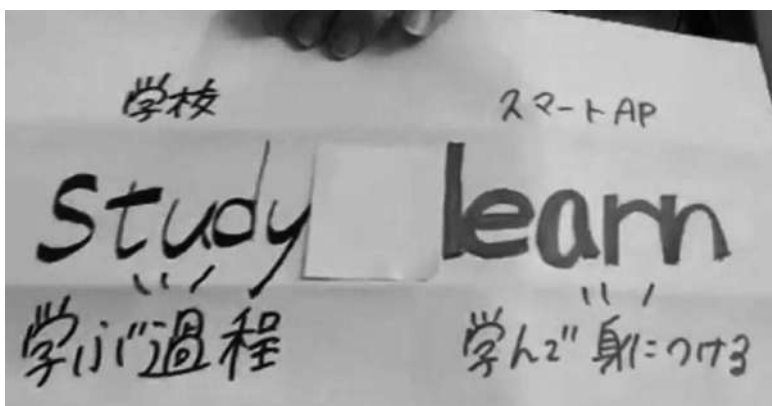
最終回となる本講義では、これまでの学びの集大成として、学んだことをどうすればうまく相手に伝えられるかについて学習した。冒頭で「伝える」と「伝わる」は似て非なるものであるとの話があった。「伝える」の主体は話し手だが、「伝わる」と言うと聞き手が主体になる。すなわちプレゼンテーションの主役は話し手ではなく聞き手である。このことを押さえた上で、聞き手に伝わるように（＝聞き手の考えや行動に変容が生じるように）伝えることがプレゼンテーションであり、聞き手を意識すれば言葉の選び方も話し方もスライドの作り方もおのずと相手に応じて変わっていくということを学んだ。

また、優れたプレゼンテーションといっても論理的で説得力のあるものや、クリエイティブで感性を刺激するもの、情熱的で感情に訴えるものなど、いくつかのタイプに分かれるので、自分が上手だと思う人のプレゼンテーションを観察し真似ることによって自分なりのタイプを作っていくのがよいという話もあった。

最後に「来年度『スマートAP』を受講する後輩たちに『スマートAP』の魅力が伝わるように伝えてください」という課題が出され、グループワークの後、各グループがプレゼンテーションを行った。



◆最後のグループワークにおけるプレゼンテーションのようす



5 受講生のリフレクションから

- 「スマートAP」最後の講義ということで、これまでの講義から学んで作り上げたものを発表するための重要な技法やプレゼンテーションの意識を身に付けられたと思います。プレゼンにかぎらず、コミュニケーションにおいても必要な知識、心がけを学ぶことができ、受講したことによって自分のスキルアップの可能性を見いだせました。
- 今回の講義を通してプレゼンテーションとは何のために、また誰のためにするのかということを改めて考えさせられました。プレゼンテーションの主役はあくまで聞き手であり、私たち（プレゼンター）が聞き手を引きつけられるようなプレゼンテーションをしなければならないと思いました。
- プレゼンや人前に立って発表することが好きだが、どうやって話せばよいかかわからず、グダグダになってしまったことが多かった。「主役は聞き手」という言葉を今後ずっと意識していきたいし、何より先生のプレゼン（講義）が上手すぎて、本物を見れた！という感じがして、私も先生のように飽きさせない話し方できるよう今回のことを活かしていきたい。
- どれだけ良い探究活動をしていても、その発信のしかたが良くなければその活動はなかったことになってしまうのではないかと気づき、発表、プレゼンテーションまでが活動の1つであるのだなど、プレゼンテーションの重要性についてその意識が大きく変わった。
- 準備が9割、そして「勝ちに意味がなくても負けには意味がある」という言葉にとてもハッとさせられた。その理由は（中略）自分のことに当てはまったからだ。これは大学受験にもすごく言えることだと思った。だからこそ、準備がとても大切という内容にとても共感した。
- 今回学ぶことができたプレゼンでのスキルは今まで自分の発表では使われていなかったスキルばかりだった。特に話し方の抑揚や話している時の間は今まで使っていなかったスキルであったし、自分の発表を向上させるものとなった。また、「聞き手」をメインにして考えることも自分の発表を向上させる良いものとなった。
- 逃げられないプレゼンテーションを得意にする秘法がたくさんありました。きっと何を考えているかわからない、評価する聞き手がいるからだと思いました。ですが、聞き手を自分のプレゼンテーションで動かしてなんぼのもん、ということを知れたので、あまり怖じ気づかずに済みそうです。毎回のことですが、社会に出て必ず必要とされる力を学ぶことができて本当に嬉しかったです。本当に本当にありがとうございました。
- 全講義を受けて体験したこの時間は大きく自分の世界観を変えることになりました。グループ内での交流の中で考えを共有し、視点を変えるコツや表現のレベルと説得力を高める方法を享受して、多くのことを学んだおかげで僕はハイレベルな探究者に近づくことができたと感じています。

ウ 総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅰ」（１年・１単位）

１ ねらい

拠点校グローバル科１年生対象の総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅰ」では、「京の智」を再発見・発信する過程において、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に探究学習を行い、価値再認識力を高め、課題発見能力・課題分析能力を向上させる。また、事業協働機関を中心とした外部講師による講義及びワークショップや、フィールドワークをとおして、探究学習を効果的に進める基本的な研究手法（＝「作法」）を獲得し、協働的に学ぶ姿勢を獲得する。

地域社会を知ることとは民主主義の基本で、「課題研究＝主権者教育」であるとの認識のもと、次の目標を掲げた。

- ① 対話をとおして「京の智」を再発見し、自己の変容を理解し、他者の気づきを促す。
- ② ソーシャル・イノベーションの主体者として地域を知り、ローカルな課題を発見（現状探究）し、グローバルな課題意識を形成する。
- ③ イノベーション探究Ⅰでは次の資質・能力を育む。
 - ・ 歴史をとおして世界を俯瞰する力
 - ・ 多様な文化的背景を持つ人々と協働する力
 - ・ 科学的に思考・吟味する力
 - ・ 新たな価値を創造する力
 - ・ 課題解決の枠組みをデザインする力
 - ・ 困難な状況を突破する力

２ 概要（実践）

（１）年間計画

「教育＝ひとづくり」、「産業＝ものづくり」、「文化財＝かちづくり」を「地域創造＝まちづくり」ととらえて、「まちづくりの切り口・視点」から、個人の興味・関心に応じて、地域の社会的課題に切り込み、個人のフィールドワークを経てチーム研究へと進む。各段階で「研究テーマ設定シート」・「研究計画書」・「研究スライド」の各様式にしたがって研究を進めることで、研究手法を身に付ける。令和４年度の年間計画は表－１のとおりである。

（２）実践内容

各回の具体的な活動・指導内容については、pp. 84-98 のとおりである。

（３）評価の方法

「京の智」の再発見をとおした課題の発見と解決に向けて、主体的・協働的に探究学習を行ったプロセスを、「研究テーマ設定シート」や「研究計画書」等で指導者が評価したほか、「研究スライド」を用いた校内課題研究成果報告会においては、「評価票」（表－２）を用いて生徒相互評価及び自己評価、最終的な指導者による評価を行った。なお、令和４年度の研究テーマについては、表－３のとおりである。

表ー1 令和4年度「イノベーション探究Ⅰ」～地域再発見プログラム～ 年間概要

学期	回	月日	内容	T A	海外研修	教科横断	連携
1 学 期	第1回	4月14日	ガイダンス・昨年度のモデル提示		中止	グ ロ ー ケ ー バ シ ル ・ コ ミ ュ	高大 高大
	第2回	4月21日	問いを立てる				
	第3回	4月28日	問いを立てる				
	第4回	5月12日	神吉先生講演				
			神吉先生講演				
	第5回	6月2日	進路とのつながりがある興味・関心を共有して 研究分野を決定				
	第6回	6月9日	研究分野に関するブレインストーミングと意見 交換をして研究テーマを決定				
	第7回	6月16日	研究テーマにおいて、問いを立て課題を発見し て仮のリサーチクエストを決定			グ ロ ー ズ ・ バ シ ル ・ シ ッ ・ プ テ イ	高大 高大
	第8回	6月24日	乾先生講演				
			乾先生講演				
	第9回	7月7日	リサーチクエストを確定させる				
	第10回	7月14日	リサーチクエストを確定させる				
	夏休み		調査を実施する				
2 学 期	第11回	9月1日	調査内容と方法を決める			ソ ー シ ヤ ル ・ イ ン テ リ ジ ェ ン ス	高大 高大
	第12回	9月15日	調査内容と方法を決める				
	第13回	9月22日	調査内容と方法を決める				
	第14回	9月29日	研究計画を発表するためのリハーサル				
	第15回	10月6日	研究計画を発表する	○			
	第16回	10月20日	杉岡先生講演				
		10月20日	杉岡先生講演				
	第17回	11月10日	調査を実施し、研究報告書にまとめる				
	第18回	11月17日	調査を実施し、研究報告書にまとめる				
	第19回	11月24日	調査を実施し、研究報告書にまとめる				
	第20回	12月8日	調査を実施し、研究報告書にまとめる				
	第21回	12月15日	研究報告書の1、2、3の提出 スライドを作成するための基礎知識				
3 学 期	第22回	1月12日	研究報告書の1、2、3の改善 研究報告書の4、5、6の提出 スライドを作成する	○			高大
	第23回	1月19日	研究報告書の4、5、6の改善 スライドを作成する	○			
	第24回	2月2日	各クラス2班の代表班を決定				
	第25回	2月4日 2・3限		○			
	第26回	2月9日	1年間の振り返り				
	第27回	2月20日	1年間の振り返り				
	第28回	3月2日	1年間の振り返り・アンケート				

※T A・・・ティーチング・アシスタント

表ー2 「イノベーション探究Ⅰ」探究成果発表会ルーブリック

()組()班		発見力		分析力・調査力		表現力	
		研究の動機・課題の背景	リサーチクエスション(RQ)	研究方法	結論	口頭発表用スライド資料	発表
評価基準	A:完璧 (Great)	「京の智」に関する課題意識のもと、探究テーマを設定し、社会的意義が明らかである。	研究テーマについて、課題を分析・調査するために、具体的にオリジナリティのある問い(RQ)を立てている。	RQを明らかにするための十分な調査・分析方法が立案できている。	RQについての考察が、調査結果から矛盾なくできている。展望も示されている。	構成が論理的であり、適切な場面で図・表を用いている。	オーディエンスの方を向いて自分の言葉で発表できる。
	B:合格 (Good)	「京の智」に関する課題意識のもと、探究テーマを設定している。	研究テーマについて、課題を分析・調査するために、具体的な問い(RQ)を立てている。	RQを明らかにするための調査・分析方法を立案できている。	RQについての考察が、調査結果から矛盾なくできている。	構成は論理的であるが、図・表を用いることが適切な場面でも、文章で説明をしている。	オーディエンスの方を向いて発表しているが、原稿を暗唱しているようである。
	C:がんばろう (Needs Work)	探究テーマが「京の智」に関するものとして捉えられていない。	研究テーマについて、課題を分析・調査するための具体的な問い(RQ)を立てられていない。	RQを明らかにするための調査・分析方法が立案できていない。	RQについての考察と調査結果の因果関係が不明である。	スライドの因果関係が不明瞭な資料である。	原稿を読みながら発表をしている。
	評価記入欄 A~C	よりよい研究にするための方策または質問					

表ー3 令和4年度「イノベーション探究Ⅰ」研究テーマ一覧

チーム	テーマ
1	桂駐屯地の地域貢献と私たちができる広報活動～キャラクター作成によるイメージ改革～
2	馬が守る京都の平和～警察の広報活動を考える～
3	京都と観光業の関係～ゴミ問題から考えるこれからの京都と外国人観光客～
4	絶滅危惧種の保全のためにできること～オオサンショウウオとの共存を目指して～
5	授業と睡眠についての考察～いねむりをしない授業を求めて～
6	京都の魅力を活かしたツアープランづくり～若者が京都での観光で求めることとは～
7	京都に理想の遊園地を～私たち学生の願い～
8	経済破綻の危機にある京都を救う新たな観光のかたち～インスタ映えというウェポン～
9	京都の和菓子を若者に伝承していくための2つの方法
10	京都から助けるスケートボードの進化～あるものを利用して騒音・練習場不足を解消～
11	和菓子離れを進めないための策～new和菓子誕生の秘訣～
12	嵐山の日本人向け・新定番お土産を開発する～株式会社渡月橋さんの話を聞いて～
13	本来の抹茶を海外に伝えるためには～歴史・健康効果・日本での工夫から本来の抹茶を海外に伝える方法について～
14	和菓子のお土産が多い京都で売れるパッケージの提案～若い人向けのデザインとは～
15	消えかけている京ことばを現代に継承していくには～「京ことばの会」の活動をもとに～
16	六孫王神社を有名にするには～京都にある人気の神社との違いを踏まえて～
17	お漬物を嫌いな人でも食べられるには～新しい2つの提案～
18	京都が繋げる明るい未来～ゴミに対する新しいアイデア～
19	出荷出来ない賀茂トマトの活用方法～SDGsを大前提としてつくられる最先端トマト～
20	家庭でフルーツ大福をつくる！～長「モチ」の秘訣～

「イノベーション探究Ⅰ」～地域再発見プログラム～

担当教諭 6組 ミューリニコラス 矢野和久
7組 戸田雄一郎 佐々木啓成

【第1回】

1 実施日

令和4年4月14日（木）6限

2 場所

講堂（2クラス合同実施）

3 内容

- (1) 担当者自己紹介（1人3分程度）
- (2) 鳥羽高校課題研究の流れ〔佐々木〕（2分）
イノベーション探究Ⅰからイノベーション探究Ⅲまでの全体像を説明
 - 1年生は地域発見プログラムとして「京の智の再発見」をテーマに探究活動を行う。
 - 2年生はグローバル・ジャスティスプログラムとして「グローバル・イシュー」をテーマに探究活動を行う。
 - 3年生は、2年生の探究の成果を英語で発信する。
- (3) 探究で身に付く汎用的能力〔佐々木〕（2分）
課題設定力・情報収集力・分析力・提案力・主体性などが身に付くことを伝える。
- (4) 昨年度のイノベーション探究Ⅰの優秀研究のプレゼンテーション〔中村〕（15分程度）
- (5) 自己開示と他者理解をテーマにしたアイスブレイク
 - 3つ選んで自己紹介（7分程度）
「趣味」、「マイブーム」、「中学校で頑張ったこと」、「レアな体験」、「マジでやばかった」、「おすすめのお店」、「将来の夢」などのテーマの中から聞き手が3つ選び、話し手はそれについて自己紹介をする。
 - 妄想自己紹介（7分程度）
「タイムマシーンで行ってみたいところは?」、「宝くじで5億円が当たったら?」などのお題について話し合う。

4 学び

- (1) 鳥羽高校グローバル科の課題研究の全体像を理解する。
- (2) 探究で身に付く汎用的能力について学ぶ。
- (3) 昨年度の優秀研究プレゼンを見ることで、イノベーション探究Ⅰのゴールを確認する。
- (4) 自己開示と他者理解の大切さを学ぶ。

5 次回への課題

今回はガイダンスとアイスブレイクなので、課題は特になし。

6 授業の振り返り

ガイダンスでは、各担当者が自己紹介とともに、これまでの探究指導経験に基づいた話をし、探究活動の大切さや、適切な心構え等について熱心に耳を傾けていた。また、昨年度の優秀研究を紹介し、イノベーション探究Ⅰのゴールを確認した。自己開示と他者理解をテーマとしたアイスブレイクでは、グループで笑顔が溢れ、仲間と積極的に話そうとする姿が見られた。

【第2回】

1 実施日

令和4年4月21日（木）6限

2 場所

HR教室（331教室・332教室）

3 内容

（1）探究マインドについて

探究活動には「教えてもらう・させられる」という受動マインドからの脱却が必要である。
自分の意見を出し、他者の意見も聞き、協働してゴールに向かうことが探究マインドである。

（2）探究活動の流れ

1. 研究テーマを決定する 2. 問いを立てる [リサーチクエスト]
3. リサーチクエストを解明するための調査内容を決定する
4. 調査方法を決定する 5. 調査を実施する 6. 結論を考察し、まとめる
7. 研究内容を発表する

（3）問いを立てる

信号機の写真を見せて、できるだけ多くの問いを立てる。

※必ず全員が発言する。他者の意見を評価しない。答えを出さない。

○なぜ、青・黄・赤なのか？

○なぜ、青・黄・赤の順番なのか？

（4）問いの深まり・課題の発見

○もっと見やすい色はないのか？

○信号機ではない仕組みはないのか？

（5）グループ発表

4 学び

- （1）探究活動で必要となる思考や態度について学ぶ。
- （2）探究活動の流れを理解する。
- （3）あるテーマから問いを立てる体験をする。
- （4）立てた問いを深めて、課題の発見をする。

5 次回への課題

ワークシートの中で、「問いを立てる」活動で使用するメモ欄と「課題の発見」活動で使用するメモ欄をそれぞれ縦に配置したが、両者の関連を明確にするには、横並びで配置すべきであった。

6 授業の振り返り

「問いを立てる」活動では、グループ内で活発に問いのアイデアが出た。第2回目の授業ではあったが、グループ内での役割分担（司会、書記、発表者）を決めたのもうまく機能したし、全員が発言するや、他者の意見を評価しないなどのルール設定をしたのもよかった。グループで出し合った問いをさらに深掘りし、課題の発見をする活動でも、多角的な視点から問いを作ることができた。

【第3回】

1 実施日

令和4年4月28日（木）6限

2 場所

HR教室（331教室・332教室）

3 内容

- （1）クリエイティブ力と分析力を高める

「信号機にもう1つライトを増やすなら、どのような目的に利用するのか？」について考えることでクリエイティブ力を高める。また、「もう1つライトを増やすことで、どのような利点や課題が生じるのか？」について考えることで分析力を高める。

(2) 提案力を高める

「あなたならどんな信号機を提案しますか？」というテーマについて、グループで議論し新しい信号機を提案する。

(3) グループ発表

新しい信号のイラストを提示しながら、全体発表を行う。

※生徒は手帳に必要なメモをとる。グループ内で司会、書記、発表の役割を決める。

4 学び

(1) クリエイティブ力と分析力を高める。

(2) 提案力を高める。

(3) 聞き手に伝わるように工夫した発表ができる。

5 次回への課題

活動前にクリエイティブ力で生み出したアイデアを紹介した。例えば、男性用の便器にシールを貼ることで便器周りが汚れにくくなるというようなアイデアを紹介したが、生徒が驚くような身の回りにあるアイデアをもっとたくさん紹介できたらよかった。

6 授業の振り返り

「信号機にもう1つライトを増やすなら、どのような目的に利用するのか？」では、ライトではなくプロジェクターにして、例えば山の風景を映してはどうかなど、かなりユニークなアイデアが出た。

また、「あなたならどんな信号機を提案しますか？」では、従来の信号機の形ではなく、地面に埋め込まれた信号機を提案するなど、当たり前にとらわれないクリエイティブな発想で議論していた。前回のテーマである「問いを立てる」と今回の授業とのつながりのある授業展開は、生徒たちの多角的な思考を促せたと思う。

【第4回】

1 実施日

令和4年5月12日（木）5，6限

2 場所

1棟多目的教室（北・南）

3 内容

講演：「課題研究」と「まちづくり」の間を考える

講師： 京都大学大学院工学研究科 神吉紀世子 教授

(1) 「課題研究」とは？「まちづくり」とは？について考える。

(2) 「まちづくりそのものだと思うワード」と「少しはまちづくりに関係があるワード」について、4人グループで意見を共有する。

(3) まちづくり研究の今昔を学ぶ。

(4) 「課題研究」の進め方を学ぶ。アプローチ方法と着地点の決定を学ぶ。

(5) 「まちづくり」の「課題研究」に対するアプローチ方法と着地点について学ぶ。

(6) 京都市内の「コミュニティ」と「まちづくり」の関係性について学ぶ。

4 学び

(1) 「まちづくり」と一言言っても人によって多様な捉え方があることを学んだ。

(2) 「課題研究」と「まちづくり」についての概念を学ぶ中で、どのような落とし込みをすれば上手くまとめられるかを学んだ。

5 次回への課題

今後研究テーマを決定することになるが、狭い視野で考えるのではなく、他の生徒とのディスカッションを活発に行って、多角的に考えることが必要である。

6 授業の振り返り

まちづくりに深く関連のあるものと、関連が薄いものとのグループ内で出し合う活動では、一人ひとりが付箋紙にアイデアを出しながら、活発なディスカッションができていた。グループの意見を全体で発表するときには、挙手をして積極的に発言する姿が見られた。この講義で得たことをこれから本格化するグループ研究に活かしてほしい。

【第5回】

1 実施日

令和4年6月2日（木）6限

2 場所

HR教室（331教室・332教室）

3 内容

- （1）研究チームで着席させ、パワーポイントスライドを使用して本日の内容について説明する。
 - ・担任が研究チームを事前に発表しておく。
 - ・研究チームはクラスの間人関係を考慮して担任が決定する。
- （2）「進路とのつながりにおける自分の興味・関心」についてスピーチをする。
自宅課題として、「進路とのつながりにおける自分の興味・関心について」をテーマにマンドラートを作成させ、それをういて4人グループで1人3分間のスピーチをする。
- （3）発表者のスピーチが終われば、グループ内で聞き手が順番に質問をする。
2分間の質問時間を設け、その時間内で質疑応答を繰り返す。
※（2）と（3）を4回行う。欠席者のいるグループはさらに質問時間を設ける。
- （4）それぞれのスピーチを参考にしながら、研究分野を決める。
研究分野とは、教育、環境、食品などのことを指す。
- （5）マンドラートに決定した研究分野を記入して提出する。
次回用の事前課題を配布して説明する。

4 学び

- （1）スピーチ力と聞く力を高める。
- （2）質問力を高める。
- （3）ディスカッションを通じて、目的を達成できるチームワークを育てる。

5 次回への課題

マンドラートを使用しながら、自分の興味関心についてスピーチをしたが、マンドラートに書いたキーワードを述べているだけのスピーチも見られたので、途中で説明の質を高める指示をした。

6 授業の振り返り

1人3分のスピーチでは、マンドラートを使用しながら、3分間、スピーチし続けることができていた。聞き手もメモをとりながら真剣に聞くことができ、質疑応答も活発に活動できていた。研究分野の決定では、食、ものづくり、和菓子、環境、国際など研究分野も多岐にわたっていた。

【第6回】

1 実施日

令和4年6月9日（木）6限

2 場所

HR教室（331 教室・332 教室）

3 内容

- (1) パワーポイントスライドを使用して本日の内容について説明する。
- (2) 「決定した研究分野×京都」についてスピーチをする。
自宅課題として、「決定した研究分野×京都」をテーマにマンダラートを作成させ、それを用いて4人グループで1人3分のスピーチをする。
- (3) 発表者のスピーチが終われば、グループ内で聞き手が順番に質問をする。
2分間の質問時間を設け、その時間内で質疑応答を繰り返す。
※(2)と(3)を4回行う。欠席者のいるグループはさらに質問時間を設ける。
- (4) それぞれのスピーチを参考にしながら、「京都」とつなげた研究テーマを決める。
参考資料として昨年度のイノベーションIの研究テーマを配布する。
- (5) マンダラートに決定した研究テーマを記入して提出する。
次回用の事前課題を配布して説明する。

4 学び

- (1) スピーチ力と聞く力を高める。
- (2) 質問力を高める。
- (3) ディスカッションを通じて、目的を達成できるチームワークを育てる。

5 次回への課題

「研究分野」に「京都」というキーワードを関連付けるのが難しいようであった。

6 授業の振り返り

「研究分野」に「京都」というキーワードを関連付けるのが難しいようであったし、「京都＝和食」のイメージがあるから「食」に偏った議論が多くなった。「×京都」を考えさせるときには、京都の背景知識についての指導が必要かもしれない。生徒達は活発に議論していた。

【第7回】

1 実施日

令和4年6月16日（木）6限

2 場所

HR教室（331 教室・332 教室）

3 内容

- (1) 前回考えた研究テーマに対する教員のフィードバックを受け取る。
- (2) フィードバックを受けて、再度、研究テーマを決める。
- (3) 研究テーマの設定に対して教員の許可が出れば、リサーチクエスチョンを考えるための用紙を受け取り、グループで意見交換を行う。

4 学び

ディスカッションを通じて、目的を達成できるチームワークを育てる。

5 次回への課題

研究テーマ自体が、広範囲に及び絞り切れていない、高校生が扱えるものではないなどの課題が見られた。

6 授業の振り返り

研究テーマとしては絞り切れていないものが散見されていたので、教員によるフィードバックを行

った。生徒たちはそのフィードバックを見ながら、再度議論を進め、前回よりはかなり絞れた研究テーマに行き着くことができた。リサーチクエスションの検討に進んでいる班も複数あった。

【第8回】

1 実施日

令和4年6月24日（金）5，6限

2 場所

1棟多目的教室（北・南）

3 内容

講演：「チーム探究のキモ！—シェアドリーダーとリサーチクエスション—」

講師： 京都橘大学経済学部 乾明紀 准教授

（1） チーム探究とリーダーシップ

- ・ チーム探究を行うために必要な「シェアド・リーダーシップ」とは何かを学ぶ。
- ・ シェアド・リーダーシップ開発ワーク「砂漠で遭難したら？」

（2） 探究（研究）の過程を理解する

- ・ 探究には（1）問う過程、（2）答える過程、（3）まとめる過程がある。
- ・ 研究過程図を用いて探究（研究）の流れを学ぶ。

（3） リサーチクエスションに関するアドバイス

- ・ 「テーマ」と「リサーチクエスション」の違いを学ぶ。
- ・ テーマからリサーチクエスションを考えてみる。
- ・ 優れた研究の3要素とは、「新規性」、「信頼性」、「有効性」
- ・ 個人探究とチーム探究の違いについて学ぶ。

4 学び

- （1） チーム探究とは、チーム（目指すべき共通の目標を有し、その達成のために必要な活動に従事している集団）として、探究活動を行うこと。そのためには、シェアド・リーダーシップを発揮することが重要である。
- （2） リサーチクエスションの設定では、自分が研究できるレベルに問題をブレイクダウンしていくことが重要である。
- （3） 視点・切り口は、他者や社会の目を自分に取り込むことで面白いものになる。

5 次回への課題

設定した研究テーマから質の高い多様な問いを設定できるのかを次の授業で丁寧に観察しながら、ファシリテートする必要がある。

6 授業の振り返り

シェアド・リーダーシップ開発ワークである「砂漠で遭難したら？」では、楽しそうに活動しながら、シェアド・リーダーシップの意識を持って活発な議論ができていた。テーマからリサーチクエスションを考えるワークでは個人によって、進度に差が出ていたので、その課題を念頭に置いて今後の指導を考えていきたい。

【第9回】

1 実施日

令和4年7月7日（木）6限

2 場所

HR教室（331教室・332教室）

3 内容

- (1) パワーポイントスライドを使用して本日の内容について説明する。
- (2) ハンドアウトを用いて、「問い」と「課題の発見」をグループで考える。
- (3) 考えたいいくつかの「課題の発見」から、リサーチクエスチョンとなるものを1つ選ぶ。
※リサーチクエスチョンは問い(?)の形にする。
- (4) 事前課題の用紙にリサーチクエスチョンを記入して提出する。

4 学び

- (1) 問いを立てる力や課題発見力を育成する。
- (2) ディスカッションを通じて、目的を達成できるチームワークを育てる。

5 次回への課題

研究テーマに対して問いを立てるのが難しそうであった。問いを立てるために切り口をうまくファシリテートする必要があるあった。

6 授業の振り返り

研究テーマに対して可能な限り多くの問いを立て、そこから生み出された課題の中から、リサーチクエスチョンを決定するのが目標であったが、各グループともに問いを立てる段階で苦勞していた。1学期最後となる次の授業でも、問いを立てて、課題を発見し、リサーチクエスチョンを決定する活動を継続する。

【第10回】

1 実施日

令和4年7月14日(木) 6限

2 場所

HR教室(331教室・332教室)

3 内容

- (1) 前回考えたリサーチクエスチョンに対する教員のフィードバックを受け取る。
- (2) フィードバックを受けて、再度、リサーチクエスチョンを考える。
- (3) リサーチクエスチョンの設定に対して教員の許可が出れば、調査内容と調査方法を考えるための用紙を受け取り、グループで意見交換を行う。

4 学び

ディスカッションを通じて、目的を達成できるチームワークを育てる。

5 次回への課題

意見交換はするが、リサーチクエスチョンを決定するのが困難であった。様々な角度から思考するための教員によるファシリテートが必要であるが、このファシリテート力に課題を感じた。

6 授業の振り返り

リサーチクエスチョンを決定することを目標としたが、複数の班で決定することができなかったのので、補習期間に継続してリサーチクエスチョンについて考えさせる。

リサーチクエスチョンを決定した班は、調査内容と調査方法の検討に進んだ。

【第11～13回】

1 実施日

第11回 令和4年9月1日(木) 6限

第12回 令和4年9月15日(木) 6限

第13回 令和4年9月22日(木) 6限

2 場所

HR教室(331教室・332教室)

3 内容

(1) 調査内容/目的/方法を考えるための用紙を受け取り、グループで意見交換を行う。

※調査内容の1つは、フィールドワークを伴うものとする。

(2) 教員によるフィードバックのために、授業の最後に提出させる。

4 学び

リサーチクエスションの答えを得るのに有効な調査内容と方法を考える。

5 次回への課題

- ・リサーチクエスションを確定することについて、グループの間に大きな差がでた。
- ・リサーチクエスションとの関連が明確でない調査内容が存在していた。

6 授業の振り返り

リサーチクエスションを確定できていないグループがあるため、リサーチクエスションを確定するためのディスカッションを繰り返し行わせたが、グループ間で差が出たことは次年度の課題である。リサーチクエスションを確定させたグループは、調査内容/目的/方法を検討するディスカッションを行った。

【第14回】

1 実施日

令和4年9月29日(木) 6限

2 場所

HR教室(331教室・332教室)

3 内容

- ・10月6日に実施される研究計画発表会の準備を行う。
 - (1) 発表は3分30秒以内とする。
 - (2) 発表内容は、①この探究をする動機 ②リサーチクエスション ③調査内容と方法のみ。
 - (3) 全員が発表できるように役割分担を行う。
 - (4) ロイロを用いて口頭で発表する。発表資料はロイロを使用して作成する。
 - (5) 時間の関係で質疑応答はなし

4 学び

研究計画を分かりやすく伝えるための方法について考える。

5 次回への課題

グループによって少し進度の差があるように思えるので、遅れ気味のグループは授業外でも進める必要がある。

6 授業の振り返り

来週の研究計画書発表に向けて、役割分担とリハーサルを行った。どのように発表することで、聞き手にうまく伝えることができるのかを考えさせた。

【第15回】

1 実施日

令和4年10月6日（木）6限

2 場所

HR教室（331教室・332教室）

3 内容

- ・研究計画を発表する
 - （1）発表は3分30秒以内とする。
 - （2）発表内容は、①この探究をする動機 ②リサーチクエスチョン ③調査内容と方法のみ。
 - （3）全員が発表できるように役割分担を行う。
 - （4）ロイロノートを用いて口頭で発表する。発表資料はロイロノートを使用して作成する。
 - （5）時間の関係で質疑応答はなし

4 学び

研究計画を分かりやすく伝えるための方法について考える。

5 次回への課題

発表者のプレゼンテーション力に差があるように感じる。プレゼンテーション力の育成は場数も重要な要因であるので、可能な限り発表の機会を与える必要があるように感じた。

6 授業の振り返り

全てのグループが研究計画の発表を行った。グループ内の全員が発表できるように役割分担がなされていた。前回のリハーサルのおかげで3分30秒の時間が守られていた。

【第16回】

1 実施日

令和4年10月20日（木）5・6限

2 場所

多目的教室北南

3 講師

福知山公立大学地域経営学部 杉岡秀紀 准教授

4 内容

次の2つを目的として、杉岡先生に講演をしていただく。大学人が取り組む研究を学ぶことで、学問を究める尊さを知り、自身の探究姿勢に生かせるようになる。研究とは社会貢献に繋がるものであることを理解する。講演は「大学の研究と社会貢献—私の探究（研究）紹介—」をテーマとしてパラレルキャリアやプロボノ研究をキーワードにお話しいただいた。

5 学び

学習者はシティズンシップ教育を話題とした様々な具体例から主権者教育について考えることになった。この話題は講演後半のテーマにつながっており、各個人が探究に取り組むにあたり、当事者意識と問う力の必要性を学んだ。

6 次回への課題

探究の目的や、自分たちの探究のテーマを社会的背景に関連させたり、社会的な意義づけができていないチームが少なくない。今回の講演で学んだ「圧倒的な当事者意識」を持たせて、探究内容を意味づけできるように支援する必要がある。

7 授業の振り返り

探究の意義や、本科目に取り組む態度、養いたい資質としてどのようなものが求められているか再確認できる内容であった。生徒の将来設計を含めたかなり内容の濃い講演であり、生徒たちは「人生＝探究」と認識させられたのではないかと思う。

【第17回】

1 実施日

令和4年11月10日（木）6限

2 場所

HR教室（331教室・332教室）

3 内容

- ・三菱みらい育成財団から、各グループに探究活動研究費 5,000 円が割り当てられているので、その予算の使い道をグループで考える。
- ・調査において、アンケートを作成する場合は、アンケート項目案を作成して提出する。

4 学び

探究内容を充実したものにするために、グループ内で予算の道を考えながらディスカッション力を高める。

5 次回への課題

全グループは、予算を使用してフィールドワークへ行くことを義務づけているが、そのフィールドワークで具体的に何をすべきであるのかが明確になっていない班が多い。

6 授業の振り返り

グループ内で活発に予算の使い道を決めていたが、行き先を決定しても、具体的な調査内容まで検討することができなかった。あるグループの探究内容が、京都南ロータリークラブの事業内容と合致するなら、そのグループと企業を結びつけられたらと考えている。なお、時間不足のため、アンケート項目を考えるとところまでは進まなかった。

【第18回】

1 実施日

令和4年11月17日（木）6限

2 場所

HR教室（331教室・332教室）

3 内容

- ・リサーチクエスションの答えを得るために調査を行い、「調査結果メモ」に記述する。
 - ・調査結果について、グループ内で共有をする。
 - ・「調査結果メモ」を参考にしながら、「研究報告書」に調査結果をまとめていく。
- ※「研究報告書」は OneDrive を使用して、共同作業ができるようにする。

4 学び

調査結果を分析する力と、伝えるための文章力を高める。

5 次回への課題

フィールドワークについて、どこに行くのか、いつ行くのかを決めていない班が多い。また、調査方法についてリサーチクエスションとの繋がりが明確でないものがある。

6 授業の振り返り

リサーチクエスションを解明するための、調査内容を確定し、調査を進めた。調査内容は、フィー

ルドワーク、アンケート、文献研究を組み合わせるグループが多い。

【第 19 回】

1 実施日

令和 4 年 11 月 24 日（木） 6 限

2 場所

HR 教室（331 教室・332 教室）

3 内容

- ・リサーチクエスションの答えを得るために調査を行い、「調査結果メモ」に記述する。
- ・調査結果について、グループ内で共有をする。
- ・「調査結果メモ」を参考にしながら、「研究報告書」に調査結果をまとめていく。

※「研究報告書」は OneDrive を使用して、共同作業ができるようにする。

4 学び

調査結果を分析する力と、伝えるための文章力を高める。

5 次回への課題

フィールドワークについて、どこに行くのか、いつ行くのかを決めていない班がまだある。また、調査方法についてリサーチクエスションとの繋がりが明確でないものがあるので引き続き検討を進めた。

6 授業の振り返り

リサーチクエスションを解明するための、調査内容を確定し、調査を進めた。調査内容は、フィールドワーク、アンケート、文献研究を組み合わせるグループが多い。各グループに 5,000 円の探究活動研究費が与えられているので、その用途についても検討した。

【第 20 回】

1 実施日

令和 4 年 12 月 8 日（木） 6 限

2 場所

HR 教室（331 教室・332 教室）

3 内容

- ・リサーチクエスションの答えを得るために調査を行い、「調査結果メモ」に記述する。
- ・調査結果について、グループ内で共有をする。
- ・「調査結果メモ」を参考にしながら、「研究報告書」に調査結果をまとめていく。

※「研究報告書」は OneDrive を使用して、共同作業ができるようにする。

4 学び

調査結果を分析する力と、伝えるための文章力を高める。

5 次回への課題

調査方法についてリサーチクエスションとの繋がりが明確でないものがあるので引き続き検討を進めた。アンケートでは改善すべき項目が見られたので、教員のフィードバックを通して改善を図った。

6 授業の振り返り

リサーチクエスションを解明するための、調査内容を確定し、調査を進めた。調査内容は、フィールドワーク、アンケート、文献研究を組み合わせるグループが多い。各グループに 5000 円の探究活動

研究費が与えられているので、その用途についても引き続き検討した。情報科の授業で、パワーポイントを作成し始めたグループがある。

【第 21 回】

1 実施日

令和 4 年 12 月 15 日（木） 6 限

2 場所

HR 教室（331 教室・332 教室）

3 内容

- ・「研究報告書」における 1.「研究テーマ」、2.「研究の動機・課題の背景」、3.「リサーチクエスション」を完成させて提出する。
- ・スライドを作成するための基礎知識を教える。（指導用パワポあり）
- ・研究発表に向けてパワポを作成する。
※「パワポ」は OneDrive を使用して、共同作業ができるようにする。
- ・発表する内容は、①研究テーマ、②研究動機、③RQ、④調査内容、⑤結論 である。

4 学び

伝えるための文章力とスライド作成力を高める。

5 次回への課題

調査方法についてリサーチクエスションとの繋がりが明確でないものがあるので引き続き検討を進めた。アンケートでは改善すべき項目が見られたので、教員のフィードバックを通して改善を図った。

6 授業の振り返り

リサーチクエスションを解明するための、調査内容を確定し、調査を進めた。半分ぐらいのグループがフィールドワークの実施を終えた。

【第 22 回・第 23 回】

1 実施日

第 22 回 令和 5 年 1 月 12 日（木） 6 限

第 23 回 令和 5 年 1 月 19 日（木） 6 限

2 場所

HR 教室（331 教室・332 教室）

3 内容

- ・研究発表に向けて発表資料（パワーポイント）を作成する。
- ・発表する内容は、①研究テーマ、②研究動機、③RQ、④調査内容、⑤結論 である。

4 学び

伝えるための文章力とスライド作成力を高める

5 各回の課題

第 22 回では、スライド作成の役割分担は決定したが、スライド作成が進んでいないグループがあった。発表日までに授業外の時間も使って進めるよう指導した。

6 授業の振り返り

第 22 回では、スライドの全体構成について再検討しているグループが多かった。スライドの作成においても、細かい部分が気になるグループもあり、1つのスライドで1つのメッセージが伝わるよ

うに指導した。

第 23 回終了時には、パワーポイントの作成において、文字の大きさや、伝えたいことを強調する工夫が見られた。クラス予選に向けて、グループ内の雰囲気もよく、クラス予選のパフォーマンスが楽しみである。

【第 24 回】

1 実施日

令和 5 年 2 月 2 日（木） 6 限

2 場所

HR 教室（331 教室・332 教室）

3 内容

- ・各クラスで、各グループの探究の成果を発表する。
- ・生徒投票を実施し、優秀なグループを決定する。
- ・各クラスで最も優秀なグループは、第 25 回「成果発表会」において、第 1 学年グローバル科生徒全員に向けて発表を行う。

4 学び

- ・聞き手に伝わるプレゼンテーション力を高める。
- ・即興的に質問に答える力を高める。

5 次回への課題

- ・質的研究と量的研究の違い等に関する分析方法を指導する。
- ・分析からどのような提案ができるのかをさらに意識させる。
- ・机上の空論ではなく、実用化の観点も考慮することを意識させる。
- ・サンプリングから、マッピング（グループ化）を教える必要がある。

6 授業の振り返り

上記のとおり、2 年次の課題研究に向けた課題はあるが、生徒たちは生き活きと発表していた。パワーポイントのスライドにも伝えるための工夫が見られた。質問にも適切かつ即興的に回答していた。1 年間の探究活動の成果が見られた発表であった。

【第 25 回】

1 実施日

令和 5 年 2 月 4 日（土） 2・3 限

2 場所

2 限：多目的教室

3 限：HR 教室（321 教室・322 教室・323 教室・324 教室）

3 助言者

京都美術工芸大学 高田光雄 副学長

京都芸術大学 吉田大作 准教授

有限会社遠山 小田浩子 代表取締役

一般社団法人京都中小企業家同友会 西山一緒 様

本校卒業生 T A 6 名

4 内容

- ・「イノベーション探究Ⅰ」成果発表会
- ・2 限は、クラス予選で 1 位であった 2 グループの発表を聞く。

- ・3限は、4教室に分かれて発表をする。
- ・発表後は、個人でコメントを書いてロイロノートで提出する。

5 学び

- ・聞き手に伝わるプレゼンテーション力を高める。
- ・即興的に質問に答える力を高める。
- ・大学教員等の外部講師から助言を受け、2年次の課題研究に繋げる。

6 授業の振り返り

各発表に対して、助言者やTAからフィードバックをいただいたことは、次年度の「イノベーション探究Ⅱ」で活かせる学びとなった。

【第26回】

1 実施日

令和5年2月9日（木）6限

2 場所

HR教室（331教室・332教室）

3 内容

「イノベーション探究Ⅰ」成果発表会の振り返り

- ・成果発表会で回収した各グループの評価とコメントを該当グループに返却し、グループ内で話し合いを行った。
- ・振り返りシートを配布して、探究活動で得たことや、来年度の探究活動で頑張りたいことなどを記述した。

4 学び

探究活動を振り返り、今年度に学んだことを来年度の課題研究に活かす。

5 次回への課題

時間的な制限があることを考慮しても、探究の内容や調査方法には改善の余地が多い。来年度は、グローバルな問題にも挑戦することになるため、質の高い探究活動のための教員側の指導システムの構築も必要だと思われる。

6 授業の振り返り

生徒たちは1年間を通して、非常に意欲的に取り組んだ。しかし、調査方法や議論の仕方など探究活動を進める上での基本的な知識やスキルを磨く必要があるため、教員側の指導力向上が必要である。

【第27回】

1 実施日

令和5年2月20日（月）6限

2 場所

HR教室（331教室・332教室）

3 内容

来年度の「イノベーション探究Ⅱ」に向けて

- ・今年度の「イノベーション探究Ⅱ」における優秀班の成果を紹介しながら、来年度の探究活動のイメージを持たせる。

4 学び

来年度の探究活動に向けて、探究テーマを考えるきっかけとした。

5 次回への課題

探究のテーマ設定において、高校生が扱えるようにテーマをもう少し絞る作業が必要であると思われるため、そのための指導を考える必要がある。

6 授業の振り返り

上級生の成果を見て、来年度は上級生の成果を超えたいという意気込みが感じられた。今年の「イノベーション探究Ⅰ」の成果は一定の評価ができるものであったため、来年度の探究活動の成果が楽しみである。

【第 28 回】

1 実施日

令和 5 年 3 月 2 日（木） 6 限

2 場所

HR 教室（331 教室・332 教室）

3 内容

- ・ 1 年間の振り返り
- ・ 「イノベーション探究Ⅰ」に係わるアンケート

4 学び

アンケートに答えることで、1 年間の探究活動を振り返り、成果と課題を認識した。

5 授業の振り返り

1 年間という長期にわたる探究活動は、生徒にとって初めての経験であったが、探究活動の型を学ぶことができた。また、グループで目標を達成するために、協力して活動を進めていくための協働力も高まった。探究活動を肯定的に捉えている生徒が多く、来年度の探究活動をとおしてさらなる成長を期待したい。

エ 総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅱ」（２年・１単位）

１ ねらい

拠点校グローバル科２年生対象の「イノベーション探究Ⅱ」では、１年次の地域再発見プログラムで培った価値の発見・発信力を研磨するため、「グローバル・ジャスティスプログラム」として、公正・正義の視点を持ってグローバル・イシューを発見し、国家・民族・宗教を超えた課題を探究する。

目標は次の４点である。１年次のねらいに「現状探究」を、２年次のねらいに「原因探究」を位置づけている。

- ① 異文化理解・多文化協働を通じて、グローバル・リーダーとして必要な社会性を習得する。
- ② ソーシャル・イノベーションの主体者としての意識を高める。
- ③ イノベティブでグローバルな人材に求められる６つの資質・能力のうち、特に新たな価値を創造する力・多様な文化的背景を持つ人々と協働する力・困難な状況を突破する力を向上させる。
- ④ 課題発見や原因探究をとおして、仮説構築力をつける。

２ 概要（実践）

（１）年間計画

①伝統文化領域、②サイエンス領域、③エリア・スタディ領域の「３つの切り口・視点」で、研究グループに分かれて研究を行う。研究テーマに基づき、各段階で「研究計画書」Ver. 1、・「調査シート」①・「研究報告書」Ver. 1・「研究計画書」Ver. 2・「調査シート」②・「研究報告書」Ver. 2の各様式にしたがって研究を進める。年間計画は表―１のとおりである。

（２）実践内容

各回の具体的な活動・指導内容については、pp. 102-115 のとおりである。

（３）評価の方法

ワークシートやポートフォリオを指導者が評価したほか、ポスターセッションについては、観点別評価のためのループリック」（表―２）としてポスターセッションループリックを用いた。なお、令和４年度の研究テーマについては、表―３のとおりである。

表一 令和4年度「イノベーション探究Ⅱ」～グローバル・ジャスティスプログラム～年間概要

学期	回	月日	内容	TA	海外研修	連携
1 学期	1	4月23日	春休み課題図書発表、ガイダンス			高大
	2	5月7日	研究グループ決定・研究テーマ（仮）決定			
	3	5月21日	講義及びワークショップ「鳥羽高校チーム探究を充実させるために」 京都橘大学 乾明紀先生			
	4	6月4日	研究テーマに基づき「研究計画書」Ver.1作成 「研究計画書」Ver.1に基づき「調査シート」①作成			
	5	6月11日	「調査シート」①に基づき「研究報告書」Ver.1作成			
	6	6月25日	「研究報告書」Ver.1を使って中間報告 大阪大学 堀一成先生、坂尻彰宏先生、柿澤寿信先生、TA 「研究計画書」Ver.2作成、再調査「調査シート」②	○		
	7	7月9日	講義及びワークショップ「よい研究発表とはどのようなものか」 大阪大学 堀一成先生、柿澤寿信先生			
夏 休 み			経営者インターンシップ			高社
			夏休みフィールドワーク			
2 学 期	8	9月10日	アカデミック・ライティング講座（1～4限） 大阪大学 堀一成先生、坂尻彰宏先生、柿澤寿信先生、TA	○		中止 高大 高社 高大
	9	9月17日	「研究報告書」Ver.2作成			
			午後 京都中小企業家同友会高大社連携研修事業中間報告会			
	10	10月1日	「研究報告書」Ver.2作成	○		
	11	10月22日	「研究報告書」Ver.2完成 ポスターセッション最終準備 （ポスター及び原稿修正、想定問答集作成）	○		
			午後 京都中小企業家同友会高大社連携研修事業			
	12	11月5日	「研究報告書」Ver.2を使ってポスター・セッション 大阪大学 堀一成先生、坂尻彰宏先生、柿澤寿信先生、 京都美術工芸大学 高田光雄先生、TA	○		
	13	11月26日	「研究報告書」Ver.3作成			
	14	12月10日	「研究報告書」Ver.3完成			
冬 休 み			「研究ノート」考察部分（個人担当）作成			高大
3 学 期	15	1月21日	「研究ノート」作成 卒業生TAによるサポート	○		
	16	1月28日	「研究ノート」完成			
	17	2月4日	「研究ノート」合評会 まとめ・省察、「イノベーション探究Ⅲ」に向けて			
		2月25日	予備日			
春 休 み			日本語要約作成			

※TA・・・ティーチング・アシスタント

表ー２ 令和４年度 イノベーション探究Ⅱ ポスターセッションループリック

		発見力		分析力・調査力		表現力		探究の内容理解
研究報告書との関連		1	2	3	4			
		研究の動機・課題の背景	リサーチクエスチョン(RQ)	研究方法	仮説	ポスター	発表	質問回答
評価基準	A: 完璧 (Great)	問題提起ができています。探究の目的が明らかである。	研究テーマについて、課題を分析・調査するために、具体的な問い(RQ)を立てている。	RQを明らかにするための適切な調査・分析ができている。	調査内容を分析した上での「因果」あるいは「比較」を含んだオリジナリティのある仮説になっている。	探究の過程が読解できる内容である。	オーディエンスを意識し、自分の言葉で発表している。	質問に対する的確な回答ができています。
	B: 合格 (Good)	問題提起ができています。	研究テーマについて、課題を分析・調査するために、具体的な問い(RQ)を立てている。	RQを明らかにするための調査・分析をしている。	調査内容を分析した上での「因果」あるいは「比較」を含んだ仮説になっている。	記述内容が乏しく、探究の過程が読解できない。	オーディエンスを意識し、発表している。	質問を理解し、回答している。
	C: がんばろう (Needs Work)	問題提起ができていない。	研究テーマについて、課題を分析・調査するための具体的な問い(RQ)を立てられていない。	RQを明らかにするための調査・分析ができていない。	「因果」も「比較」も含まないあいまいな仮説になっている。	未記入箇所がある。	オーディエンスを意識することなく、原稿を読んでいる。	質問に適切に回答できていない。
	評価記入欄 A～C							
よりよい研究にするための方策								
							総合評価 (A～C)	

表ー３ 令和４年度「イノベーション探究Ⅱ」研究テーマ一覧

チーム	テーマ
1	医療格差や医療不足を無くしたい
2	NFTを用いた新しい支援方法の確立を目指して
3	国ごとのLGBTQに関する意識差の考察
4	小学校の給食指導における”食べ残し”の改善
5	2025年デフリンピックの日本開催を盛り上げるために何をすべきか？
6	国内で外国の人と交流する場を作る
7	ジェンダー教育の在り方についての考察
8	海外で働くことについて
9	海外の人とのコミュニケーション
10	日本の野菜の食品ロス
11	持続可能なエネルギーを身近にする
12	マスクのリスク
13	どうしたら学生が留学に行きたくなるのか
14	地球温暖化の抑止について～カーボンニュートラルを通して～
15	スピーキング力の向上を目指した英語教育について
16	高校生のネット依存の現状
17	発展途上国の幼児（0ー4歳）の医療
18	外国人労働者・留学生を受け入れについて

「イノベーション探究Ⅱ」～グローバル・ジャスティスプログラム～

担当教諭 山中脩平 三嶋千代子 中村啓介 藤原久美子

【第1回】

1 実施日

令和4年4月23日（土）1・2限

2 場所

1棟多目的教室

3 内容

春休み課題図書の共有

前年度に「イノベーション探究Ⅰ」で出された図書課題（「グローバル課題」に関わる図書を読む）について、iPadにまとめたメモをもとにグループ内で交流する。

1 グループ3人 1人3分発表、2分質疑応答

内容：「何を明らかにするために書かれたのか」「最も興味を持った部分は何か」
「どのようなリサーチクエスチョンが考えられるか」

ガイダンス（趣旨説明）

（1）はじめに

（2）「イノベーション探究Ⅱ」ガイダンス（日程等）

（3）「イノベーション探究Ⅱ」の到達目標など

①プレゼンテーションソフト資料を用いて発表する。（昨年度）

→チームの提言を論文にまとめて（アカデミック・ライティング）発表する。（今年度）

②課題設定の仕方について

自己の課題や関心のあることを選ぶ。

→自己課題について、関心のある探究領域・テーマを切り口にして研究していく。

③グループの研究論文を様々な大会などで発表する機会があることを知る。

④次回までに、6・7組の枠を超え、興味関心が近い生徒が集まり4人グループを作る。

（4）「課題研究テーマを考えよう！」ロイロノートを活用し、自己課題と関心のある研究領域・テーマを全員で共有する。

4 学び

- ・他者が書いた読書レポートを読むことで、読書の質を高め問題意識を広げる。
- ・一年次に再発見した「京の智」を土台に、地球の智へと学びを広げていく。
- ・自己の課題や関心のあることを研究領域やテーマにつなげていくことで、自分事として研究を進めていくようにする。
- ・積極的にコミュニケーションをとりながら、グループで協力して研究を進めていくことが大切である。

5 次回への課題

自分が興味・関心を持つ課題研究テーマについて考える。6・7組の枠を超え、興味・関心が近い生徒で4人グループを作る。

6 授業の振り返り

春休み課題図書読書レポートについては「何を明らかにするために書かれたのか」「最も興味を持

った部分は何か」「どのようなリサーチクエストが考えられるか」という点について、3人グループで発表した。ほとんどの生徒が熱心に取り組んでいたが、中には課題ができていない生徒もいた。SDGs、エシカル、女性、環境についての図書などがあった。

この3人グループは1時間目のアイスブレイクで「普段あまり交流のない人同士で3人組になる」という指示で集まったメンバーだった。意図としては、今年度は教員が指示をするのではなく、生徒間でできるだけコミュニケーションを多くとり、自分たちで主体的に活動して欲しいということである。研究グループについても、次回までに自分たちで4人グループを作ってくことにした。

今年度は、「チーム探究する力」を大きく伸ばしたい。そのためには、自ら行動する姿勢やコミュニケーション力の向上、シェアド・リーダーシップの伸長が必要になる。この軸を様々な取組に落とし込み、活動を行っていききたい。

【第2回】

1 実施日

令和4年5月7日（土）1・2限

2 場所

1棟多目的教室

3 内容

探究のチーム編成

前回の授業で共有した、各個人が関心をもつキーワードをもとに、探究チームを編成した。「チーム探究する力」の伸張のために、「生徒同士でコミュニケーションをとりながら生徒自身でチームを編成する」ようにした。

探究テーマの設定

チーム編成後、各チームで探究テーマの設定を行った。生徒同士で議論したり試行錯誤したりすることを通じてテーマを決定させた。

4 学び

性別や交友関係にとらわれず編成されたチームがいくつもあったので、当初の意図はクリアできた。また、これにより「自ら動く」、「話し合いの中で物事をすすめる」ことの経験が得られたと考える。タブレットが導入され、グループワークや調べごとでもそれぞれがタブレットとの対話に終始してしまう光景を何度も見た。「チーム探究する力」の伸長のためにこの取組は有意義であると考え

5 次回への課題

今回は、京都橘大学の乾先生にお越しいただき、探究活動を充実させるために必要なことについて、講演をしていただき、ワークショップに取り組む。

6 授業の振り返り

前述したが、タブレットとの対話に終始してしまう光景を何度も見た。本日の取り組みは、自ら行動する姿勢やコミュニケーション力の向上、シェアド・リーダーシップの伸長につながる。これからもこの軸を様々な取組に落とし込み、活動を行っていききたい。

【第3回】

1 実施日

令和4年5月21日（土）1・2限

2 場所

3 講師

京都橘大学経済学部経済学科 乾明紀 准教授

4 内容

- (1) イントロダクション
- (2) なぜ探究活動を行うのか？
- (3) なぜ予備調査が必要なのか？
- (4) 研究計画書を作成する際のポイント
- (5) チーム探究とリーダーシップについて
- (6) チームで研究計画書づくり

5 学び

本科目の探究プロセスを外観し、研究報告書を更新していくことで探究が進むことを確認した。また、大阪大学の先生やティーチング・アシスタントの大学院生の助言をフィードバックして研究計画書を更新していくことを確認した。探究のテーマを自分事にするために十分な事前調査を行い、言語化する方法を学習した。また、リサーチクエスションの立案の方法を学習した。

6 次回への課題

研究報告書 Ver. 1 作成に向けた情報収集を各自で行い、研究計画書を作成する。

7 授業の振り返り

授業前半で探究のプロセスや、リサーチクエスションの立案方法を学習した後、チーム毎に研究報告書を作成することで学習内容を実践できた。また、昨年コロナウィルス感染予防のため遠隔で授業を行ったが、今年度は対面で授業を行うことができた。授業の後半は乾先生と質問・相談を行いながら、研究計画書の作成を進めた。学習したことを、講師に質問しながらアウトプットできる有益な場になった。

【第4回】

1 実施日

令和4年6月4日（土）1・2限

2 場所

1 棟多目的教室

3 内容

本日の目標の確認

研究報告書 Ver. 1 と調査シート①の完成をゴールとする。

前回授業の振り返り

京都橘大学乾先生に指導していただいた「リサーチクエスション（RQ）の立て方」や、「RQをより具体的にするための方法」などを、全体で振り返った。また、それを研究計画書にどのようにして落とし込むのかを、具体的な例を示しながら説明をした。この資料は生徒に事前に配信されている。

研究報告書 Ver. 1 の作成

前回の授業での京都橘大学乾先生の講演をもとに研究報告書の Ver. 1 を作成した。次回の Ver. 2 にバージョンアップさせることを念頭に今回は Ver. 1 を完成させた。

4 学び

生徒が役割を完全に分担するのではなく、チーム内で話し合いをしながら R Q を立てたり、R Q を解明するために必要な調査について考えたりすることができた。話し合いが深まらないチームもあったが、教員がファシリテーターとして質問をしたり、調査の仕方をアドバイスしたりし、次の段階に進むための小さな R Q を考えることができた。

5 次回への課題

今回は、Ver. 1 の調査結果をもとに、Ver. 2 を作成する。6 月 25 日（土）に大阪大学の先生や大学院生（T A）の方々に「中間報告会」に向けた指導をしていただく。そのための準備を進めておくことが必要である。

6 授業の振り返り

各チームが自分たちのペースで研究を進めていた。文献の検索方法や調査内容についてのアドバイスについては、生徒の様子を見ながら必要があれば声をかけるようにする。過年度の見本を教室に掲示をして、生徒が参考資料として読むことができた。また、そのシートに考える視点（ポイント）も記入したので、生徒が研究を進めるヒントになった。

【第 5 回】

1 実施日

令和 4 年 6 月 11 日（土）1・2 限

2 場所

1 棟多目的教室

3 内容

本日の目標の確認

研究報告書 Ver. 1 の内容を Ver. 2 に落とし込み、研究報告書 Ver. 2 を完成させる。次回、大阪大学の先生や大学院生の方々に指導していただくので、そのための準備をする。Ver. 2 の 3 「具体化された R Q を明らかにするための調査」まで記入して、助言をいただきやすくする。

研究報告書 Ver. 2 の作成

- ・ Ver. 1 の 2 「当初の R Q（リサーチクエスション）を明らかにするための調査」で調べたことをもとに、Ver. 2 の 1 「研究の動機・問題の背景」に落とし込む。
- ・ Ver. 2 の 1 「研究の動機・問題の背景」で書いた内容をまとめると、論文の序論になる。
- ・ 序論を踏まえて、そこから導き出せる具体化された R Q を Ver. 2 にまとめる。Ver. 1 の調査で明らかになっている問題に対しての R Q にする。

4 学び

研究を進めていくにあたり、研究報告書 Ver. 1 で調査した内容を研究報告書 Ver. 2 にどのように展開していくのかを学んだ。5 月 21 日の京都橘大学乾先生の講義資料も提示して、「研究の動機・問題の背景」の書き方を振り返った。

5 次回への課題

研究報告書 Ver. 2 の内容を理解し、説明できるようにしておく。大阪大学の先生や大学院生の方々

に指導をいただく際に、受け身の姿勢にならないようにさせたい。研究の進め方やRQの立て方について、自分たちから考えを示せるように準備をしておくことが必要である。

6 授業の振り返り

チームによって、研究の進度に差がある。教員が質問や助言をしたりしながら、研究が進むように促した。進みにくいチームに対してどのようにアプローチしていくかが課題である。

【第6回】

1 実施日

令和4年6月25日（土）1・2限

2 場所

1棟多目的教室、331・332・333・334教室

3 講師

大阪大学 全学教育推進機構 堀一成 教授

大阪大学 全学教育推進機構 坂尻彰宏 准教授

大阪大学 国際共創大学院学位プログラム推進機構 柿澤寿信 准教授

大阪大学のTA 4名

鳥羽高等学校 教諭 山中脩平、三嶋千代子、藤原久美子、中村啓介

4 内容

本日の内容の確認

作成した研究報告書 Ver. 2 をもとに、大阪大学の先生方やTAに対して構想発表を行う。

研究計画説明と助言

各チームが自分たちの研究計画を大阪大学の先生、TAの方に説明に機会を設けた。4つの教室に指導者2名を配置して、探究チームはそれぞれ、およそ25分で研究計画を指導者に説明し助言をいただく。1ターンで7チームがそれぞれ25分間じっくり大学の先生と対話できる時間がある。このターンを3回繰り返す。

全体講評

大阪大学の先生方やTAに、全体の講評をいただいた。

5 学び

「研究」をするうえでの大切な視点であったり、データやソースの所在についてであったり、大小様々なことについて指導いただいた。大学の先生とゼミを行うかのように、じっくり対話する時間があったので、チーム毎に探究に関する様々な見方・考え方を広げる機会になった。教員側の生徒への指導の在り方についても大阪大学の先生方から伺うことができたので、これらを生かしたい。

6 次回への課題

生徒は、単なる「調べ学習」ではなく、「研究」に取り組む難しさを知ることができたと考える。専門家の方々からの指導は刺激にもなり、足りないものを明確化することができたであろう。今後の授業で、これをどのように補っていくかが課題である。

7 授業の振り返り

昨年度までは、8分間で、研究計画を発表と質疑応答を行い、最後に大学の先生から御講評をいた

だく形式だった。しかし、今年度は生徒と大学の先生とがじっくり対話する活動を充実させたいという思いで活動内容を昨年度からの発表形式から変更した。その結果、生徒にとっては非常に満足度の高い時間を創出することができた。一方で、「イノベーション探究Ⅱ」は探究の成果をポスターセッションで行う。ポスターセッションは、「イノベーション探究Ⅰ」で行ったパワーポイントを用いた口頭発表とは異なり、発表者が聴衆をファシリテートしながら進行する必要がある。そういった経験を事前に生徒にさせておくことが、この時期に必要なのではないかと助言を大阪大学の先生にいただいた。「イノベーション探究Ⅱ」で求められる発表スキルの違いなどは今後指導する。チーム探究の在り方であったり、メディアリテラシーであったり、日頃から生徒に伝えていることについて先生方から指導をいただいたことから、方向性として間違っていないことを確認することができた。また、これにより後の指導でのフィードバックもやりやすくなった。

【第7回】

1 実施日

令和4年7月9日（土）1、2限

2 場所

多目的教室（9チーム）

311教室（9チーム）

3 講師

大阪大学 全学教育推進機構 堀一成 教授

大阪大学 国際共創大学院学位プログラム推進機構 柿澤寿信 准教授

4 内容

講義及びワークショップ 「よい研究発表とはどのようなものか？」

- （1）本日の目的と進め方
- （2）よく見かける研究発表のパターン
- （3）よい研究発表の条件
 - ①研究目的が明確であること
 - ②思考に分析（分けること）と論理（つなげること）が含まれていること
 - ③的をしばった調査ができていること
- （4）明確な研究目的とは
 - ①「主題」・「トピック」・「仮説」
 - 「主題」…漠然とした大きな関心領域
 - 「トピック」…具体的に特定された研究対象
 - 「仮説」…トピックに関する「因果」あるいは「比較」を含む予想
 - ②トピックの5要件（研究する意義があるか 研究する本人が興味を持てるか本人の力で扱いきれるか 必要な情報が集められそうか 内容に新しさがあるか）
 - ③「主題」・「トピック」・「仮説」を考える
- （5）分析的思考／論理的思考とは
 - ①定義：分析とは「分ける」こと 論理とは「つなげる」こと
 - ②「分ける」考え方 仮説設定に関して
 - ③「つなげる」考え方 議論の筋道 根拠づけ 論点抽出 ピラミッド構造
- （6）的をしばった調査とは
 - ①何をすべきか ②論点の明確化 ③情報の取捨選択

5 学び

①研究目的が明確であること ②思考に分析と論理が含まれていること ③的をしばった調査が

できていること 以上3点がよい研究発表の条件であることを理解し、自分たちの課題研究を進める。

6 次回への課題

今回学んだよい研究発表の条件を整理し、夏季休業を利用して調査計画を立案する。

7 本時の振り返り

学習者は1年次に「イノベーション探究Ⅰ」で探究の枠組みを学習し、京の智の再発見をテーマに探究活動を行った。そのときの発表の成果や、今年度の探究計画を振り返って、これからの探究テーマに関するチームの議論が促進されることを期待している。

また、本時で学習した分析的・論理的思考のプロセスは探究の文脈に依存することなく、これからの変化の大きい社会で生き抜くために必要なスキルだと考える。各チームの計画を確認し、適切な助言・指導を行い、学習者の思考プロセスの精度を向上させるようにする。

【第8回（アカデミックライティング講座）】

1 実施日

令和4年9月10日（土） 8:40～15:30

2 場所

大阪大学 豊中キャンパス

3 講師

大阪大学 全学教育推進機構 堀一成 教授

大阪大学 全学教育推進機構 坂尻彰宏 准教授

大阪大学 国際共創大学院学位プログラム推進機構 柿澤寿信 准教授

大阪大学 TA 4名

4 内容

8:30 鳥羽高校集合

8:40～10:00 バス移動

10:00～10:50 第1講 批判的に考えるとは？

10:50～11:00 休憩

11:00～11:50 第2講 レポート作成のチェックポイント

11:50～13:20 休憩

13:20～14:20 第3講 パラグラフ・ライティングとは？

14:30～15:30 バス移動

15:30 鳥羽高校到着後、解散

5 学び

論文を作成する際に必要な技能であるアカデミック・ライティングについて学習し、根拠情報の見つけ方や情報の整理方法、レポートの組み立て方などに関する手法を身につける。

6 次回への課題

「研究報告書」Ver. 2を作成する。

7 本時の振り返り

第1講 批判的に考えるとは？

主張を整理し検証する方法と、論拠を吟味するためのチェックポイントについて学んだ。その後、調査シートをペアで相互検討し、グループの調査内容を見直した。

第2講 レポート作成のチェックポイント

アカデミックにふさわしい文章の注意点について講義を受けた。ここで学んだことを生かし、間違いがたくさん散りばめられたレポートから間違いを発見するワークを行い、間違いを共有した。

第3講 パラグラフ・ライティングとは？

トピックセンテンス、サポートセンテンス、コンクルーディングセンテンスからなるパラグラフの構造について学んだ。自分の調査シートから問いと答えを書き出し、実際にパラグラフ・ライティングを行った。

学習者は第2講でレポートの間違いを発見する活動を行った。一方で、第3講でパラグラフ・ライティングをした際は、ダメレポートにあるような間違いに気づかないまま提出する学習者が少なかった。執筆し、読み返して再執筆するという繰り返しの過程が必要なことは、3学期の論文執筆の活動をとおして伝えていきたい。

【第9回】

1 実施日

令和4年9月17日（土）1、2限

2 場所

多目的教室

3 内容

前回に大阪大学で「アカデミック・ライティング講座」を受けた。その時に、大学の先生方や大学院生の方から励ましの言葉を書いた色紙をいただいたので、それを紹介した。また、当日各自が書いた論文の冒頭部分を添削してくださったので、生徒に返却した。大変丁寧かつ書けている部分をほめるコメントが多く、生徒たちはやる気が出たようだ。

1限目は、11月5日実施のポスター発表までのスケジュールを全体で確認した。今回は研究報告書 Ver. 2の「0. 研究テーマ」、「1. 研究の動機・問題の背景」、「2. 具体化されたりサーチクエスション（RQ）」までを完成させることが目標であった。また、1を書くにあたり、1学期に学んだ京都橘大学乾先生の資料を映し、書き方のポイントを確認した。「ツッコミシート」も再度提示し、RQを深めていく資料とした。

2限目はチーム毎に研究報告書を進め、本時の成果をロイロノートに提出した。

4 学び

「1. 研究の動機・問題の背景」を詳しく説明することは、「2. 具体化されたRQ」や「3. 具体化されたRQを明らかにするための調査」に繋がることが分かった。自分たちの研究テーマについて改めて深く考え、どのような調査が必要なのか見えてきた。

5 次回への課題

研究報告書 Ver. 2の完成のため、返却されたフィードバックをもとに準備を進める。

6 本時の振り返り

進度やレベルに差はあるが、発表に向けて研究が進んでいる。ポスター発表まで授業はあと2回なので、スケジュールを考えながら研究を進めていく必要がある。生徒の研究報告書から良い例を授業で共有し、見本としながら全体のレベルアップを図った。

【第10回】

1 実施日

令和4年10月1日（土）1、2限

2 場所

多目的教室

3 ティーチング・アシスタント

卒業生2名

4 内容

1限は、研究報告書 Ver. 2 の記入に向けて、これまでの探究の過程を振り返る。アカデミック・ライティング講座で学習した内容を踏まえて、発表内容を構成する。4月から中間発表までに、探究してきた過程を説明できるようにする。

2限は中間発表に向けて研究報告書 Ver. 2 の記入をする。特に本時では、「4. 現時点の仮説」の項目まで記入することを目標とする。

5 学び

探究の過程を振り返ることで、探究の全体像を俯瞰することができた。その結果、改めて探究課題を理解できたようで、リサーチクエストを明らかにするために、「さらに調査が必要じゃないか」、「こんな調査をするべきじゃないか」というような会話が生まれた。複数のチームにこの行動が観察できたので、学習者は探究の過程を振り返ることで、探究課題に対する新しい見方・考え方を獲得したと考えられる。

6 次回への課題

本時で研究報告書 Ver. 2 を完成できなかったチームは発表原稿、想定問答集作成を並行して作成する必要がある。

7 本時の振り返り

各チームとも会話内容の“熱量”が高く感じた。この段階で提案される調査内容も精度が高く、各チームの探究のオリジナリティを高めるものであった。インターネットでの調べ学習から、フィールドワークを伴うような調査に変化してきた。例年はもう少し早い時期にこの変化が生まれるのだが、今年だけのものなかは、引き続き検討したい。

【第11回】

1 実施日

令和4年10月22日（土）1、2限

2 場所

1棟 多目的教室

3 ティーチング・アシスタント

卒業生1名

4 内容

① ポスター発表当日の流れについて

- ・各チームの発表は「7分発表・5分質疑応答・3分移動」の15分1セット。
- ・1セット×4回転とする（3人・5人チームはチーム内で相談）。

- ・今まではプレゼンテーションソフトで発表を行っていたが、ポスターセッションになることを踏まえて心づもりをする。

② 「研究報告書」 Ver. 2＝ポスター完成

- ポスターの内容をチームでチェックする。
- 何を伝えたいかが明確になっているか？
- フォントの種類が統一されているか？フォントの大きさは適切か？
- 図や表の活用、デザインも含め、見やすいものになっているか？
- 引用文献・参考文献をR Qごとに示しているか？

③ ポスターセッションに向けての準備

- 発表原稿や想定問答集を作成する。発表練習をする。
- 発表内容をチームでチェックする。
- 時間が守られているか？（発表時間6分）
- 原稿を読み上げるだけになっていないか。
- 発表の態度は良いか。（声の大きさや抑揚、目線など）
- 質問者の意図を理解したうえで質疑応答を行っているか。

④ ポスター印刷

⑤ 発表練習

教室の前後で、班ごとに発表練習
＊T Aの方々に助言をいただく。

5 学び

「研究報告書」＝ポスターの作成をとおして、①研究内容を明確にすること、②R Qを論理的につなげること、③図、表を効果的に使うこと、④引用文献、参考文献を明記することを学習する。

6 次回への課題

ポスターセッション（11月5日）を行う。オーディエンスからの質問や、講師・T Aからの助言・評価内容を受けて研究内容をブラッシュアップする。

7 本時の振り返り

この授業では、11月5日（土）に実施されるポスターセッション（課題研究中間発表会）のための発表用ポスターを作成した。また、ポスターセッションでの質疑応答のために想定問答も考えた。T Aの本校卒業生の学習者への関わり方が、すばらしかった。学習者の悩みに寄り添ったり、自分の経験から考えを述べて学習者の探究の後押しをしたりと、それぞれの得意分野や個性を生かして指導していた。繰り返し参加しているT Aの指導スキルが向上していることも観察できる。次年度以降も卒業生T Aの活用を継続したい。

【第12回】

1 実施日

令和4年11月5日（土）1、2限

2 場所

講堂

3 講師

大阪大学 全学教育推進機構 堀一成 教授

大阪大学 全学教育推進機構 坂尻彰宏 准教授
大阪大学 国際共創大学院学位プログラム推進機構 柿澤寿信 准教授
大阪大学 TA 4名
京都美術工芸大学 高田光雄 副学長
鳥羽高等学校 教諭 中村啓介、三嶋千代子、山中脩平、藤原久美子

4 内容

ポスター発表

- ・各チームの発表は「7分発表・5分質疑応答・3分移動」の15分1セット
- ・4人1チーム 1セット×4回転とする
(3人・5人チームはチーム内で2回発表する生徒がいる。)

5 学び

口頭で発表することの難しさを学んだ。また、質疑応答をすることにより、自分たちの研究について新しい視点を持つことができた。最後に堀先生と高田先生からご講評をいただきポスター発表の仕方などの作法面、ポスターの構成などの技術面などについて全体にアドバイスをいただいた。また、発表を楽しむことが大切ということも学んだ。

6 次回への課題

本時で説明できなかった内容や、質問に答えられなかったことについてチームで検討し、研究をまとめる。フィールドワークの計画を新たに立てているチームもある。講師の先生方の評価表には観点別評価の他、「よりよい研究にするための方策」も書いていただいている。それらをもとに研究報告書 Ver. 3、さらには研究論文に反映させていく。

7 本時の振り返り

昨年度までは、チームの何人かでポスター発表する形態だった。しかし、学年末に向けて個人論文を執筆することを鑑みて、この中間発表を機に探究の過程を各個人が振り返り、説明できる水準に至ることを目指すため、発表形態を一人で発表する形に変更した。その結果、一人一人がこちらの意図を理解していることが観察でき、チーム内の探究内容理解の平均化がなされた。

筆者らは講師の先生方から、発表会後に「プレゼンテーションソフトを利用した口頭発表とポスター発表は性質が異なる」という助言をいただいた。

学習者が1年生のときは、プレゼンテーションソフトを利用して発表を行った。会場の前に立ち、聴衆に対して発表を行い、質疑応答に答えるというものである。一方、ポスター発表は、発表者自身で聴衆を集め、発表を行い質疑応答に答える。発表の途中に質問に答える場面もあるし、聴衆のリクエストによっては、重点をおいて発表する箇所が変化する。発表者自身で聴衆をファシリテートして発表する必要がある。この1年と2年での発表に求められる技能の指導を明示的にするべきだった。次年度に引き継ぎ改善をする。

学習者間の質疑応答は非常に積極的に行われ、お互いに探究内容理解を深化させるものになっていた。

【第13回】

1 実施日

令和4年11月26日(土) 1、2限

2 場所

多目的教室

3 内容

中間発表会を踏まえて、各チーム、リサーチクエスションや調査方法を見直す。調査が終わってい

ないチーム、冬季休業中に調査にいく予定のチームは実施計画を立てる。

4 学び

中間発表会では、それぞれのチームの良いところや課題を指摘していただいた。特に調査方法について、「これは必要な調査なのか」、「〇〇の情報を知りたい時はどのような質問が適切か」、「手持ちのデータは適切に採取されたデータか」など、学術における調査データの重要性について指摘いただいたことが多かった。これまでは、校内でのアンケートやインターネットを用いた検索が中心だったが、校外に調査や査読論文などを用いるチームも出てきた。研究ノートをより学術的にしようとする試みが各チームで見られた。

5 次回への課題

作業が早く進むチームは、研究ノートの執筆を開始させることにより、他のチームに雛形・参考材料を示せるようにしたい。冬季休業までに調査を一区切りさせ、研究ノート執筆に繋げていきたい。

6 本時の振り返り

各チーム、指摘されたことを真摯に受け止め、探究内容を修正していた。また、方向性に迷いが生じていたチームも見通しをもって作業を進めることができていた。

【第14回】

1 実施日

令和4年12月10日（土）1、2限

2 場所

多目的教室

3 内容

探究の調査が終わっていないチーム、冬季休業中に調査にいく予定のチームは実施計画を立てる。探究が終わっているチームは探究活動費の精算が終わり次第、研究ノートの執筆を進める。

4 学び

これまでの調査活動は、校内でのアンケートやインターネットを用いた検索が多かった。しかし、冬季休業に向けて、校外に調査に出かける計画を立てるようになった。外部の方との連絡、アポイントメントの取り方など学校外の大人と関係を持とうとするところに学びがあると考ええる。

5 次回への課題

3学期は、研究ノートを執筆開始できるように調査は一区切りさせるようにする。研究ノートの書き方を支援する教材を作成し、次回に配布する。

6 本時の振り返り

探究チーム毎に熱心に調査計画を立てることができていた。外部と連絡を取るにあたって基本的なメールの書き方や、電話の受け答えを指導したが、これらのことが学べる機会として探究活動は有益なものだと思った。万が一失礼があったときは、謝りにいくから大丈夫と学習者が安心する声かけも大切である。

【第15回】

1 実施日

令和5年1月21日（土）1、2限

2 場所

多目的教室

3 協力者

T A（卒業生 2 名）

4 内容

探究の調査が終わっていないチームと冬季休業中に調査に行ったチームはグループ内で共有し、探究内容を修正する。探究が終了しているチームは探究活動研究費の精算が終わり次第、研究ノートの執筆を進める。研究ノートのテンプレートは Word 形式で配布する。1 研究の動機、目的、2 研究の方法、3 研究の結果、4 考察の各項目に探究の成果を入力した。

5 学び

これまでの調査活動は、校内でのアンケートやインターネットを用いた検索が多かった。冬季休業を経て、校外での調査について計画を立てることができるようになった。そして、計画通りに実行した結果をチーム内で共有し考察した。

6 次回への課題

「研究ノート」に必要な資料・データ等を整理し、第 17 回（2 月 4 日）までに完成させる。

7 本時の振り返り

各チームとも残りの時間を考え、会話内容の「熱量」が高かったと感じた。調査内容もインターネットでの調べ学習から、フィールドワークを伴うような調査に変化し、研究ノートを完成させようと取り組んだ。T A からのアドバイスを受け、内容の調整を行い、研究ノートへ反映したまとめをしていた班も見受けられた。

【第 16 回】

1 実施日

令和 5 年 1 月 28 日（土）1、2 限

2 場所

多目的教室

3 内容

研究ノートの完成を目指して執筆を進めた。シェアド・リーダーシップをもとに、メンバー全員で進めた。授業の終わりに、現在の執筆状況（達成度）を、完成を 100% として、パーセンテージで報告させた。また、研究活動費の申請ができていないチームは、締め切り（1/31）に間に合うように、早急に書類を準備するよう連絡した。

4 学び

前回の授業で T A から助言を受け調査項目を加筆修正したチームもあるなど、研究ノートを提出する直前まで、調査を練り直している様子がうかがえた。図書館で資料を探すチームもあった。また、探究活動費で購入したものを使用して調査しているチームもあった。この研究ノートの執筆は、アカデミック・ライティングのルールに従って書くことを学ぶ機会でもある。生徒は、以前 Microsoft Teams に配信した「研究ノートの書き方」を参考にして執筆を進めていた。

5 次回への課題

次回が最終回である。次回 (2/4) の研究ノート提出に向けて、時間が不足しているチームは授業以外の時間にも取り組むようにと伝えた。また、最終のレポート枚数は、A 4 用紙で 4 枚から 6 枚と設

定しているが、2枚、3枚で終わりそうなチームもある。そのようなチームはもう一度推敲し、足りない部分を補うようにする。表やグラフを効果的に使用することも考えていくとよい。

6 本時の振り返り

探究チームごとに熱心に取り組んでいた。提出期限が迫ってきていることもあり、書くことに集中できていたように思う。執筆を誰かひとりに任せるのではなく、メンバー全員で取り組めているチームがほとんどだが、中にはそうではないチームがあった。最後までシェアド・リーダーシップで取り組みたい。

【第17回】

1 実施日

令和5年2月4日（土） 1、2限

2 場所

HR教室（333教室・334教室）

3 内容

最終授業日となるため、執筆中の研究ノートを完成させる。

4 学び

事前に提示したフォーマットに基づいて作成させた。文字のフォントの大きさや参考文献の表記のやり方など、「ルールに基づいて執筆する」ことを学んだ。

5 次回への課題

「イノベーション探究Ⅱ」で執筆した研究ノートの要旨については、イノベーション探究Ⅲにおいて英語に直す予定である。スムーズに取り組めるように、春季休業中から準備させたい。

6 本時の振り返り

すべてのチームが研究ノートの提出を完了することができた。今後は提出された研究ノートの、フォントや参考文献の書き方などをチェックし、修正させて再提出させる。今年度を振り返ると、研究内容が具体化するにつれて、各チームの熱量が上がっていったと感じる。また、各チームでフィールドワークやアンケート調査を計画・実行する場面が多く見られた。教員の支援がなくとも、自分たちの興味関心に基づき行動する姿に、探究の在り方を感じることができた。

オ 総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅲ」（３年・１単位）

１ ねらい

拠点校グローバル科３年生対象の総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅲ」では、１・２年次の課題研究を総合し、「ユニバーサルプログラム」において、価値の普遍化をはかり、未来を見すえた新たな価値を創り出す価値創造力を高める。

拠点校の総合的な探究の時間「イノベーション探究Ⅲ」～ユニバーサルプログラム～では、１・２年次の課題研究を総合し、「ユニバーサルプログラム」において、価値の普遍化をはかり、未来を見すえた新たな価値を創り出す価値創造力を高める。

次の２つの目標を掲げ、２年次に取り組んだ「原因探究」の成果を世界に発信することを目指した。

- ① 異文化理解・多文化協働を通じて、グローバル・リーダーとして必要な社会性を高める。
- ② イノベティブでグローバルな人材に求められる６つの資質・能力のうち、特に新たな価値を創造する力・多様な文化的背景を持つ人々と協働する力・困難な状況を突破する力を向上させる。

２ 概要（実践）

（１）年間計画

学期	月	イノベーション探究Ⅲ	グローバル・コミュニケーションⅢ
１	４月 ～ ７月上旬	アカデミック・ライティング演習Ⅰ期（英語） 研究報告書の英文要約 プレゼンテーション作成	Advanced Academic Writing I
	７月中旬	プレゼンテーション校内発表及び ディスカッション（英語）	Global Issues Presentation
	７月下旬	「イノベーション探究Ⅰ」の研究計画助言	
２・３	８月下旬	アカデミック・ライティング演習Ⅱ期（英語）	Advanced Academic Writing II

（２）実践内容

ア 研究報告書の英文要約

２年次「イノベーション探究Ⅱ」で作成した研究報告書について、その要約を英語で作成することに取り組んだ。

イ 「プレゼンテーション校内発表及びディスカッション」

上記アで作成した研究報告書の英文要約を、京都で学ぶ留学生に対して発表するとともに、各自の研究テーマについて英語で議論した。詳細については、pp. 117-118 に記載している。

ウ 連携

学校設定科目「グローバル・コミュニケーションⅢ」におけるアカデミック・ライティング学習と連携し、教科横断的な学習を通して、論理的思考力及び英語力の向上を図った。

（３）評価の方法

英文要約については、日本語論文の研究内容が十分反映され、論理的に文章にまとめられているかについて評価を行った。ディスカッション及びプレゼンテーションについては、生徒相互の評価及び留学生の方々からの評価及びフィードバックを受けた。

「イノベーション探究Ⅲ」～ユニバーサルプログラム～ 「プレゼンテーション校内発表」

担当教諭 小野田千里 桂カイ 中澤知里 山口理紗

1 実施日

令和4年7月15日（金）5・6限

2 場所

多目的教室

3 協力者

京都府名誉友好大使 15 名、京都府立高校在籍のALT 5 名

4 内容

1 学期に2年次で取り組んだ研究ノートの内容を英語に要約し、探究の内容を英語で発表するという形にアップグレードした。チーム毎に京都府名誉友好大使（留学生等）に探究内容を発表して、助言をえた。実施スケジュールは次のとおりである。

第1回	4月13日	オリエンテーション・役割分担
第2回	4月27日	プレゼンテーションソフトによる資料・要約作成
第3回	5月11日	
第4回	5月18日	
第5回	6月1日	プレゼンテーションソフトによる資料・要約提出
第6回	6月8日	修正
第7回	6月15日	プレ発表（グループ間）
第8回	6月22日	プレ発表（クラス）
第9回	6月29日	
第10回	7月15日	本番（2h）

5 学び

（生徒感想）

- ・自分たちの考えをまとめたものを英語で発表できる機会がありとても良かった。
- ・英語でのプレゼンテーションはとても難しかったが楽しかった。
- ・プレゼンテーションを聞いてもらい、日本の感覚と海外の感覚が違うことを実感した。
- ・自分たちのテーマについて、留学生の国における現状を話してもらえて良かった。
- ・留学生の中には英語が母国語ではない人もいたので、今からでも英会話を頑張れば遅くないのだと気づいた。

（留学生）

- ・生徒が自分の英語力を試すまたとない機会になった。
- ・日本の高校生が考えていることを知れて刺激的だった。
- ・自分が大学院で研究しているような内容に触れていて、大変驚いた。

（教職員感想）

- ・生徒にとって、なんとか会話をつなごうと必死になれる2時間だった。
- ・タイムスケジュール通り、非常にスムーズに進行できたことはよかった。

- ・英語が完璧でなくとも、多少崩れていても、なんとかコミュニケーションをとってみようとする前向きな生徒の姿が見られた。

6 次年度への課題

20名の留学生を募集するために、京都名誉友好大使の他に、留学生ハウス等との連携を密にする必要がある。発表形態について、事前に十分なオリエンテーションができなかった。次年度からは発表形態等に係る事前説明の時間を十分に確保し、生徒が安心して取り組めるように準備する必要がある。

7 授業の振り返り

本プレゼンテーション大会は、運営面に課題は多いが、コロナ禍においても生徒が海外の学生と交流できる機会であり、グローバル科らしい意義のある取組である。生徒の満足度も非常に高い。留学生等の協力者に「次年度もし同じ活動があれば参加したいか」というアンケートをとったところ19人中17人から「はい」という回答を得た（「いいえ」のうち1人は帰国予定のため「いいえ」と回答）ことから、留学生にとっても満足度の高い取組になった。生徒には、なんとか留学生等とコミュニケーションをとろうとする前向きな姿がみられた。また、会話内容を振り返って、言い方がより良くなるように考える姿もみられた。また、留学生の母国では、探究内容についてどう考えているかなど、We b等からは入手できない貴重な情報も対話によって得ることができる取組になった。



カ カナダ・コキットラム市の高校生とのオンライン交流会 (京都府WWL高校生サミットの事前準備レッスン)

1 ねらい

令和4年度京都府WWL高校生サミットの英語グループ・ディスカッションに参加する生徒のうち、希望者を対象に、オンラインでカナダ・コキットラム市の高校生とオンラインで接続し、京都府WWL高校生サミットで議論するテーマ等について意見交換を行う。これによりグローバルな視点で各テーマに関する課題や解決策について学び、身近な地域や日本の伝統・文化等の価値を再発見するとともに、多様な文化的背景を持つ人々と協働する力も身に付ける。なお、参加生徒はカナダの高校生との交流前に、効果的に意見交流するために必要な英語ディスカッションのスキルに関して講義・ワークショップを受講し、実践練習を行う。

2 計画変更

当初の計画では海外インターンシップにおいて、現地の高校生や大学生等と探究活動に係るフィールドワークや世界の伝統・文化や技術について現地調査することを計画していた。しかし、海外インターンシップをオンラインで実施に変更したため、現地の高校生や大学生等とのグローバルな協働学習の機会が設定できなくなった。そこで、カナダの高校生と京都府WWL高校生サミットで議論するテーマについて意見交換する機会を設定し、ALネットワーク京都の連携校を含めて、グローバルな協働学習の機会を提供することとする。

3 概要

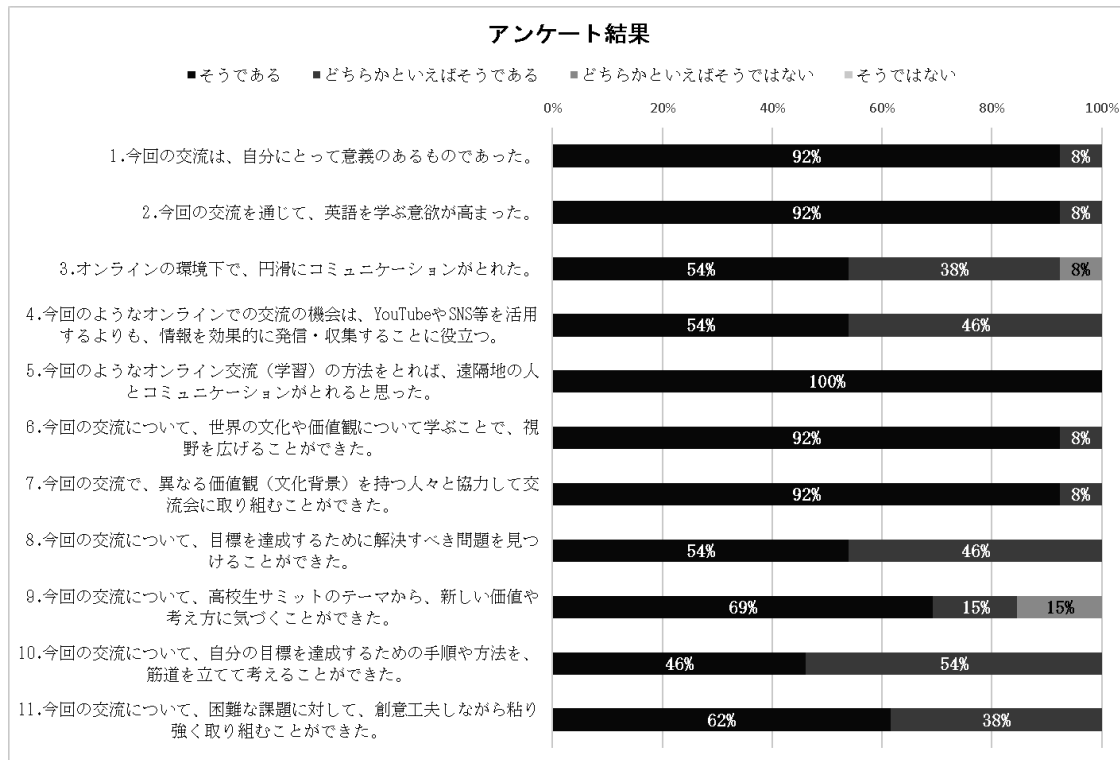
- (1) 日 程 令和4年10月15日(土) 午前8時30分から午後1時まで
- (2) 方 法 自宅等からZoomを活用したオンラインで参加
- (3) 参加者 拠点校・共同実施校・連携校の生徒13人
(鳥羽高校、福知山高校、洛西高校、南陽高校、峰山高校、秋田県立秋田南高校)
- (4) 内 容 **【事前レッスン】※カナダのVector International Academyによる指導**
 - 午前8時30分 サミットで議論するトピックについて英語で議論するための指導
 - 午前10時 新たな3グループに分かれて実践練習**【カナダの高校生との交流会】**
 - 午前11時 グループで日本語と英語で意見交流
テーマ：「文化遺産を活用した観光業について」
「多文化共生社会を実現するための取組について」
「日本とカナダの高校生活の違いについて」
 - 午後12時30分 代表生徒による感想発表、アンケート記入
 - 午後1時 閉会

4 成果

- (1) アンケート結果
次ページ参照。
- (2) 参加者の感想
 - ア 事前学習について
 - ・事前に議論するトピックについて調べるのが大変でしたが、調べているうちに色々な事が知れて良かった。
 - ・スピーチやコミュニケーションについてたくさん指導していただき、楽しかった。
 - ・今回の交流会だけでなく海外の人と話すときには必ず役立つことをたくさん学べた。
 - ・プレゼンテーション能力を高めることができてよかった。

- ・発音をもっと練習しようと思う良いきっかけになった
- ・英語のディスカッションについて上手くできるか不安だったが、事前レッスンで少し自信が持てるようになった。

(1) アンケート結果（回答数：13名）



(2) 参加者の感想

イ カナダの高校生との交流会について

- ・お互いの文化のことについて知ることができた。高校生の中で流行していることや学校開始時間が同じであるが、部活は季節ごとに変わるということが知ることができた。さらに国際交流をしたいという思いが強くなった。
- ・カナダと日本の違いや共通点を知れて興味深かった。カナダには色んな国の人がおり、またカナダの高校生は日本のことをよく知っていたので、私も海外のことをさらに知りたいと思った。
- ・英語を使って気軽に話す機会が少なかったため、非常に楽しかった。
- ・思うように話せなかった時が1度あったが、別の言い方に変えると伝えたいことが伝わった。
- ・カナダの高校生の日本語が上手で自分も頑張ろうと思えるきっかけになった。
- ・国が違って文化の違いもあったが、似ているところもあった。また、話すことが下手でも他のメンバーが助けてくれたので話しやすかった。ただ、この単語が言えないからという理由で話が詰まったので、もっと上手く話せるようになりたいとも思った。
- ・とにかく楽しかったです。将来やりたいことがなくて困っていたのですが、海外関係の仕事も魅力的だと思い始めた。今回の交流会は自分にとってほんとにプラスになりました。

(3) 分析できる成果

昨年度に引き続き、他府県連携校からも参加者を募りながら、京都府WWL高校生サミットと連動して実施できたことはALネットワーク京都の連携において大きな成果である。参加者のうち9割が質問1及び2について、非常に肯定的に回答しており、参加生徒にとって本取組は大きな意義があったと考えられる。

また、参加者の感想から、国際交流の機会が減少している中、海外の高校生と繋がる機会創出することで、参加者の今後のキャリアや英語学習への意欲向上に好影響を与えていることがわかる。

キ 中国・西安交通大学附属中学とのオンライン交流会

1 ねらい

同世代を生きる海外の高校生との交流を通して、多様な文化と価値観を受け入れ、異なる文化背景を持つ人たちと対話する力を身に付ける。また、各校のグループ・プレゼンテーションを通して、お互いの学校と各国、各地域の伝統・文化について学び合うことを通して、京都や日本の伝統・文化や技術を海外に発信するとともに、日本や世界の伝統・文化や技術の持つ新しい価値に気づく力を養う。

2 概要

- (1) 日 程 第1回 令和4年10月19日(水) 午後3時50分から午後5時10分
第2回 令和4年12月7日(水) 午後3時50分から午後5時10分
- (2) 場 所 鳥羽高校
- (3) 参加者 鳥羽高校生徒 10名、西安交通大学附属中学 16名
- (4) 方 法 W e b 会議システム Zoom を活用したオンライン開催
- (5) 内 容
- ア 第1回 午後3時50分 開会、自己紹介
午後4時12分 鳥羽高校プレゼンテーション及び質疑応答
鳥羽高校の紹介・日本の高校生活・休日の過ごし方
午後4時36分 西安交通大学附属中学プレゼンテーション及び質疑応答
西安交通大学附属中学の紹介・中国の高校生活・休日の過ごし方
午後5時10分 閉会
- イ 第2回 午後3時50分 開会、各校学校長挨拶
午後4時12分 西安交通大学附属中学プレゼンテーション及び質疑応答
・鳥羽高校生に紹介したい中国語
・日本や日本人の印象
・中国のお勧めの食べ物や観光地
午後4時36分 鳥羽高校プレゼンテーション及び質疑応答
・西安交通大学附属中学生に紹介したい日本語
・中国や中国人の印象
・日本のお勧めの食べ物や観光地
午後5時10分 閉会



オンライン上の様子



鳥羽高校の様子

3 成果

(1) アンケート結果

尺度については、4が「そうである」、3が「どちらかといえばそうである」、2が「どちらかといえばそうではない」、1が「そうではない」である。

No	質問項目	回	4	3	2	1
1	今回の交流は、自分にとって意義のあるものであった。	第1回	10			
		第2回	8	2		
2	今回の交流を通じて、英語（外国語）を学ぶ意欲が高まった。	第1回	9	1		
		第2回	9	1		
3	オンラインの環境下で、円滑にコミュニケーションがとれた。	第1回	1	8	1	
		第2回	4	5	1	
4	遠隔教育システムを活用すれば、遠隔地の情報を効果的に発信・収集することができる。	第1回	7	3		
		第2回	7	3		
5	遠隔教育システムを活用すれば、誰でもすぐに遠隔地の人とコミュニケーションがとれる。	第1回	7	2	1	
		第2回	7	2	1	
6	今回の交流で、日本や世界の文化について学ぶことで、視野を広げることができた。	第1回	10			
		第2回	8	2		
7	今回の交流で、異なる価値観（文化背景）を持つ人々と協力して課題に取り組むことができた。	第1回	6	4		
		第2回	6	4		
8	今回の授業で、目標を達成するために解決すべき問題を見つけることができた。	第1回	6	4		
		第2回	6	4		
9	今回の交流で、京都や世界の伝統・文化について、それらの持つ新しい価値に気づくことができた。	第1回	3	5	2	
		第2回	7	2	1	
10	今回の交流で、目標を達成するために手順や方法を、筋道を立てて考えることができた。	第1回	6	4		
		第2回	6	4		
11	今回の交流で、困難な課題に対して、創意工夫しながら粘り強く取り組むことができた。	第1回	7	3		
		第2回	7	3		

(2) 交流会に参加した主な理由

- ・他言語を通してその現地の人と関わってみたかったから。
- ・他国の人と関わったことがなくいい機会だと思ったから。
- ・第二外国語で中国語を選んでいて、中国に興味を持ち、今回の交流を通して中国の文化や文化や学校生活について知りたいと思ったから（複数）
- ・鳥羽高校のグローバル科に入ろうと決めた時からこの取り組みに興味があったから。

(3) 交流会に参加した主な感想

ア 第1回について

- ・少し詰まった部分もあったけれど遠い場所でも交流がとてできてよかった。
- ・とてもコミュニケーションするのは大変だったけれど、とても楽しく英語の大切さが分かった。
- ・初めて同級生の中国の生徒さんと話したので少し緊張したけど、後半は新しい価値観や文化に出会えてワクワクしたし、楽しかった。
- ・向こうの1日の生活など知らないことばかりで、たくさんのことを発見することができてとても楽しかった。
- ・向こうの高校生は英語がとても流暢で、日本の自分の英語をもっと上達させようというモチベーションにできた。
- ・向こうの人は英語も日本語も話せてすごいと思いました。

イ 第2回について

- ・普段の授業では知ることのできない新しい価値観に出会うことができて楽しかった。

- ・日本語で話してもらっても意思疎通が難しいなと感じた。言葉の壁はすごく厚いものなんだと知った。
- ・海外の人と交流する機会が普段なかったため、今回の交流で伝える難しさや、伝わった時の嬉しさを知ることができて有意義な時間を過ごせた。
- ・質問したり答えたりするのは楽しかったけどとても難しかった。答えられなかった質問にいつか答えたい。
- ・今まである程度日本語を話せる海外の人としか交流がなかったことに気付かされました。本当に日本語の通じないところでも交流ができるようになりたい。

(4) 今回の経験をこれからの学校生活や将来にどのように活かしていきたいかについて

- ・さらに海外の文化を知る必要があると思った。もっと勉強をしないといけない。
- ・視野を広げて物事を考えられるようにしたい。
- ・外国の人に対しても臆せず話すことが大切だと思った。これからの学校生活に活かしていきたい。
- ・最後まで伝えたいことを伝え切るようにしたい。

(5) 分析できる成果

両校の参加者ともに、本交流会への参加意欲は非常に高く、第1回から積極的に準備に取り組み、交流会当日も質疑応答を熱心に行っていた。アンケート結果からも、本交流会について肯定的な回答が多く、大変意義のある交流となった。

2回の交流を通して特に大きな変化があった項目として、質問項目9「京都や世界の伝統・文化について、それらの持つ新しい価値に気づくことができた。」における肯定的回答率の変化が挙げられる。自信を持って「新たな価値に気づいた」と回答する生徒が増加した。第2回交流会では、西安交通大学附属中学の生徒たちが、中国の若者の間で人気があることとして、日本のアニメやドラマについて紹介するとともに、茶道や抹茶等の日本の食文化についても紹介していたことが要因であると考えられる。グローバルな視点から日本の伝統・文化を考える機会となり、それらの持つ価値に気づくことができたと考えられる。

課題としてはオンライン上でのコミュニケーションの難しさに加えて、生徒の外国語運用能力の向上が挙げられる。生徒たちがより円滑に意思疎通を行うためには、正確な英語の発音や英語でやり取りする力の向上が必要である。しかし、今回の参加者の多くが感想でも述べているとおり、本交流会を通して自身の課題に気づくことができ、外国語学習への動機付けになったことから、グローバルな人材育成の過程における大きな成果とも考えられる。

ク フランス・ヌヴェール高校とのオンライン交流会

1 ねらい

同世代を生きる海外の高校生との交流を通して、多様な文化と価値観を受け入れ、異なる文化背景を持つ人たちと対話する力を身に付ける。また、各校のプレゼンテーションややり取りを通して、お互いの学校と各国、各地域の伝統・文化について学び合い、京都や日本の伝統・文化や技術を海外に発信するとともに、日本や世界の伝統・文化や技術の持つ新しい価値に気づく力を養う。

2 概要

- (1) 日 程 令和4年12月9日（金） 午後5時10分から午後6時10分
※今年度はフランス・オクシタニー州の日本週間の時期に合わせて実施
- (2) 場 所 鳥羽高校
- (3) 参加者 鳥羽高校生徒 6名、ヌヴェール高校生徒 20名
- (4) 方 法 W e b 会議システム Zoom を活用したオンライン開催
- (5) 内 容 午後5時10分 開会
 - ・オクシタニー州の日本週間責任者より挨拶
 - ・各校学校長より挨拶
 午後5時25分 鳥羽高校生の発表
 - ・京都の町並み（清水寺周辺）を動画で紹介
 - ・日本に関するクイズ
 午後5時40分 ヌヴェール高校生の発表
 - ・ヌヴェール高校生によるソーラン節の披露
 - ・ヌヴェール高校の紹介
 午後5時50分 小グループで日本語または英語で交流
 午後6時10分 閉会

3 成果

(1) アンケート結果

尺度については、4が「そうである」、3が「どちらかといえばそうである」、2が「どちらかといえばそうではない」、1が「そうではない」である。

No	質問項目	回答			
		4	3	2	1
1	今回の交流は、自分にとって意義のあるものであった。	5	1		
2	今回の交流を通じて、外国語を学ぶ意欲が高まった。	6			
3	オンラインの環境下で、円滑にコミュニケーションがとれた。		3	3	
4	遠隔教育システムを活用すれば、遠隔地の情報を効果的に発信・収集することができる。	3	3		
5	遠隔教育システムを活用すれば、誰でもすぐに遠隔地の人とコミュニケーションがとれる。	4	2		
6	今回の交流で、日本や世界の文化について学ぶことで、視野を広げることができた。	3	3		
7	今回の交流で、異なる価値観（文化背景）を持つ人々と協力して課題に取り組むことができた。	2	3	1	
8	今回の交流で、目標を達成するために解決すべき問題を見つけることができた。	3	2	1	
9	今回の交流で、京都や世界の伝統・文化について、それらの持つ新しい価値に気づくことができた。	3	3		
10	今回の交流で、目標を達成するために手順や方法を、筋道を立てて考えることができた。	1	3	2	
11	今回の交流で、困難な課題に対して、創意工夫しながら粘り強く取り組むことができた。	2	3	1	

(2) 参加者の感想

- ・ヌヴェール高校の皆さんに日本に関するクイズで楽しんでもらうことができた。また、英語で会話することができたのでいい経験になりました。自分の英語が一応伝わったことが良かった。
- ・フランスの方が使っていた言葉や表現をこれからのフランス語の授業で使っていきたい。
- ・ヌヴェール高校生の日本語能力を目の当たりにして、もっと外国語能力をつけたいと思った。
- ・あまりフランスの人と会話することが出来なかったため、次は積極的に話しかけたい。
- ・これから英語力をもっと伸ばして様々な国の人とコミュニケーションを取りたい。

(3) 分析できる成果

アンケート結果より、参加生徒にとって本取組は大変意義のあるものであったとわかる。また日本語が堪能なフランスの高校生もおり、彼らとの交流を通して、今後の外国語学習の大きなモチベーションになったとわかる。特に第1学年の生徒が3名おり、初めてのオンラインによる国際交流で難しさを感じたようだが、今後の異文化コミュニケーションへの興味が高まったようである。

4 課題

ヌヴェール高校の参加者が多かった一方で、鳥羽高校生の参加者が少なかったため、鳥羽高校生が遠慮する場面が見られた。鳥羽高校生の参加者が少なかった原因としては、フランス・オクシタニー州の日本週間の時期に合わせて実施したが、日本では学期末の時期であったことがあげられる。時差の問題以外にも日仏の学年歴の違いも、オンライン交流では大きな課題となる。

また、オンラインの接続状況が良くなく、ブレイクアウトルームによる交流時間が少なくなったため、今後はトラブルが起こった時のために別の計画を準備する必要がある。

今回の交流では、Zoomのヌヴェール高校の画面と、グリーンバックを用いた鳥羽高校の画面をOBS Studio（ストリーミングアプリ）で合成し、簡易的な超鏡システムを構築した。そのシステムを用いて、ヌヴェール高校と鳥羽高校の参加者が同じ画面に写って記念撮影できるようにした。その結果、お互いの距離が縮まり「きゃー、くっついたー」という声が鳥羽高校の参加者から発せられた。遠隔なのに「くっつく」というまるで、実際に対面しているかのような用語が発せられたことは、参加者にこれまでにない遠隔交流の体験を提供できたと考えられる。立ち位置を調整するために、参加者同士で自然に会話も発生した。今後も、この簡易的な超鏡システムを利用した交流の形を開発したい。



ケ 韓国・ハンヨン高校とのオンライン交流会

1 ねらい

同世代を生きる海外の高校生との交流を通して、多様な文化と価値観を受け入れ、異なる文化背景を持つ人たちと対話する力を身に付ける。また、各校のプレゼンテーションややり取りを通して、お互いの学校と各国、各地域の伝統・文化について学び合うことを通して、京都や日本の伝統・文化や技術を海外に発信するとともに、日本や世界の伝統・文化や技術の持つ新しい価値に気づく力を養う。

2 概要

- (1) 日 程 令和4年12月21日（水） 午後0時40分から午後1時40分
- (2) 場 所 鳥羽高校
- (3) 参加者 鳥羽高校生徒 10名、ハンヨン高校生 11名
- (4) 方 法 W e b 会議システム Zoom を活用したオンライン開催
- (5) 内 容 午後0時40分 開会

・ハンヨン高校教諭より挨拶

午後0時45分 交流

・ジェスチャーゲーム

・音楽クイズ

・TikTok 撮影

・写真撮影

午後1時40分 閉会

3 成果

- (1) アンケート結果

尺度については、4が「そうである」、3が「どちらかといえばそうである」、2が「どちらかといえばそうではない」、1が「そうではない」である。

No	質問項目	4	3	2	1
1	今回の交流は、自分にとって意義のあるものであった。	10	0	0	0
2	今回の交流を通じて、外国語を学ぶ意欲が高まった。	9	1	0	0
3	オンラインの環境下で、円滑にコミュニケーションがとれた。	3	4	2	1
4	遠隔教育システムを活用すれば、遠隔地の情報を効果的に発信・収集することができる。	7	3	0	0
5	遠隔教育システムを活用すれば、誰でもすぐに遠隔地の人とコミュニケーションがとれる。	6	3	1	0
6	今回の交流で、日本や世界の文化について学ぶことで、視野を広げることができた。	7	3	0	0
7	今回の交流で、異なる価値観（文化背景）を持つ人々と協力して課題に取り組むことができた。	8	2	0	0
8	今回の交流で、目標を達成するために解決すべき問題を見つけることができた。	6	3	1	0
9	今回の交流で、京都や世界の伝統・文化について、それらの持つ新しい価値に気づくことができた。	4	3	2	1
10	今回の交流で、目標を達成するために手順や方法を、筋道を立てて考えることができた。	5	4	1	0
11	今回の交流で、困難な課題に対して、創意工夫しながら粘り強く取り組むことができた。	6	4	0	0

(2) 参加者の感想

- ・初めて外国の人と交流して、緊張したけどハンヨン高校の方たちが場を盛り上げてくれてとても楽しかった。
- ・オンラインだけど韓国側のリアクションから思っていた何十倍も優しさが伝わって、こんなに海外の人は優しいのだと気づいた。初めての経験だったけど、仲良くなれて友達のように楽しかったです。
- ・とても楽しかった！交流会が終わってからもDMで連絡を取り合い、それぞれ写真やメッセージでお正月の伝統や住む街を紹介しあったりしていて、とても楽しい！いつか実際に会おう！と約束している！いつかその日が来ることを楽しみに普段の学校生活も頑張っている。
- ・私は韓国語をほとんど話せないからちゃんと交流できるか心配だったけど、先輩やハンヨン高校の生徒のみなさんのおかげで思ったよりちゃんと交流が出来てよかった。交流内容もすごく楽しかった。来年も参加したいと思った。

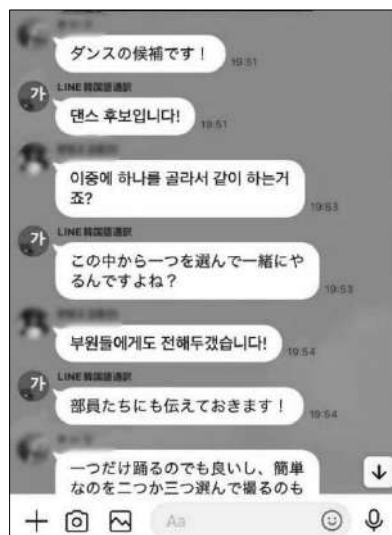
(3) 分析できる成果

アンケートの結果、参加動機には「好き」「文化に興味」といった言葉が目立った。本校生の韓国に対する興味・関心が非常に高いのは、昨今の韓流や K-POP の流行をみても容易にわかる。それゆえ、参加者の本交流に対する期待値は非常に高く、ハンヨン高校生の反応の良さも加わって非常に満足度の高い取組になったことがわかる。また、本取組をきっかけにして、インスタグラムなどで交流を継続させているところが、中国・フランスの海外交流の参加者と異なるところであり特徴である。「いつか実際に会おう」と約束するような、学校を超えた出会いの場となった。

4 課題

ハンヨン高校との交流当日の計画は LINE のグループ機能を用いて、鳥羽高校とハンヨン高校の代表生徒や教員が LINE 内のテキストコミュニケーションによって立案した。特に日本語と韓国語でのコミュニケーションを円滑にするために、「LINE 韓国語通訳」という bot もグループに招待した。これにより母語で入力したコメントが即時に翻訳され投稿されるので、高校生同士のコミュニケーションを促進させ、スムーズに交流内容の計画を立てることができた。

交流当日は 12 月 9 日（金）に実施したフランス・ヌヴェール高校との遠隔交流で試行した簡易超鏡システムを利用して遠隔交流を行った。TikTok にあるような短時間のダンス動画を、日韓の参加者が画面内の空間で隣り合うようにして踊っている動画を撮影できるかを試みた。日韓の高校生にとって TikTok は共通の SNS であり、ダンス動画への興味関心も一致しているので、自然な雰囲気楽しく交流できた。



(3) 京都戦略Ⅲ「研究開発内容の共有と継続的な成果普及」

ア 京都府WWLフォーラム

1 ねらい

「未来を創る課題解決先進国の人材育成～京の智から地球の智へ～」をテーマに、日本各地の高校・大学・企業等と協働し、高校生に高度な学びを提供するAL（アドバンスド・ラーニング）ネットワーク京都の形成および発展に取り組んできた。研究開発及び成果について総括するとともに、ALネットワーク京都の事業協働機関から有識者を招き、未来社会に向けた人材育成について学ぶ機会とする。

2 概要

- (1) 日 時 令和4年12月23日（金）午後1時30分から3時30分まで
- (2) 方 法 Zoomを活用したオンライン開催
- (3) 参加者 22名（本府WWL事業運営委員、本府WWL事業運営指導委員、共同実施校関係者、府内外連携校関係者、他府県WWL拠点校等、他府県教育委員会、大学関係者、）
- (4) 内 容
 - 午後1時30分 開会・挨拶
 - 午後1時35分 本府WWL事業の概要説明
 - 午後1時40分 管理機関の成果報告
 - 午後2時 拠点校の成果報告
 - 午後2時30分 基調講演
講師 阿部健一 教授（総合地球環境学研究所）
題目 「未来を創る言葉と力：関係価値」

3 成果報告内容

別紙資料1（管理機関）（pp.129-133）及び資料2（拠点校）（pp.134-135）のとおり。

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

「未来を創る課題解決先進国の人材育成～京の智から地球の智へ～」

参加申込はこちら！



管理機関
京都府教育委員会
拠点校
京都府立鳥羽高等学校

令和4（2022）年度
京都府WWLフォーラム

開催日：令和4年12月23日（金）午後1時30分から3時30分まで
形式：Zoomによるオンライン開催

内容

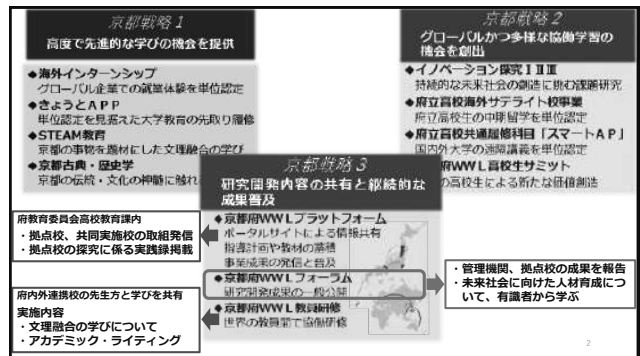
13:30～13:40 開会・あいさつ
13:40～14:20 WWL事業成果報告（管理機関、拠点校）
14:30～15:30 基調講演
講師 阿部健一 教授（総合地球環境学研究所）
題目 「未来を創る言葉と力：関係価値」

申込

上記の二次元コードまたは下記のURLから申し込んでください。
<https://forms.office.com/r/vGCMtB618M>（〆切12月15日まで）

主催・問い合わせ：京都府教育庁指導部 高校教育課 (075)414-5815

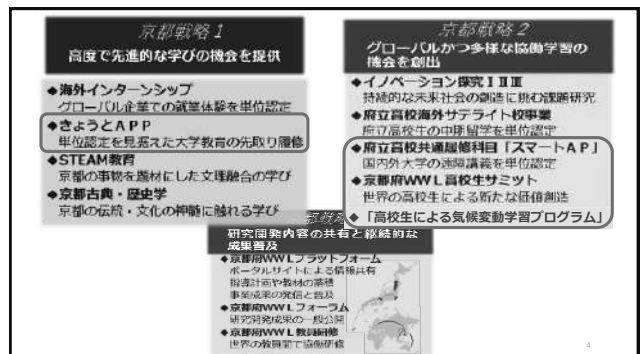
令和4年度京都府WWLフォーラム 管理機関資料



令和2年度指定文部科学省
WWLコンソーシアム構築支援事業

管理機関より成果報告

京都府教育庁指導部高校教育課
指導主事 伊藤恵哉



大学・国際機関と協働した取組

- ① 府立高校共通履修科目「スマートAP」
京都府WW L 高校生サミットとの連動
- ② 大学教育の先取り履修
「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム（ＡＰＰ）」
- ③ 高校生による気候変動学習プログラム

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

趣旨

イノベティブなグローバル人材に求められる資質・能力として、本府WWLコンソーシアム構築支援事業が定義する6つの力のうち、主に次の3つの力の育成に関連し、大学との協働による高度で先進的な学びのプログラムを提供し、大学教育との効果的な接続に資する。

- ②多様な文化的背景を持つ人々と協働する力
③科学的に思考・分析する力
⑤課題解決の枠組みをデザインする力

1 府立高校共通履修科目「スマートAP」

目的 希望する高校生に、社会課題の解決に必要なリサーチ（探究）スキルを習得させるとともに、イノベティブなグローバル人材の基盤となる論理的・批判的思考力と多文化協働力を育成

内容 高校2年生を対象に、6名の大学教員によるリレー講義・ワークショップから成るプログラムをオンライン又はオフラインで受講し、その成果を踏まえて京都府WWL高校生サミットに参加※「取組が十分である」と認められたものには修了証を府教育委員会が発行し、**在籍校の単位**として認める。

令和4年度実施 プログラム内容 ※各回：90分講義を2回実施

回	日程	テーマ・内容	形式（講師）
第1回	4月16日（土）	導入・リサーチスキル①「課題研究の価値、関心の立て方」 杉岡秀紀氏（福知山公立大学地域経営学部 准教授） 江上直樹氏（大阪大学工学部 講師）	遠隔
第2回	5月7日（土）	リサーチスキル②「研究テーマの決定～目的の設定と仮説の構築～」 乾明紀氏（京都大学経済学部 准教授）	遠隔
第3回	5月4日（土）	リサーチスキル③「研究方法について～文献研究と質的研究～」 神田紀世子氏（京都大学大学院工学研究科 教授）	遠隔
第4回	7月16日（土）	多文化協働の手法「Team Work and Collaboration」 Rebecca Axelson氏（豪州・クイーンズランド工科大学）	遠隔
第5回	7月30日（土）	論理的・批判的に考える 柿澤寿信氏（大阪大学国際共創大学院学位プログラム推進機構 准教授）	遠隔
第6回	8月20日（土）	リサーチスキル④「チームでプレゼン研究！～研究計画書を作る～」 乾明紀氏（京都大学経済学部 准教授）	対面 （鳥羽高校）
第7回	9月17日（土）	リサーチスキル⑤「プレゼンテーションの技法」・まとめ 杉岡秀紀氏（福知山公立大学地域経営学部 准教授）	遠隔
第8回	10月29日（土）	京都府WWL高校生サミット	遠隔 （在籍校）

1 府立高校共通履修科目「スマートAP」

カリキュラム開発から実施までの流れ

令和2年

- 制度設計
鳥羽高校SGH事業をベース
- 講師依頼
- 遠隔実証研究

令和3年

- 対象校
鳥羽・福知山
- 在籍校から接続
- 20名参加

令和4年

- 対象校
鳥羽・福知山・洛北
嵯峨野・南陽・峰山
※BYOD先行校
- 自宅から接続
- 27名参加

参加校

講師

【京都】
神吉紀世子 教授 京都大学大学院工学研究科
杉岡秀紀 准教授 福知山公立大学地域経営学部
乾明紀 准教授 京都大学経済学部

【大阪】
柿澤寿信 准教授 大阪大学国際共創大学院学位プログラム推進機構
江上直樹 講師 大阪大学教育学部

【奈良】
クイーンズランド工科大学

2022 京都府公立高等学校
スクールガイドより

講義内容の連携

探究から研究へ

第8回 京都府WWL高校生サミット

第7回 プレゼンテーションの技法

第6回 協働作業による研究計画書作成

第1回～第5回 探究に係るリサーチスキル等の学び

探究の意義と関心の立て方

1. 関心の探求（探究）
2. 関心の整理
3. エッセイ
4. 関心の整理
5. デザイン（図）

1 府立高校共通履修科目「スマートAP」

京都府WWL高校生サミット（高校生国際会議）

■ 府立高校及び他府県連携校から参加者を募り、「『豊かさ』の価値の再創造による持続的な未来社会の創出」をテーマに、少人数のグループで、設定したトピックのうち1つについて、オンライン上で日本語又は英語で議論

トピック

- I 「文化遺産の戦略的活用による活力ある未来社会の創出」
- II 「科学技術と自然が調和する豊かな未来社会の創出」
- III 「多文化共生による平和で安心な未来社会の創出」

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

R 4 京都府WW L 高校生サミット

- 講評者
杉岡秀紀 准教授（福知山公立大学）
スティーブン・ハーダー 教授（京都ノートルダム女子大学）
- 令和4年度参加校（者） 合計53名 13グループ
スマートAP受講者、府立高校（7校）、秋田県立秋田南高校、
学校法人九里学園高校、沖縄県立那覇国際高校、豪州・Mansfield
State High School、留学生（京都府名誉友好大使、京都外大等）

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

今年度の参加者の声

- RQ（リサーチ・クエスチョン）は自分一人で考えるのが、
自分の思い通りにでき楽だと思ったこともあったが、班の
人たちと共有することで客観的に考えられるとわかった。
RQ一つ立てるのにも、考えていくうちに根本からRQが
変わったり、丁寧にすればするほど精度の高いRQができ
ていくのが面白かった。 ※メタ認知力の向上

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

今年度の参加者の声（サミットとの連動）

- スマートAPを通して話し合う能力が付き、今回の高校生サ
ミットで使うことで自分の力になってとても良かった。こ
のような力はこれからの人生においてとても大切なものだ
から大切にしていきたい。
- スマートAPで学んだことを活かした調査や発表、議論がで
きたと思います。

大学・国際機関と協働した取組

- ① 府立高校共通履修科目「スマートAP」
京都府WW L 高校生サミットとの連動
- ② 大学教育の先取り履修
「きょうとアドバンスト・プレイスメントプロ
グラム（APP）」
- ③ 高校生による気候変動学習プログラム

② 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

目 的

本プログラムは、十分な能力と意欲を有する生徒が在
学中に高度な学びにアクセスできる機会を保障すること
により高校教育と大学教育の円滑な接続を図り、京都の
知を活かし、持続可能な未来社会の創出に貢献できるイ
ノベティブなグローバル人材の育成に資することを目
的とし、京都府立大学、福知山公立大学及び京都府教育
委員会の協働により実施するものである。

② 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

概 要

- （1）生徒に各大学の正規授業の履修機会を提供するため、各大学と教育委員会の協働により大学教育の先取り履修プログラムを開発する。
- （2）受講方法はオンライン配信を基本とし、具体的には各大学において定める。
- （3）令和4・5年度の2年間を試行期間とする。
- （4）プログラムの修了者には大学から修了証を交付し、在籍校で高校の単位として認定する。

2 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

先行事例の調査から試行開始までの流れ

令和2年

令和3年

令和4年

- 先行事例の調査研究
埼玉大学
- 2大学と協働し、
制度設計
■ 先行事例の調査研究
広島県教育委員会
広島大学
県立広島大学
- 試行開始
※身分は聴講生
■ 対象
鳥羽・福知山
(全学年)

2 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

京都府立大学

後期科目（10名）

- 教養教育センター
「現代社会と法」
- 公共政策学部
「コミュニティワーク」
- 生命環境学部
「森林の科学」

福知山公立大学

前期科目（6名）

- 地域経営学部
「経営学入門」、「多文化共生論」
- 情報学部
「エンタテインメント情報学」

後期科目（6名）

- 地域経営学部
「地域協働論」
- 情報学部
「ゲーム情報学」

2 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

受講状況 ※前学期終了時点

- 大学が定める要件を満たし、6名全員が修了した。
- 大学側のご配慮により事前オリエンテーションを実施していただいたため、自宅からの受講は概ね円滑に行われた。
- ▲大学からのメールによる連絡・指示が伝わらないことがあった。
- ▲数回分の授業をまとめて視聴し、遅れて授業レポートを提出するケースがみられた。

2 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

生徒のアンケート ※前学期終了時点

- 受講科目について、全員が「非常に満足している」と回答
- 授業の内容理解について、6名中5名が「概ね全ての講義を理解した」と回答
- 受講して良かったことについて（複数選択式）
 - ①講義の内容が興味深かった 5名
 - ③進路を考える上で役立った 4名
 - ④自ら学ぶ姿勢が身についた 4名
 - ⑤知識の習得に役立った 4名
 - ⑥思考力・表現力の育成に役立った 3名

2 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

生徒の感想 ※前学期終了時点

- 以前から気になっていた学問だったため、大学の学科選びに役立った。知らないことを知ることは楽しく、だからこそ大学で学ぶ学科は慎重に選ぶべきだと思った。
- 私の知っていることは遅れているし、思っていた以上に凄い技術にあふれていることを知った。これからもアンテナをはって生活をしていきたい。
- 最終レポートは1,600字以内で書くものでしたが、図書館で本を借り、高校で作成したレポートを振り返りなどし、レポートを提出することができた。

2 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

生徒の感想 ※前学期終了時点

- ▲Wordをあまり使った経験がない状況で、PDFでレポートを提出する必要があり最初は戸惑った。
- ▲高校のテスト期間中も講義はあるため、時間の使い方が大変だった。
- ▲定期的に講義を視聴しなかったため、まとめて視聴してしまい、担当の先生にご迷惑をかけてしまった。
- ▲事前に説明を受けたが、授業支援システムの登録方法やその使い方に困り、講義の視聴が遅れた。

② 「きょうとアドバンスト・プレースメントプログラム」

大学教員の意見 ※前学期終了時点

- 大学生との能力の差は感じられず、円滑に授業を実施できた。
- 一般的な大学生より意欲的で、課題やレポートの出来も遜色ない。
- 熱心な取組姿勢が教員側により刺激となる。
- ▲授業形式が異なる（大学生＝対面、高校生＝オンライン）場合、教員側の負担が増す。
- ▲高校生を受け入れることの大学側のメリットがあまり感じられない。

大学・国際機関と協働した取組

- ① 府立高校共通履修科目「スマートAP」
京都府WWL 高校生サミットとの連動
- ② 大学教育の先取り履修
「きょうとアドバンスト・プレースメントプログラム（APP）」
- ③ 高校生による気候変動学習プログラム

③ 高校生による気候変動学習プログラム

主催 京都環境文化学術フォーラム
(京都府、京都市、総合地球環境学研究所、京都大学
京都府立大学、国際日本文化研究センター)

概要 「京都環境文化学術フォーラム」国際シンポジウムと連動し、府内の高校生を対象に、日本での気候変動に関する専門家による3回の勉強会を通して学んだことを発表する。気候変動に関する理解の促進や行動変容に繋げることを目指す学習プログラム。

③ 高校生による気候変動学習プログラム

参加校 嵯峨野高校、桃山高校、南陽高校、福知山高校（以上、WWL関係校）、北稜高校、立命館宇治高校、堀川高校、工学院高校、塔南高校、紫野高校 ※令和4年度プログラム

プログラム概要
第1回「気候変動の現状について」等
講師：山極壽一（総合地球環境学研究所所長）
木原浩貴（京都府地球温暖化防止活動推進センター）
第2回「気候変動に関する科学的根拠について」
講師：江守正多（国立環境研究所地球環境研究センター）
第3回「気候正義について」
講師：宇佐美誠（京都大学大学院 地球環境学堂教授）

令和2年度指定文部科学省
WWLコンソーシアム構築支援事業

カリキュラム開発拠点校より成果報告

京都府立鳥羽高等学校
教諭 中村 啓介
令和4年12月23日



京都府立鳥羽高等学校
Kyoto Prefectural Torii High School

発表の概要

- 府教委WWL事業が参加生徒に与えた肯定的な影響
- 学校設定科目の研究開発
 - カリキュラムの概要
 - 研究開発のねらい・実践事例の共有方法
 - STEAM領域科目の実践報告
- 発展・充実した課題探究
 - 課題探究の推進ーSGHからWWLへー
 - 生徒の探究成果発表
- 今後の展望

1

1 府教委WWL事業が参加生徒に与えた肯定的な影響

■スマートAP参加者（2年普通科5名、グローバル科4名）

- ・学習の継続と目標達成による自信
- ・発表スキル向上
- ・コミュニケーションスキル向上
- ・英語による演習と議論の経験
- ・京都の文化的価値の創造

■全国高校生フォーラム参加者（R3年12月）

- ・実証的な探究の価値の気づき
- ・探究課題に対する当事者意識



1 府教委WWL事業が参加生徒に与えた肯定的な影響

■きょうとAPPの参加者（前期）2年普通科1名、3年グローバル科2名
（後期）1年普通科2名、グローバル科5名、2年普通科2名、グローバル科2名

- ・大学の授業に対する不安解消
 - 担当の方の丁寧な説明、魅力的な講義
- ・大学の学びを高校の学びへフィードバック
- ・希望進路に適した学びで、志望動機向上
- ・高2で学習したアカデミック・ライティングスキルの活用
- ・自己肯定感の向上

3

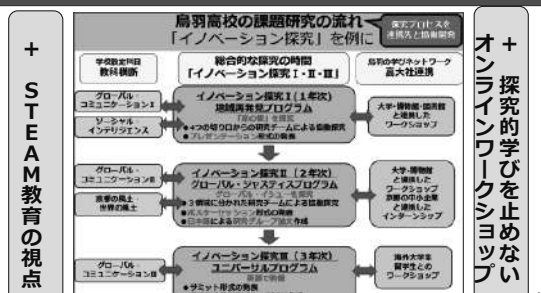
2-1 カリキュラムの概要

+ STEAM教育の視点

鳥羽高校の課題研究の流れ
「イノベーション探究」を例に

総合的な探究の時間
「イノベーション探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」

探究的学びを止めない
オンラインワークショップ



2-2 研究開発のねらい・実践事例の共有方法

学校設定科目実践報告書

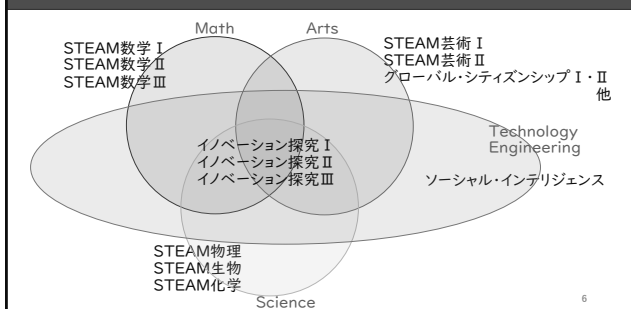
- はじめに
学校設定科目の申請書にもとづいて、設置理由を記入
- 内容
日時、対象、授業の内容、指導の手順等を詳細に記入
- 学び
生徒が授業で何を学んだかを記入します。科目特有の知識・技能、活動体験等について記入します。特に本研究開発で育む6つの資質・能力のうち、どの資質能力が授業で養われたか、あるいは養われることを期待したかを記入
- 次回への課題
改善箇所、工夫できる箇所について記入
- 授業の振り返り
授業全体を振り返って、まとめる

図 WWLで育成する6つの資質・能力

- ① 歴史をとおして世界を探究する力
- ② 多様な文化価値を自分たちと協働する力
- ③ 科学的に思考・探究する力
- ④ 物事に積極的に関与する力
- ⑤ 課題解決の過程でアイデアを生み出す力
- ⑥ 困難な状況で決断する力

5

2-3 STEAM領域科目の実践報告



2-3 STEAM領域科目の実践報告

STEAM数学 I 「図形と計量」分野



Technology Engineering Math Arts

【教材】
micro:bit
(教育用小型マイコン)
iPad
ロイノート

【生徒の活動】
水平距離の計測
仰角の計測
プログラム設計
micro:bitのUIデザイン

2-3 STEAM領域科目の実践報告

STEAM数学 I 「図形と計量」分野



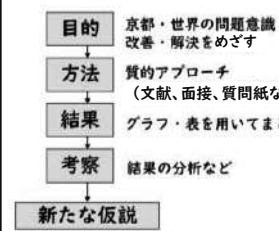
Technology Engineering Math Arts

【教材】
micro:bit
(教育用小型マイコン)
iPad
ロイノート

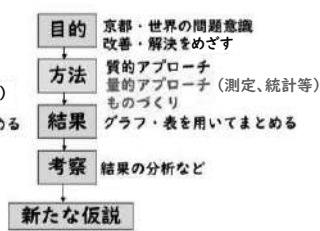
【生徒の活動】
水平距離の計測
仰角の計測
プログラム設計
micro:bitのUIデザイン

3-1 課題探究の推進—SGHからWWLへ—

SGHの鳥羽の探究方略



WWLの鳥羽の探究方略



3-1 課題探究の推進—SGHからWWLへ—

探究課題	SGH時のアプローチ	WWLのアプローチ
東寺のお堀が臭うので改善したい。	お堀周りの通行者にインタビュー調査や質問紙調査を行う。	事前調査から仮説立案。CODを測定する。臭気を測定するなど検証する。
地域の魅力を伝えたい。	対象地域の名所について調べる。インタビュー調査を行う。	位置情報ゲームを用いた地域学習プログラムをデザインする。
化石燃料の代替エネルギーの検討	代替エネルギーの候補を調べる。インタビュー調査を行う。	家庭用の風力発電機のプロトタイプを作製する。



4 今後の展望

- (1) 学校設定科目の研究開発の継続
・各科目の取組をカリキュラム内で、より効果的に結びつける
- (2) 自走によるグローバルなネットワークの維持・発展
・WWLの3年間でオンライン交流の豊富な知見を獲得
・人と人のつながりの重要性を再認識
- (3) 課題解決学習→価値観の変容を促す
・異文化間の協働をととして、見方・考え方を広げる学習プログラムを開発

イ 京都府WWL教員研修

1 ねらい

総合的な探究の時間において、論文を作成する際に必要な技能であるアカデミック・ライティングについて、根拠情報の見つけ方や情報の整理方法、レポートの組み立て方などに関する指導法を学ぶ。

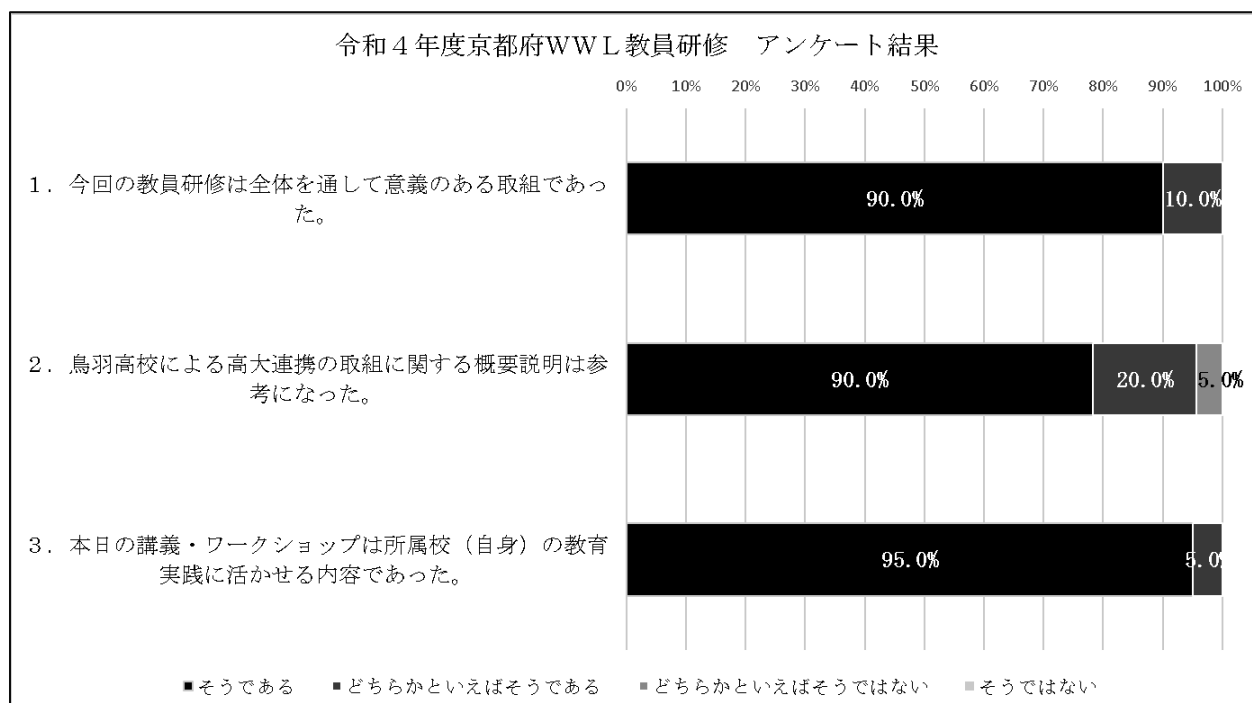
また、ICTを活用したオンライン研修として実施し、ALネットワーク京都を形成する府内・他府県の高等学校の教員が、指導方法等について意見交換をする場とする。

2 概要

- (1) 日 程 令和4年7月28日(木) 午後1時30分から3時30分まで
- (2) 方 法 オンライン開催
- (3) 講 師 大阪大学全学教育推進機構 教授 堀一成 氏
- (4) 題 目 「探究活動におけるアカデミック・ライティングの指導－鳥羽高等学校の実践を例に－」(pp.138-143)
- (5) 内 容
 - ア 高大連携によるアカデミック・ライティングの指導について、鳥羽高校の事例紹介(pp.144-146)
 - イ 生徒作成のレポートを用いた、アカデミック・ライティングの指導について講義・ワークショップ
- (6) 参加者 合計20名
(鳥羽高校、福知山高校、洛北高校、桃山高校、清明高校、北稜高校、朱雀高校、須知高校、秋田県立秋田南高校、沖縄県立那覇国際高校)

3 成果

(1) アンケート結果



(2) 参加者の感想

- ア 今回の研修のテーマについて、御意見・御感想をお書きください。
 - ・「探究」という教員にとっても曖昧なテーマだったので、タイムリーな内容で良かったと思います。

- ・多様な意見を交流でき、非常に学習させてもらいました。またこのような勉強会及び交流会があれば是非参加したいと思いました。
- ・教員間で評価の観点を確認できてよかった。人によって評価が異なったので、ばらつきのないルーブリック作成を進めていきたい。
- ・探究の時間については、どこの学校でも苦勞されていると思いますので、このように実践を共有できるような機会はとても有意義な時間でした。
- ・本校でも探究活動の成果のまとめとして、論文を書かせており、指導・評価については悩みが多かったところでした。ルーブリックの文言作成の注意点など、大変参考になりました。また、鳥羽高校さんの取組についても大変示唆に富む発表でした。
- ・自校の生徒レポートの評価も難しい中で、他校の生徒のレポートを他校のルーブリックで評価することは非常に難しかった。ただ、それを他の先生と共有することで共通点や差異が見え、班全体で考えた評価の質は高かったと思う。なかなか現場でこれだけの時間をかけて評価することは難しいが、本来はこのようなプロセスが必要であることを知れた。
- ・このような探究活動を1年間に何回もテーマを変えてできる方が生徒のスキルがアップする。たとえば、評価は1回目と10回目の変化を比較して自己評価や相互評価をさせる。間の8回は参加(提出)したかしかだだけの評価する。先生の評価の手間が減り、生徒は何度もレポート作成を練習しスキルアップできる。そのような持続可能な評価方法を考えないといけないと思いました。
- ・探究の内容をどう評価するかという話と、アカデミック・ライティングの方法についての話の2つがありました。私は後者の方に関心がありました。

イ 今回の研修の運営全般について、御意見・御感想をお書きください。

- ・ディスカッションのテーマについて事前に示していただけるとありがたいです。どのような観点をもとに事前課題をおこなうのかについて知ること、さらにディスカッションがしやすくなるかと思います。
- ・グループ活動もあり、実りのある研修となりました。
- ・少しグループディスカッションの時間が短く感じましたが、全体を通してわかりやすくスムーズな運営でした。
- ・鳥羽高校の実践例が、とても勉強になりました。
- ・勤務校の探究活動はあまりうまく行っていないので、生徒のモチベーションを高めることができる問いかけの工夫を知りたいです。
- ・話し合いのテーマを理解することが難しかった。うまくグループワークの司会として運営するためにも、事前にテーマが示されていると良かった。
- ・先に手元に講座の資料がある方が、その場で資料に線を引いたりメモしたりできるのでうれしいです。

(3) 分析できる成果

全ての参加者が本研修会を意義のあるものであったと回答している。特に探究活動に本格的に取り組み始めた教員にとっては、日頃から多くの悩みを抱えており、本研修会が該当校の課題解決の一助になったようである。

また他校の教員がグループワークを通して、指導と評価について議論したことにより、新たな視点や気づきが多くあったようである。新学習指導要領で示されている「指導と評価の一体化」にもつながる大変有意義な研修会を開催できた。

4 課題

講師資料等については、あえて事後に配付することで学びが深まると考えていたが、参加者によっては事前の配布を希望する教員もいた。特にグループワークの進め方を事前に知りたいという意見があったことから、当日の指示において、チャットも利用しながら議論する内容を文字に残す工夫が必要であったと思われる。

2022/07/28 @ オンライン研修



OSAKA UNIVERSITY

OSU 2027

探究型授業推進機構

京都府教育委員会 令和4年度京都府WWL教員研修



探究活動における
アカデミック・ライティングの指導
ー鳥羽高等学校の実践を例にー

大阪大学 全学教育推進機構
堀 一成 (ほり かずなり)



2022/07/28 (C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ. 1

2022/07/28 @ オンライン研修



OSAKA UNIVERSITY

OSU 2027

探究型授業推進機構

今日の研修概要

- 2022年4月以降高校探究学習の概要
- 新課程で求められるアカデミック・ライティング要素
- 実践してきたライティング教育・研修
(高校生、学部生、大学院生、教員)
- 鳥羽高校の実践事例紹介 (鳥羽高校 竹林先生担当)
- サンプルレポート評価グループワーク
- 諸活動により得られた知見 (+アドバイス)
- 参加者の皆さんとのディスカッション

2022/07/28 (C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ. 2

2022/07/28 @ オンライン研修



OSAKA UNIVERSITY

OSU 2027

探究型授業推進機構



1. 2022年4月以降
高校探究学習の概要

2022/07/28 (C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ. 3

2022/07/28 @ オンライン研修



OSAKA UNIVERSITY

OSU 2027

探究型授業推進機構

2022年4月から
高校新課程がはじまりました

今回の新課程では「探究」が付く科目が多く新設されました
「古典探究」「地理探究」「日本史探究」
「世界史探究」「理数探究基礎」「理数探究」
「総合的な探究の時間」
「総合的な探究の時間」は
2019年4月から始まっています。

2022/07/28 (C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ. 4

2022/07/28 @ オンライン研修



OSAKA UNIVERSITY

OSU 2027

探究型授業推進機構

「探究」科目への期待と不安

[主に大学教員が(勝手に)抱く期待]

探究心を持った学生が大学に入学してくれるかな？
アカデミック・ライティングの初歩を高校で
経験してくれるかな？

[主に高校教員が抱かれるであろう不安]

「探究」がなにかわからない
なにをどこまで指導すべきか目標がはっきりしない
(自分の経験が乏しいので) どう指導していいかわからない

⇒高校・大学協働で解決しましょう！

2022/07/28 (C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ. 5

2022/07/28 @ オンライン研修



OSAKA UNIVERSITY

OSU 2027

探究型授業推進機構

探究学習の成果評価観点について

探究学習は、どうなれば？
(生徒さんたちが)なにができるようになれば？
良いのでしょうか？

- ◎自分の関心事項を研究課題として明確化できる。
- ◎(グループ探究の場合)仲間とディスカッション・協力して
探究活動を進めることができる。
- ◎自分の進めるべき活動を粘り強く進めることができる。
- ◎自分の探究成果を(広い意味で)
アカデミック・ライティングし、公表できる。

これは堀の考えた例です皆さんも考えてみてください。

2022/07/28 (C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ. 6

探究学習の到達点目標設定の バリエーション



高校により、また探究の科目により、
探究活動の到達点目標の設定はいろいろあるようです。

- ◎調べ学習の成果メモ作成
- ◎手作りポスターで発表
- ◎PowerPointスライドを作って発表
- ◎ミニレポート（論文）の作成

下に行くほど、指導の負担が増えそうな、、
でも、今日の研修はレポートに着目しましょう。

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

7



2. 新課程で求められる アカデミック・ライティング要素

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

8

「総合的な探究の時間」



〔第4章 総合的な探究の時間〕

自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し
解決していくための資質・能力を育成する

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

2（5）探究の過程においては、（中略）情報を
収集・整理・発信するなどの学習活動が行われるよう
工夫すること。

その際、情報や情報手段を主体的に選択し活用できるよう
配慮すること。

平成30年告示高等学校指導要領より抜粋

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

9

「理数探究基礎」



〔理数探究基礎〕

数学・理科の考え方を組み合わせ、課題を解決する
基本的な資質・能力を育成する。

内容 イ（ウ）探究した結果をまとめ、適切に表現する力
内容の扱い（2）実施に当たっては、
探究した結果について、
報告書などを作成させるものとする。

平成30年告示高等学校指導要領より抜粋

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

10

「理数探究」



〔理数探究〕

数学・理科の考え方を組み合わせ、課題を解決する
資質・能力を育成する。

内容 イ 次のような思考力、判断力、表現力等を
身に付けること。

（ウ）探究の過程を整理し、成果などを適切に表現する力
内容の扱い（5）実施に当たっては、
探究の成果などについて、
報告書を作成させるものとする。

平成30年告示高等学校指導要領より抜粋

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

11

探究科目以外でもライティング要素が



〔数学〕

目標（2）数学的な表現を用いて事象を
簡潔・明瞭・的確に表現する力を養う。

〔理科〕

物理基礎 3. 内容の扱い イ
情報の収集、仮説の設定、実験の計画、実験による検証、
実験データの分析・解釈、法則性の導出などの
探究の方法を習得させるようにするとともに、
報告書などを作成させたり、
発表を行う機会を設けたりすること。

平成30年告示高等学校指導要領より抜粋

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

12

探究科目以外でもライティング要素が

[外国語 論理・表現III]

1. 目標 (3) 書くこと (イ)

日常な話題や社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、支援をほとんど活用しなくても、複数の資料を活用しながら、多様な語句や文を目的や場面、状況などに応じて適切に用いて、意見や主張などを、読み手を説得できるよう、論理の構成や展開を工夫して複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝えることができるようにする。

平成30年告示高等学校指導要領より抜粋

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

13



3. 堀が実践してきた ライティング教育・研修

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

14

学部学生対象ライティング教育

- アドヴァンスト・セミナー「学術的文章の作法」
アカデミック・ライティングの基本を
15回のアクティブラーニング授業で習得
受講者約20名
- 教養科目「試して学ぶ物理学入門」
実験ノートの取り方、レポートの書き方も指導 受講者約20名
- 「阪大生のためのアカデミック・ライティング入門」配布
大学リポジトリから自由にダウンロードできる
<http://hdl.handle.net/11094/71454>
- 阪大ウェルカムチャンネル (YouTube) で
アカデミック・ライティング説明動画を配信
<https://www.celas.osaka-u.ac.jp/education/support/study-skills/>

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

15

大学院生対象ライティング教育

- 大学院科目「学術的文章の作法とその指導」
アカデミック・ライティングの基本とその指導法を
15回のアクティブラーニング授業で習得。
ルーブリックを利用した多数回相互評価を導入。
受講者数は毎年だいたい20名
- 附属図書館ラーニング・サポーター研修
附属図書館で学習支援にあたる大学院生（ラーニング・サポーター）の活動を有効にするための研修。
アカデミック・ライティング指導法を含む。年2回

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

16

大学院生対象ライティング教育 で利用する評価ルーブリック例

※評価項目は、各科目の学習目標に基づき、評価項目を設定する。

※評価項目は、各科目の学習目標に基づき、評価項目を設定する。

評価項目	評価基準	評価結果
1. 学術的文章の作法	学術的文章の作法を正確に理解し、適切な形式で記述できる。	○
2. アカデミック・ライティングの基本	アカデミック・ライティングの基本を正確に理解し、適切な形式で記述できる。	○
3. 学術的文章の作法	学術的文章の作法を正確に理解し、適切な形式で記述できる。	○
4. アカデミック・ライティングの基本	アカデミック・ライティングの基本を正確に理解し、適切な形式で記述できる。	○
5. 学術的文章の作法	学術的文章の作法を正確に理解し、適切な形式で記述できる。	○
6. アカデミック・ライティングの基本	アカデミック・ライティングの基本を正確に理解し、適切な形式で記述できる。	○
7. 学術的文章の作法	学術的文章の作法を正確に理解し、適切な形式で記述できる。	○
8. アカデミック・ライティングの基本	アカデミック・ライティングの基本を正確に理解し、適切な形式で記述できる。	○
9. 学術的文章の作法	学術的文章の作法を正確に理解し、適切な形式で記述できる。	○
10. アカデミック・ライティングの基本	アカデミック・ライティングの基本を正確に理解し、適切な形式で記述できる。	○

大学院生が作成した
レポートを、完成直前段階で
評価するためのルーブリック
です。

画面では詳細が見づらいと
思います。
元のPDFファイルも
提供していますので、
そちらをご覧ください。

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

17

大学教員を対象とした研修などの取り組み

- 大阪大学高大連携物理教育セミナー
- ライティングFDプログラム
「科目の中でのアカデミック・ライティング指導法」
- ライティング指導教員マニュアルの公開
- 「あらためて、ライティングの高大接続」
ひつじ書房 の発刊

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

18

大阪大学の主な高大接続活動



大阪大学の高大接続活動は、
スチューデント・ライフサイクルサポート（SLiCS）センターが
窓口となっています。

- 大阪大学SEEDSプログラム
高校生が大阪大学で科学の研究を体験する
- 阪大生「高大接続サポーター」による学習アドバイス
- 高校生大学訪問の受け入れ（学生交流・キャンパス見学）
- OWWL（ワールドワイドラーニングコンソーシアム）実施協力
- OSDGs@HANDAI, SGH甲子園
- 高校教員向け「探求学習指導セミナー」実施

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

19

（堀担当の）高校生対象ライティング教育



- 大阪大学SEEDSプログラム
高校生が大阪大学で科学の研究を体験する
約150名、夏休みにアカデミック・ライティング講習
- 京都府立鳥羽高校 「イノベーション探究II」
2年生 80名 文理合同 1年間4回（夏休みは半日集中）
研究法・ライティング・ポスター発表
- 大阪府立大手前高校 2年生 30～40名 文系コース
1年間6回 総説・リーディング・ライティング
- 大阪教育大学 附属高等学校池田校舎
1年生120名、2年生120名
1年生は総説・リーディング、2年生はライティング

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

20



4. 鳥羽高校 竹林先生の事例紹介

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

21



5. サンプルレポート 評価グループワーク

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

22

（注意）

この後のディスカッションの参考に提供する
堀のルーブリック評価例は
あくまで一例であり、決して
正解や
その通りの評価をしなくてはいけないもの
ではありません

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

23

鳥羽高校ルーブリックを利用した 探究活動評価グループワーク 1



先に配布し、参加の皆さんに事前ルーブリック評価作業をお願いしている、
鳥羽高校の生徒さんが作成した研究レポートに基づく、
探究学習の評価結果を情報共有しましょう。

まずは、3つのレポートを参考情報に、
レポートから読み取れる探究活動全体の評価結果を
グループ内で説明してください。

（各自3分程度、全部で15分くらい？）

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

24

鳥羽高校ルーブリックを利用した 探究活動評価グループワーク 2



ひととおり、各自の評価結果を共有できましたら、
グループ全体で討論してください。

個別の評価結果は大体一致していましたか？
それとも結構ばらつきがありましたか？

大体一致⇒評価観点を生徒とどう共有するか？
ばらつきがあった

⇒なぜ評価に違いが出たか？ゆれを少なくするには？

をグループ内で話し合ってください。(全部で10分くらい？)

終わったら、ブレイクアウトルームを抜けてください

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

25

鳥羽高校ルーブリックを利用した 探究活動評価全体共有ワーク



グループで議論した内容を、全体で共有しましょう。
各グループ代表の方に発言をお願いします。

グループメンバー個別の発言を紹介すると

時間がなくなりますので、

特徴的な評価例、グループで話し合ったこと
を紹介して下さい。

(ひとグループ3分程度、全部で15分くらい？)

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

26

鳥羽高校レポート例を利用した ライティング評価グループワーク



今回は、レポート個別のライティング評価について考えてみましょう。

グループ全体で討論してください。

3つのレポートを、レポートそのものとみて、

アカデミック・ライティング成果として評価すると仮定しましょう。

さきほどの鳥羽高校ルーブリックにもいくつか評価項目がありますが、
(高校での)ライティング評価にはどのような項目が必要か？

(さっきと同じく)評価観点を生徒とどう共有するか？

をグループ内で話し合ってください。(全部で10分くらい？)

終わったら、ブレイクアウトルームを抜けてください

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

27

鳥羽高校レポート例を利用した ライティング評価全体共有ワーク



グループで議論した内容を、全体で共有しましょう。
各グループ代表の方に発言をお願いします。

やはり個別の発言を紹介すると

時間がなくなりますので、

特徴的な、グループで話し合ったこと
を紹介して下さい。

(ひとグループ2分程度、全部で10分くらい？)

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

28



6. 高大接続活動により 得られた知見



高大接続活動をして得られた知見



- ◎ (大学・高校ともに) 教員が丁寧に指導できるのは
30名くらいが限度 (担当者数の問題が出てくる)
- ◎ 高校の先生の取り組み意欲は高い。
探究科目指導経験は意外に短い。⇒指導法がわからない。
ですが(短時間の)研修実施により
[改善されたこと] 基本的な指導手順をわかってもらえた
[改善されないこと] 評価法はまだ自信が持てない
- ◎ 高校生が取り組むライティングにどのような問題があるか？
探究(研究)の手順がわかっていない
アカデミックな記述の必要要件がわかっていない

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

29

2022/07/28

(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.

30






7. 高校教員のみなさんへの提言

2022/07/28
(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.
31




得られた知見に基づく (高校教員のみなさんへの) 提言

- ◎各高校の実情にそったライティング教育の到達目標・カリキュラムをつくりましょう
- ◎相互活動研修のシステム整備を進めましょう
(なるべく多くの仲間を増やしましょう。対面では限界が)
- ◎高校ニーズに沿った研修内容改善を提案しましょう
(ループリックの共同開発、教員自身のアカデミック・ライティング経験蓄積など)
- ◎(大学を含む) 周辺組織に協力要請しましょう
(短期でなく継続して協働できる仕組みを確立しましょう)

2022/07/28
(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.
32




文献情報

春日美穂・近藤裕子・坂尻彰宏・島田康行・根来麻子・堀一成・由井恭子・渡辺哲司(2021)
『あらためて、ライティングの高大接続—多様化する新入生、応じる大学教師』
ひつじ書房 ISBN978-4-8234-1082-6

堀一成・坂尻彰宏・進藤修一・柿澤寿信・金泓謹・田中誠樹・竹林祥子・大泉幸寛・宮崎雄史郎(2020)
『高大連携により取り組む高校生に対するアカデミック・ライティング教育の実践』
『大阪大学高等教育研究』Vol.8, pp. 51-60. 大阪大学全学教育推進機構
<https://doi.org/10.18910/75500>

京都府教育委員会・京都府立鳥羽高等学校・京都府立福知山高等学校(2022)
『令和2年度指定WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業
管理機関 研究報告書 <第2年次>』
<http://www.kyoto-be.ne.jp/soumu/upload/040330WWL.pdf>

2022/07/28
(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.
33




文献情報

堀一成・北沢美帆・山下英里華(2022)
『ダメ例から学ぶ 実験レポートをうまくはやく書けるガイドブック』
羊土社 ISBN978-4-7581-0853-9



理系の探究学習、理科の自由研究、SSH校などで、高校生の皆さんにも活用してもらえる内容になっています。高校の先生方も指導の参考にしてください。(宣伝ですみません)

2022/07/28
(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.
34




参考Web情報

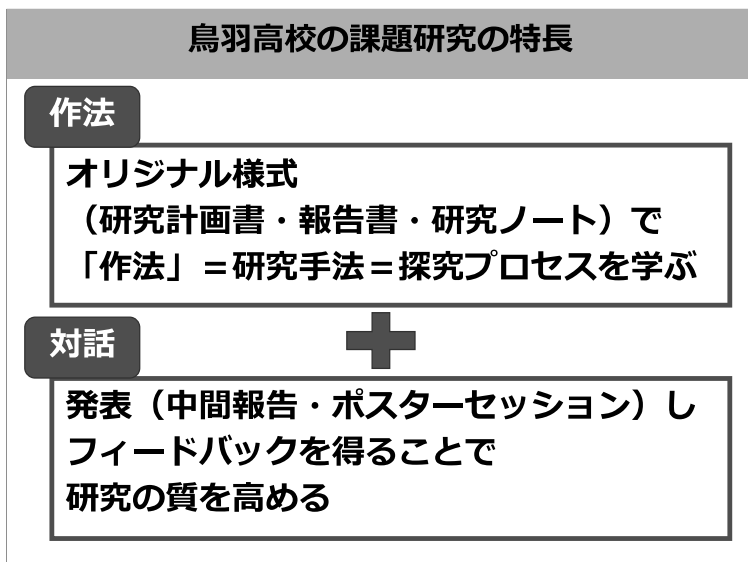
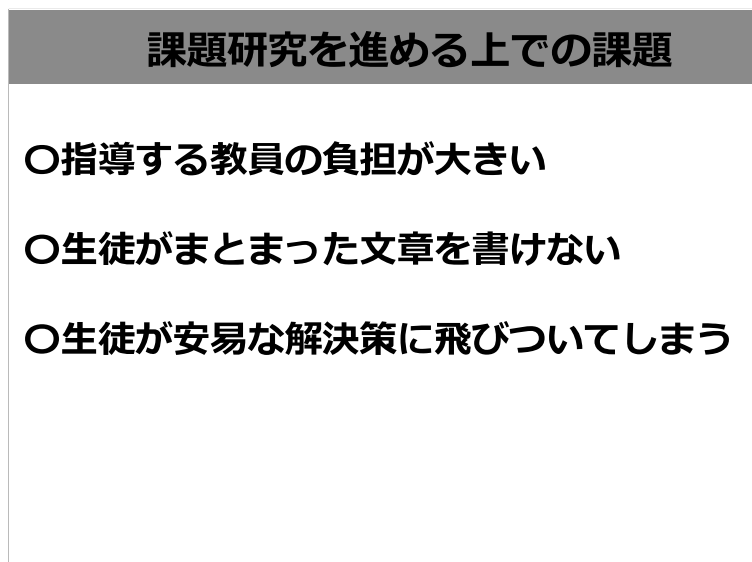
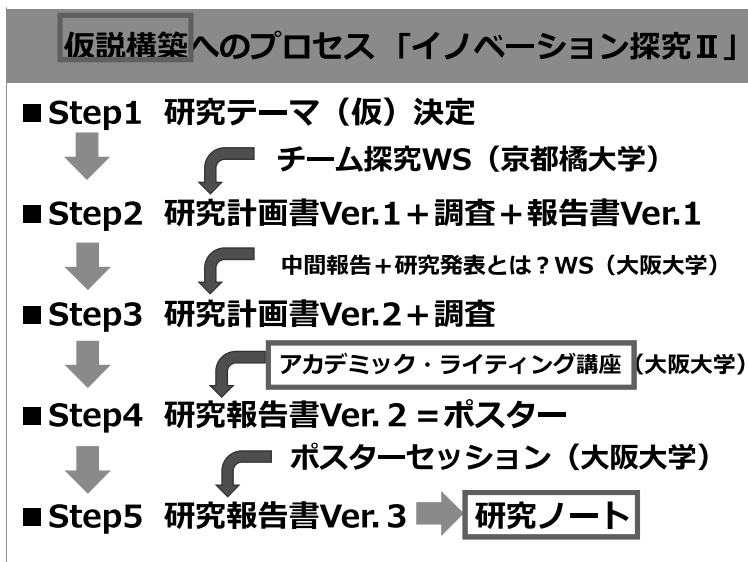
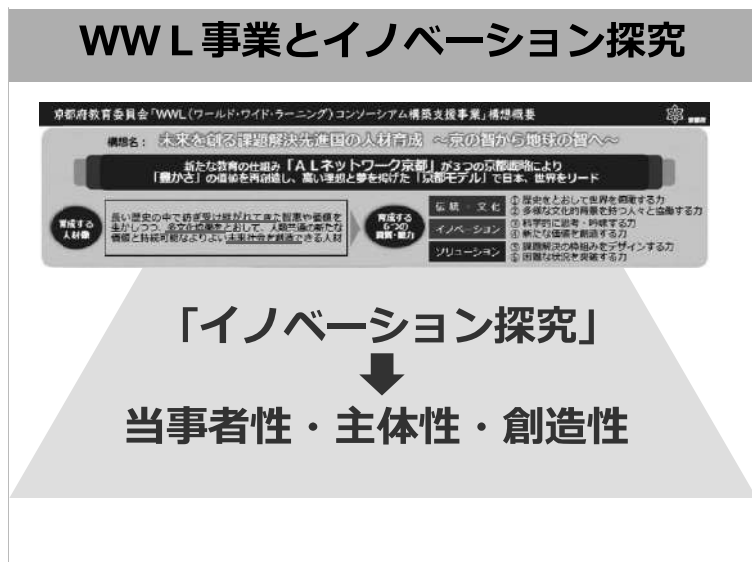
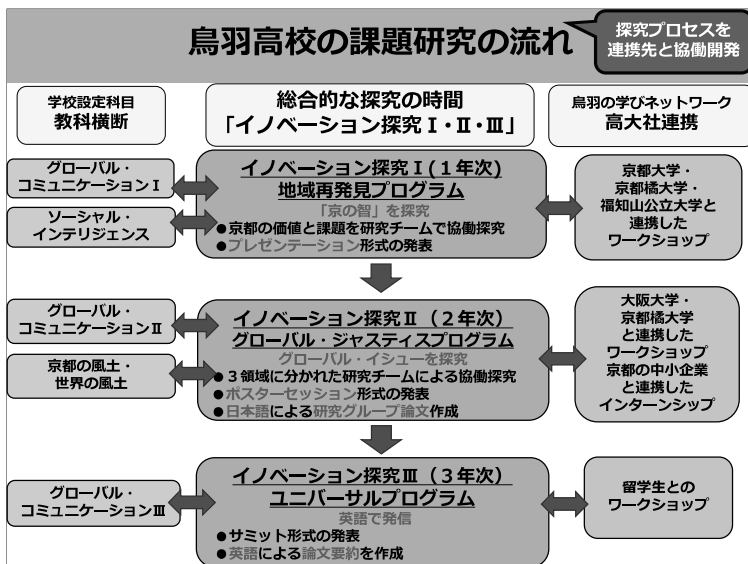
東京学芸大学
『高校探究プロジェクト』
<https://g-tanq.jp/>



探究学習とはなにか、どのような心構えで進めるか、などを、高校生の皆さんにわかりやすく伝える内容になっています。生徒さんたちに、まずは、ここの動画をみてみればとご指導いただくと、先生方の労力削減につながると思います。

2022/07/28
(C) 2022 HORI Kazunari, Osaka Univ.
35

資料 2



鳥羽高校オリジナル様式

令和4年度 イノベーション探究Ⅱ 「研究計画書」 Ver.1

研究 チーム	リーダー 氏名	氏名
	氏名	氏名
	氏名	氏名
	氏名	氏名
	氏名	氏名

作成月日 令和4年 月 日

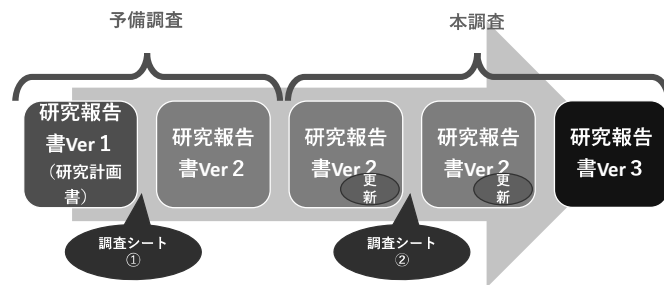
0. 最初の研究テーマ=主題 (Subject area)

1. 当初のリサーチエディション (RQ) = トピック (Topic) を疑問文にしたもの

2. 掘り下げるための RQ = 当初の RQ を明らかにするための小さな問い *研究チームのメンバー数以上

RQ①	RQ②
調査方法	調査方法
調査担当者 ()	調査担当者 ()

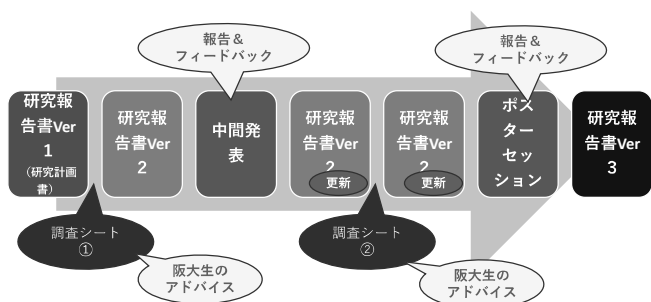
“更新”を繰り返す研究（探究）活動



京都橘大学乾明紀准教授ワークショップ資料（令和4年5月）より

8

さらに、報告の機会があります
(フィードバックによって質を高めます)



京都橘大学乾明紀准教授ワークショップ資料（令和4年5月）より

9

鳥羽高校の課題研究の特長

対話 をするには…

伝わる工夫・技術が必要

「『伝える』と『伝わる』には大きな隔たりがある。」（福知山公立大学杉岡秀紀准教授）

「アカデミック・ライティング講座」
ダメレポート、店長店員ゲームなど



「ツッコミシート」

ツッコミのための問い一覧＝ツッコミシート

（例）日本の科学技術における研究力低下問題について考える

ぶつける問い	取り出される問いの例
① 本当に？＜信憑性＞	① 日本の科学技術研究力は本当に低下しているのか。
② どういう意味？＜定義＞	② そもそも研究力が「低下する」ってどういうことか/国の「研究力」ってどう定義されているのか（どうやって測るのか）
③ いつ（から/まで）？＜時間＞	③ いつから日本の研究力は低下しはじめたのか/いつから研究力低下が問題視されるようになったのか/研究力低下が問題になったのはこれが最初か
④ どこで？＜空間＞	④ 他の国で同じような研究力低下は起きていないか（問題視されていないか）
⑤ だれ？＜主体＞	⑤ だれが研究力低下を指摘しているのか（憂慮しているのか）/だれの研究力が低下しているのか（と言われているのか）
⑥ いかにして？＜経緯＞	⑥ どのような過程を経て研究力が低下してきたのか（急にか、徐々に）

戸田山和久(2022)『最新版 論文の教室 レポートから卒論まで』 NHKブックス より

伝わる工夫は進路指導・キャリア教育にも活用

小論文・面接・ディスカッション対策として
アカデミック・ライティング講座で学んだことを活用できる。



さらには将来の学修や研究、仕事にも役立つ。

生徒に伝えていること

「書くにしても話すにしても、どのようなテーマであっても、意識してほしいポイントは構成です。」

構成のイメージ

2. 1の根拠となる事実や具体例を異なった視点や立場から複数挙げます。字数や時間次第で2つないし3つを判断します。

1
意見＝主張＝結論

1. まずあなたの意見を読み手、聞き手にわかりやすく伝えます。主張・結論を明確にするのです。

2-①
視点＝根拠

2-②
視点＝根拠

3-③
視点＝根拠

3 = 1
意見＝主張＝結論

2'. 視点にオリジナリティがあるとよりよいです。

3. 字数や時間に余裕があれば、最後にもう一度1を確認。「だから1である」と結びます。

まとめ

○指導する教員の負担が大きい

○生徒がまとめた文章を書けない

○生徒が安易な解決策に飛びついてしまう

アカデミック・ライティングは
課題の解決策＋進路指導、キャリア教育

まとめ

アカデミック・ライティング



汎用性の高い伝える工夫・技術

(4) 共同実施校（京都府立福知山高等学校）の取組

1 具体的な取り組みと成果

(1) 地域課題から、世界を見つめる「地域課題研究」

文理科学科第1学年の総合的な探究の時間「みらい学Ⅰ」では、京都府北部地域の課題について、各自の興味関心に基づいてテーマを設定し、SDGsの視点を踏まえた地域課題研究に取り組んでいる。生徒たちにはアンケートやインタビュー、フィールドワークなどによる一次データの収集と分析、自ら行動しその結果を発表することを求めている。また、事業協働機関である福知山公立大学 杉岡秀紀氏には探究活動に係るガイダンスを実施していただき、研究者から研究に関する作法を学ぶ機会も設定している。成果として、地域課題をベースとした探究活動の流れを確立できたこと、そして地域と連携する方法や連携先の素地ができたことが挙げられる。

普通科の総合的な探究の時間「みらい考」では、「みらい学」で確立した手法や成果を活かし、身の回りの課題について探究する取組を行った。主に1学年では課題についての調査、2学年ではその課題の解決に向けた具体的行動のデザインと実践を行い、その成果の発表をすることとしており、本年度においてその流れを完成させることができた。

なお、今年度は「校歌'ive プロジェクト」に取り組んだ普通科の生徒たちが福知山公立大学主催の2022 地域活性化策コンテスト「田舎力甲子園」に応募し、最終11 策（全国54 策中）の1つに選ばれた。本プロジェクトは、廃校となった学校の校歌をアーカイブして、廃校を卒業した方がいつでもどこでも校歌にアクセスできるモデル構築を目指した取り組みである。文理総合科の探究活動の指導方法等が、普通科の探究活動にも成果として着実に広がっている。

(2) 高度な学びの機会の提供

ア 海外オンライン・インターンシップ

昨年度に引き続き、希望生徒が拠点校の生徒とともに海外オンライン・インターンシップに計2回参加した。海外渡航が困難な状況が続く中、海外事業所（台湾・上海）の現地社員の方々からグローバルに活躍するための資質・能力を学ぶことができる大変貴重な機会となった。特に現地社員の方々が日本語で流暢に説明される様子を目の当たりにし、グローバル人材の良いロールモデルを示していただいた。なお、事前学習として行われた株式会社片岡製作所京都本社レーザ工場訪問日には、海外オンライン・インターンシップ参加者が、事業協働機関である金剛能楽堂を訪問し、金剛龍謹氏による能楽の実演と講話を通して日本の伝統・文化について学ぶ機会も得た。

イ 府立高校共通履修科目「スマートAP」

今年度4名の生徒が参加し、大学教員による講義・ワークショップの受講により大学初級レベルのリサーチスキル等の習得に向けて取り組んだ。昨年度は同じ学校の生徒でグループ活動に取り組んだが、今年度は対象校が拡大されたことにより、鳥羽高校以外の府立高校生とディスカッションやグループ活動の時間が多くあり、府内の多様な地域課題や異なる考え方に触れる機会が増えた。なお、参加者の一人が学校のグループ探究で取り組んだ「オートミールを普及させられる料理は作成可能か」で、関西学院高等部主催「中・高生による探究の集い 2022」コンテスト部門において第2位となり、「スマートAP」の学びを通して得たスキルを在籍校の探究活動に活かすことができている。

ウ 「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム（きょうとAPP）」

今年度より試行を開始した「きょうとAPP」に希望生徒が参加した。福知山公立大学前期科目については計3名の生徒が参加し、全員に対して大学から修了証が発行された。後期科目につい

ては、3名が京都府立大学の科目を、1名が福知山公立大学の科目を聴講し、(7)名が修了した。受講生徒には、大学のハイレベルな講義の内容に魅力を感じただけではなく、自分の進路選択において大きな影響を受けたものもあり、大変有意義な機会となった。なお、令和5年度も引き続き、本プログラムの試行に取り組む。

エ 「高校生による気候変動学習会」

事業協働機関である総合地球環境学研究所等が実施している気候変動に係るオンライン学習会に本校1名が参加した。合計3回の勉強会と課題の提出を通して、気候変動の危機的な状況を学び、課題に対して自分事として考え取り組む必要性を実感した。令和4年11月14日には京都国際会館で開催された京都環境文化フォーラム・国際シンポジウム並びに第13回「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式に出席し、府内高校生の代表の一人として選ばれ、2名の殿堂入り者とパネルディスカッションを行った。

(3) 「国際理解教育」の充実

国際理解教育の充実については、今年度もJICA 関西と連携して国際理解プログラム「JICA 国際協力出前講座」を実施した。青年海外協力隊として西アフリカのセネガル共和国で小学校教員をされた藤原真美氏を講師にお招きし、セネガルでの活動及び国際協力の現状についてオンラインで御講演いただいた。

加えて、2年生文理科学科の生徒を対象に、外務省「高校講座」を実施した。外務省領事局法人テロ対策室所属で、スーダンとレバノンの日本大使館で勤務した経験のある梶原祐馬氏を講師にお招きし、海外勤務や国際協力についての御講演いただいた。

また、アジア高校生架け橋プロジェクトをとおして、タイの留学生を受け入れ、日々の授業や探究活動に加えて、英語部における文化交流のイベントで講師を務めるなど、本校の国際理解教育を促進する存在となった。

なお、本校独自のプログラムとして、異文化理解促進とディスカッションスキルの習得等を目的に、文理科学科第1学年対象の「福高グローバル・リーダーシップ・プログラム語学研修」を今年度も実施し、生徒たちはオールイングリッシュで2日間のプログラムに取り組んだ。

2 次年度について

(1) 探究活動について

SDGsの視点を重視し、地域課題が世界でも共通する課題であることに気づかせ、グローバルとローカルをつなぐ取組は継承しつつ、科学的に思考・吟味する力、新たな価値を創造する力をさらに伸ばせるように、テーマ設定や実践活動や研究活動を深めることが出来るように計画的に実施していきたいと考えている。

(2) 国際理解教育について

国際交流、国際協力、そして英語を含めたコミュニケーション力の向上という3つを柱とし、取組を継続する。また、それぞれの取組内容を互いに上手く融合させて行く仕組みを構築しつつ、その仕組みを効果的に実行するための学校全体の指導体制と生徒の支援体制を整備していきたいと考えている。

(3) 普通科の探究活動の充実

地域活性化・福高活性化をテーマとし、地域課題を自分事として捉え、解決に向けた方策を提案し、その提案をより具体化して実施する活動をより計画的に、効果的に進めていくことができるように、指導体制を整備したいと考えている。

参考1 福知山高校文理科学科第1学年総合的な探究の時間「みらい学Ⅰ」年間計画

1 学期

回	月	週	時間	大きな流れ	学習内容	具体的な活動
1	4	15	1	みらい学開講	開講式・アイスブレイク	みらい探究部長挨拶、ガイダンス、アイスブレイク
2		6	1	探究活動の意義	特別講義	福知山公立大・杉岡氏の特別講義「探究活動と地域課題研究」
3	5	13	1	SDGs×地域課題研究	SDGsと地域課題	SDGsの各項目及び福知山の抱える課題について概要を学ぶ
4		27	1	探究スキルの学習	キーワードマッピング	KJ法を用いて、地域課題についてグループで考えを共有する
5		3	1		探究活動における図書館の活用方法	図書資料の活用方法と参考文献・引用文献について
6	6	10	1		Teamsを利用した協働	Teamsの基本的な使用法とファイル共有による同時編集作業について
7		17	1		スキヤニング・スキミング	「ぐるぐる読書会」をととして、スキヤニングやスキミングの手法を身につける
8		24	1		情報リテラシー・論文検索	情報の信憑性について学ぶ。CiNiiやGoogle Scholarを使って論文検索をする手法を身につける
9	7	10	1	テーマを決める	探究テーマの検討	KJ法を用いて、これから研究を進めていくテーマについて検討する

2 学期

夏季休業期間

(課題) テーマについて書籍・新聞・インターネット等を用いたリサーチ

10		9	1	RQ設定	探究テーマの交流	グループ内で、夏季課題で調査してきた内容を共有し、自分たちのテーマとして選ぶものを検討する
11	9	16	1		RQについて学ぶ	RQについての講義を聴き、自分たちが選んだ探究テーマについてRQの案を立てる
12		30	1		問いを磨く	前回立てたRQの案を磨き、より意義のある実現可能な探究テーマにしていく
13		7	1	研究計画書の作成	研究計画書について学ぶ	研究計画書の書き方や目的を学び、自分たちの研究の計画を立てる
14	10	21	1	調査・研究活動	課題の背景・現状等について調査する	図書やインターネット資料等を用いて、課題の背景や原因、先行研究や事例について調査する。調べた内容を元に、研究計画書を作成する
15		28	1			
16		4	1			
17	11	11	1			公開授業（令和3年度中丹地方中高連携推進会議）
18		18	1		研究方法の策定	アンケートやインタビューなど、自分たちの研究に適切な方法を検討する
19	12	9	1		研究計画書の完成	取材先やアンケートの対象等を決め、研究計画書を完成させる
20	12	15	1		みらい学研究発表会見学	文理科学科2年生の研究発表会に聴衆として参加し、探究の具体的な進め方や発表の方法等を学ぶ

3 学期

冬季休業期間

アンケート、インタビュー、フィールドワークなどの実施

21		13	1	発表会準備	プレゼンテーションについて	プレゼンテーションについての講義を聴き、効果的な発表の方法やスライドの作成法について学ぶ
22	1	20	1			
23		31	1			
24		3	1		研究のまとめ発表の準備	アンケートやインタビュー、フィールドワークの結果について考察し、研究の成果をまとめる。また、発表のためにスライドの準備や原稿の作成を行う（必要に応じて追加の調査を行う）
25	2	10	1			
26		24	1	発表当日	研究交流会	スライドを用いて、研究の成果を交流する。発表を相互に評価する
27			1			

参考2 福知山高校文理科学科第2学年総合的な探究の時間「みらい学Ⅱ」年間計画

I 学期

月	週	時間	行事	外部連携	大きな流れ	学習内容	具体的な活動
4	20	2	一斉委員会		テーマ設定	オリエンテーション	オリエンテーション、個人でテーマを考える・下調べ
	27	2				テーマ交流会①	自分の考えてきた探究テーマを交流
5	4		みどりの日				
	11	2				テーマ交流会②	同上、この後グルーピングをする。
	18	2			RQと仮説の設定	RQ設定のための調査	(アイスブレイク) テーマについての情報収集・RQとは(復習)
	25		中間考査				
6	1	2				RQ案の設定	RQ案の設定と発表準備(A3用紙1枚)
	8	2				RQ交流会	
	10	2			研究・調査	RQの練り直し、研究調査開始	交流会を受けてよりよいRQの設定
	15		研修旅行				
	22	2		神戸大学 今石先生		研究・調査	特別講義 研究の手法について(特に理系)
	29	2					
7	6	2					
	13	2					

2学期

夏季休業期間

8	31		福高祭準備				
9	7	2	体育祭予備日		中間発表会		
	14	2					
	21	2					
	28	2					
10	5	2					
	12		中間考査				
	19	2			研究発表に向けて	研究のまとめ・発表準備	
	26	2					
11	2	2					
	9	2				リハーサル①	
	16	2				リハーサル②	
	23		勤労感謝の日				
	30	2		公立大 杉岡先生		研究発表会	
12	7	2			振り返り	振り返り	
	14						

3学期

冬季休業期間

1	11	2			ミニ論文作成	論文の書き方	
	18	2				ミニ論文作成・お礼状作成	
	25	2					
2	1	2				第1稿提出	
	8	2				手直し	
	15	2					
	22	2				完成版提出	
3	1		卒業式				
	8		中期選抜				
	15		附属中卒業式				

（５）令和４年度検証組織委員会からのWWL事業３年間の成果検証に係る報告

1 育成する６つの資質・能力

ALネットワーク京都では、イノベティブなグローバル人材に求められる資質・能力を以下のとおり設定している。

領域	資質・能力
伝統・文化	① 歴史をとおして世界を俯瞰する力
	② 多様な文化的背景を持つ人々と協働する力
イノベーション	③ 科学的に思考・吟味する力
	④ 新たな価値を創造する力
ソリューション	⑤ 課題解決の枠組みをデザインする力
	⑥ 困難な状況を突破する力

2 検証組織委員

専門的見地から本府WWL事業の取組を検証・分析していただき、また検証資料の収集や評価指標の作成における指導・助言を仰ぐために、以下の２名の方に検証組織委員会の委員をお願いした。

氏名	所属・役職
小野 善生 様	滋賀大学・教授
福田 敏信 様	有限責任 あずさ監査法人 京都事務所

3 検証資料

本府WWL事業の成果を検証するために、下記(1)のアンケート調査を、令和２年度から３年間にわたり実施した。

(1) アンケート調査内容

アンケート名	調査項目	対象
WWLコンソーシアム構築支援事業に係る生徒アンケート	○６つの資質・能力 ○マインドセット	拠点校令和２～４年度入学生
WWLコンソーシアム構築支援事業に係る教職員アンケート	○カリキュラム研究開発の進捗状況 ○授業改善等の状況	拠点校教員
探究的な資質・能力に係るアンケート	○探究に係る資質・能力	拠点校及び共同実施校令和２～４年度入学生

(2) 調査時期（回数）

令和２年度入学生：令和２年１２月、令和３年７月・１２月、令和４年７月・１２月（計５回）
 令和３年度入学生：令和３年７月・１２月、令和４年７月・１２月（計４回）
 令和４年度入学生：令和４年７月・１２月（計２回）

(3) その他、資料

ア 海外研修等に係るアンケート調査

海外インターンシップや海外連携校等との交流会に参加した生徒を対象に、６つの資

質・能力の変化等について、アンケート調査を実施した。

イ 管理機関の自己評価

管理機関実施の取組について、目標（値）を設定し、達成状況を評価した。

4 各アンケート調査の結果

各アンケート調査について、入学年度ごとの生徒の回答の変化及び教職員の主な変容は以下のとおりである。

なお、生徒アンケートについては、入学年度ごとの経年比較と、入学年度間の同学年比較を実施している。

(1) 令和2年度入学生（現3年生）の拠点校生徒対象アンケートに係る3年間の経年比較

ア 成長志向について、令和4年12月の結果において、全ての指標で肯定的回答率が1年次よりも上昇している。特に、向上心・挑戦心に係る指標4「自分のやりたいことを見つけ、それに情熱を傾けたい。」は、2年次に肯定的回答率が下降したが、今年度12月の調査では95.5%の生徒が肯定的に回答している。なお、リーダーシップに係る指標5「集団での問題解決場面において、率先してリーダー的な役割を担うことができる。」についても、肯定的回答率が令和2年度は47.8%であったが、今年度12月には58.6%にまで上昇している。

イ 海外志向について、英語・異文化への関心及び海外志向性ともに、2年次に肯定的回答率は下降した。しかし、今年度12月の結果は1年次と変わらない肯定的回答率となった。ただし海外志向性に関する指標9及び10の肯定的回答率は、いずれも50%となっている。

ウ 6つの資質・能力について、いずれの指標も3年次では1年次を上回る肯定的回答率となっている。特に変化の大きい指標として、「歴史をとおして世界を俯瞰する力」と「新たな価値を創造する力」における、京都に関連した指標12と18（+21.2%、+20.5%）がある。

エ 加えて、6つの資質・能力については、2年次に肯定的回答率が下降した「多様な文化的背景を持つ人々と協働する力」に係る指標13と指標14や「困難な状況を突破する力」に係る指標21において、今年度12月には1年次の結果を上回る肯定的回答率となっている。今年度12月における、各指標の肯定的回答率は指標13が93.7%（+7.1%）、指標14が88.8%（+15.7%）、指標21が88.8%（+10.1%）である。

(2) 令和3年度入学生（現2年生）の拠点校生徒アンケートに係る2年間の経年比較

ア 成長志向及び海外志向に係る指標について、1年次の結果と比較して大きな変化はない。全体として、令和2年度入学生（現3年生）の2年次の結果よりも、肯定的回答率は高い。

イ 6つの資質・能力について、1年次より肯定的回答率が上昇しているものに、「科学的に思考・吟味する力」に係る指標15（+7.4）と「困難な状況を突破する力」に係る指標21と指標22（+9.6%、+7.0%）がある。なお、肯定的回答率が下降している指標はない。

ウ 令和2年度入学生と比較して、6つの資質・能力について、「歴史をとおして世界を俯瞰する力」に係る指標12と「新たな価値を創造する力」に係る指標18は、他の指標と比べて肯定的回答率はそれほど高くない。それぞれ、指標12が43.6%、指標18が67.8%となっている。これは令和2年度入学生と同様の傾向である。

(3) 令和4年度入学生（現1年生）の拠点校生徒アンケートに係る年度内比較

ア 成長志向及び海外志向に係る指標について、年度内の調査（7月・12月）の比較では大きな変化はない。なお、英語・異文化への関心に係る指標7「英語によるコミュニケーション能力を向上させたい。」については、肯定的回答率が89.5%と、過去2年間と比べても非常に高い肯定的回答率となっている。

イ 6つの資質・能力について、指標13「異なる文化や価値観を尊重している。」は肯定的回答率が92.4%と極めて高い。また、「困難な状況を突破する力」に係る指標21について、肯定的回答率が大きく上昇している（75%→87%）。

ウ 6つの資質・能力について、指標12と指標18の肯定的回答率は、それぞれ47.5%と66.3%であり、令和2・3年度入学生と同様に他の指標よりも肯定的回答率はそれほど高くない。

(4) 拠点校教職員アンケート結果

ア 全ての指標について、肯定的回答率は8割を超えている。

イ 特に3年間の変化が顕著なものとして、指標5「WWL事業による取組が、課題の解決に向けた主体的・協働的な学びになっており、学校全体の授業改善につながっている。」がある。指定初年度に74.2%であった肯定的回答率が、今年度12月には85.3%に上昇（+11.1%）している。

ウ 指標6「カリキュラムに位置付けられた短期・長期留学や海外研修は、生徒にグローバルかつ多様な協働学習の機会を提供できる。」のみ、初年度から肯定的回答率が下降（▲11.8%）している。

(5) 令和2年度入学生（現3年生）の探究的な資質・能力に係る生徒アンケート結果

ア 鳥羽高校の結果について、昨年度（2年次）に指標1「関心のあるテーマに、課題を発見・設定できた。」と指標7「自己の役割を自覚し、協働的かつ建設的にグループ活動に参加しようとしている。」の肯定的回答率が下降した。しかし今年度12月では、全ての指標で1年次の肯定的回答率を上回っている。特に変化の大きい指標は、指標5「研究内容を研究ノートやポスター等に効果的にまとめ、発表することができた。」（+35%）である。

イ 福知山高校について、2年次までに探究活動を終える教育課程となっており、令和4年12月の結果は参考程度の扱いとなる。ただし、鳥羽高校と同様に指標5の肯定的回答率は初年度から着実に上昇し、令和4年7月（3年生1学期）には90.2%の生徒が指標5について肯定的に回答している。

(6) 令和3年度入学生（現2年生）の探究的な資質・能力に係る生徒アンケート結果

ア 鳥羽高校について、昨年度（1年次）と比較して、全ての指標で肯定的回答率が上昇している。特に変化の大きい指標は、指標2（+15.4%）、指標3（+17.0%）、指標4（+15.2%）、指標5（+11.9%）、指標8（+12.0%）である。

イ 福知山高校について、全ての指標で肯定的回答率が大きく上昇している。特に指標4「課題解決の道筋を明らかにしながら、仮説を立てることができた。」において、昨年度（1年次）は肯定的回答率が35.2%であったが、今年度12月には76.8%まで上昇（+41.6%）した。

(7) 令和4年度入学生（現1年生）の探究的な資質・能力に係る生徒アンケート結果

ア 鳥羽高校について、年度内比較において、指標5「研究内容を研究ノートやポスター等に効果的にまとめ、発表することができた。」（+18%）と指標6「自ら設定した研究テーマに基づき、主体的に探究活動に取組もうとしている。」（+9.8%）で、肯定的回答率の顕著な上昇が見られる。一方、SDGsへの意識に係る指標8（△6.0%）で肯定的回答率が下降している。

イ 福知山高校について、年度内比較において、指標1（+15.9%）、指標4（+16.5%）、指標6（+15%）、指標7（+11.3%）で肯定的回答率が上昇している。特に指標1「関心のあるテーマに、課題を発見・設定できた。」と指標6「自ら設定した研究テーマに基づき、主体的に探究活動に取組もうとしている。」において、9割の生徒が肯定的に回答している。

5 拠点校担当教員へのヒアリング調査について

上記4のアンケート調査結果を踏まえて、令和5年1月16日（月）に、拠点校WWL事業担当者へのヒアリング調査を実施した。ヒアリング調査の結果は次のとおりである。

(1) 昨年度の課題となった指標に対する取組

拠点校3年次の「総合的な探究の時間」において、グローバル科及び普通科において2年次の取組の成果をアプトプットする取組を設定した。グローバル科では、探究の成果を英語でまとめて、京都府名誉友好大使等（留学生）に英語で発表するとともに、探究したテーマについて意見交流する機会を設定した。普通科では、探究の成果を日本語でレポートにまとめ、他のグループのレポートを読み批評し合う活動を行った。これらの取組等により、昨年度に令和2年度入学生（現3年生）の課題となった指標6「議論の際は自分の考えを相手にわかりやすく伝えたとともに、相手の意見にも耳を傾けることができる。」や指標14「異なる価値観を持つ人と協力しながら課題に取り組むことができる。」について、生徒は達成感を感じることができ、課題であった資質・能力の育成に役立ったと考えられる。

(2) 成長志向に係る指標の変化

令和2年度入学生（現3年生）について、向上心・挑戦心に係る指標4やリーダーシップに係る指標6において、2年次に肯定的回答率が下降する指標があった。これは、学年が上がるにつれて到達目標が高くなり、同時に自己の行動等をより客観的に振り返る力も高まっているため、自分自身に厳しい評価をする傾向にあることが要因だと考えられる。今年度は上記(1)のとおり、生徒が探究活動の成果を再確認し達成感を感じることができたことで、自己肯定感等が高まり、指標4や指標6の肯定的回答率も上昇したと考えられる。

(3) 探究活動における工夫・改善

探究活動におけるテーマ設定について、令和3年度入学生（現2年生）から設定方法を工夫・改善した。令和2年度入学生までは、1年次に「祇園祭におけるゴミ問題」のように京都の問題を1つ取り上げて探究させ、2年次ではグローバルな課題を設定させていた。しかし、昨年度の1年生（令和3年度入学生）からは、京都の課題に限定せずに、生徒の興味関心のあるテーマについてグループで一つ取り上げ、その内容を「京都」に関連させて探究させることにした。同様に2年生についても興味関心のあるテーマを、グローバルな視点で探究させるアプローチに変更した。これにより、探究的な資質・能力に係る指標1「関心のあるテーマに、課題を発見・設定できた。」や指標6「自ら設定した研究テーマに基づき、主体的に探究活動に取組もうとしている。」について、昨年度の2年生（現3年生）は肯定的回答率が下降傾向にあったが、現2年生では高い肯定的回答率（「指標1」78.2%、「指標6」77.7%）を維持できており、工夫・改善の成果が出ている。

(4) 「新たな価値を創造する力」の育成

6つの資質・能力の育成について、昨年度（令和3年度）から新たな価値を創造する力（指標18）の育成に課題意識を持ち取り組んできた。具体的な解決策として、担当教員が新たな価値を創造することについて、その定義や到達点を明確にし、それを生徒と共有して探究活動に取り組んだ。なお、拠点校では、「新たな価値の創造」を、新しい考えや方法を生み出すことだけでなく、今まで気がつかなかった物事の別の一面や価値に気づくこと、また発見することと定義した。その結果、指標18について、令和2年度入学生の肯定的回答率が2年次（61.5%）から3年次（76.5%）にかけて上昇したと考えられる。

(5) 「京都」に関連する指標の変化

6つの資質・能力において、「身近な地域や京都の事柄を、日本全国や世界と関連づけて考えることができる。」（指標12）と「京都や世界の伝統・文化や技術について、それらの持つ新しい価値に気づくことができる」（指標18）について、現3年生の他の指標は肯定的回答率が8割以上ある中で、指標12が63.0%、指標18が76.5%の肯定的回答率である。しかし3年間の伸び率を考慮すると、指標12が+21.2%、指標18が+20.5%となっており、全指標において肯定的に回答する生徒の増加が著しい。これは上記(3)に記載のとおり、教員が

課題意識を持って取り組み、継続して指導改善を行ってきた成果ではないだろうか。

(6) 探究活動と教科指導力との関係

上記(1)から(5)のとおり、探究活動における指導方法等の改善に継続して取り組んできたことは、教員の教科指導にも成果として現れはじめています。教科指導の発問において、教員が探究活動との連動を意識するようになり、どのような発問が探究活動に活きるのかを多くの教員が意識するようになっている。つまり教員に教科横断的指導の意識が芽生えている。

(7) 新たな教科・科目の研究開発における教員の意識統一

指定初年度から、新たな教科・科目の研究開発について、担当教員が科目を通して育成する資質・能力を明確にして指導するために、実践報告書を作成し校内で共有することに取り組んでいる。それにより担当教員が6つの資質・能力の育成について、自身の教育実践の中でどのように育成していくのかをより意識するようになった。上記(6)に記載の内容に加えて、実践報告書の作成により、教員の授業改善の意識は着実に高まっている。このことは、教職員アンケートの指標5「WWL事業による取組が、課題の解決に向けた主体的・協働的な学びになっており、学校全体の授業改善につながっている。」について、指定初年度は74.2%であった肯定的回答率が、今年度12月には85.3%に上昇(+11.1%)していることからもうかがえる。

(8) 管理機関の取組の成果

管理機関が実施している高度な学びに係る取組について、参加生徒のキャリアの多様化に大きく影響している。「スマートAP」で豪州・クイーンズランド工科大学の講義を経験した生徒は国際学部への進学を志すようになった。京都府WWL高校生サミットに参加した生徒は、秋田県、山形県、沖縄県の高校生と文化遺産の活用に係る課題と解決について議論したことで、京都にある文化財の価値に気づき、学芸員を目指すことに決めた。さらに「きょうとAPP（大学教育の先取り履修）」についても、大学の正規授業の聴講を通して、受講者が自身の学問に関する興味・関心を確認できる機会となり、受講した科目を専門的に学べる学部への進学を決断した。

6 WWL事業に係る3年間の成果

(1) 3年間を通した探究活動のサイクルを確立

拠点校の探究活動は、学年が上がるにつれてローカルな視点からグローバルな視点での探究へと発展させ、3年次でその成果を英語又は日本語でアウトプットする流れを確立している。この探究のプロセスは、アンケート結果のとおり、3年間かけて6つの資質・能力を着実に伸ばすことに成功しているようだ。特に「京都の事柄を日本や世界と関連付けて考えることができる（歴史を通して世界を俯瞰する）力」や「京都そして世界の伝統・文化や技術について、それが持つ新たな価値に気づくことができる（新たな価値を創造する）力」については、それぞれ1年次よりも肯定的回答率が20%も伸びており、段階を追った指導と継続した教員の指導改善の結果である。

また、2年次でも探究の成果を発表する機会は設定しているが、3年次に再び時間をかけて成果発表し、また他者と意見交流することで、自分自身の成長に改めて気づくことができるようである。それがリーダーシップに係る指標6「議論の際は自分の考えを相手にわかりやすく伝えるとき、相手の意見にも耳を傾けることができる」の育成に繋がっていると考える。なお、鳥羽高校ではシェアド・リーダーシップという、場面・状況により誰もがリーダーシップを発揮する考え方を導入しているが、指標5「集団での問題解決場面において、率先してリーダー的な役割を担うことができる。」についても、3年間かけて着実に成果がでており、3年間を通して発表の場を作り、グループで問題解決する場面を設定していることが良い効果を生み出しているのではないかと。

(2) 拠点校における高大社連携による取組の充実

生徒が京都の事柄を世界と関連させて考えることや、京都の事柄について新たな価値に気づくために、拠点校では株式会社松栄堂や株式会社岡墨光堂と連携しながら、京都の伝統文化に係る学習を推進している。また探究活動において、グローバル科では事業協働機関をはじめとする複数の大学教員と、普通科では京都府立大学の教員と連携し、講義や中間発表会における指導・助言をお願いしている。さらに今年度は京都府名誉友好大使である留学生とも連携することで、大学や企業の方々を含め、多様な文化的背景を持つ人々と協働しながら意見交流する機会を3年間にわたって生徒に提供できている。これは指標6「自分の考えをわかりやすく伝え、相手の意見にも耳を傾けること」や指標14「異なる価値観を持つ人と協力しながら課題に取り組むことができる」の育成にも大きく影響していると考えられる。

(3) 探究活動を軸にした教員の授業改善と教員の意識変容

令和2年度入学生において、昨年度（2年次）に肯定的回答率が下降した指標が6つの資質・能力及び探究的な資質・能力に係る指標で見られたが、令和3年度入学生ではその傾向は見られない。これは探究のテーマ設定のプロセスについて工夫と改善を行った結果であるとともに、教科指導においても探究の視点から発問を行える教員が増えたことが要因であると考えられる。探究活動を軸にした取組が、生徒のみならず教員の教科指導にも良い影響をおよぼしている。

また新たな教科・科目の研究開発についても、6つの資質・能力をどのようなアプローチで育成するのかについて、校内で実践報告書を作成し共有することで、教員間で指導に関する意識が統一され、教職員アンケート結果のとおり、授業改善が進んだと考えられる。

(4) 拠点校・共同実施校の探究的な資質・能力の育成

拠点校と共同実施校ともに、「総合的な探究の時間」を通して、探究的な資質・能力を着実に育成できている。特に、両校ともに、指標5「研究内容を研究ノートやポスター等にまとめ、発表することができた。」の肯定的回答率の伸び率は非常に高い。その他の指標と比較して、1年次における発表に係る指標の肯定的回答率は低い傾向にあるが、学年が上がるごとに着実に上昇していることから、両校の指導の成果が表れている。

(5) 高度な学びの機会による生徒の変化

府立高校共通履修科目「スマートAP」や「きょうとAPP」のような高度で先進的な学びは、参加生徒のキャリアに大きな影響を与えている。イノベティブでグローバルな人材に求められる資質・能力の育成にとって非常に効果的な取組であるとともに、高校生が自分自身のキャリアを深く考える契機ともなっており、自らの資質・能力を高めるために必要とされる向上心や挑戦心の育成にとって大変意義があると考えられる。

(6) グローバルな協働学習の機会

令和2年度入学生の今年度12月に実施したアンケート調査について、海外志向性に係る指標9「海外の大学への長期留学や進学に関心がある。」と指標10「将来海外で働いたり、海外ボランティアなど国際的な活動に参加したりしたい。」における、肯定的回答は50%であった。海外渡航制限等によりカリキュラムに位置付けられた留学や海外研修は実施できていない状況ではあるものの、海外連携校との交流（フランス・韓国・中国）や株式会社片岡製作所と連携した海外インターンシップを中止することなく、オンラインで3年間実施した。これは、拠点校のグローバル教育において少なからず効果があったと考えられる。

7 指定期間終了後の課題

(1) 探究活動における質の維持

令和3年度入学生（現2年生）から探究のテーマ設定について工夫・改善を行い、令和2

年度入学生の課題が改善された。この変化は、指導する教員にとって、より多様なテーマで生徒が探究活動を行うことを意味しており、探究に係る指導・助言において難しさが増すことになる。そのため、指定終了後も高大連携や卒業生の活用等を継続し、様々な視点から助言やフィードバックをもらえる機会の提供が必要となる。また、高大社連携については、多様な文化的背景を持つ人々と協働することにも繋がり、海外の人たちだけでなく、大学教員や社会人との交流を通して、異なる価値観を理解し、新たな視点を得る重要な機会となる。

(2) 高大社連携等の継続性

拠点校の探究活動の成果は、高大社連携による取組が一つの大きな要因となっている。指定終了後も継続して事業協働機関等と協働していけるのかが、大きな課題となる。管理機関が実施している「きょうとAPP」では、管理機関が協働大学と覚書を交わし、組織として取り組んでいるように、拠点校も担当者が変わっても継続して高大社連携ができるように校内体制等を維持する必要がある。

また、探究活動における支援について、ティーチング・アシスタント（TA）として卒業生の協力を得ることを継続できるかも課題となる。

なお、次年度から土曜日授業を実施しないこととなっており、これまで土曜日に設定していた探究活動が平日実施となることから、高大社連携及び卒業生TAの活用について多くの調整が必要となることも課題である。

(3) 卒業生追試調査の実施と結果のフィードバック

本府WWL事業の取組が卒業後の進路選択にどのような影響を与え、また育成した6つの資質・能力がどのような状況・場面で活用されているのかについて、追跡調査を実施する必要がある。これにより、WWL事業の長期的な成果が分析できる。

また、追跡調査の結果を踏まえて、拠点校の探究活動及び学校設定科目の課題と成果を振り返り、事業終了後も継続した授業改善や教育課程の編成が求められる。

(4) 海外留学等の目標値とICT活用によるグローバル教育

海外留学等が難しい状況においても、令和2年度入学生のうち50%の生徒が、将来の海外大学進学や長期留学を希望している。拠点校では、昨年度に海外大学進学者を輩出するなど、グローバルに活躍できる人材育成を行っているが、指定後もさらに継続してグローバル人材の育成を目指すためには、将来的に留学を志す生徒数について今後の目標値を設定するとともに、ICTも活用した海外交流等を継続し生徒の海外志向性を高めていく努力が必要である。

8 管理機関の自己評価について

管理機関の取組について、別紙のとおり、各取組について目標（値）を設定し、自己評価を行った。一部の取組（オンライン・キャリアセミナーや「スマートAPP」教員参観等）において、参加人数が目標値に達しなかったが、予定した取組は全て実施し、概ね目標を達成することができた。

9 まとめ

アンケート結果のとおり、拠点校は探究活動を軸に、6つの資質・能力を育成するためのカリキュラム研究開発を着実に実施できたと考えられる。特に京都に関する事柄を世界と関連付けて俯瞰的に考える力、また京都や世界の伝統・文化や技術について新たな価値に気づく力については、指導の難しさがあるなかで、3年間かけて着実に涵養できている。これは拠点校教員が探究に係るテーマ設定や協働する力の育成について、課題の分析と課題解決に向けた方策を的確に実施した結果である。その成果は、令和3年度入学生における指導にも活かされており、6つの資質・能力の育成を含めて、課題となる指標は見られなかった。つまり、教職員ア

ンケート結果のとおり、WWL事業指定の3年間で授業改善が着実に行われている。

指定終了後も、拠点校がイノベーティブなグローバル人材に必要な資質・能力を育成し続けるためには、WWL事業の取組を通して確立した探究活動の3年間のプロセスやオンラインによる取組を確実に継続できるのかが重要となる。それにはALネットワーク京都の事業協働機関との連携が必要であり、校内体制の維持と蓄積されたノウハウの引継ぎも欠かせない。特に、海外連携校との対面による交流にはまだ時間がかかりそうであり、ICTを活用した海外連携校等との協働学習の継続は、協働力の育成のみならず、海外志向性を高めるために重要である。

最後に、「スマートAP」、「きょうとAPP」及び京都府WWL高校生サミットは、府内や他県の高校生が協働することで、新たな価値に気づく機会となり、また多様な価値観を学ぶ場となっている。加えて、6つの資質・能力の育成のために必要となる、向上心・挑戦心を育成する機会ともなっている。管理機関は、高校生にとって非常に有益な高度で先進的な学びのプログラムを継続実施するために、ALネットワーク京都の事業協働機関並びに国内外の連携校と継続して連携できる体制の整備が必要である。

短期的な目標（令和 2 年度～令和 3 年度末、第 1 年次、第 2 年次） ・拠点校、共同実施校が協働機関の大学と、大学教育の先取り履修による単位認定 ・研究開発に係る情報共有の場として京都府WWLプラットフォームの開設 ・京都府WWL 高校生サミットの開催	中期的な目標（令和 4 年度～令和 5 年度末、第 3 年次、第 4 年次） ・大学教育の先取り履修による単位認定の本格実施 ・京都府WWL プラットフォームの本格運用開始
---	--

長期的な目標（令和 6 年度～、第 5 年次～） ・令和 6 年度以降は、管理機関が A L ネットワーク京都の運営を継続し、WWL コンソーシアムにおける役割を担い続ける。財源については、京都府予算及び、ふるさと納税制度を用いた「京都府校に拠ふるさと事業」等を活用する。 ・ I C T を用いた時間的・地理的・経済的に制限されずに各都道府県において活用できる A L ネットワークモデルの完成
--

別紙

領域	重点項目	令和 4 年度の計画	評価指標	目標（値）	達成状況・成果	自己評価
京都戦略 1	海外インタナショナル	(1)株式会社片岡製作所と連携し、海外研修が実施できない状況でも、ICT を活用し、オンラインによる海外インタナショナルを実施 (2)拠点校だけでなく、共同実施校の生徒も参加できる仕組みを構築 (3)連携校の生徒にもグローバルな学びの機会を提供する取組（オンライン・キャリアセミナー）を実施	(1)実施回数 生徒アンケート (2)共同実施校参加状況 (3)セミナー参加者数	(1) 2 回 生徒の受容 (2)合計 8 名参加 (3)参加者 100 名で実施	オンラインによる海外インタナショナルについて、共同実施校の生徒も加えて、予定通り参加者数で年間 2 回実施することができた。アンケート結果から、参加生徒の海外志向性及び外国語学習等への意識に大きな変化があったこともわかり、将来、グローバルに活躍できる人材の育成にとつて効果的な取組となった。 海外インタナショナルの成果を、府立高校の連携校にも広げる目的で実施したが、参加者 18 名とという結果であった。アンケート結果においては、参加した生徒の満足度は高く、将来の海外留学や海外大学進学に向けて貴重な学びの機会となった。	A
高度で先進的な学びの機会を提供	大学教育の先取り履修「きょうと A P P」	(1)福知山公立大学及び京都府立大学と大学教育の先取り履修の取組を開始 (2)聴講者にアンケート調査を実施するとともに、2 大学と令和 5 年度の取組に向けて成果と課題を整理し、改善策を協議	(1)実施の有無 (2)開催状況 協議状況	(1)前後期ともに参加 (2)全参加者にアンケート 各学期終了後に 2 大学と協議	前後期ともに 2 大学に科目を提供していた。参加者へのアンケート調査も実施し、課題となる事項も明らかになっている。本格協議については、次年度に実施することとしている。	A
高度で先進的な学びの機会を提供	拠点校のカリキュラム開発及び成果普及	(1)普通科リベラルアーツコース「総合的な探究の学習」における京都府立大学との連携（年 3 回） (2)京都府 WWL 教員研修で拠点校が取り組んでいた『アカデミック・ライティング』をテーマにした研修を府内外の連携校及び府立高校の教員を対象に実施 (3)伝統文化の神髄に触れる機会を共同実施校に提供	(1)連携回数 (2)開催有無 (3)実現の有無	(1)年間 3 回 (2)10校 20 名の参加者 A L ネットワーク京都以外からの参加者の参加 (3)金剛能楽堂と連携し実施	京都府立大学と拠点校普通科の「総合的な探究の学習」で年間 3 回、連携することできた。 京都府 WWL 教員研修については、WWL 関係校以外からの参加もあり、目標とする参加者数で実施し、拠点校の WWL 事業の成果を普及することができた。 金剛能楽堂との連携については、今年度も共同実施校の生徒が訪問し、能楽について学ぶ機会を提供できた。	A
京都戦略 2	府立高校海外サテライト校事業	(1)海外渡航ができない状況でも、国内でハイブリッド型英語研修を実施 (2)年間 2 回開催し、合計 200 名の府立高校生参加者の英語力向上及び異文化理解を促進	(1)開催実績 (2)参加者数	(1)年 2 回開催 (2)各回 80 名以上の生徒が参加	ハイブリッド型英語研修については、年間 2 回開催予定であったが、夏については感染症対策のためオンラインのみの開催となった。参加者は夏が 66 名、春が 80 名であった。	B
グローバルかつ多様な協働学習の機会を創出	府立高校共通履修科目「スマート A P」	(1)令和 3 年度の取組を踏まえて、対象校を 6 校に拡大し、主に遠隔で実施 (2)全対象校から生徒が参加しオンライン上で佐瀬校を超えたグループ活動を実施 (3)豪州・タイ・ベトナムの大学と連携し、英語による大学レベルの講義を実施することともに、受講者が十分理解できるように内容の調整と支援を実施 (4)令和 5 年度以降も継続実施できるように調整	(1)実施回数 (2)参加者数 (3)実施の有無 支援状況 (4)調整状況	(1)計 8 回開催 (2)6 校から 20 名以上の参加者 (3)全量が英文レポートを作成 T A 等を活用し支援 (4)実施可能な状況にする	対象校 6 校から合計 27 名の参加があり、計画通り全てのプログラムを終了することができた。クイーンズランド工科大学により遠隔授業において、T A を活用しながら、参加者が英文レポートを期日内に提出できた。令和 5 年度も継続して実施することが決定している。	A
京都戦略 3	京都府 WWL 高校生サミット	(1)ICT を活用し拠点校・共同実施校及び府内外の連携校が参加できるサミットを開催 (2)SDGs をテーマに、参加者がグループ・ディスカッションを行い、持続可能な未来社会について議論 (3)日本語によるディスカッションだけでなく、英語ディスカッションも実施 (4)海外の連携校の参加を実現 (5)事業協働機関・大学と連携したサミットを開催	(1)開催有無 (2)生徒アンケート (3)実施状況 参加者数 (4)調整状況 (5)連携状況	(1)6 校以上から 60 名の生徒が参加 (2)肯定的回答 8 割以上 (3)日本語 40 名、英語 15 名 (4)次年度参加に向けて調整 (5)講師等や連携校の調整	合計 11 校から 53 名の参加者で京都府 WWL 高校生サミットを開催した。参加者の 9 割以上が本サミットを意義のあるものと感じ、オーストラリアの高校生も参加し、日本語 40 名、英語 15 名、英語 29 名、英語 29 名に 24 名が参加した。事業協働機関とは、当日の進行計画及び講師の調整を御協力いただいた。次年度も京都府 WWL 高校生サミットを継続開催することが決定しており、参加校の調整を開始したところである。	B
京都戦略 3	京都府 WWL プラットフォーム	(1)京都府 WWL プラットフォームによる継続的な情報発信 (2)鳥羽高校「総合的な探究の時間」に係る授業実践を発信・普及	(1)情報発信回数 訪問者数 (2)実践記録掲載回数	(1)毎月 5 つ以上の情報を発信 毎月 500 人以上 (3)授業回数 2 割掲載	令和 3 年度から継続して、拠点校・共同実施校及び管理機関の時組について情報を発信し続けている。拠点校の実践記録について、今年度分の掲載が遅れている。	B
研究開発内容の共有と継続的な成果普及	京都府 WWL フォーラム	(1)ICT を活用し、時間的・地理的・経済的制約を超えたフォーラムの開催 (2)3 年間の研究開発の成果を府内外の高等学校に普及 (3)学術顧問や事業協働機関と連携	(1)開催状況 (2)参加者数 (3)連携状況	(1)オンライン実施 (2)全国から 50 名 (3)連携先の大学教員等が参加	計画通りオンラインによる京都府 WWL フォーラムを開催し、他府県 WWL 拠点校及び教育委員会等から 23 名の参加があった。また事業協働機関と連携し、基調講演も実施し、これからの人材育成について、参加者とともに学びを深めた。	B
研究開発内容の共有と継続的な成果普及	京都府 WWL 教員研修	(1)ICT を活用し、時間的・地理的・経済的制約を超えた拠点校の実践に係る教員研修を開催 (2)研究開発した「スマート A P」を教員研修の機会として府内の連携校に提供	(1)開催状況 (2)参加者数	(1)年間 1 回 (2)対象校のうち 5 校以上から参加 合計 10 名以上	上記の「拠点校のカリキュラム開発及び成果普及」に記載のとおり、計画通り、オンラインによる京都府 WWL 研修を実施し、拠点校の取組について成果普及を行った。 「スマート A P」を教員向けに参観可能としたが、4 校から 6 名の参加があった。	A
						B

【達成度の基準】 A：達成した B：ほぼ達成した C：あまり達成できなかった D：達成できなかった

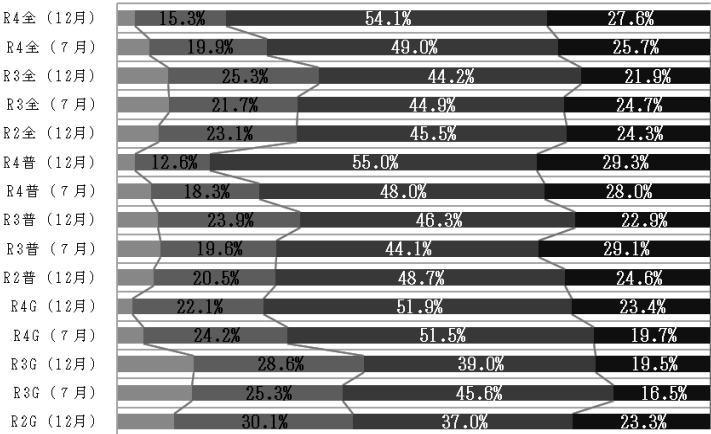
資料 1

令和 2 年度入学生（現 3 年生）WWL コンソーシアム構築支援事業に係る生徒アンケート

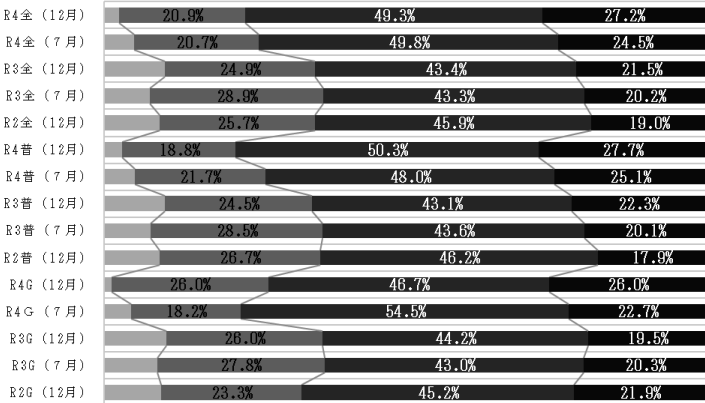
- 1 実施時期 令和 2 年度 12 月 令和 3 年度 7 月・12 月 令和 4 年度 7 月・12 月
- 2 回 答 数 鳥羽高校（拠点校）※全：全体、普：普通科、G：グローバル科
- 令和 2 年度 12 月 268 名 令和 3 年度 7 月 258 名 令和 3 年度 12 月 265 名
- 令和 4 年度 7 月 243 名 令和 4 年度 12 月 268 名

2. 尺 度
- 1 そうではない
- 2 どちらかといえばそうではない
- 3 どちらかといえばそうである
- 4 そうである

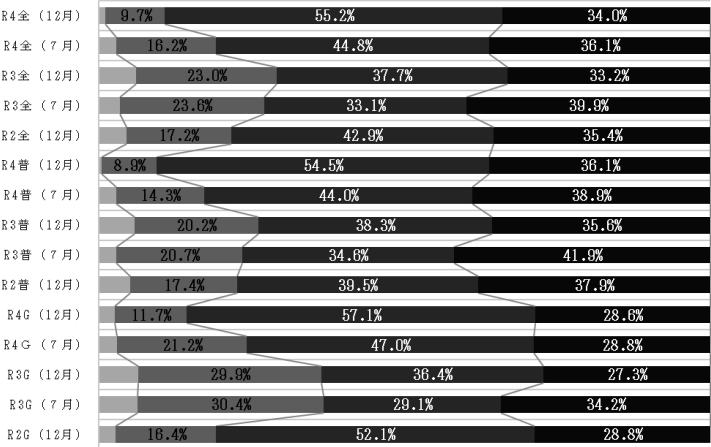
1. 自分は人のために役立つことができると思う。



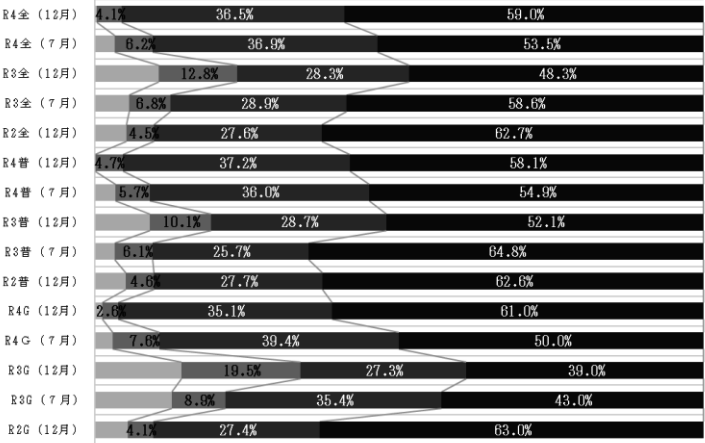
2. ボランティア活動への参加など、積極的に社会に貢献したい。



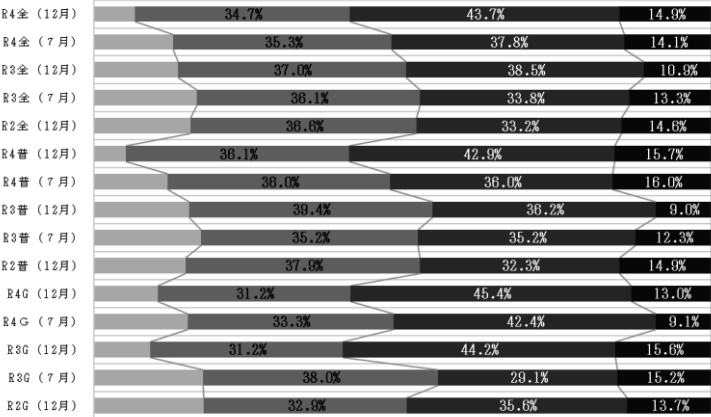
3. 自身の能力及びスキルの向上に努めている。



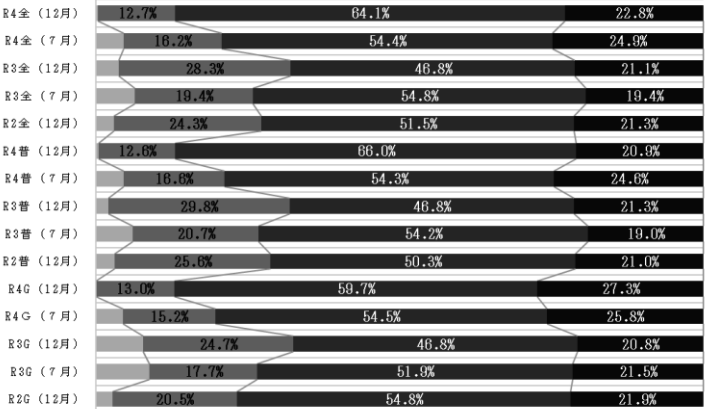
4. 自分のやりたいことを見つけ、それに情熱を傾けたい。



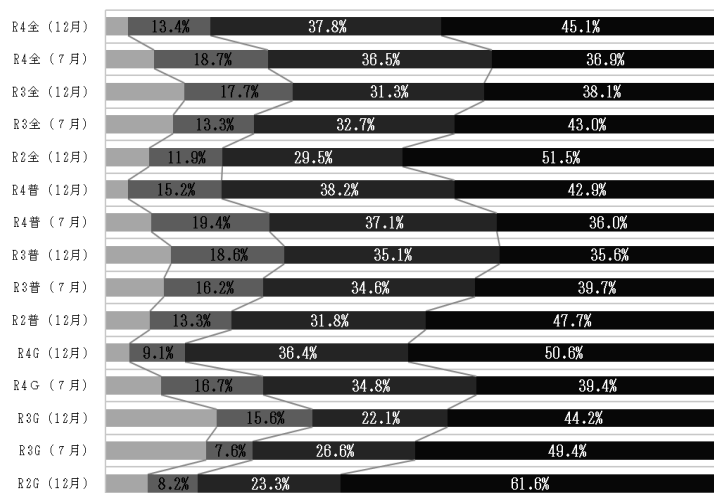
5. 集団での問題解決場面において、率先してリーダー的な役割を担うことができる。



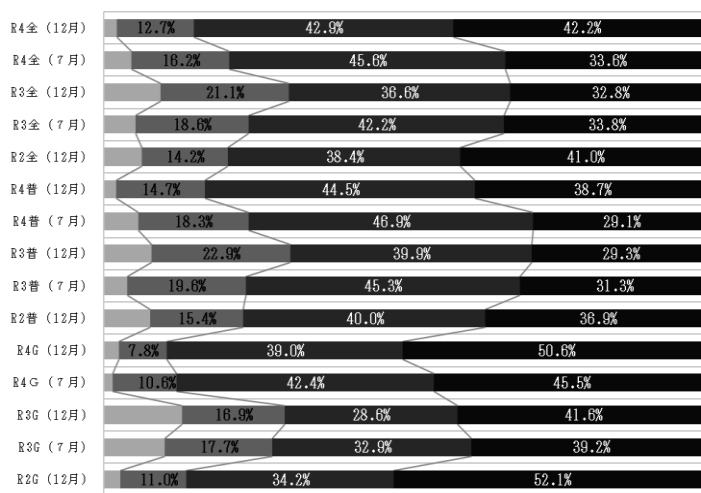
6. 議論の際は自分の考えを相手にわかりやすく伝えるとともに、相手の意見にも耳を傾けることができる。



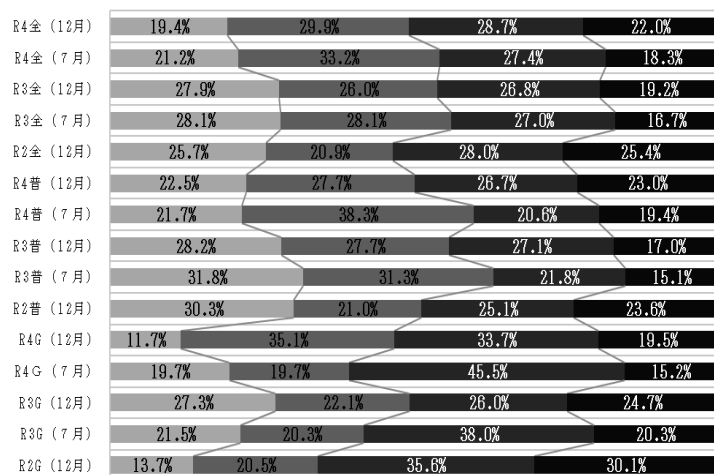
7. 英語によるコミュニケーション能力を向上させたい。



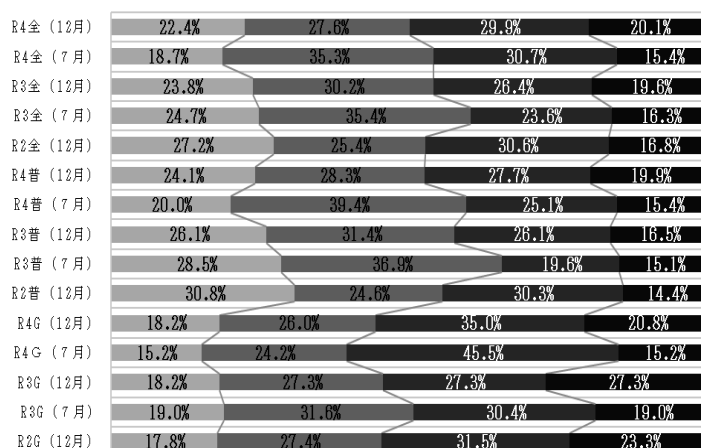
8. 外国の様々な異文化に触れることは楽しい。



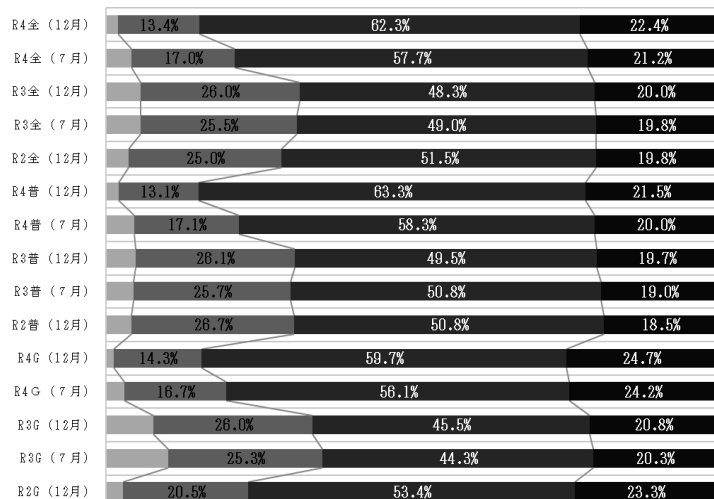
9. 海外の大学への長期留学や進学に関心がある。



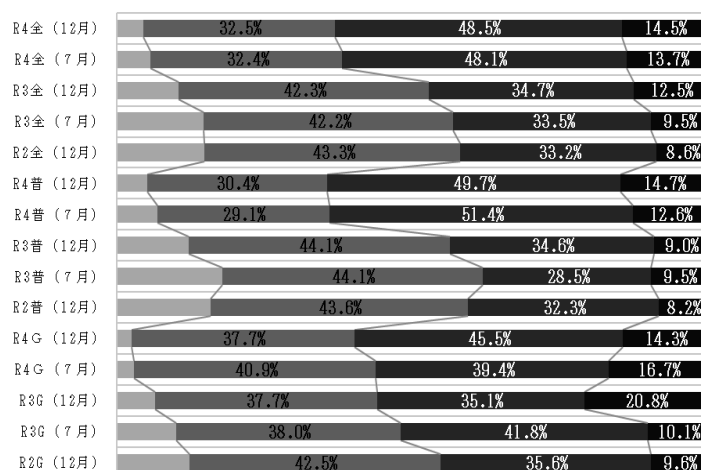
10. 将来海外で働いたり、海外ボランティアなど国際的な活動に参加したりしたい。



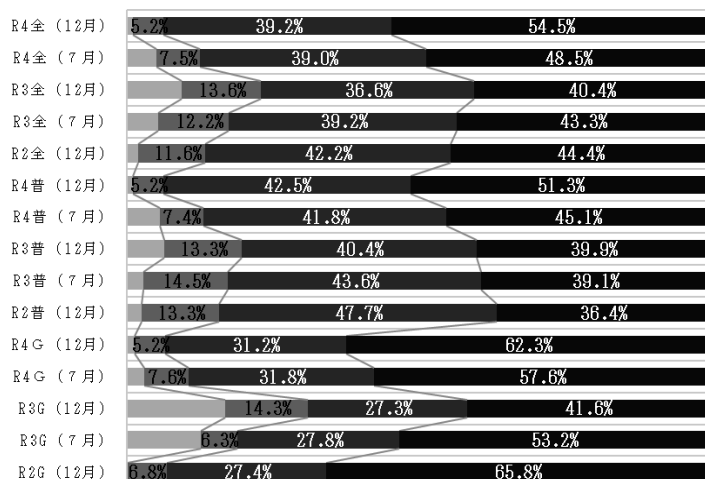
11. 物事や課題の全体を見渡して考えるようにしている。



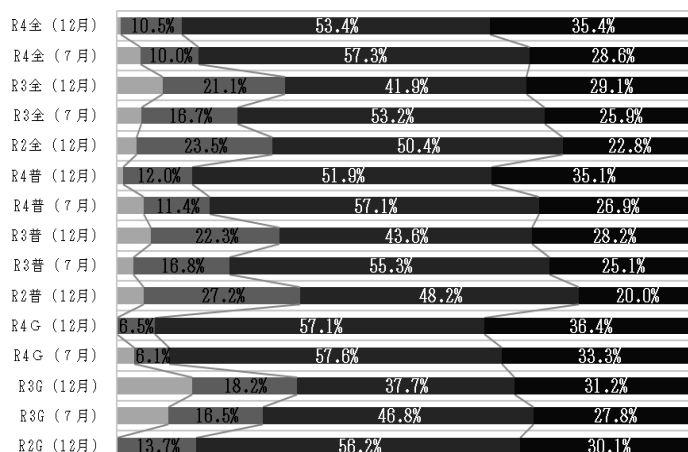
12. 身近な地域や京都の事柄を、日本全国や世界と関連づけて考えることができる。



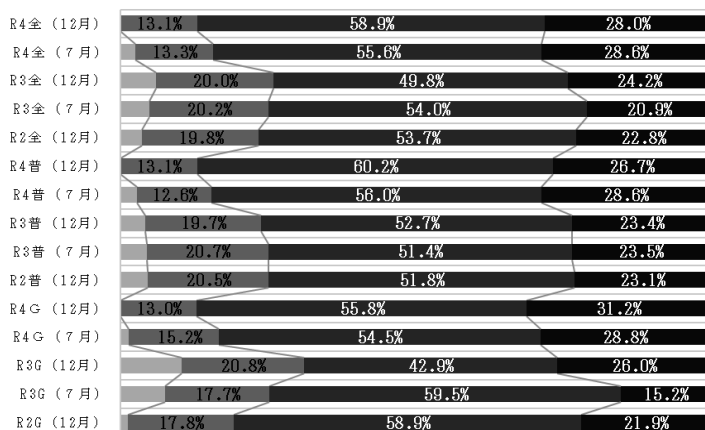
13. 異なる文化や価値観を尊重している。



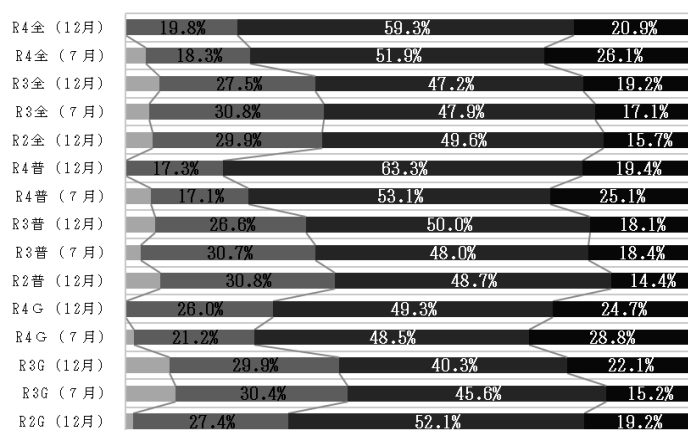
14. 異なる価値観を持つ人と協力しながら課題に取り組むことができる。



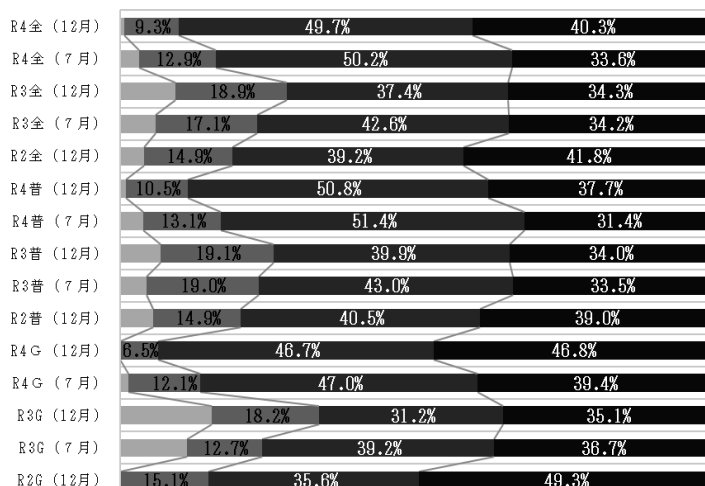
15. 目標を達成するために解決すべき問題を見つけることができる。



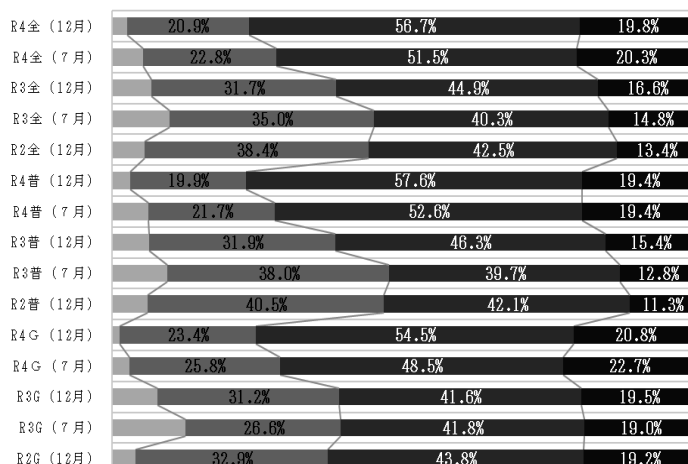
16. 集めた情報やデータを目的に応じて整理・分析することができる。



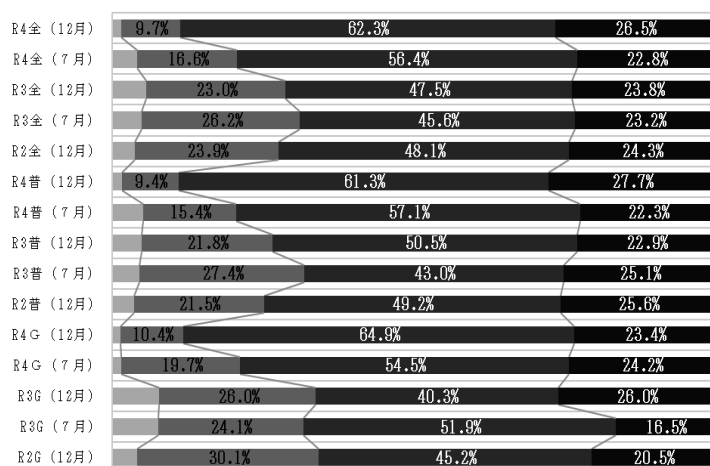
17. 今までにないアイデアを創造することは楽しいと思う。



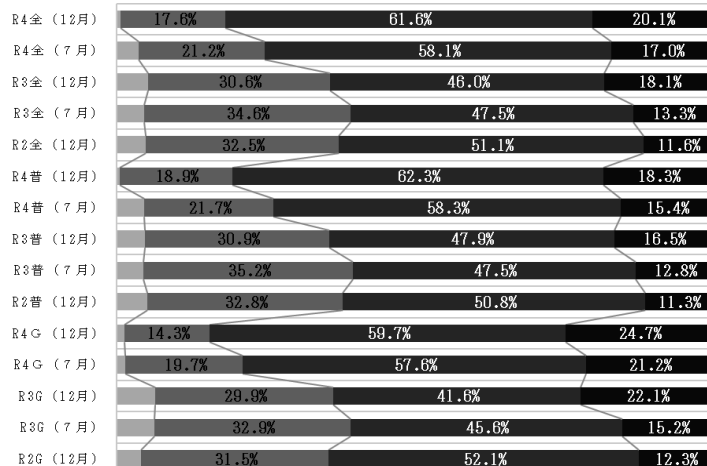
18. 京都や世界の伝統・文化や技術について、それらの持つ新しい価値に気づくことができる。



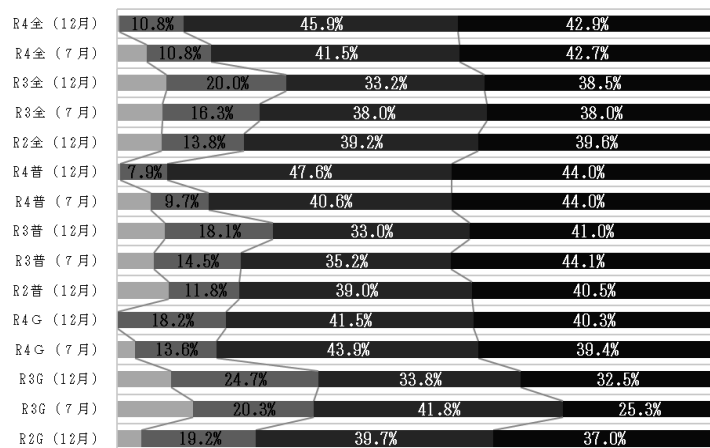
19. 目標を達成するための手順や方法を筋道立てて考えるようにしている。



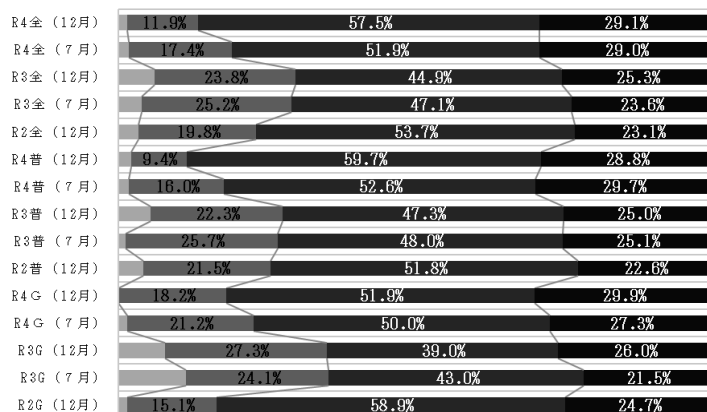
20. 複数の選択肢を比較検討しながら、課題解決に向けた最善のプロセスを考えることができる。



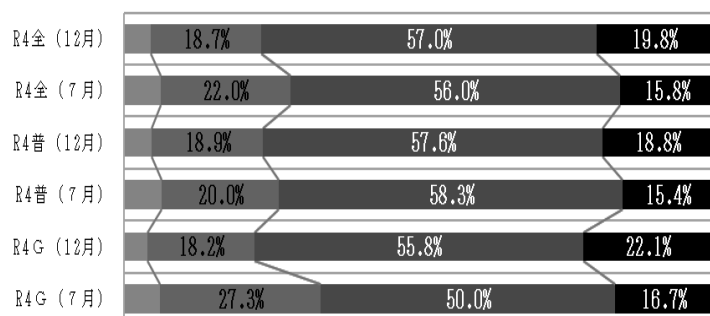
21. 困難な状況であっても、あきらめたくないと思う。



22. 困難な課題に対して、創意工夫しながら粘り強く取り組むことができる。



23. 高校で学んだ身近な歴史・智恵の活用方法や多文化交流の経験を、自身の人生や将来の社会貢献に活用することができると思う。



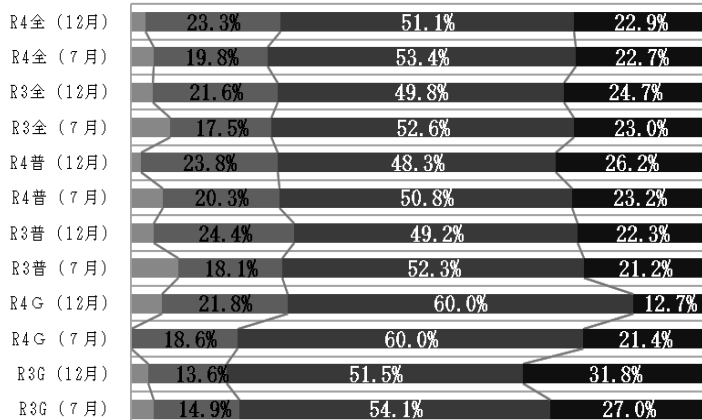
資料 2

令和 3 年度入学生（現 2 年生）WWL コンソーシアム構築支援事業に係る生徒アンケート

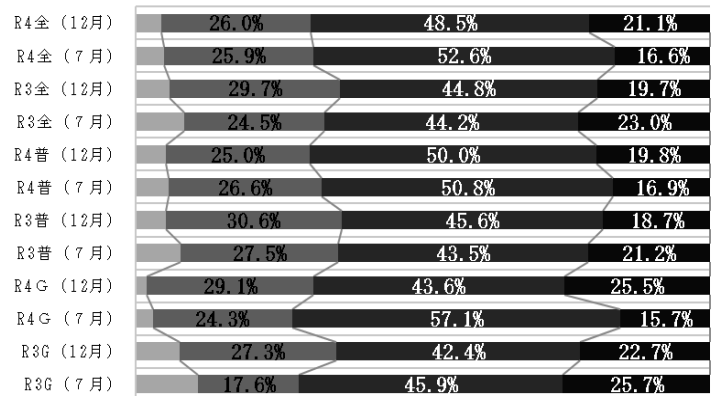
- 1 実施時期 令和 3 年度 7 月・12 月 令和 4 年度 7 月・12 月
- 2 回 答 数 鳥羽高校（拠点校）※全：全体、普：普通科、G：グローバル科
 令和 3 年度 7 月 267 名 令和 3 年度 12 月 259 名
 令和 4 年度 7 月 247 名 令和 4 年度 12 月 227 名

- 3 尺 度  1 そうではない  2 どちらかといえばそうではない
 3 どちらかといえばそうである  4 そうである

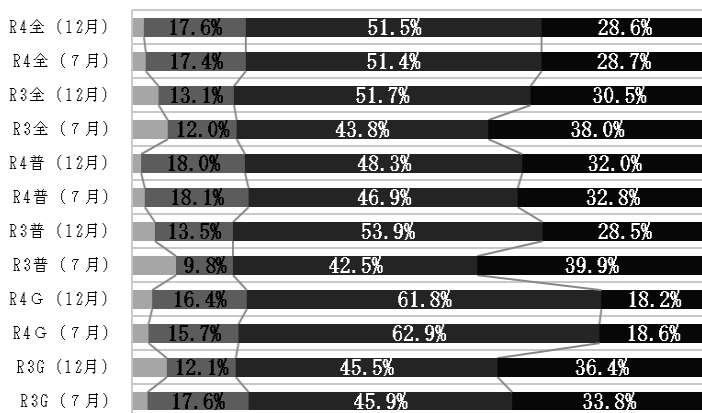
1. 自分は人のために役立つことができると思う。



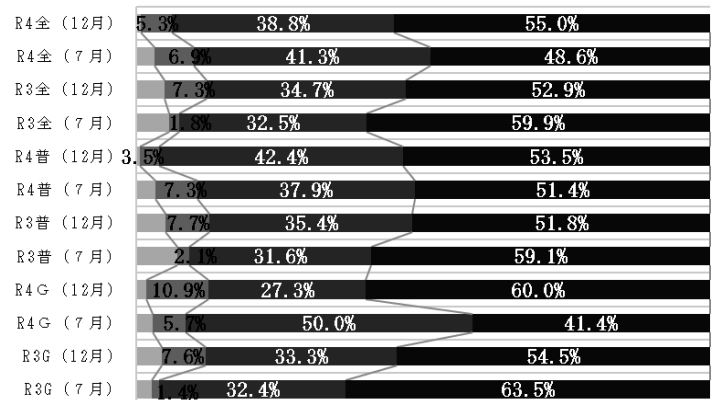
2. ボランティア活動への参加など、積極的に社会に貢献したい。



3. 自身の能力及びスキルの向上に努めている。



4. 自分のやりたいことを見つけ、それに情熱を傾けたい。



5. 集団での問題解決場面において、率先してリーダー的な役割を担うことができる。



6. 議論の際は自分の考えを相手にわかりやすく伝えるとともに、相手の意見にも耳を傾けることができる。



7. 英語によるコミュニケーション能力を向上させたい。

R4全（12月）	17.2%	41.9%	36.1%
R4全（7月）	13.0%	47.4%	32.8%
R3全（12月）	12.7%	38.6%	41.3%
R3全（7月）	13.1%	31.4%	50.0%
R4昔（12月）	18.0%	43.0%	33.8%
R4昔（7月）	14.1%	50.8%	27.1%
R3昔（12月）	16.1%	42.5%	34.2%
R3昔（7月）	17.6%	33.7%	42.5%
R4G（12月）	14.5%	38.2%	43.7%
R4G（7月）	10.0%	38.6%	47.1%
R3G（12月）	3.0%	27.3%	62.1%
R3G（7月）	2.7%	24.3%	68.9%

8. 外国の様々な異文化に触れることは楽しい。

R4全（12月）	18.5%	44.5%	33.0%
R4全（7月）	19.4%	44.9%	31.6%
R3全（12月）	16.6%	42.9%	32.8%
R3全（7月）	20.4%	35.4%	36.5%
R4昔（12月）	19.2%	48.3%	28.4%
R4昔（7月）	20.3%	50.3%	24.9%
R3昔（12月）	18.1%	45.1%	28.5%
R3昔（7月）	21.8%	39.9%	30.1%
R4G（12月）	16.4%	32.7%	47.3%
R4G（7月）	17.1%	31.4%	48.6%
R3G（12月）	12.1%	36.4%	45.5%
R3G（7月）	17.6%	25.7%	51.4%

9. 海外の大学への長期留学や進学に関心がある。

R4全（12月）	30.0%	27.3%	28.2%	14.5%
R4全（7月）	25.9%	30.4%	27.5%	16.2%
R3全（12月）	24.3%	35.1%	21.2%	19.3%
R3全（7月）	33.2%	24.5%	24.5%	17.9%
R4昔（12月）	33.7%	29.7%	25.6%	11.0%
R4昔（7月）	28.8%	33.9%	25.4%	11.9%
R3昔（12月）	28.0%	36.8%	20.2%	15.0%
R3昔（7月）	38.9%	26.4%	23.8%	10.9%
R4G（12月）	18.2%	20.0%	36.4%	25.5%
R4G（7月）	18.6%	21.4%	32.9%	27.1%
R3G（12月）	13.6%	30.3%	24.2%	31.8%
R3G（7月）	18.9%	20.3%	25.7%	35.1%

10. 将来海外で働いたり、海外ボランティアなど国際的な活動に参加したりしたい。

R4全（12月）	25.6%	34.8%	31.7%
R4全（7月）	25.1%	32.0%	33.2%
R3全（12月）	23.2%	35.1%	26.3%
R3全（7月）	29.6%	33.9%	23.4%
R4昔（12月）	29.1%	35.5%	29.1%
R4昔（7月）	27.7%	36.7%	28.2%
R3昔（12月）	26.4%	35.8%	27.5%
R3昔（7月）	36.3%	34.7%	20.2%
R4G（12月）	14.5%	32.7%	40.0%
R4G（7月）	18.6%	20.0%	45.7%
R3G（12月）	13.6%	33.3%	22.7%
R3G（7月）	12.2%	32.4%	32.4%

11. 物事や課題の全体を見渡して考えるようにしている。

R4全（12月）	21.1%	57.1%	19.0%
R4全（7月）	20.8%	56.4%	18.5%
R3全（12月）	26.3%	52.9%	15.3%
R3全（7月）	20.3%	59.3%	18.6%
R4昔（12月）	19.8%	57.1%	19.2%
R4昔（7月）	22.8%	56.0%	17.1%
R3昔（12月）	26.9%	54.9%	12.4%
R3昔（7月）	32.7%	54.5%	9.1%
R4G（12月）	24.3%	57.1%	18.6%
R4G（7月）	15.2%	57.6%	22.7%
R3G（12月）	24.3%	48.6%	21.6%

12. 身近な地域や京都の事柄を、日本全国や世界と関連づけて考えることができる。

R4全（12月）	48.5%	33.9%	9.7%
R4全（7月）	42.1%	39.7%	9.7%
R3全（12月）	42.1%	39.0%	8.5%
R3全（7月）	42.7%	33.6%	8.0%
R4昔（12月）	45.3%	35.5%	10.5%
R4昔（7月）	38.4%	41.8%	9.6%
R3昔（12月）	44.0%	38.3%	7.7%
R3昔（7月）	43.0%	32.6%	7.3%
R4G（12月）	58.2%	29.1%	7.3%
R4G（7月）	51.4%	34.3%	10.0%
R3G（12月）	36.4%	40.9%	12.1%
R3G（7月）	43.2%	33.8%	10.8%

13. 異なる文化や価値観を尊重している。

R4全（12月）	9.3%	47.6%	42.2%
R4全（7月）	8.1%	44.9%	43.3%
R3全（12月）	9.3%	42.5%	43.6%
R3全（7月）	13.5%	43.8%	39.1%
R4昔（12月）	9.3%	48.8%	41.9%
R4昔（7月）	7.3%	48.0%	40.7%
R3昔（12月）	11.4%	39.9%	44.0%
R3昔（7月）	16.1%	45.6%	34.7%
R4G（12月）	9.2%	43.6%	43.6%
R4G（7月）	10.0%	37.1%	50.0%
R3G（12月）	3.0%	50.0%	42.4%
R3G（7月）	8.1%	39.2%	48.6%

14. 異なる価値観を持つ人と協力しながら課題に取り組むことができる。

R4全（12月）	20.7%	54.6%	24.3%
R4全（7月）	15.8%	54.7%	27.1%
R3全（12月）	14.3%	56.4%	25.1%
R3全（7月）	19.7%	52.9%	23.7%
R4昔（12月）	20.9%	53.5%	25.6%
R4昔（7月）	16.4%	55.4%	24.9%
R3昔（12月）	16.1%	57.5%	22.3%
R3昔（7月）	22.3%	52.8%	21.8%
R4G（12月）	20.0%	58.2%	20.0%
R4G（7月）	14.3%	52.9%	32.9%
R3G（12月）	9.1%	53.0%	33.3%
R3G（7月）	13.5%	52.7%	28.4%

15. 目標を達成するために解決すべき問題を見つけることができる。

R4全（12月）	13.3%	63.4%	20.7%
R4全（7月）	14.6%	57.9%	24.3%
R3全（12月）	18.9%	57.5%	21.2%
R3全（7月）	17.5%	54.4%	22.3%
R4昔（12月）	13.4%	61.0%	22.7%
R4昔（7月）	13.0%	57.6%	24.9%
R3昔（12月）	18.7%	57.5%	21.2%
R3昔（7月）	17.6%	50.8%	25.4%
R4G（12月）	12.7%	70.9%	14.5%
R4G（7月）	18.6%	58.6%	22.9%
R3G（12月）	19.7%	57.6%	21.2%
R3G（7月）	17.6%	60.8%	16.2%

16. 集めた情報やデータを目的に応じて整理・分析することができる。

R4全（12月）	23.8%	55.1%	18.5%
R4全（7月）	20.2%	59.9%	18.6%
R3全（12月）	24.7%	56.4%	14.7%
R3全（7月）	24.8%	53.3%	15.7%
R4昔（12月）	22.1%	55.2%	19.8%
R4昔（7月）	18.6%	61.0%	18.6%
R3昔（12月）	23.3%	57.5%	13.5%
R3昔（7月）	23.8%	54.4%	15.0%
R4G（12月）	29.1%	54.6%	14.5%
R4G（7月）	24.3%	57.1%	18.6%
R3G（12月）	28.8%	53.0%	18.2%
R3G（7月）	27.0%	51.4%	17.6%

17. 今までにないアイデアを創造することは楽しいと思う。

R4全（12月）	15.4%	47.6%	34.8%
R4全（7月）	13.0%	49.4%	32.0%
R3全（12月）	15.8%	45.2%	33.2%
R3全（7月）	13.1%	47.4%	33.2%
R4昔（12月）	15.7%	47.1%	35.5%
R4昔（7月）	14.1%	46.9%	31.6%
R3昔（12月）	16.6%	46.6%	31.1%
R3昔（7月）	14.5%	48.7%	30.6%
R4G（12月）	14.5%	49.2%	32.7%
R4G（7月）	10.0%	55.7%	32.9%
R3G（12月）	13.6%	40.9%	39.4%
R3G（7月）	10.8%	44.6%	39.2%

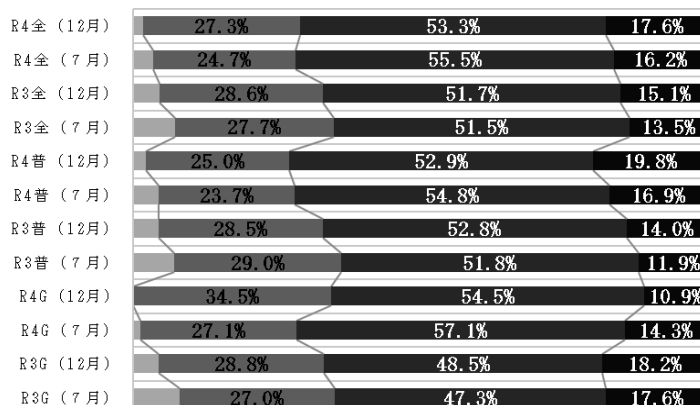
18. 京都や世界の伝統・文化や技術について、それらの持つ新しい価値に気づくことができる。

R4全（12月）	28.2%	53.7%	14.1%
R4全（7月）	28.3%	52.6%	13.0%
R3全（12月）	31.7%	43.6%	18.5%
R3全（7月）	29.6%	46.7%	13.9%
R4昔（12月）	26.7%	54.1%	15.1%
R4昔（7月）	26.0%	56.5%	11.3%
R3昔（12月）	32.6%	45.1%	16.6%
R3昔（7月）	29.5%	47.7%	11.9%
R4G（12月）	32.7%	52.8%	10.9%
R4G（7月）	34.3%	42.9%	17.1%
R3G（12月）	28.8%	39.4%	24.2%
R3G（7月）	29.7%	43.2%	20.3%

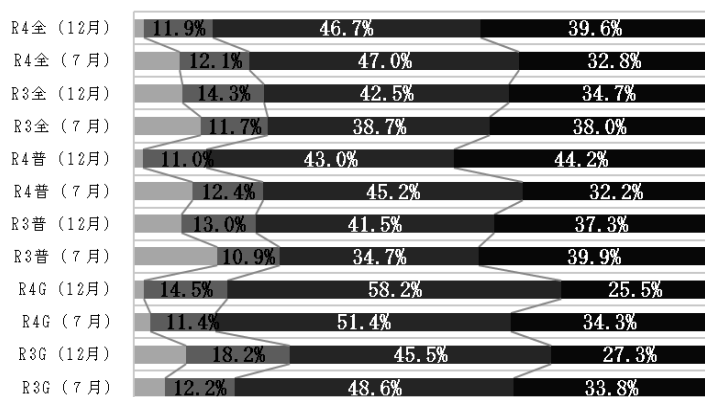
19. 目標を達成するための手順や方法を筋道立てて考えるようにしている。



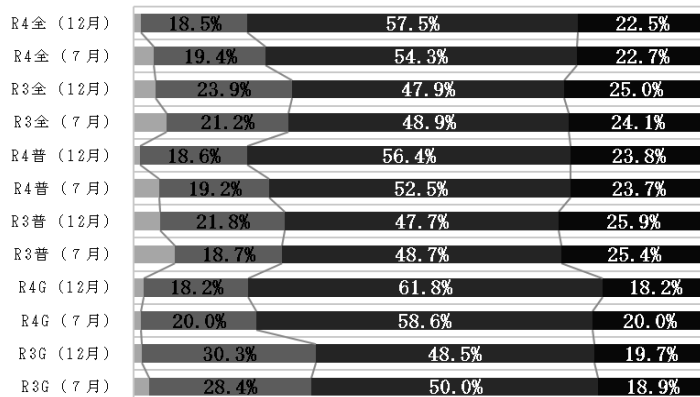
20. 複数の選択肢を比較検討しながら、課題解決に向けた最善のプロセスを考えることができる。



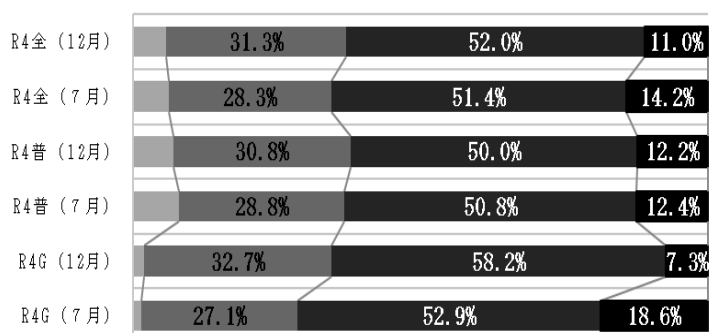
21. 困難な状況であっても、あきらめたくないと思う。



22. 困難な課題に対して、創意工夫しながら粘り強く取り組むことができる。



23. 高校で学んだ身近な歴史・智恵の活用方法や多文化交流の経験を、自身の人生や将来の社会貢献に活用することができると思う。



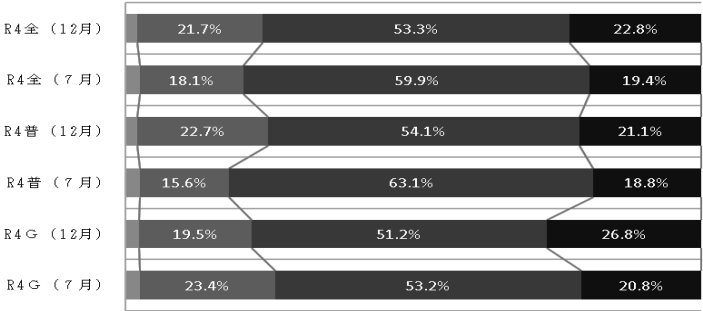
資料 3

令和 4 年度入学生（現 1 年生）WWL コンソーシアム構築支援事業に係る生徒アンケート

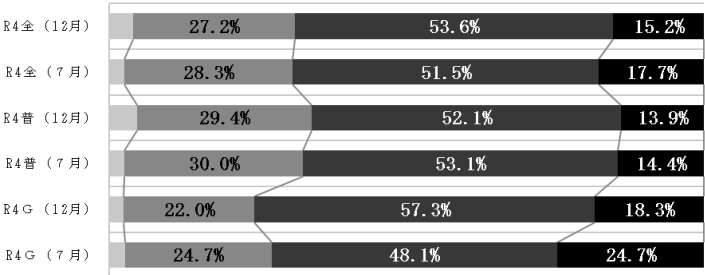
- 1 実施時期 令和 4 年度 7 月・12 月
- 2 回 答 数 鳥羽高校（拠点校）※全：全体、普：普通科、G：グローバル科
- 令和 4 年度 7 月 237 名 令和 4 年度 12 月 276 名

3. 尺 度
- 1 そうではない 2 どちらかといえばそうではない
- 3 どちらかといえばそうである 4 そうである

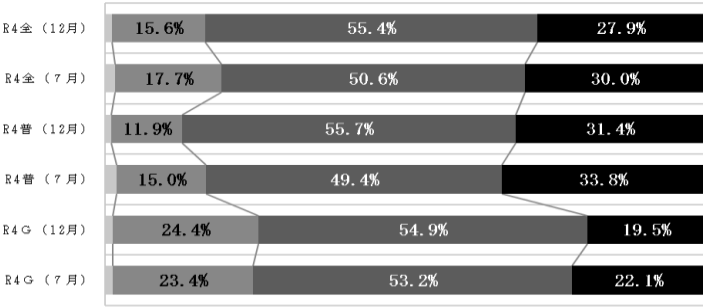
1. 自分は人のために役立つことができると思う。



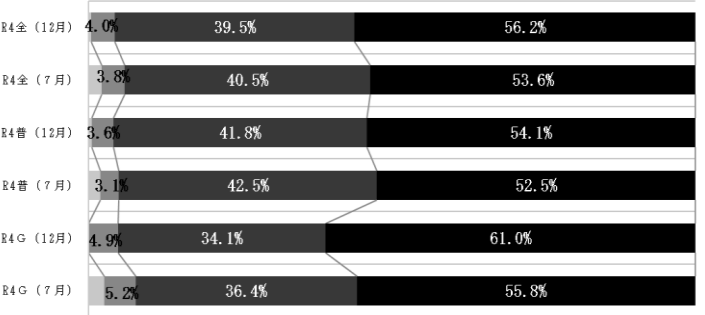
2. ボランティア活動への参加など、積極的に社会に貢献したい。



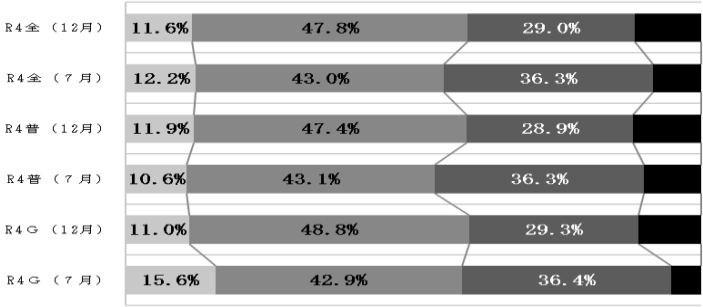
3. 自身の能力及びスキルの向上に努めている。



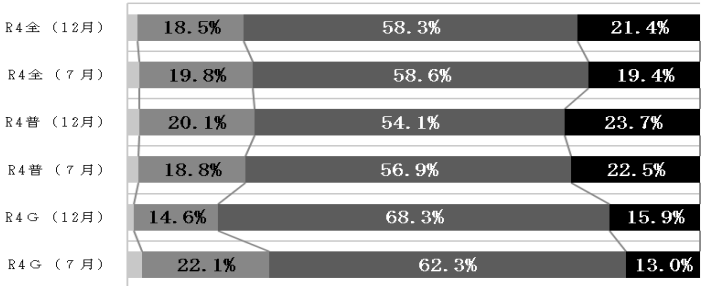
4. 自分のやりたいことを見つけ、それに情熱を傾けたい。



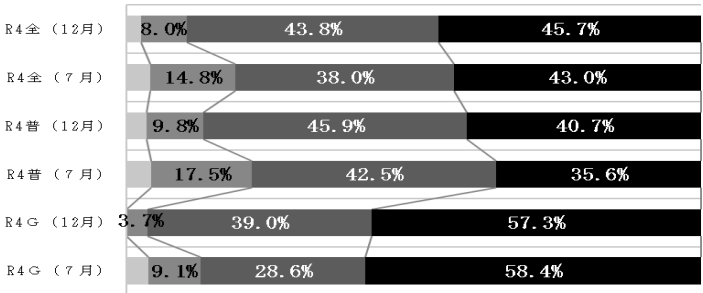
5. 集団での問題解決場面において、率先してリーダー的な役割を担うことができる。



6. 議論の際は自分の考えを相手にわかりやすく伝えるとともに、相手の意見にも耳を傾けることができる。



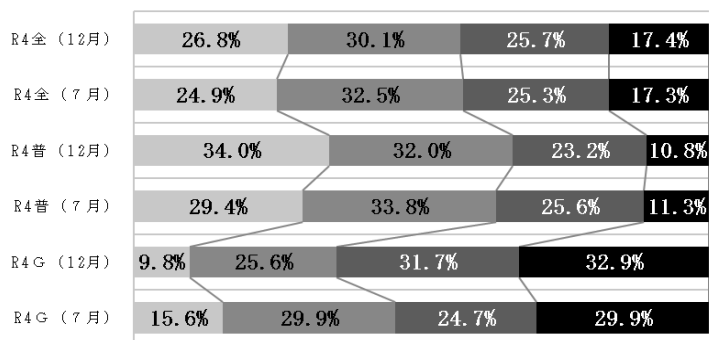
7. 英語によるコミュニケーション能力を向上させたい。



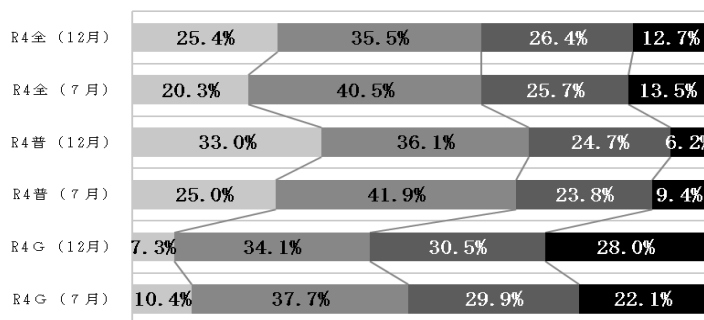
8. 外国の様々な異文化に触れることは楽しい。



9. 海外の大学への長期留学や進学に関心がある。



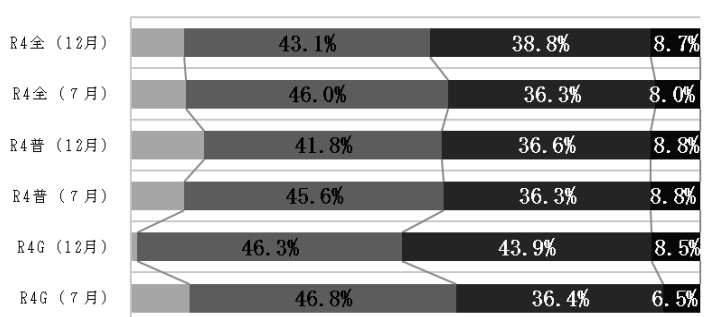
10. 将来海外で働いたり、海外ボランティアなど国際的な活動に参加したりしたい。



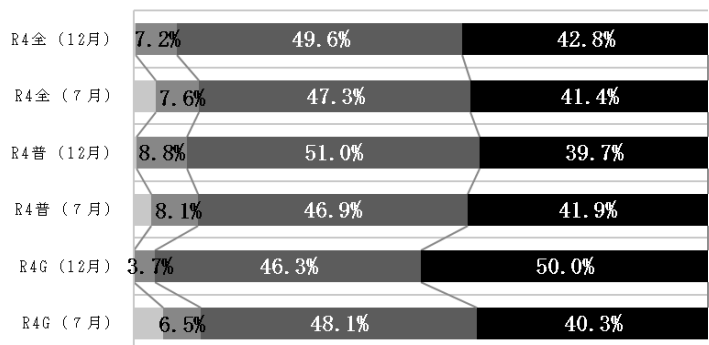
11. 物事や課題の全体を見渡して考えるようにしている。



12. 身近な地域や京都の事柄を、日本全国や世界と関連づけて考えることができる。



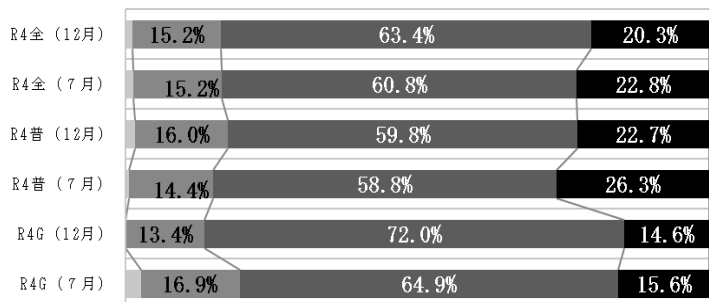
13. 異なる文化や価値観を尊重している。



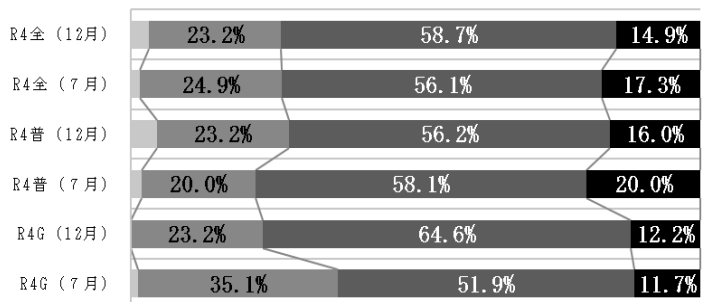
14. 異なる価値観を持つ人と協力しながら課題に取り組むことができる。



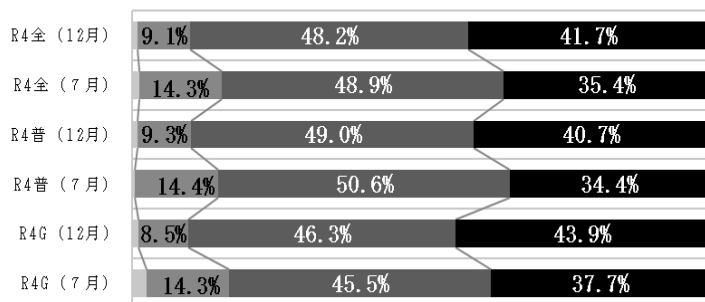
15. 目標を達成するために解決すべき問題を見つけることができる。



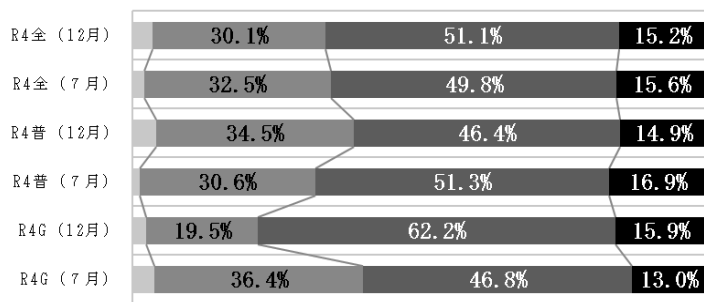
16. 集めた情報やデータを目的に応じて整理・分析することができる。



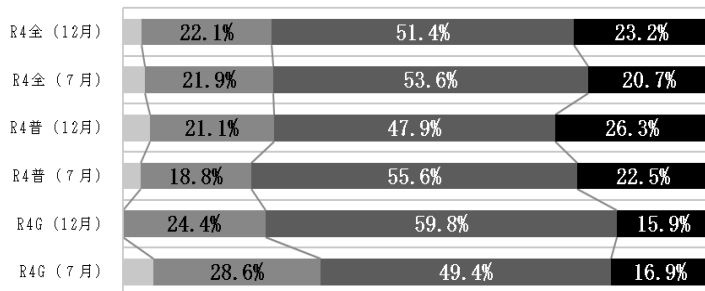
17. 今までにないアイデアを創造することは楽しいと思う。



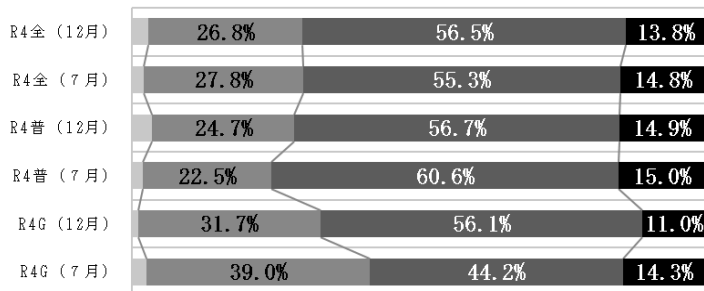
18. 京都や世界の伝統・文化や技術について、それらの持つ新しい価値に気づくことができる。



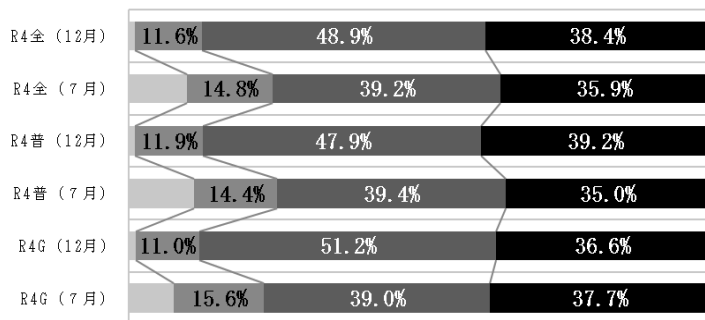
19. 目標を達成するための手順や方法を筋道立てて考えるようにしている。



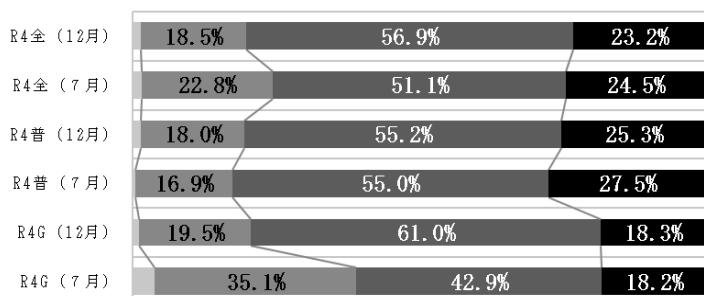
20. 複数の選択肢を比較検討しながら、課題解決に向けた最善のプロセスを考えることができる。



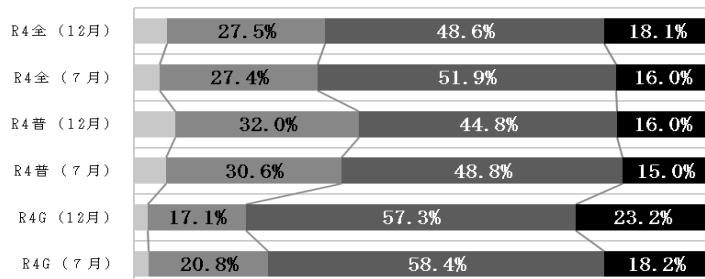
21. 困難な状況であっても、あきらめたくないと思う。



22. 困難な課題に対して、創意工夫しながら粘り強く取り組むことができる。



23. 高校で学んだ身近な歴史・智恵の活用方法や多文化交流の経験を、自身の人生や将来の社会貢献に活用することができると思う。



資料 4

WWLコンソーシアム構築支援事業に係る教職員アンケート

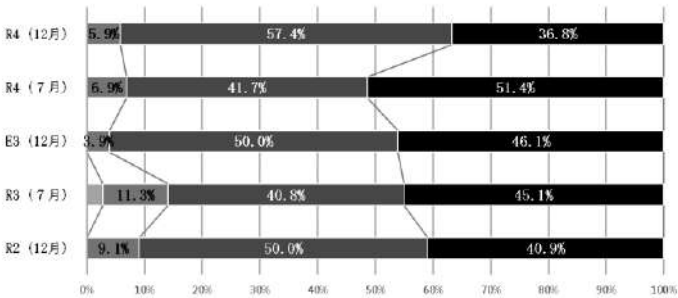
- 1 実施時期 令和2年度12月 令和3年度7月・12月 令和4年度7月・12月
- 2 回答数 鳥羽高校（拠点校）
令和2年度12月 66名 令和3年度7月 71名 令和3年度12月 76名
令和4年度7月 72名 令和4年度12月 68名
3. 尺度
- 1 そうではない

2 どちらかといえばそうではない

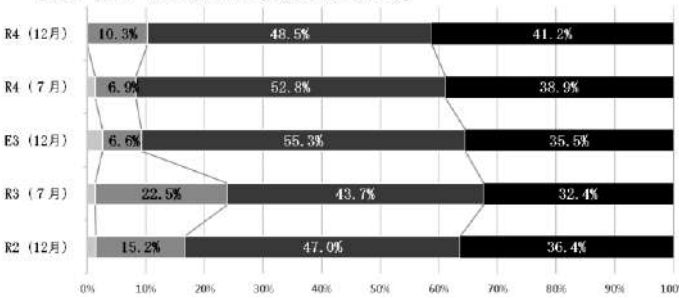
3 どちらかといえばそうである

4 そうである

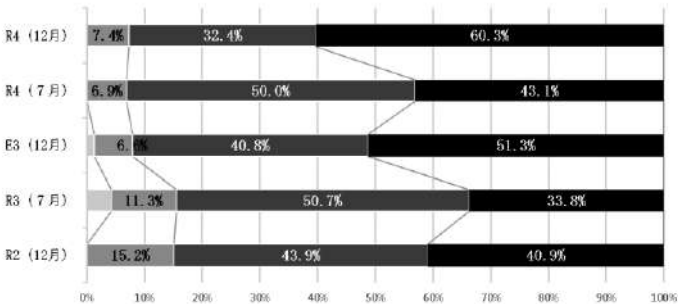
1. 教育課程の編成は、6つの資質・能力を統合的に育成するのに有効である。



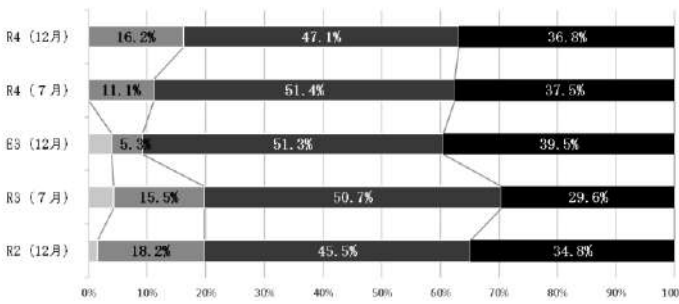
2. 「ソーシャル・インテリジェンス」「グローバル・シティズンシップ」等の多様な学校設定科目は、高度で先進的な学びの機会を、生徒の興味・関心・特性に応じて、提供できている。



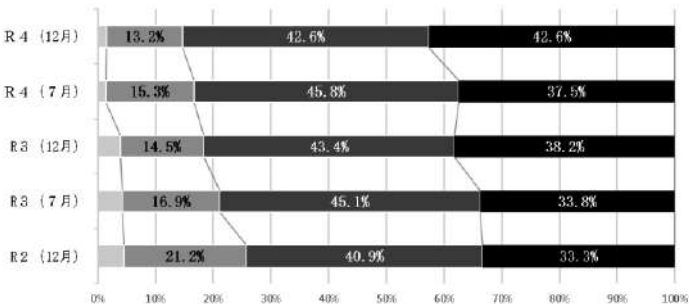
3. 鳥羽の学びのネットワークを活用した伝統文化の神髄に触れる機会は、広い視野でのグローバル社会を俯瞰できる力の育成に有効である。



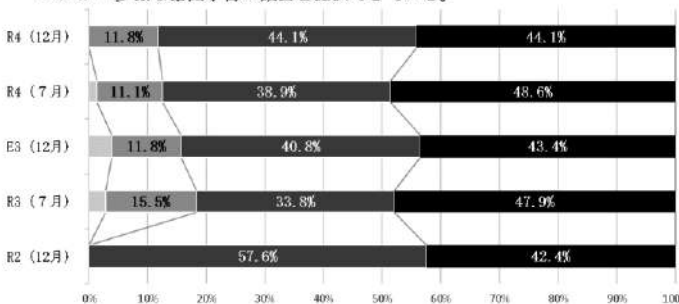
4. STEAM教育に係る科目など、文理横断的・異分野融合的科目の実施は、新たな価値を創造する力の育成に有効である。



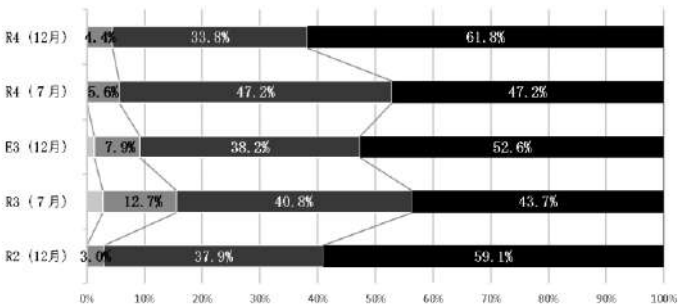
5. WWL事業による取組が、課題の解決に向けた主体的・協働的な学びになっており、学校全体の授業改善につながっている。



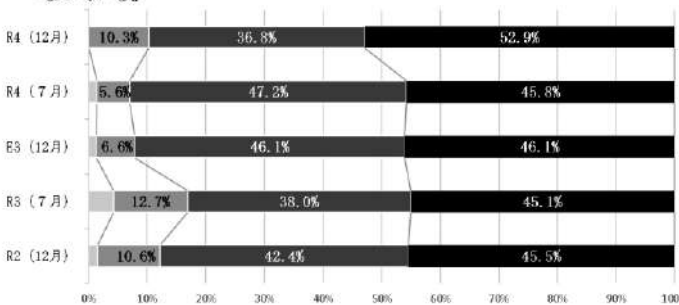
6. カリキュラムに位置付けられた短期・長期留学や海外研修（海外研修旅行、海外インターンシップ、サテライト校事業）は、生徒にグローバルかつ多様な協働学習の機会を提供できている。



7. ICTを活用した遠隔教育は、生徒にグローバルかつ多様な協働学習の機会を提供できている。



8. 「イノベーション探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」と「総合的な探究の時間」における課題研究は、持続可能な未来社会の創出に向けた効果的な取組となっている。



資料5

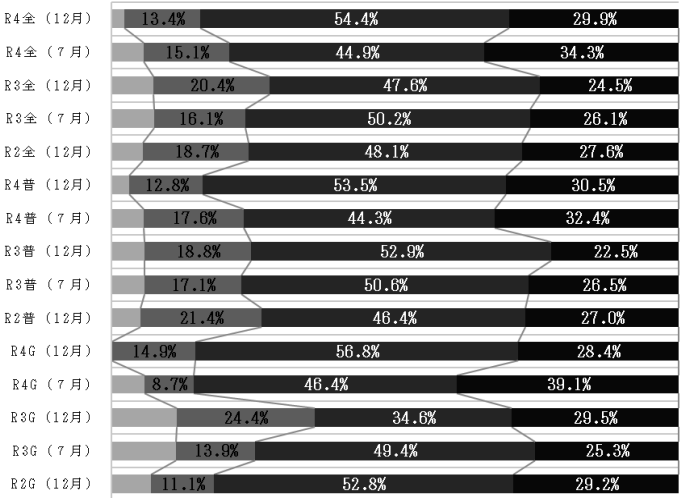
令和2年度入学生（現3年生）の探究的な資質・能力に係るアンケート

- 1 実施時期 令和2年度12月 令和3年度7月・12月 令和4年度7月・12月
- 2 回答数 鳥羽高校（拠点校）※全：全体、普：普通科、G：グローバル科
 令和2年度12月 268名 令和3年度7月 249名 令和3年度12月 269名
 令和4年度7月 245名 令和4年度12月 261名
 福知山高校（共同実施校）※全：全体、普：普通科、文理：文理科学科
 令和2年度12月 223名 令和3年度7月 207名 令和3年度12月 195名
 令和4年度7月 214名 令和4年度12月 205名
- 3 尺度  1 そうではない  2 どちらかといえばそうではない
 3 どちらかといえばそうである  4 そうである

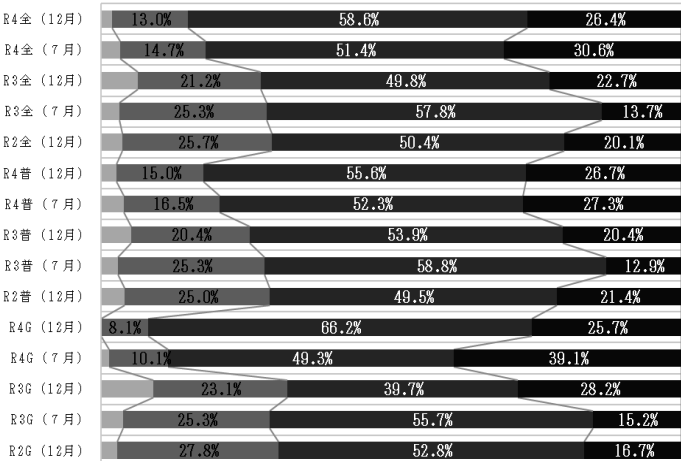
鳥羽高校

福知山高校

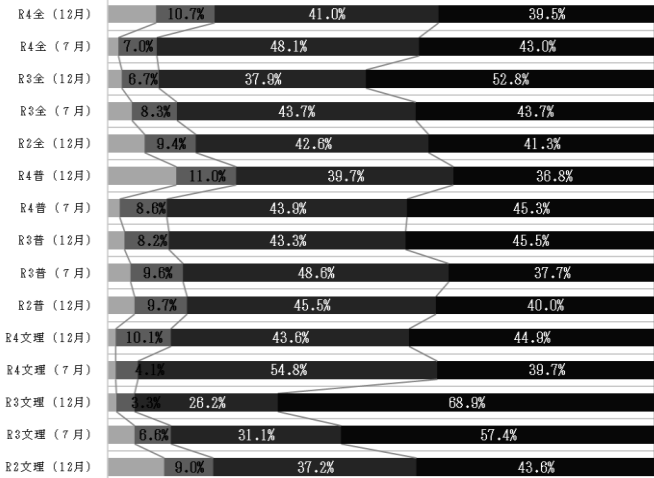
1. 関心のあるテーマに、課題を発見・設定できた。



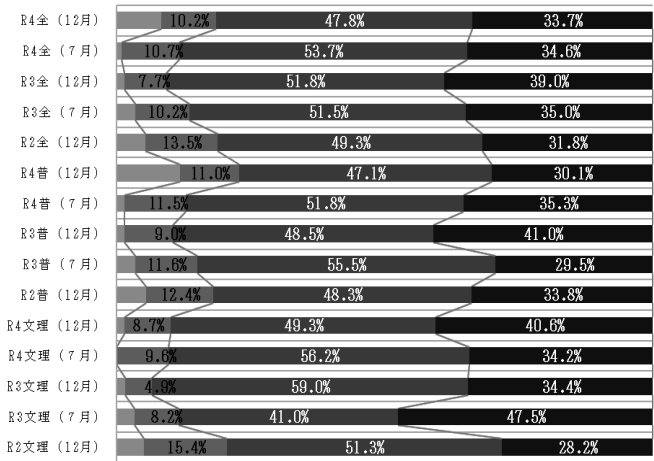
2. 課題設定や仮説構築に必要な情報やデータを収集・選択できた。



1. 関心のあるテーマに、課題を発見・設定できた。

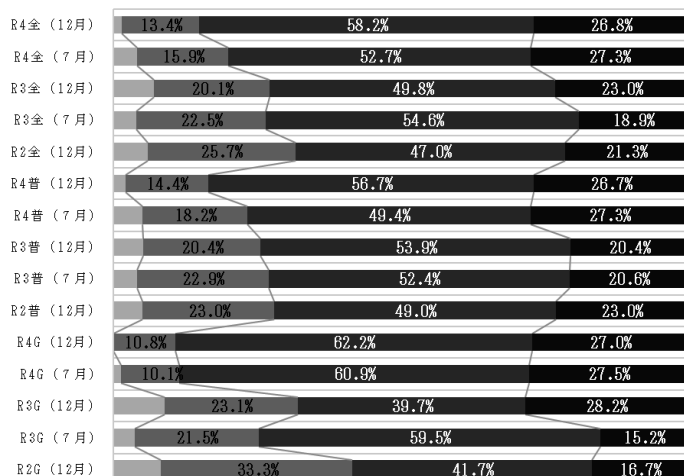


2. 課題設定や仮説構築に必要な情報やデータを収集・選択できた。

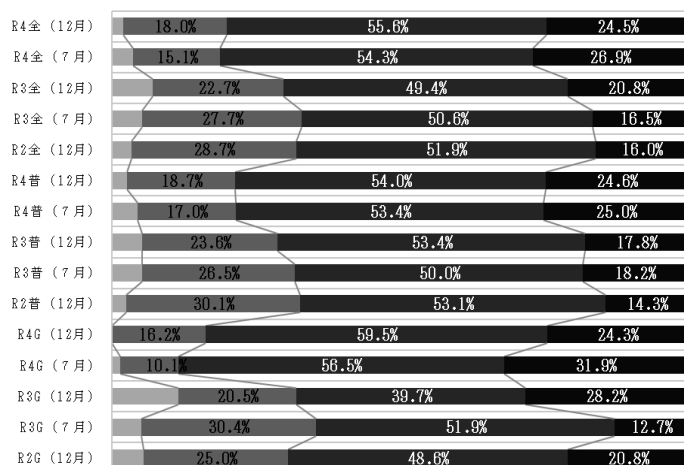


鳥羽高校

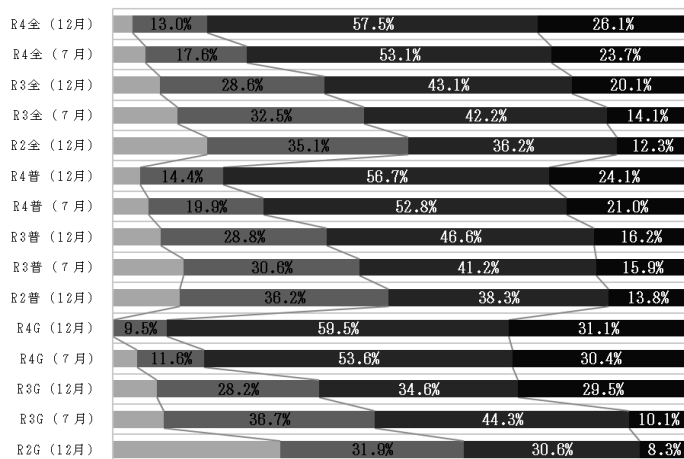
3. 収集・選択したデータを目的に応じて整理・分析することができた。



4. 課題解決の道筋を明らかにしながら、仮説を立てることができた。

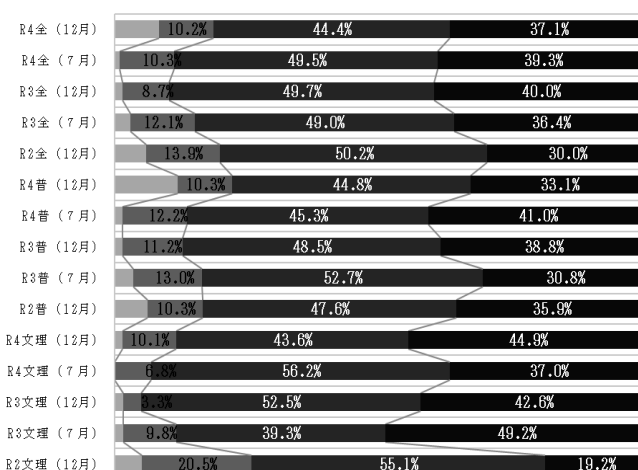


5. 研究内容を研究ノートやポスター等に効果的にまとめ、発表することができた。

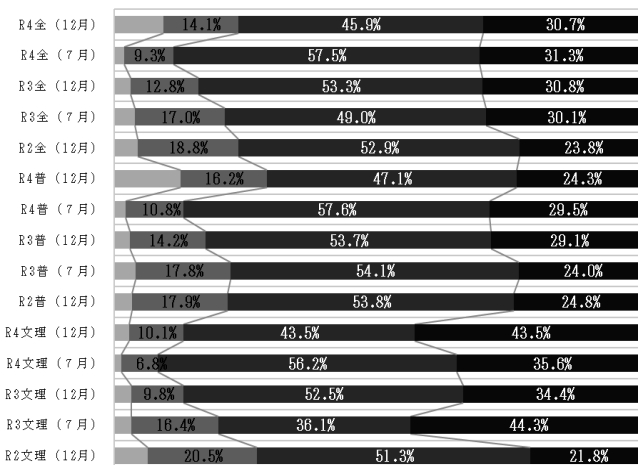


福知山高校

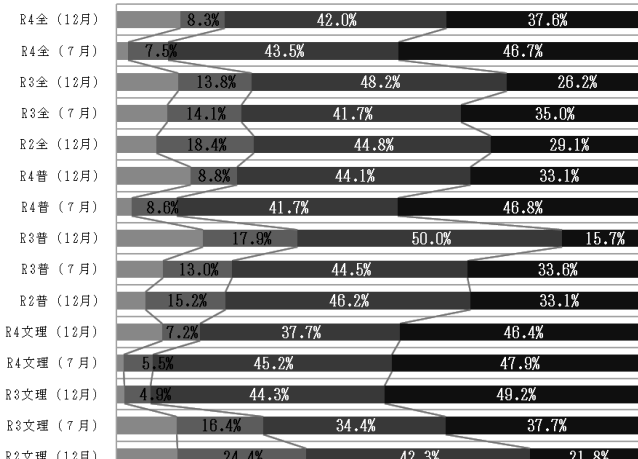
3. 収集・選択したデータを目的に応じて整理・分析することができた。



4. 課題解決の道筋を明らかにしながら、仮説を立てることができた。

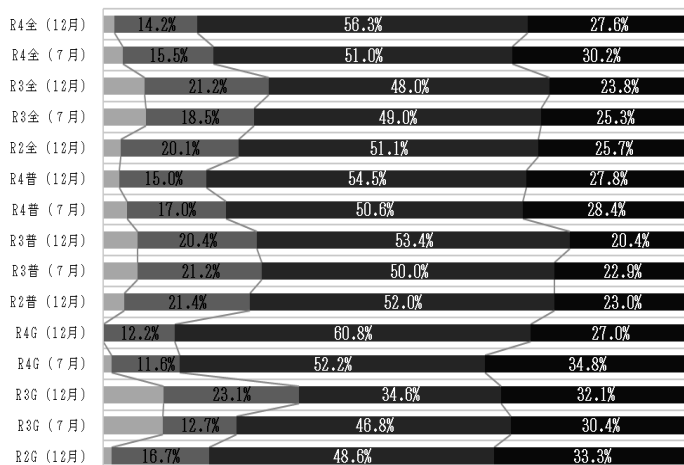


5. 研究内容を研究ノートやポスター等に効果的にまとめ、発表することができた。

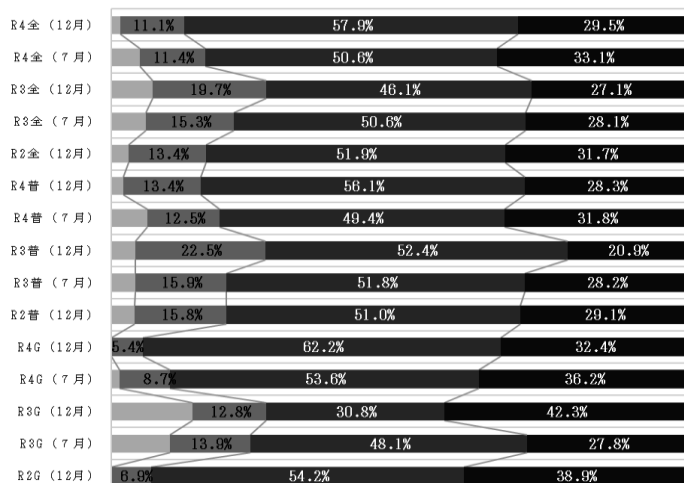


鳥羽高校

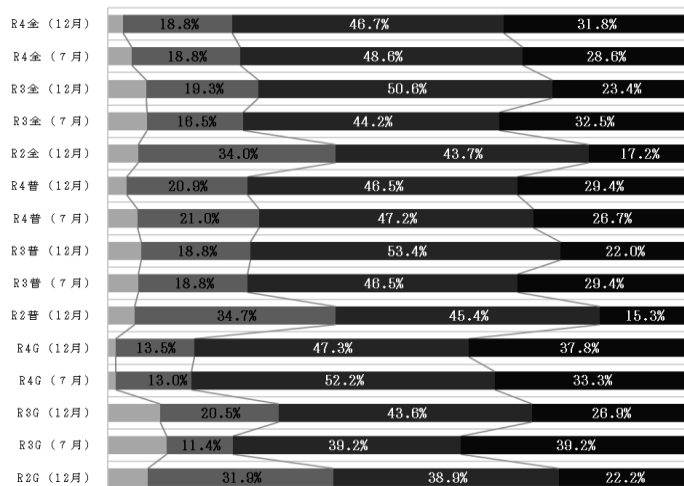
6. 自ら設定した研究テーマに基づき、主体的に探究活動に取り組もうとしている。



7. 自己の役割を自覚し、協働的かつ建設的にグループ活動に参加しようとしている。

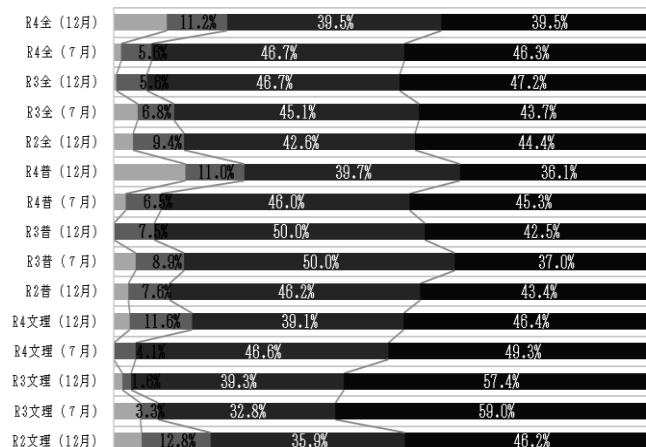


8. 持続可能な未来社会（SDGs等）を意識して、探究活動に取り組もうとしている。

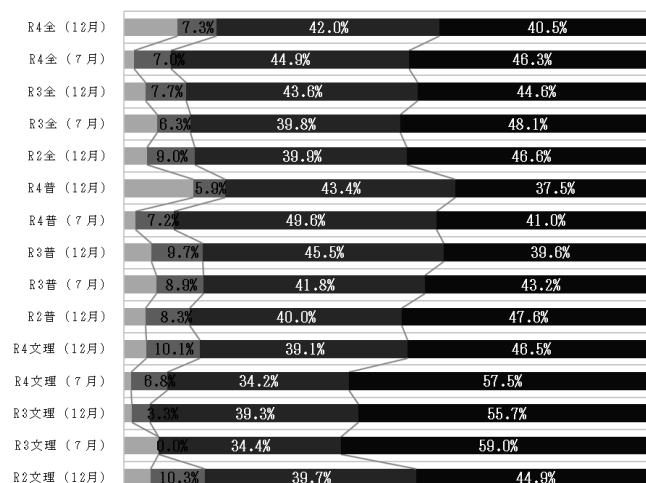


福知山高校

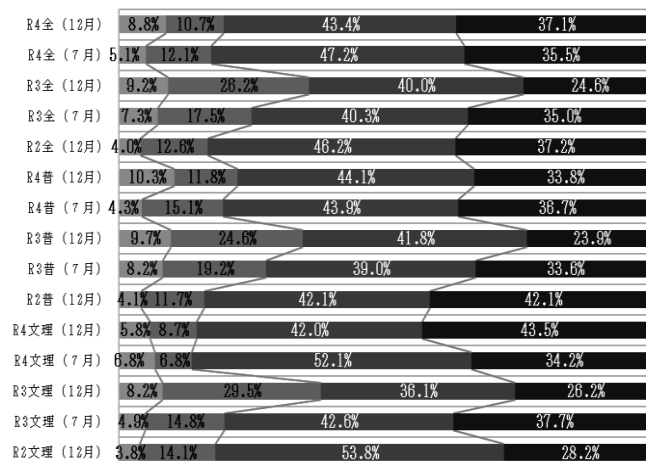
6. 自ら設定した研究テーマに基づき、主体的に探究活動に取り組もうとしている。



7. 自己の役割を自覚し、協働的かつ建設的にグループ活動に参加しようとしている。



8. 持続可能な未来社会（SDGs等）を意識して、探究活動に取り組もうとしている。



資料 6

令和3年度入学生（現2年生）の探究的な資質・能力に係るアンケート

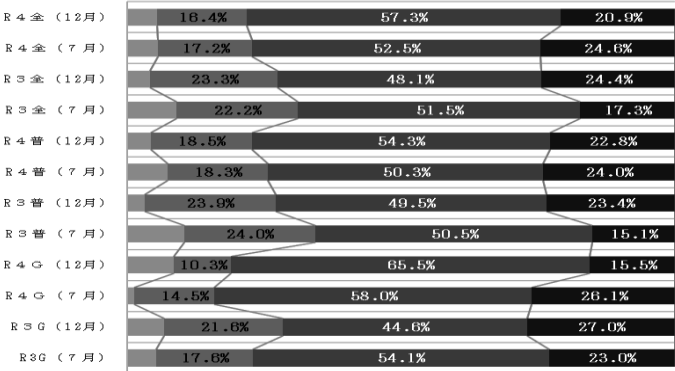
- 1 実施時期 令和3年度7月・12月 令和4年度7月・12月
- 2 回答数 鳥羽高校（拠点校）※全：全体、普：普通科、G：グローバル科
令和3年度7月 266名 令和3年度12月 262名
令和4年度7月 244名 令和4年度12月 220名
福知山高校（共同実施校）※全：全体、普：普通科、文理：文理科学科
令和3年度7月 230名 令和3年度12月 234名
令和4年度7月 219名 令和4年度12月 211名

3. 尺度
- 1 そうではない
- 2 どちらかといえばそうではない
- 3 どちらかといえばそうである
- 4 そうである

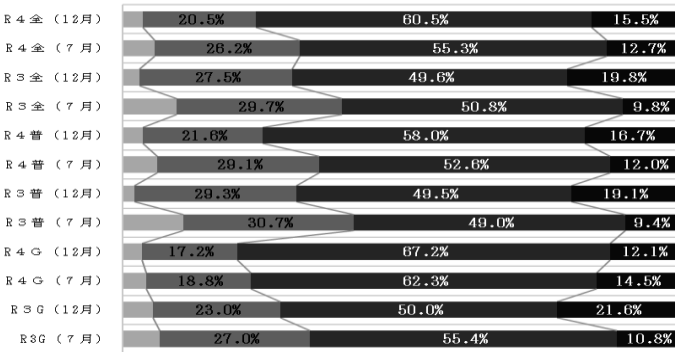
鳥羽高校

福知山高校

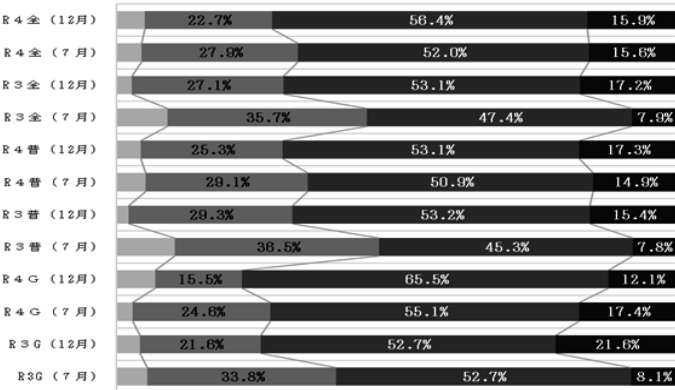
1. 関心のあるテーマに、課題を発見・設定できた。



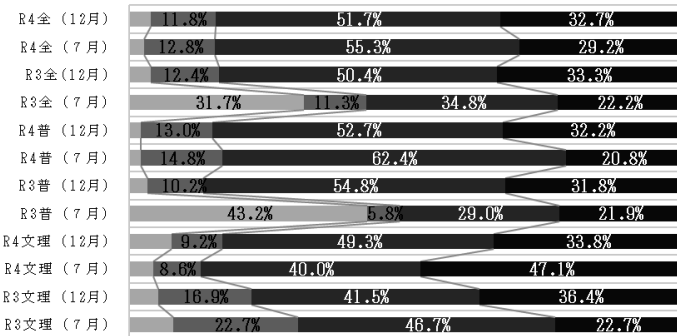
2. 課題設定や仮説構築に必要な情報やデータを収集・選択できた。



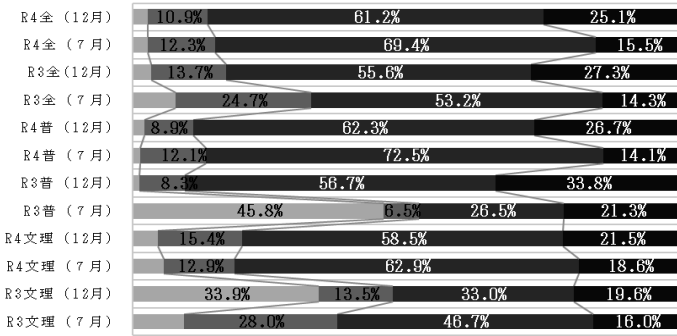
3. 収集・選択したデータを目的に応じて整理・分析することができた。



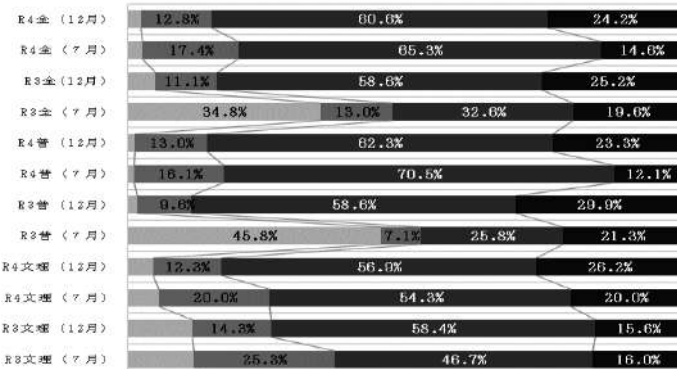
1. 関心のあるテーマに、課題を発見・設定できた。



2. 課題設定や仮説構築に必要な情報やデータを収集・選択できた。

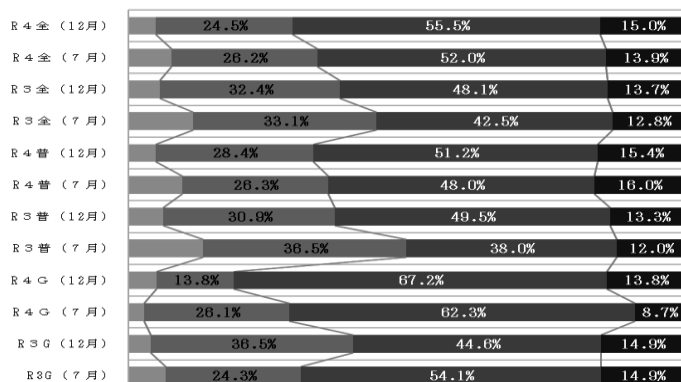


3. 収集・選択したデータを目的に応じて整理・分析することができた。

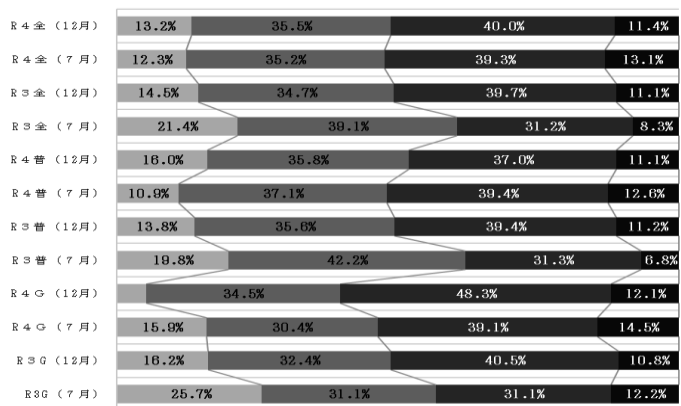


鳥羽高校

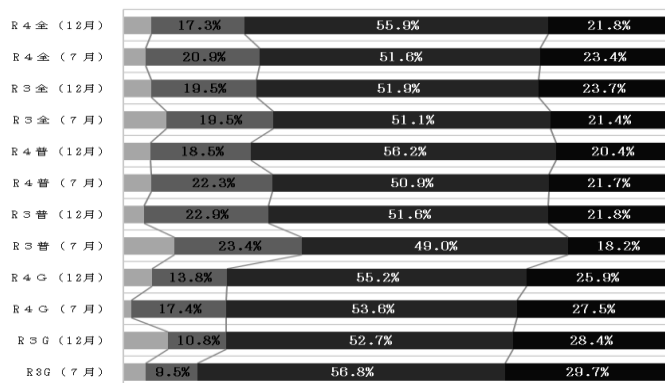
4. 課題解決の道筋を明らかにしながら、仮説を立てることができた。



5. 研究内容を研究ノートやポスター等に効果的にまとめ、発表することができた。

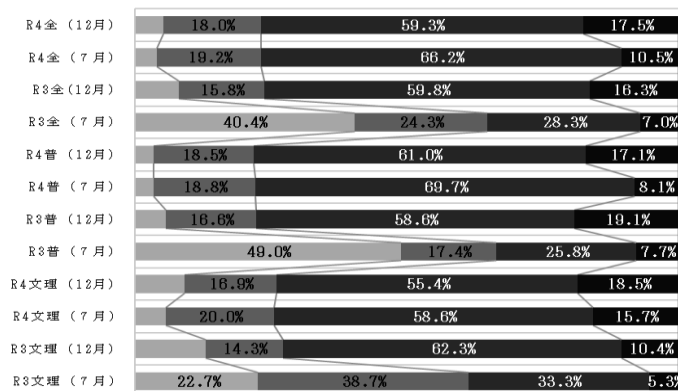


6. 自ら設定した研究テーマに基づき、主体的に探究活動に取り組もうとしている。

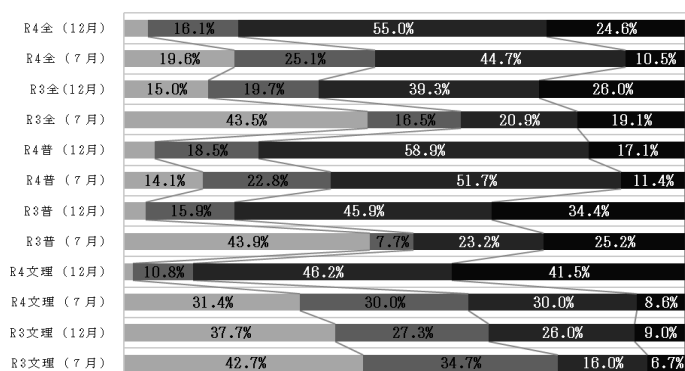


福知山高校

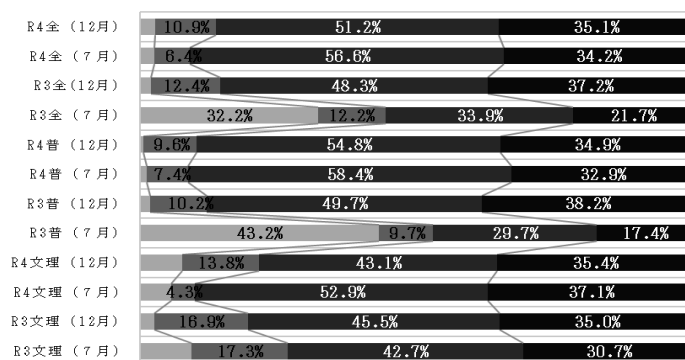
4. 課題解決の道筋を明らかにしながら、仮説を立てることができた。



5. 研究内容を研究ノートやポスター等に効果的にまとめ、発表することができた。

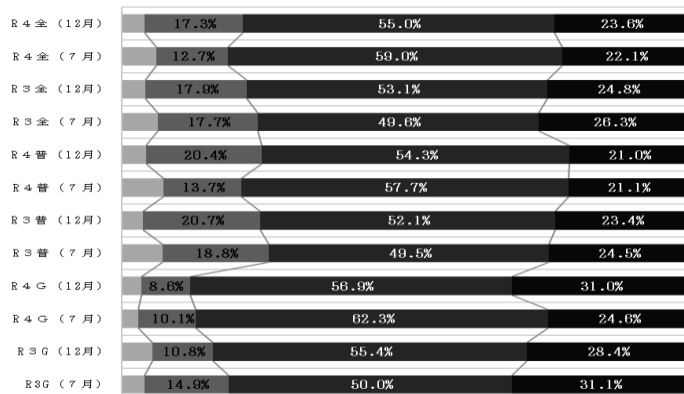


6. 自ら設定した研究テーマに基づき、主体的に探究活動に取り組もうとしている。

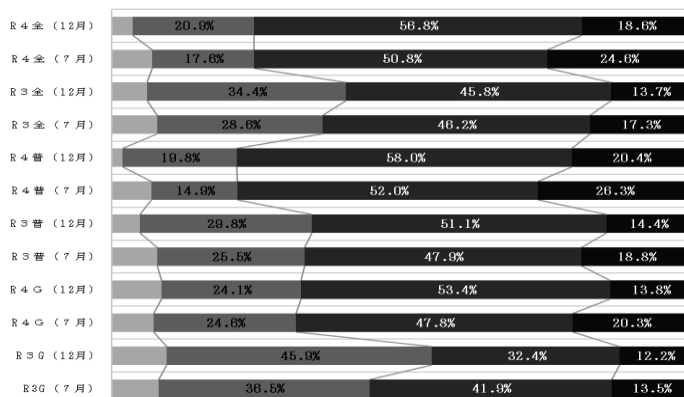


鳥羽高校

7. 自己の役割を自覚し、協働的かつ建設的にグループ活動に参加しようとしている。

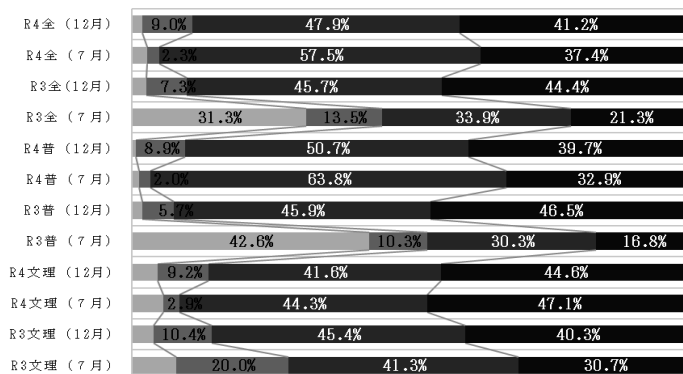


8. 持続可能な未来社会（SDGS等）を意識して、探究活動に取り組もうとしている。

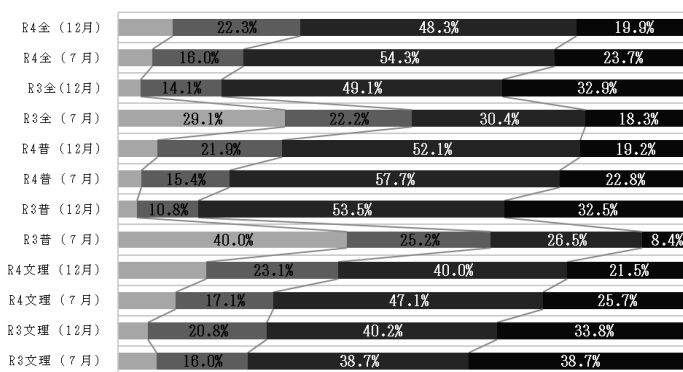


福知山高校

7. 自己の役割を自覚し、協働的かつ建設的にグループ活動に参加しようとしている。



8. 持続可能な未来社会（SDGS等）を意識して、探究活動に取り組もうとしている。



資料 7

令和4年度入学生（現1年生）の探究的な資質・能力に係るアンケート

- 1 実施時期 令和4年度7月・12月
- 2 回答数 鳥羽高校（拠点校）※全：全体、普：普通科、G：グローバル科
令和4年度7月 253名 令和4年度12月 279名
福知山高校（共同実施校）※全：全体、普：普通科、文理：文理科学科
令和4年度7月 179名 令和4年度12月 207名

- 3 尺度
- 1 そうではない

2 どちらかといえばそうではない

3 どちらかといえばそうである

4 そうである

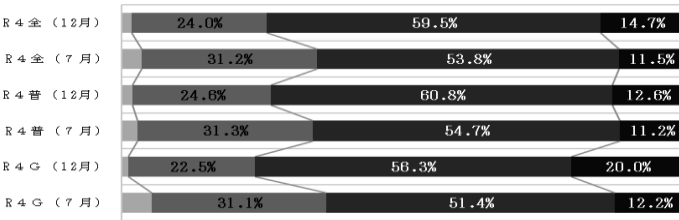
鳥羽高校

福知山高校

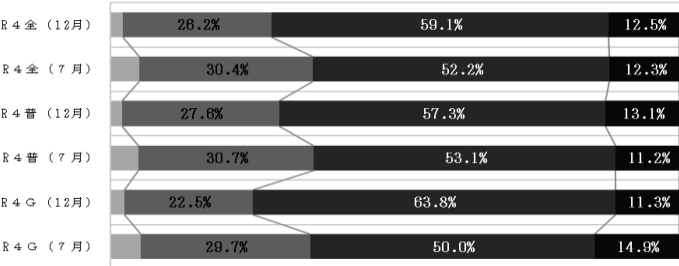
1. 関心のあるテーマに、課題を発見・設定できた。



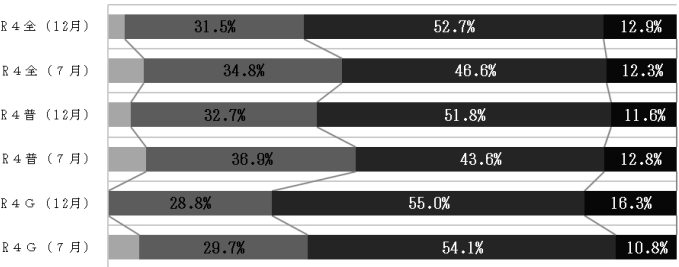
2. 課題設定や仮説構築に必要な情報やデータを収集・選択できた。



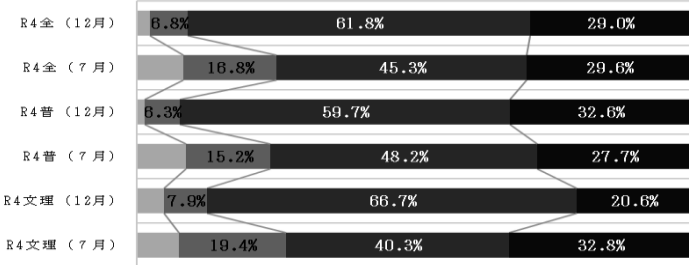
3. 収集・選択したデータを目的に応じて整理・分析することができた。



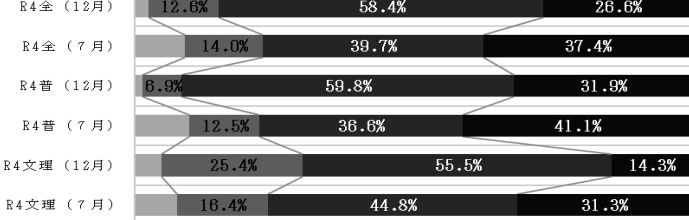
4. 課題解決の道筋を明らかにしながら、仮説を立てることができた。



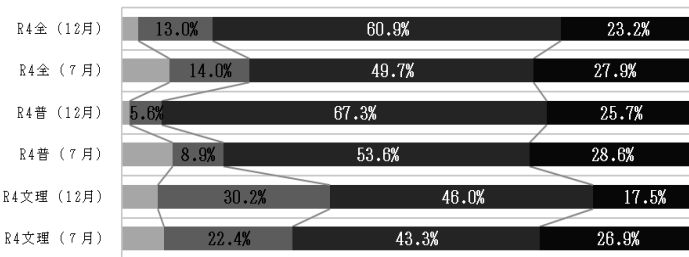
1. 関心のあるテーマに、課題を発見・設定できた。



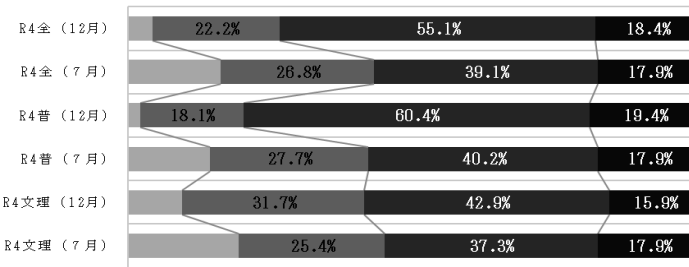
2. 課題設定や仮説構築に必要な情報やデータを収集・選択できた。



3. 収集・選択したデータを目的に応じて整理・分析することができた。

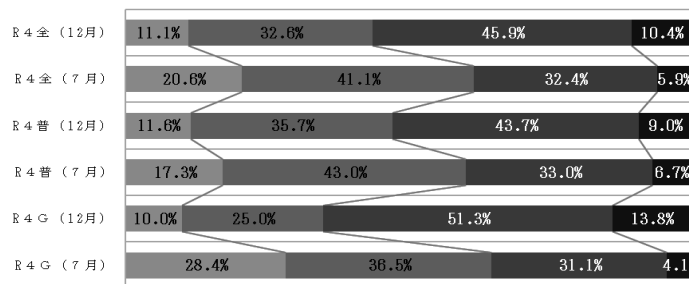


4. 課題解決の道筋を明らかにしながら、仮説を立てることができた。

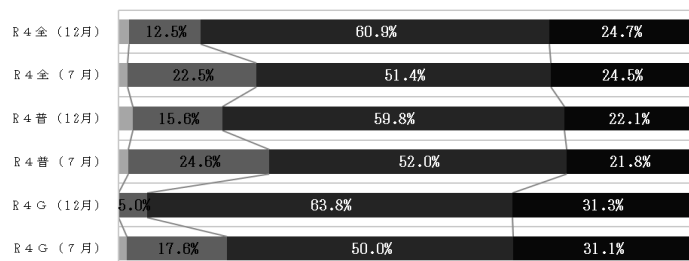


鳥羽高校

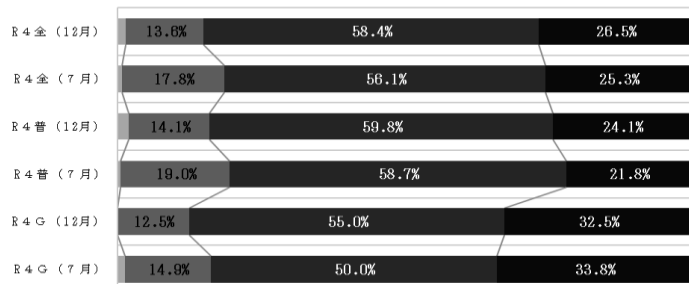
5. 研究内容を研究ノートやポスター等に効果的にまとめ、発表することができた。



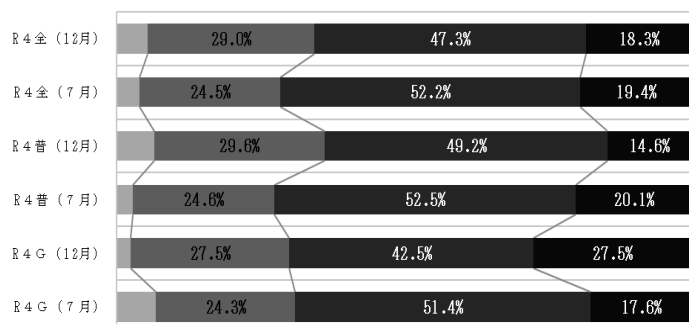
6. 自ら設定した研究テーマに基づき、主体的に探究活動に取り組もうとしている。



7. 自己の役割を自覚し、協働的かつ建設的にグループ活動に参加しようとしている。

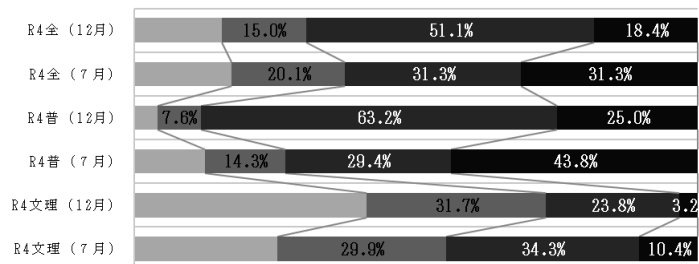


8. 持続可能な未来社会 (SDGs等) を意識して、探究活動に取り組もうとしている。

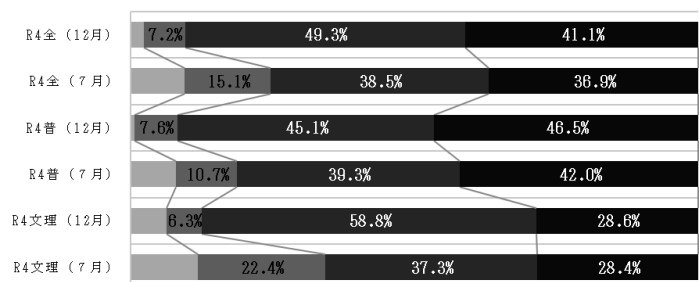


福知山高校

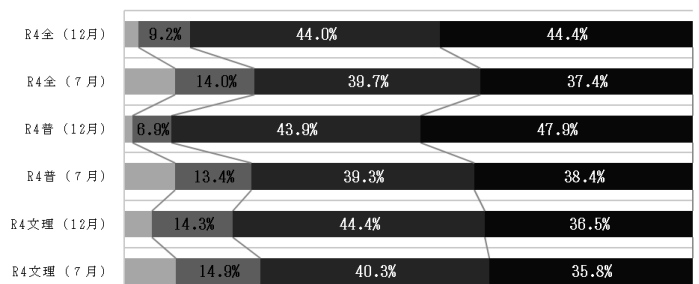
5. 研究内容を研究ノートやポスター等に効果的にまとめ、発表することができた。



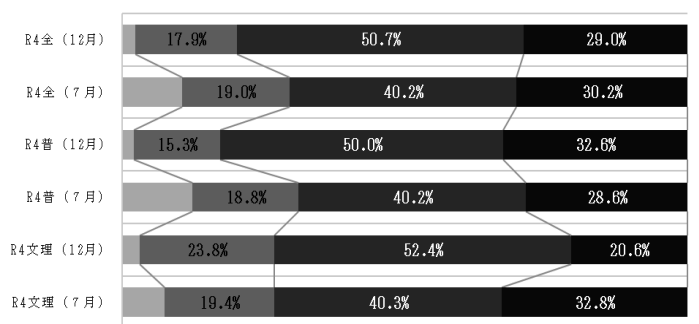
6. 自ら設定した研究テーマに基づき、主体的に探究活動に取り組もうとしている。



7. 自己の役割を自覚し、協働的かつ建設的にグループ活動に参加しようとしている。



8. 持続可能な未来社会 (SDGs等) を意識して、探究活動に取り組もうとしている。



(6) 令和4年度(2022年度)第1回運営指導委員会議事録

1 日 時 令和4年9月26日(月) 午後1時30分から4時まで

2 場 所 府立鳥羽高等学校

3 出席者

- (1) 運営指導委員 三谷宏治氏、内藤義弘氏、ハーダー・スティーブン氏、北尾哲郎氏
- (2) 府教育委員会 村田勝彦(指導部理事)、水口博史(高校教育課首席総括指導主事)、辻陽輔(高校教育課課長補佐兼係長)、伊藤恵哉(高校教育課指導主事)、森杏菜(主事)
- (3) 鳥羽高等学校 宮島勇二(校長)、竹林祥子(副校長)、佐藤政史(副校長)、中村啓介(教諭)
- (4) 福知山高等学校 藤田浩(校長)、松嶋亮潤(教諭)、白石耕二(教諭)

4 内容

(1) 開会

教育委員会挨拶 村田理事

校長挨拶 宮島校長、藤田校長

(2) 運営指導委員長選出

三谷委員を委員長として選出。

(3) 今年度の事業実施計画及び上半期の状況について

ア 管理機関からの報告(伊藤指導主事)

(三谷委員)

- ・報告内容によれば、全ての取組が順調に実施できているように聞こえるが、今どのレベルまで来ているのかわからない。グローバル・キャリアセミナーが100名募集のところ20名参加とあったように、**今年度の取組について、目標を達成できている取組みと、想定外(未達成)である取組は何か。**

→(回答:伊藤)

- ・海外に係る取組(交流)については、オンラインでしか実施できておらず、取組を充実させることに限界を感じている。グローバル・キャリアセミナーについては、海外大学進学を見据えており、高校生にとってはハードルの高い内容だと感じている。しかし、夏休みの土曜日に実施したにも関わらず申し込みは20名という結果だった。WWL事業に関わらず、府立高校生全体の海外志向性の向上に課題を感じている。
- ・「きょうとAPP(先取り履修)」や「スマートAPP」のように高校と大学を接続する取組については、一部、試行段階ではあるものの、今年度大きく前進している。「きょうとAPP」については、受講生の満足度は高く、また大学生並のレポート評価を受けていると聞いている。一方で、前期終了時点で、大学側の負担は大きいことがわかっており、大学にとってメリットがあるような取組にする必要がある。
- ・京都府WWL高校生サミットについては、ハーダー委員にもご助言をいただきながら、内容の改善ができています。

(三谷委員)

- ・WWL事業指定後に全ての取組が終了するわけではなく、今後も継続実施する取組はある。**現段階でどこまで目指すのかについて、管理機関として明確なゴールビジョンを設定する必要がある。**例えば、学校で取り組んでいるものは全員を対象とするが、一部の生徒を対象とした取組もあるはずである。その場合、何名の生徒を対象として、どの程度まで力を伸ばすのかについて明確な目標設定をすべきである。

(内藤委員)

- ・各取組について、同じ生徒が複数の取組に参加しているように思われる。

→ (回答：伊藤)

- ・「きょうとA P P」と「スマートA P」については、2名ほどが重複して受講しており、同じ生徒の参加は少ない。「きょうとA P P」では、各学期に90分の講義を15回受講し、レポート提出等が課される。また「スマートA P」では、9月までに7回の土曜に実施し、各回に90分の講義を2回受講することになる。在籍校の学習が優先であることから、各校で指導いただいているため、上記の取組を重複して受講している生徒は少ない。ただし、海外連携校との交流については、重複して参加している生徒が多い印象はある。

(内藤委員)

- ・**WWL事業の取組に、より多くの生徒が関心を持つための努力や工夫について、実施していることはあるか。**

→ (回答：伊藤)

- ・管理機関として、取組の計画及び運営を行っているが、参加者募集については各校で実施しているため、直接的に高校生に取組みをアピールするなど、幅広く生徒が参加するための工夫はできていない。

→ (追加コメント：三谷委員)

- ・より多くの生徒に取組の参加を促す工夫として、管理機関が直接生徒に声をかけることができないということであるが、**拠点校と共同実施校の2校であれば、各校で参加を呼びかける機会を設定できるのでないか。**

(内藤委員)

- ・「きょうとA P P (先取り履修)」について、**大学側のメリットは必要なのか。**

→ (回答：伊藤)

- ・管理機関としては、本格実施により大学の単位として認定していただけることが最終目標となる。そのためには、高校と大学双方にとってメリットがなければ難しいと考えている。今後、協働大学とは、課題を整理しながら、大学にとってメリットのある先取り履修の在り方を協議していく。

(ハーダー委員)

- ・**コロナ禍の影響**については、大学で教えていても感じている。過去の大学生と状況は大きく異なり、授業外の取組への参加が少ないなど、**気持ちに余裕がない**と感じている。高校では、コロナ禍の影響について、気持ちの面にどのような影響がどの程度あると感じているか。またWWL事業がなければ、どのような結果になっていたと想像するか。

→ (回答：竹林副校長)

- ・グローバル科の1期生が大学3回生になり、過去数年間にわたって海外に行けなかったが、今年に入って多数が海外に行っている。コロナ禍の影響は大きく、渡航することに遠慮しているように見える部分もあるが、海外に行きたい気持ちは持っている印象がある。それが表面には現れていないのではないか。

→ (回答：佐藤副校長)

- ・高校生は若い時にたくさんのことを経験したいと思っているはずである。海外に行きたいが行けないというのが本音であり、行き始めるとそこからは早いのではないか。

→ (回答：藤田校長)

- ・海外に行くことだけでなく、中学と高校をコロナ禍で過ごした生徒は、人と人との関わりについて成功体験が非常に少ない。オンラインの取組はあるものの、様々な経験を通して人間関係を構築する実体験がないため、臆病になっている。実体験のなさは、将来にじっくりと影響が出てくると思われる。

→ (追加コメント：三谷委員)

- ・コロナ禍の影響について、鳥羽高校ではローカルなテーマに関する取組から始めており、海外留学や海外インターンシップが全てではない。コロナ禍の影響はあるかもしれないが、今年度の第1回アンケート調査結果を踏まえると、**ローカルなテーマへの取組をうまく回し、拠点校及び共同実施校ともに着実に成果は出ているのではないか。**コロナ禍でグローバルな取組や実体験の機会が少ない状況であるからこそ、そこを強化していくことが必要であり、今年度後半にそのペースを加速させられるかが課題である。

(北尾委員)

- ・**海外インターンシップ**について、京都から海外に進出している企業はたくさんある。**より様々な企業にアプローチし、日本の企業ではなく海外企業から直接学べるように取組を広げていくのが良いのではないか。**

イ 拠点校（鳥羽高校）からの報告及び生徒発表（中村教諭）

(ハーダー委員)

- ・**生徒発表について、今回の発表はこれまでで最も良いものだった。**発表内容を暗記し、テンポが良く、途中で発表が詰まっても落ち着いて考えながら話していた。発音も良く、内容をすべて理解できた。また gravitas（言葉や態度の真剣さ）が感じられ、論理性においても完璧であった。内容については、世代間の差を感じられて興味深かった。

(三谷委員)

- ・報告事項について、各取組の参加者は10人程度とあり、参加者募集に課題があるということだが、**最終的な数値目標は何名なのか。**20人程度（2倍）であれば生徒とコミュニケーションを取る機会を増やせば達成できる。しかし、今の10倍参加するなど、さらに高い目標を設定するならば、より自発的に生徒が参加する仕組み作りが必要である。例えば、参加することで内申書に影響するなど、生徒にとって実利がある仕組みが必要となる。

(内藤委員)

- ・**取組の参加者を増加**させることについて、現在募集をする際に、苦労している点や工夫をしていることはあるか。

→ (回答：中村教諭)

- ・本日の発表者の場合、自発的に名乗り出た。工夫している点としては、発表に係る難しさと想定される成果を伝えるなど、生徒とのコミュニケーションを丁寧に行っている。

(内藤委員)

- ・**参加者の成功体験を校内に広げていく仕組み**をこれから構築するということだが、そのような仕組みは費用がかかるわけではないため、指定終了後も継続して実施できる。またその仕組みに必要なノウハウについては、形成したALネットワーク京都を活用することで得ることが可能である。

(北尾委員)

- ・**WWL事業の取組に係る生徒への情報提供**について、全校生徒のうちどの程度の生徒が取組を認知しているのか。取組について、生徒への周知方法で工夫ができるのではないか。

(三谷委員)

- ・アンケート項目について、仮説構築に係る項目など、高校生が自己評価するには難しいものがある。そのような項目については、教員からのフィードバックがあることで、生徒が達成できたかどうかを実感できる。**指導者の面から言えば、教員がフィードバックする力を高めること、そしてその機会の設定が必要となる。**そのために、「スマートAP」への教員参観の増加や京都府WWLプラットフォームの訪問者をさらに増やすなど、**教員の力を高める工夫が必要**である。最後の成果を評価するのは誰でもできるが、途中のプロセスを評価すること、また適切なタイミングでコミュニケーションをとることは難しい。教員の指導力向上に取り組むことがダイジであり、是非とも取り組んでほしい。

ウ 共同実施校（福知山高校）からの報告及び生徒発表（松嶋教諭）

（北尾委員）

- ・グローバルリーダーの育成について、どのように生徒を引き込んでいくのがダイジである。大変熱心に指導していることが感じられるが、**教員が何もかも指導してしまわないことが必要**である。

（内藤委員）

- ・地域とグローバルの視点を、上手く織り込んで取り組んでいる。グローバルリーダーの育成については、現在の取組を続けるとともに、地域の課題が世界ではどのような状況なのかを考える後押しを行うことでグローバルな視点に広がっていくのではないかと。現京都府国際センター理事長である山際氏が” **Think local and Act global**”、すなわち「地域の課題を考え、地球規模で行動する。」と発言している。そのような視点でリーダーを育成する必要があるのではないかと。

（三谷委員）

- ・地方では多様性がなく、大学や海外に行ってはじめて多様性を感じる。**グローバルリーダーの育成には、1カ国だけでなく、多様な国の人たちと接触し、文化等の差をたくさん経験することが求められる。**福知山高校でグローバルリーダーを育成するには、オンラインも含めて、多様な国の人たちとの接点を作り、違いを経験させることが必要である。ただし全員に対してではなく、リーダーの素質を持つ生徒に経験を積ませることでいいだろう。
- ・また、地方においては、グローバルリーダーのロールモデルとなる人物が不足している。ロールモデルになる人物から経験談を聞き学ぶ機会を、学校が設定することも必要である。

（ハーダー委員）

- ・**女性のリーダー像**について、海外と日本では異なる。リーダーシップについて、スキルを指すのか、あるいは特技や特性のことを指すのかは、場面や時代によって変わる。**まずはリーダーシップについて学ぶことから始める必要がある。**それを踏まえて、グローバルな経験を積み、海外と日本のリーダーシップの違いに気づくことで、グローバルリーダーが育成できる。

（北尾委員）

- ・日本人は会話をするのは得意だが、対話が苦手である。「同じ意見の人と話すこと」（会話）だけでなく、「**価値観や意見が異なる人とのコミュニケーション**」（対話）をする指導をして欲しい。

（三谷委員）

- ・将来を見据えた**高校の探究活動で身につけておくべき思考や姿勢について、大学と社会でのやり方は異なる**。アカデミックなスキルを習得し大学卒業後も研究を続ける人は必要だが、9割は大学院には進学せずに社会人になるため、アカデミックなスキルを活用することは少ない。ただロジカルシンキングも含めて、世の中で広く認知されている方法は複雑かつ難しい。鳥羽高校の生徒対象に毎年実施している「発想力の鍛え方」や意志決定に係る「決める力の鍛え方」は、より実務的かつ簡素に単純に発想力等を鍛える方法である。福知山高校の教員にも、その講義をぜひ受けてもらいたい。
- ・また、福知山高校でも活用している「KJ法」は、情報の教科書では「問題解決の手法」として紹介している。しかし本来は発想法であり、「問題発見の手法」である。

(4) 令和4年度第1回アンケート調査結果の報告（伊藤指導主事）

（三谷委員）

- ・新たな指標 23（「グローバル人材を総合的に測る指標」）と6つの資質・能力に係る相関について、肯定的回答である尺度3と4をまとめて相関を分析するのではなく、**尺度4の「とてもそう思う」と回答した生徒だけに着目し、いずれの指標も「4」と回答した生徒の割合を見てはどうか。**
- ・限られた予算でどのように取組を広げていけるのかについて、生徒とのコミュニケーションを増やすことに加えて、**参加者（生徒）にとっての実利や大学の単位認定に繋げていけるのが大きな要因となる。教員への普及についても、WWL事業で蓄積したノウハウを広めるために、プラットフォームに掲載している鳥羽高校の実践について、レポートを提出すれば研修の一つとして認めるなど、教員の实利になる方法が考えられる。加えて、悉皆研修として、全部または一部の教員に「スマートAP」の参観を課すことも考えられる。**
- ・生徒対象であれ教員対象であれ、各取組について、目標とする参加人数を明確に設定し、方法論も決定していくことが必要である。

(5) 閉会

教育委員会挨拶 水口首席総括指導主事

令和2年度指定

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

管理機関 研究報告書＜第3年次＞

令和5年3月発行

京都府教育委員会（高校教育課）

〒600-8533

京都府京都市下京区中堂寺命婦町1-10 京都産業大学むすびわざ館内4階

TEL 075-414-5815

FAX 075-414-5847